

B l a n k   s t o r  
i e s

V S B R

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

コズミック・イラ71, 9月27日。プラントからの停戦申し入れを地球連合は受諾。翌3月10日に締結されたユニウス条約によって、「血のバレンタイン」に始まる戦争は幕を閉じた。

しかしそのわずか一年半後、コズミック・イラ73, 10月2日。プラントのアーモリーワンで起こったMS強奪事件により、地球連合とプラントは再び戦争状態に突入する事となった。

戦間期と呼ぶにはあまりにも短い期間。

戦争の傷を癒すためではなく、次の戦争の準備に明け暮れてしまう人々。

これは、悲しく愚かな空白の物語。

# 目次

第十部	401
第九部	366
第八部	313
第七部	263
第六部	216
第五部	188
第四部	149
第三部	112
第二部	72
第一部	38
キャラクターの設定	6
作品の解説	1

第十一部  
あとがき

470 436

## 作品の解説

この作品も、自分がお世話になってるサイトに掲載していたものです。ただ、他の作品とは少し違うお話の作り方をしました。

そのサイトでの活動が活発だった頃、他の参加者がよく「キャラ募集」という企画を行っていました。読んで字のごとく、サイトの参加者からキャラクターの設定を募り、そのキャラクターを物語に登場させるといふものです。

自分も他の人の「キャラ募集」に乗っかったりしていたのですが、集まってくるキャラクターの設定を読みながらこんな事も考えていました。

「ここまで細かく設定を書くなら、もうお話にしちゃった方が早くない？」と。そして、

「この設定を集めて一つにすれば、それだけで一つの物語になるんじゃないかね？」と。だったら自分でもやってみようと思ひ、企画を立ち上げました。

以下の文章は、その時に募集要項と一緒に載せたものです。

今時分、博物館の特別展示に集まる人などいないであろう。戦争が終わって半年ほどしか経っておらず、ニュースでは連日のように連合との交渉の経緯を伝えている。交渉が決裂すれば再び戦端が開かれるのは明白であり、ボアズとヤキン・ドゥーエを失ったプラントは丸裸である。失われた大西洋宇宙軍に代わり、月の裏側のユーラシア宇宙軍へは、ビクトリア・エクスプレスと呼ばれる大規模な物資輸送が続いている。

だがそのような状況を正確に把握している人はプラントには少なく、終戦間際にクーデターを起こしたアイリーン・カナバ政権の正当性の是非の方に、人々の話題は集中していた。テレビに映る彼女の顔は、日に日にやつれていく。

「ほら、サボってんじやない」

「客なんて、来やしませんよ」

特別展示を担当する学芸員は、テレビを消してそう言った。注意した先輩も同じ表情をしている。ひっそりとしたホールで、ただ一点照明を浴びる展示物が物悲しい。

『コーディネーター その過去から未来へ。生命の可能性は、大宇宙へ羽ばたく』

「大宇宙」に「フロンティア」とのルビが振られた特別展。アプリウウス市で展示されているエヴィデンス01の原寸大レプリカが、展示物の目玉であった。大仰なタイトルの割にはごく普通の展示内容であるため、そのレプリカの大きさのみがやけに目立って

いる。

再びテレビを付けようとした学芸員が手を止める。足音が聞こえてきたのだ。男女数名のグループが、展示ホールに入ってきた。酔狂な人間もいるものだと、肩をすくめる。機械のスイッチを入れると、録音された解説がスピーカーから流れた。

「ゴズミックイラー15、一人の男の告白からこの世界は始まった・・・」

ゴズミックイラーは、旧世紀とは分断された新世紀である。この世界はかつての世界の延長線上にあるのではなく、ジョージ・グレンの言葉によって始まった世界なのだ。コーディネーターという人類の可能性と、ナチュラルという人類の限界。世界はこの二つに引き裂かれ、血を流した。

「人類はこの宇宙の孤児なのか、古来よりのこの問いに、エヴィデンス01は否と答えた・・・」

人類の宇宙進出を支えたのは、政治的な要請でも経済的な必然性でもない。それを支えたのは、可能性に向けて足を踏み出す人類のやむにやまれぬ未来への勇気である。宇宙をその生存環境としていた生命の存在は、そのまま人類の新たな可能性を示唆するものだったのだ。

「コーディネーターはどこから来たのか？ それは地球でありナチュラルである。では、コーディネーターはどこへ行くのか？」

解説の音声はそこまでだった。展示スペースの端まで歩いて来たそのグループは、出口に置いてあったパンフレットを手に取る。帰りの順路を指し示した学芸員が、軽く頭を下げる。

「うん、まずまずの出来なんじゃない。コーディネートしたら」

帰り際にそんな事を言われたと、学芸員は先輩に話した。ややあつて、二人は顔を見合わせる。今のプラントでは、冗談でもありえない言葉の選択。学芸員は、急いで館内電話の受話器を取った。

コズミックイラ72、2月29日の出来事であった。

---

(ちなみにこの文章、本編とは特に何の関係もありません。)

参加して下さった方は15人、キャラクターは全部で23名が集まりました。

これは予想よりも多く、一話の長さも全体の量も当初考えていたものより長い話になってしまいました。



それほど日を空けずに投稿していく予定です。  
もしよろしければ、お付き合いです。

## キャラクターの設定

キャラ名：カナン・エスペランザ

性別：男

遺伝子：ナチユラル

生年月日：CE55 8月3日

出身地：大西洋連邦

所属組織：連合軍・水中戦部隊および精密砲撃（狙撃）部隊（バスターダガー隊）によく配置される

その他各種詳細設定：

通り名は深淵の魔眼（光が指さない深海から精密なメーサー砲でMSをいくつも落とす）した。

視力は7.5。外見はきわめてワイルド（ぶちやげゼノサーガのカナンがモデル）。にもかかわらず恐ろしく人懐っこい性格。挙句とても業の深いオタク趣味の持ち主（こっさりMSに美少女のイラストでかでかと書くほど。自分のエンブレムよりも派手に）。しかしこと射撃に関しては神がかったている。

キャラ名：ミコト・ムラサメ

性別　　：女（半陰陽）

遺伝子　：ナチユラル

生年月日：CE55　7月12日

出身地　：大西洋連邦

所属組織：連合軍・主にソードダガー隊やデイエルダガー隊

その他各種詳細設定：

通り名は剣真（斬撃モーションをとくいとするため。神とつけないのはまだ未熟だと思っているため。）

性別こそ女だが、あるときまで男として生きてきた。というのも半陰陽という珍しい病気が原因。そのためたまに男子更衣室で彼女を見かけることがある。性格はすごくまじめ（石頭）。カナンとは幼馴染で突っ込み役。なお行き過ぎて鉄パイプで突っ込むこともけっこうある。実家はムラサメ流武術という道場である。

キャラ名：ユイ・タカクラ

性別　　：女（両性具有で男性器の一部がある。オーブの戸籍法では法律上“女性”

扱いにされている。精神は女性が主導)

遺伝子 : コーディネイター

生年月日 : CE53 10月6日

出身地 : 東アジア共和国極東列島(旧日本国)

所属組織 : オーブ首長国連合軍・第四MS実験小隊・バルディシユ所属

その他各種詳細設定 :

両親が東アジア共和国出身だが受精卵の段階で重遺伝子病の恐れと診断されユールン・ヒビキらが試作した人工子宮に移さ遺伝子を操作したのでコーディネイターになり、その際性器の遺伝子の変調し出生後に両性具有と判明、両親と共にオーブに移住している。

その後はオーブ軍幼年学校に入学し、並外れた身体能力と知力を持つも両性具有がネックになり悩んだ時期もあつてか恋に対しては臆病だが周囲の男女からは好意を持つてしまう魅力があるのも事実。

元々はパワードスーツ部隊に所属していたが両親がモルゲンレーテ社員でMS開発に関与していたのでオノゴロ島守備隊に配置転換されている。これはMS開発を隠す為にミナが画策した方法でMSテストパイロットを特定されない様にする為である。

第四MS実験小隊バルディシユはデータ採集を兼ねて様々なフィールドにて任務を

こなす事から通では“モルモット小队”と呼ばれている。初代搭乗機は“MBF—MX1P MX1Pアストレイ”はM1アストレイの先行量産型で量産ライン試験の際に製造された機体。P0シリーズの特徴であるスライドアーム式バックパックが特徴だが彼女の搭乗機のみブルーフレームセカンドGと同じ仕様スベックになる。二代目搭乗機は“ORB—X1 ハガネ”でこの機体はアカツキのプロトタイプでヤタノカガミも一部に装備。ストライクの予備メインフレームとパーツを流用している。

政治的思想は反連合思想で特にブルーコスモスに対しては殺意にも達する程の憎悪を抱いており士官学校時代にブルコス思想に染まった同級生らに身体の事をバラされ、あわや性暴力被害者になりかけた事が原因で恋に臆病な所はこれが原因。だが理解あるナチュラルに対しては普通に接する。

体は胸とお尻が平均以上に発育しており過去の遺伝子治療との因果関係は不明、しかし本人はそれが原因と思っている。生殖能力には問題無いとされているが精子は出来ないが卵子は正常に出る。

キャラ名：サイモン・メイフィールド

性別：男

遺伝子：コーディネーター（第2世代）

生年月日：CE41 4月4日

出身地：ユーラシア連邦ブリテン島ロンドン

所属組織：ザフト月軌道艦隊・ローラシア級クルックス艦長

その他各種詳細設定：

プラントの最初期に移住して来た、現在はマイウス・セブンに在住。

両親は造船工学の専門家で、その縁か比較的艦船に対する思い入れは深く、自身も造船の道へと進むつもりであった。が、時は既に地球・プラント間の緊張が最大限にまで高まっていたころであり、ザフトへ。

ザフト入隊後は当時主流だったMSパイロットコースではなく、艦船コースへ。

性格は気難しく、その割に話好き、慣れれば比較的面白い人物。

艦長としてはまだ若年の部類には居るが、持ち前の真面目さと造船家を志していた為か、比較的船の特性を理解した緻密な操艦技術が特徴。

第二次ヤキン・ドゥーエ戦においても、その力を遺憾なく発揮したが、戦後は月軌道艦隊所属となり、連合軍の輸送隊の監視の任務に就く事が多い。

長身赤毛の天然パーマ、しかめっ面も多い所為か眉間の皺が目立つ、それに伴い実年齢より若干老けて見える。

その見た目とは裏腹に、かなりの甘党。

キャラ名：嵩月・巖耶（ゲンヤ・タカツキ）

性別：男

遺伝子：ナチュラル

生年月日：CE22 12月18日

出身地：東アジア共和国 日本列島

所属組織：地球連合・東アジア共和国・日本自治州海軍艦隊司令

その他各種詳細設定：

日本自治州海軍艦隊司令官を務めており潜水艦狩りと防空戦闘における指示の正確さと迅速さに加え臨機応変に対応できる柔軟さを持っている。また部下の教育にも優れ彼の率いる艦隊はどんな新兵ですら強兵に変えると言われている程である。

彼の能力の高さは艦隊司令官でありながら「東亜の鯨」という二つ名がつくほど他国で高い評価を受けている。

更には、彼が中型空母やヘリ空母を主体とした一自治州展開の防衛艦隊ではなく大型正規空母を主体とした艦隊を率いていたら太平洋は東アジアの物になっていただろう。とまで大西洋連邦や赤道連合の提督達に評価されている。

其れにも拘らず彼が正規の大艦隊ではなく一自治州の防衛艦隊の司令官という役職

と少将という階級に留まっているのは東アジア共和国軍内部での日系将兵に対する警戒感からであるといわれている。但し、本人が望んでいることも確かなので其れほど問題化していない。

家族としては二十歳年下の妻と二人の娘がいる超がつく愛妻家である。同僚からは「ロリコン」とよく言われるのが悩みである。

尚、地上で暮らしているコーデイネーターを差別することは全くなく、其の人柄で判断することで知られている。其の為彼の部下には日本出身のコーデイネーターも数多く所属する。

キャラ名：アリシア・ルイズ・ド・ヴァロワ

性別　　：女

遺伝子　：ナチユラル

生年月日：CE30　8月16日

出身地　：ユーラシア連邦ユーロ会議フランス自治州

所属組織：地球連合・ユーラシア連邦軍陸軍・フランス自治州軍主席参謀

その他各種詳細設定：

イメージとしてはブラックラグーンのバラライカ。



常在戦場を心がけ彼女の一度でも薫陶を受けた物は一兵卒から上司に至るまで彼女の心酔者となる程の人格者でもある。

産まれは孤児だったがフランス自治州出身のユーロ会議議員ミツテランにより引き取られ我が子のように育てられる。

決して部下と国民を見捨てることなく任務を完遂する事で知られ若くしてユーラシア連邦陸軍欧州方面軍において強固な基盤を造った。それゆえに軍閥化を懸念した軍中央より遠ざけられた。

しかし、彼女の事を彼女の養父と親しかったフランス自治州の政治家達が招聘した事で今は生まれ故郷であるフランス自治州に存在する全軍勢力をフランス自治州大統領を補佐する形で掌握する立場にいる。

尚、彼女の職権はフランス自治州だが他の自治州のTOP達とは知己か元教え子が殆どであり事実上欧州方面におけるユーラシア連邦軍の全戦力を掌握している。

コーディネーターに対しては非常に否定的だが今現在産まれてしまっているコーディネーターはプラント在住者以外に限り非常に鷹揚である。また優秀で国への忠誠心があれば自らの下で保護さえしてくれる。

結婚はしていないが自らが出資している孤児院でコーデイ・ハーフ・ナチュラル問わず多くの子供を育てている。子供達の前では非常に優しい顔を見せる。

尚、彼女の忠誠心は地球連合などではなくユーラシア連邦にあり更に狭めるのなら欧州及びフランス自治州にある。祖国の利益になる存在と手を組む事と祖国の害になる存在を排除する事に彼女は全く躊躇する事がない。

キャラ名：グエン・ヴィレン

性別　　：男

遺伝子　：ナチユラル

生年月日：CE40　1月2日

出身地　　：赤道連合ヴェトナム州

所属組織：地球連合・赤道連合軍陸軍

その他各種詳細設定：

一言で言えばステイブ・セガールをアジア系にしたような感じ。

家族構成は妻と息子三人・娘二人で非常に賑やかである。

趣味は外見と反して裁縫・料理であり非常に家庭的で良く部下達にも手料理を振舞う。振舞われた部下達からは一流ホテルでコックをやっていた方がよかつたのではないかといわれる程の料理の腕前と大抵の物は織ることができる裁縫の腕前を持っている。

訓練は非常に厳しいがその代わり親身になってアドバイスをしてくれる事から部下達に非常に慕われている。

また、ナチュラル用OSがなくともMSを全く支障なく戦闘運用できる人物でもあり赤道連合におけるMS戦術を造り上げた人物でもある。

コーディネーターへの偏見は無いもののエイプリルフルクライシスで両親を失った事からプラントに対しては憎悪を抱いている。但し感情に流される事は異常ともいえる強さを持った自中心のおかげで全く無い。

愛機は赤道連合でライセンス生産されている「ストライクダガー」か「M1アストレイ」。若しくは輸入されている「ダガーL」。良く使うストライカーはエールストライカー。

キャラ名：秋篠・奏（カナデ・アキシノ）

性別：女

遺伝子：コーディネーター（第一世代）

生年月日：CE48 7月9日

出身地：東アジア共和国日本列島北海道地区

所属組織：FUJIYAMA社日本本社・北海道工場機動兵器開発部第三課課長

その他各種詳細設定：

可変MS「心神」開発計画のテストパイロットも兼ねる

日本人形のような清楚な外見と柔らかな物腰。そして産まれつき能力ではなく自ら努力して得た知識と発想力で知られている。

但し、売り込みに際しては相手が降参するまで理にかなった説得を続ける事から「彼女が来たらはんこを用意しておけ」とまで言われている。

そのおかげで彼女は若くして国産MS開発計画を担う機動兵器開発部第三課課長にまで上り詰め、アクタイオン社との共同開発計画であるGAT-X105E「ストライクE」、FUJIIYAMA社による東アジア共和国合同で発注された新型MS開発計画の目玉であるGAT-FJ108「ライゴウ」の開発、そして日本政府の要請で開発が開始された日本独自の可変MS「心神」開発計画。いずれにおいても主導的な立場となった。

パイロットとしての腕前も常に相手の先を読むかのような動きをし、相手が自ら当たりに来ざる得ないという脅威の操縦技術を持つ。また圧倒的な弾幕の中でさえ微妙な動きで全て回避し相手に接近し葬るという離れ業までやってのける。その為何度も軍から勧誘を受けているが全て拒否している。その技量に自らも自身を抱いている事から、可変MS「心神」開発計画においては同機が設計の難しい可変機である事も手伝つ

て積極的にテストパイロットも兼ね問題点の洗い出しを行った。

家族は母親・弟二人と祖父母がいる。

母の真澄はFUJIYAMA社の重役で日本政府だけでなく東アジア共和国政府や地球連合総会に対しても非常に強い影響力を持っている。また父親は日本政府首相で認知を受けている。

弟は二人ともナチュラルで重度シスコン。

彼女はプラントに対しては地球諸国在住のコーディネーターらしく不信感を抱いている。

日本が独自に開発を行っている可変MS「心神」は日本のような戦場となる場所が陸よりも海が広い地区／州等の防衛で主力を担えるよう考えられている。VTOL離着陸も可能で中型空母やヘリ空母でも運用可能。

「心神」のイメージはガンダムUCにでてくる「リゼル」隊長機です。

キャラ名：カルロス・アストウリアス

性別：男

遺伝子：ナチュラル

生年月日：CE37 5月10日

出身地：ユーラシア連邦スペイン州セビリヤ手

所属組織：地球連合・ユーラシア連邦イベリア半島防衛軍戦技教導隊指揮官

その他各種詳細設定：

外見は常に縁無し眼鏡をかけ色白で麦色の髪を持ったインテリ風の優男。中身はワイルドな兄貴。

両親が早死にし他の家族を養う為に十代で州軍に入隊した以降ひたすら現場で勘と実力を磨き、その事が州軍上層部で評価され少佐にまでなる事ができた。

MSがユーラシア連邦で配備開始された後、そのMS適性と指揮官適性の高さからMS部隊の指揮官となり「ハイペリオン七号機」を愛機にイベリア半島からザフトをたたき出す際にジブラルタル基地に一番に侵入するなど多くの功績を挙げた。

彼自身の実績と部下の多くを生還させてきた手腕、部下を大事にしつつ上層部と上手く付き合える交渉力から部下達の信頼と上層部の信頼は厚い。

ジブラルタル基地に対する備えとイベリア半島のスペイン・ポルトガルの二州をユーラシア連邦は決して見捨てない事の現われとして、同二州の各州軍と連邦各地の精鋭部隊から供出させた戦力で編成されたイベリア半島防衛軍にスペイン州陸軍から彼の部隊は配備された。

その実力から先の戦争時に中断されその後再開された国産MS「ハイペリオン量産

型」の実験部隊に彼の部隊が選ばれ、同機のユーラシア連邦軍における本格配備の為に必要なデータの収集をしている。但し自らの愛機は先の戦争以来乗ってきた「ハイペリオン七号機」である。

彼の編み出した「ハイペリオン」の特性を生かした密集戦術は集団戦闘を好むユーラシア連邦軍でも採用されている。

コーディネーターに対する差別意識は無いが侵攻してきた侵略者に対して戦う事に躊躇をしていない。

キャラ名：ラビ・アルベール・コクトー

性別：男

遺伝子：コーディネイター

生年月日：CE42 1月21日

出身地：大西洋連邦ニューヨーク

所属組織：大西洋連邦軍・第44独立MS戦闘部隊（イェール大学 神学部 准教授）

授

その他各種詳細設定：

裕福な家庭に生まれる。父親はラビ、母親は製薬会社の重役。既婚。

神学校を卒業後、神学系の大学で教鞭を執っていたが、コーディネイターとしての力を見込まれ軍に召集を受ける。従軍牧師兼パイロットという異色の存在。

特別にチューンナップされ黒く塗装された専用ストライクダガーで敵を倒してきた。

「八・八作戦」中に大洋州連合において終戦を迎える。

戦後は古巣である大学に戻ったが、自分と仲間の命を守るためとはいえ、敵兵を殺してしまったことに自責の念を感じている。

そのため講義や後進の指導にも身が入らない。

しかし、そんなアルベールの心中とは裏腹に、世間は彼をコーディネイターと戦った勇敢なラビとして英雄視している。軍もアルベールのパイロットとしての能力に加え、従軍牧師としての働きに期待をかけており、再召集される日もそう遠くないかもしれない。

### 外見、特徴

身長175cm 体重63kg ユダヤ人。

ラビとはユダヤ教の司祭、宗教的指導者を指す。

痩せマッチョ、軍人としては小柄な印象。くすんだ金髪をオールバックにしている。

パイロットスーツは支給されたものを使っている。祈祷の際には黒衣を着用。

考えるときに顎に手をやる癖がある。旧約聖書をいつも持ち歩いている。



冗談が好きな明るい性格だったが、戦争を経てふさぎこんでいる。部下からは精神的支柱として慕われていた。

除隊時の最終階級は軍属（大尉待遇）。中隊長を務めていた。撃墜スコアはMS32，ヘリコプター6，陸上艦2。

キャラ名：オイレン・クーエンス

性別：男

遺伝子：コーディネーター

生年月日：CE52 4月1日

出身地：プラント、ノウエンベル市

所属組織：ザフト軍・アプリリウス直衛部隊所属

その他各種詳細設定：

コーディネーターとしては、運動能力、知能などは決して高くなく、アカデミー卒業時の成績は、下から数えたほうがずっと早い、落ちこぼれ一歩手前だった。しかし、実戦を潜り抜けた数だけ、MSの扱いの才能が開花し、現在では超一流にまで登り詰めた、叩き上げのエースパイロット。当然、緑服。

MSに触れるまでは、特技無しのダメコーディネーターとして周囲から蔑まれてきた

ため、もはやMSのみが彼の拠所となってしまうている。

それゆえ、クライン派へは、MSを取り上げられた相手として憎しみに近い感情を抱いている。

キャラ名：カフネ・イーガン

性別：女

遺伝子：コーデイナーター

生年月日：CE57 5月23日

出身地：プラント、マイウス市

所属組織：イーガン設計開発事務所

その他各種詳細設定：

機械工学、兵器工学における稀代の天才と噂される少女。

実家であり職場でもある家族経営の「イーガン設計開発事務所」は、各設計局から発注される兵器部品の設計などを商売としている。

彼女は、幼いながらにしてその責任者の立場であり、稼ぎ頭でもある。

また、自らも独創的な機械から兵器までを設計しているものの、家族経営という事務所の規模の小ささから、それが形として実現することは滅多に無い。

各設計局からは発注以来と共にスカウトの声も多くかかるが、頑なにそれを拒否している。「私はウチの看板娘」だからだとか。

キャラ名：デイルク・フランツ・ツエルニー

性別　　：男

遺伝子　：ハーフコーデイナー

生年月日：CE42　3月19日

出身地　：プラント、フェブラリウス市

所属組織：ファントムペイン

その他各種詳細設定：

プラントにおける次世代誕生計画の実験体「コード4231977」として生を受け  
る。両親、遺伝子提供者に関する詳細は不明。「実験体」以外の意味合いを見出せず、  
かつそれを与えてくれなかったプラントを脱走、地球においてブルーコスモスの下部組織  
に入る。

パイロット適性を認められてファントムペインに編入、大尉の軍籍を得る。

「実験室のシャールでかきませられた命に価値を求める者はいない！」

キャラ名：ユウキ・ナンリ

性別　　：女

遺伝子　　：ナチュラル

生年月日：CE56　7月28日

出身地　　：大洋州連合オーストラリア、ダーウィン市

所属組織　：無し（民間人）

その他各種詳細設定：

おそらくは普通の高校生。

容姿は黒髪のショートヘア、肌の色はよく日に焼けた小麦色（日系ということにしておきます）。学校ではもっぱら陸上部での活動に打ち込んでいるせいか、頭の良さはそこそこ。

自分のことを「ボク」と言い、他者のことは「キミ」もしくは呼び捨て。

男っぽい口調とさばけた性格のせいか初対面の人間からはよく男子と勘違いされ、難儀している。

父母がザフト・カーペンタリア基地の中で働いている関係で自らも基地内によく出入りする。親の仕事を手伝うこともあるが、基地にいる兵士に「勝負」と称して腕相撲や

短距離走で挑みかかったりしていることの方が多く、相手からは暇つぶし代わりに遊ばれている。

誰とも分け隔てなく付き合える陽気で人懐っこい性格だが、内面はプレッシャーに弱く押しにも弱い、男勝りな態度に反して気弱な人間。

自らを取り巻く現状に満足しておらず、「強い人間になりたい」と思いながらも平凡な日々の生活に甘んじている。

キャラ名：ノーリッチ・シユノウザー

性別：男

遺伝子：ナチュラル（試験型エクステンデッド）

生年月日：CE52 1月1日

出身地：孤児なので不明

所属組織：連合

その他各種詳細設定：

ブーステッドマンとエクステンデッドの間の時期に開発された試験型エクステンデッド。

薬物投与や内臓骨格改造、インプラントなどによりブーステッドマンを越えた性能を

有する。しかし、その無茶ともいえる強化によって精神的に、ひどく不安定。扱いやすさはブーステッドマンやエクステンテッドに比べると悪い。

その為、ノーリッチを含めた「試験型」は、エクステンテッドとしてファントムペインに採用されることはなかった。

戦闘の度に大掛かりで手間のかかる「調整」を必要とする。無茶苦茶な改造手術により、肉体の寿命は余命数年。普段は余計な消耗を抑える為に強制的に睡眠をとらされている。彼が目を覚ましている間 $\parallel$ 戦っている時である。

ただ、ごく稀に目を覚ましてしまうことがあるようだ。その際、寝起きで機嫌が悪い子供のよう泣きじやくりながら暴れる。

余談であるが「ノーリッチ・シユナウザー」とは犬の名前。彼ら「試験型」の呼称は犬の名前で統一されている。

好戦的というよりも戦うことしか能がない。戦闘中は常時、一定量の脳内麻薬が分泌される為、精神は安定している。

「お前、○○だな」と戦っている相手をカテゴライズすることを好む。そのカテゴライズは過剰に独断と偏見に塗れているが時折、鋭いところをついてくることがある。

孤児だった頃の記憶は度重なる改造によって薄れているが時折、フラツシユバックする。その際には対処法が、わからない為、子供のように泣きじやくる。青春時代の、ほ

ぼ全てを実験と改造に費やされた為、その精神は幼く無邪気。

キャラ名：シビル・ストーン

性別　　：女

遺伝子　：コーディネーター

生年月日：CE50　6月21日

出身地　：プラント、クインティリス市

所属組織：ザフト

その他各種詳細設定：

極度の器用貧乏。何においても人並以上にできるが、何においても一等賞はとれない。

第一世代コーディネーター。自分をこんな器用貧乏にした両親に感謝しつつも恨んでもいる。

ルックスも、そこそこのので、やはり突出できない。性格も目立つ方ではなく、割とまわりに流されやすい性格。ザフトに入ったのにも、たいした理由はない。

好きな男性のタイプは「世界で一番、愛してるよ」と恥ずかしげもなく言ってくれて尚且つ、それを証明してくれるような人。

「僕には君が必要なんだ」などといったセリフにも弱い。

キャラ名：ルーファス・リシユレーク

性別　　：男

遺伝子　：ナチユラル

生年月日：CE46　11月9日

出身地　：ユーラシア連邦ブリユツセル

所属　　：民間（リシユレーク家）

その他各種詳細設定：

外見は緑がかった黒髪を持つ端正な顔立ち。社交場の女性達からは憧れの的とされる事が多い。スーツがよく似合う男。

主にユーラシア連邦で大きな影響力を持つ名門財閥・リシユレーク家の跡継ぎ。実は現当主たる父親の妾の子供であり、彼とその母親は正妻の一族を始め周りから迫害されていたが、父親だけは彼を自分の息子を認め、現在に至るまで立派に育て上げた。この事からは彼は父親に対しては大きな恩義を感じている。2年前に時期当主と決定され、周りからは愛人の子に当主の位は認められないと猛反発があったが、現在では彼の力量を見て、表立って批判する事は無くなり、彼を認める者も多くなりつつあるが、未だに正



妻の一族を始め、快く思わない者もまた多い。

幼い頃から英才教育を施されてきた為、頭脳明晰であり、経営者としての才も優れている。また、昔から多くの世界各国の要人達の集うパーティーにも出席してきた為、交友関係も広い。その過程でムルタ・アズラエルとも面識があり、彼の事を「経営者としては一流。人間としては三流以下」と評していた。過去に襲われた事もある為、ある程度は体を鍛えている。(プロの軍人には及ばないレベル)

皮肉屋な性格であり、よくブラックキューモアを口にしたたりする等暗い所もあるが、基本真面目で非常に義理堅く、誠実な人物である。リシュレーク家の御曹司としては「私」という一人称だが、気心の知れた相手には一人称は「俺」に変わり、口調も少々砕けた物へと変わる。(本人曰く、「これが素」)

現在は現当主であるルディガー・リシュレークの補佐役として世界各地を飛び回っており、戦争が終結して経営状態が若干悪化した本家の立て直しに奔走する日々を送っている。

キャラ名：アルテシア・ローレンツ

性別：女

遺伝子：コーディネーター

生年月日：CE49 2月8日

出身地 : ユーラシア連邦

所属 : 民間(リシユレーク家)

その他各種詳細設定 :

外見は腰まで伸ばした艶やかな栗毛色の髪を持つ美女。服越しでもスタイルの良さは明白であり、体目的で襲われた事も多数。(全部撃退した)

ルーファスの専属秘書。彼女の過去でわかっている事は、ユーラシア連邦の出身である事。何らかの事情により孤児になっていた所を、リシユレーク家が経営する孤児院に拾われ、数年後、彼女の優秀さを聞いたルディガーに請われて息子の一人・ルーファスの話相手兼個人秘書として本家に召し抱えられた。反コーディネーター色が強かった本家では多くの嫌がらせも経験していた模様。

彼女の行動原理は自分を見出してくれたルディガーや自分をコーディネーターでは無く一人の女性として見てくれたルーファスへの忠誠であり、特にルーファスに対しては単なる主人以上の感情を持っているが、普段は胸の内に抑えこんでいる。

秘書としての能力は有能な他、ルーファスとは8年間の付き合いの為、彼の考えている事はおおよそ把握している。また、護身用に銃も扱える。周りからは「ルーファスの愛人」等と陰口を叩かれており、嫌味を言われる事も多いが、平然と反論できるなど精

神的にもタフ。

キャラ名：トルベン・タイナート

性別：男

遺伝子：コーディネーター（第1世代）

生年月日：CE25 9月9日

出身地：ユーラシア連邦 ドイツ ハノーファー市

所属組織：フェブラリウス大学

その他各種詳細設定：

遺伝子工学の研究者。地球で博士号を取得後、GARMR&Dに就職しメンデルで研究を行う。

どのように遺伝子进行操作すればどのような能力を発現するのかという、いわば設計図の分野の研究を専門としており主任研究員のユーレン・ヒビキが推し進めていた人工子宮については殆どタッチしていなかった。

CE55年にブルーコスモスを名乗る武装集団の襲撃を受けた事で、穏やかに研究を行える環境ではないと感じGARMR&Dを退社。

その後プラントに渡りフェブラリウス大学で研究を行うようになり、プラントを代表

する遺伝子工学者の一人となる。

その研究成果は、プラントのみならず地球でも注目されており、一部ではプラントを含む各国で軍事転用されているとも指摘される。

しかし彼自身は、自分の研究が実社会でどのように応用されているかは興味が無く、神の設計図を完全に解明しこの世の真理を知る事、それ自体に意味があると考えている。

キャラ名：テルシエ・ミンター

性別　　：女

遺伝子　：コーディネーター（第2世代）

生年月日：CE55　2月3日

出身地　：プラント、オクトーベル市

所属組織：ザフト

その他各種詳細設定：

アカデミーでの訓練課程を終える前に終戦を迎えた為、実戦経験はまだ無いMSパイロット。

アカデミーでの総合成績は真ん中より少し上ぐらいで緑服だが、MSの操縦に関して

はTOP20に入っていた。

瞬間視（一瞬見ただけで複雑な状況を知覚する能力）と周辺視野（視界の中心から外れた物を認識する力）が優れておりそういった「目の良さ」がMS戦で活かされるほか、普段から何かにつけて目ざとい。

父親は若い頃、ヨーロツパを自転車で横断しながら写真家の真似事をやっていた人間で、その時撮った写真を今も多数保有している。

その影響もあつて、地球の大自然や旧所名跡に対して殆ど幻想に近い憧れを抱いている。

夢は地球一周旅行で、その際の順番も既に考えている。具体的にはオーストラリアのグレート・バリア・リーフから始まって日本のスシバーで終わる予定。

キャラ名：コトハ・キサラギ（如月ことは）

性別：女

遺伝子：コーデイナー（第一世代）

生年月日：CE58 2月14日

出身地：地球・日本

所属組織：プラントアカデミー・美術学科・美学美術史専攻

その他各種詳細設定：

細身、黒髪と黒い瞳。

日本の関西地区産まれ。良家の子女で品や学はあれど世間ずれが激しい。雰囲気は初期のラクスを彷彿とさせる。

なまじ家の歴史が古いためかなり反動的な教育を受けている。政治や時事問題から遠ざけられて育ち、親族が戦争の被害をほぼ受けなかったことも有って世の中の流れに疎い。

思考もナチユラルやコーディネイターと言った人種、及び国家に強く拘る事がなく、いわば中庸。

現在プラントに留学中。子供の頃から関わりの深かった美術や芸術の歴史を学び、学芸員資格と教員免許を取るため日々精を出す。

実家へ戻った暁には即何処かの家と婚約が決まる事を察しており、限られた自由を味わう為、日々を積極的に生きている。

独特なイントネーション（方言）でおっとり喋り、和装（着物姿）を好む。

母国の歴史や文化に関して博識で、お茶、お花、日舞、着付け等を嗜み、振る舞いもしとやかな事から「旧世代の遺産」「絶滅危惧種」と噂される事も。

内面は相当男前で殿方を立てる（コントロールする）のが上手い。三歩さがってつい

て行く（Ⅱ後ろから手助けしますから、男なら三歩先を歩いてくださいまし）事の出来る女性。煽り上手とも言う。

アカデミーについて

プラントにおける総合芸術大学としては最大規模の大学。

学園のランクはトップレベルだが、少子化、戦争、徴兵などの影響で定員割れを起こしており、プラント、地球問わず生徒を募集している。

一芸入試や特待生制度によって個性豊かな生徒が存在する一方、OBの援助者（パトロン）の親類など、裕福な層の子女も多い。

イメージとしては大阪芸術大学や、東京芸大あたり？

キャラ名：ウオーレン・パーシバル

性別　　：男

遺伝子　：コーデイナーター（第1世代）

生年月日：CE38　10月26日

出身地　：ユーラシア連邦オランダ州

所属　　：ザフト・プラント守備艦隊所属

その他各種詳細設定：

外見は背が高くがっしりとした体躯で髪はくせっつ毛の茶髪。

地球各国で広がりつつある反コーディネイターの世論をみてプラントのマティウス市に移住。移住後ザフトに入隊し、MSパイロットになる。

世界樹攻防戦でジンを駆りM A I 2機、戦艦1隻を撃沈し戦功を挙げる。後に当時新型のジンハイマニニューバーを受領し月のグリマルデイ戦線で地球連合軍との一進一退攻防を続ける。ザフト軍がグリマルデイ戦線を放棄、月より一時撤退した後ヤキン・ドゥーエ駐留部隊に配属される。

第二次ヤキン・ドゥーエ戦で地球連合軍、三隻同盟を相手に奮戦するもヤキン・ドゥーエ自爆と本国からの停戦命令を受け武装解除する。

戦後はプラント守備艦隊に所属しプラント周辺宙域の治安維持に努めている。面倒見がよく謹厳実直な性格で上司と部下からの信頼が厚い。

キャラ名：メイファ・リン（凌・美花）

性別：女

遺伝子：ナチュラル

生年月日：C E 4 7 5月23日

出身地：東アジア共和国四川省



所属 : 地球連合・東アジア共和国陸軍第422独立機甲混成部隊  
その他各種詳細設定 :

外見は黒髪のショート、肌が色白の小柄なスレンダー体系。

祖父の代から三代に亘る軍人家系の出。

戦闘ヘリパイロットとしてカオシユン宇宙港防衛戦に参加しザフトのジンの驚異的な性能を目の当たりにする。

カオシユンが陥落し生還したあとMSパイロットに志願をする。

ストライクダガー搭乗し小隊を率い第三次ビクトリア攻防戦に参加、僚機を失うことなく帰還を果たす。その後八・八作戦に参加しオーストラリアで終戦を迎えた。

戦後、実績を買われMS運用研究及び戦闘データ収集を目的とした第422独立機甲混成部隊に転属。

初の自国製MSであるGAT-FJ108ライゴウのテストパイロットになる。

## 第一部

天窓から差し込む月光が、床に散らばった刃物に反射している。両脚を撃ち抜かれた男が、なおも抵抗を試みるように床に落ちた刀に手を伸ばす。軽い銃声とともに刀身は砕け、飛び散った破片が男の手に突き刺さる。

拳銃を撃つた人間は、男に抵抗するなど無言で言う。そして、その命に興味は無いと付け加えるように視線を別の方向に向けた。いまだ表情を崩さない女が、椅子に座っている。拳銃が向けられた。

「……………ジブリールの差し金か」

女の声が震えているのは、恐怖ではなく怒りのためだろう。拳銃を手にしていた男が、胸のポケットから小さな機械を出した。スイッチを入れると、男はその機械をテーブルの上を滑らせるように女の方へと投げる。機械から声が流れてきた。

「ルシア・ゼルレッツくん、このような形でメッセージを送ることを許していただきたい。我々は総意として君をブルークコスモスから除名する事とした。青き清浄なる世界に、君のような不浄の者は不必要という判断だ。ブルークコスモスは、君の趣味を満たすための遊び場ではないのだよ。君らの研究成果は、青き清浄なる世界の建設のために有

効に使わせてもらう、その点は心配しないでもら……」

女の握り拳が振るわれ、メッセージを最後まで流す事無く機械は壊れた。男は拳銃を再び構える。感情を隠す事をやめた女の表情は、その美しさのために一層恐ろしさを増していた。

報告に来た部下がたじろいでいるのを背後に感じながら、男は小さくため息をついた。足をすくめていている部下に近づき、報告を受ける。回収を予定していた物の大部分は、移送の準備が整ったようだ。

「だが本命は見つからず……か」

「ツエルニー大尉、尋問の準備は？」

無駄だと言って、男は回収品のリストが映されたポケコンの画面を見る。運用関係の技術者と共に回収した試験型エクステンデッドの輸送を優先させる。データと違って現物の輸送は手間がかかるのだ。

時計を確認して、順次撤収するように指示を出す。次の来客のアポイント時間まで、それほど余裕があるわけではない。部屋を出て行く部下の足音に混ざって、微かな物音が聞こえた。

男が首を後ろに向けるのと、女が腕を振るったのは同時だった。執務机に置かれていたペーパーナイフが、首筋に向かって飛んで来るのが見えた。その向こう側に、女の残酷

な笑みが見える。

男は振り返りにペーパーナイフを掴み、そのまま体を回転させるようにペーパーナイフを投げ返す。残酷な笑みの残る目に、ペーパーナイフが突き刺さっていた。女の絶叫をかき消すように、銃声が響いた。

「ヴィレン少佐、ダメです。証拠らしいものは……死体くらいなものです」  
「構わん、捜査はこっちの仕事じゃない」

軍での最後の仕事で、ブルークコスモスの内部抗争の後始末だった事にげんなりしながら、少佐と呼ばれた男性は捜査当局者との打ち合わせのため指揮車両へと足を向ける。

東アジア南部からインドシナ半島一帯で、麻薬の売買などを手広く行っていたシンジケートがブルークコスモスと繋がっているとの情報を受け、東アジア共和国と赤道連合は合同でその摘発を行っていた。両組織の幹部が極秘で接触するとのリークを受けて乗り込んでみれば、すでに全てが終わったあとであった。

プラントとの戦争がひとまず終わった今、連合各国はたがの緩んだ自国内の体制強化に乗り出している。ブルークコスモスのような過激な原理主義は、排除される方向にあるのだ。

だから連中も焦っているのでしょうと、捜査関係者は言っていた。

宇宙から落とした基礎構造物を繋ぎ合わせて作ったカーペンタリア基地は、戦中もその設備の拡充に努めていた。だが、地球での大規模土木工事のノウハウを持たないザフトは、湾の浚渫や海岸線の護岸工事を行わず、もっぱらプラントから運んできた部品を組み上げる形での基地建設を続けている。

プラントが地球に打ち込んだ楔、アイリーン・カナバが首と引き換えした置き土産、基地建設時の勇壮な物語と共にロマンチックな響きを持つて語られるカーペンタリアも、降りてみれば巨大な工事現場であった。一番偉いは重機であり、次がザウート、バクウなどうるさいだけの駄犬であり、グリーンなど水槽の金魚扱いだ。

だがプラントの先人は、まさにこうやって宇宙に大地を作り上げたのだ。巨大建築とはコーディネーターの魂を揺さぶるものなのかもしれない。

「……完全に迷ったわ」

関係者以外立ち入り禁止の立て看板の前で、女性が自分を納得させるように言った。

目に付いたクレーンをランドマークにして歩いていたので、赤と白に塗られたクレーンは十数本林立している。先ほどまでは工事関係者らしき人がいたのだが、今歩いているところには、人影すらも見えない。遠くから聞こえてくる工事の音は、そこはかとな不安をかきたてる。

仕方ないかと一人つぶやいた。方向音痴に關しては親を恨む事にする。見たものを細かく認識するのは得意だが、何故か道に迷うのだ。細かなものに気が付き過ぎる事の反動みたいなものであつた。とりあえず今歩いてきただろ方向に向かつて、足を進める。

いくつ目かの曲がり角、目の端を人影がよぎつたのを見逃さなかつた。足早にそちらへ向うと、作業服姿の人達が雑談をしている。頭を下げて道を聞いた。

「ああ、新人さんね。連れてつてやるやわ、ユウちゃん」

現地の訛りを隠す事無く、作業員の一人が大声で人を呼ぶ。クラーボックスを括りつけた自転車を押してきた子が、多少不満そうな表情で言う。

「何でボクが？ まだこれから二ヶ所も回るところがあるんだけど」

「どうせ仕事もせずに、回らんでいいが。コッチの方が大事な仕事」

作業員達はヘルメットを被りなおして、現場へと戻つていく。自転車の子は、付いて来いと言わんばかりに歩き出した。

「ゴメンね、お仕事中に」

「別に。キミは、何しに？」

「一応、パイロット」

戦争は終わったけどね、と付け加えた女性はテルシエ・ミンターと名乗る。そして自

転車の子に名前を聞いた。

「ユウキ……ユウキ・ナンリ」

ユウキはそう名乗って立ち止まり、クーラーボックスを開ける。中から取り出したアイスクャンディーをテルシエに手渡した。休憩所から離れた現場に、冷たいものを配って歩いているのだ。

歩き回って喉が渴いていたテルシエはありがたくアイスクャンディーを口にする。一本ーアースダラーだとは知らなかった。

水平線の向こう側から姿を現したのは、巨大な軍艦である。外観は旧世紀の空母と似たような姿にも見えるが、その性能を見た目で測る事は出来ないであろう。現在の軍艦はMSという新兵器をいかに運用するかを試行錯誤している段階である。オーブほどの国が旧来の空母と同じような姿の軍艦を建造していたという事は、その形状がMSの運用に適していると判断したからであろう。

「だが……外洋に出られる艦だな。タケミカツチといつたか」

男性のつぶやきは、オーブの外交姿勢の変化を直接的に見せ付けられたからである。東アジア共和国海軍のゲンヤ・タカツキは、双眼鏡から目を離して手元の資料に目を

落とした。思わず資料を遠ざけてしまうのは、最近になって老眼が出てきたからだ。タケミカツチから打ち上げられた信号弾に、返信の発光信号を送る。

連合における新型MS試験の一環として、オーブとの共同訓練が行われるのだ。彼の指揮する艦には、軍関係者だけでなく開発メーカーの人間も多数乗り合わせていた。部下もやりにくそうである。

ブリッジに熱紋センサーの甲高い音が響き、全員の視線が窓の外に向う。ゲンヤは再び双眼鏡を覗いた。タケミカツチから一機の機体が飛び立っていたはずだ。

「戦闘機……にしては形が妙ね」

甲板に出ていたパイロットスーツ姿の女性は、額に手をかざして上空をパスした機体を見上げる。ブリッジからの連絡でオーブ側から機体が出てくるとは聞いていたが、どうやら司令官を載せたヘリの類ではないようだ。

背後の整備員が急に慌しくなった。着艦準備を始めるよう大声で指示が出されている。その指示を、女性は思わず聞き返してしまった。この艦はヘリ空母で、航空機が着陸するための減速ワイヤーの類は装備されていないはずだ。

そのため着艦準備というより回避命令であった。オーブの機体は本気で着艦する気なのだろう、高度を落として真つ直ぐこちらに向って突っ込んでくる。

「……変形!？」



「慌てて逃げ出そうとした女性は、その航空機が突如人型に姿を変える瞬間を見た。その機体は、一気に増大した空気抵抗で速度を落とすと、全身のスラスタを使ってフワリと甲板に降り立った。」

呆然とする女性の前で、そのMSはハッチを開いてパイロットを降ろす。昇降用ワイヤーに掴まっているのは、メリハリのはっきりしたボディラインの女性であった。ヘルメットを外してインナーを取ると、豊かな髪が零れ落ちる。

「オーブ首長国連合軍第四MS実験小隊のユイ・タカクラ少尉です」

軽やかな微笑と共に握手を求められ、女性は慌てて自己紹介をする。今回の試験にオーブザーバー参加する事になった、FUJIYAMA社のカナデ・アキシノと。

月軌道は、プラント・連合の最前線となっている。ジエネシスによる攻撃でプロレマイオスクレーター連合軍基地は消滅したが、防衛線である二つの宇宙要塞を失ったプラントにとって、月の裏側の連合軍は依然として脅威であった。

そのためザフトは、残存の宇宙艦隊を再編して、月軌道の防衛に力を注ぐ事となっている。それだけに今回の命令は、いささか唐突であり不可解であった。

「つまり、積荷に關しての情報は最重要機密という事ですか」

「そうだ」

月軌道艦隊司令長官に呼び出されて、受けた命令はカーペンタリアへの輸送任務であった。猫の手も借りたい月軌道艦隊の艦艇を引き抜いて、その護衛に当たらせるというのだ。

しかも何を運ぶのかは、護衛艦艇の艦長である彼にも明かせないときた。ただ任務の遂行が不可能となった場合は、速やかに輸送艦ごと積荷を破壊しろとの命令である。眉間の皺が深くなっているのが、自分でも意識できる。

ヤキン・ドゥーエ宙域戦の記憶がまだ新しい時期である。軍からの不可解な命令というものには、神経質にならざるを得ない。

「サイモン・メイフィールド、これより護衛任務に向います」

敬礼の姿勢だけは正しく保って司令官室を出る。色々と考えるのは、艦に戻ってからでも出来る事だ。通信室に入り所属と乗艦を伝える。部下に移動のための準備をさせておかなくてはならない。

専用のブースに座ると、交換手の声が聞こえた。レーザー通信を阻害するデブリの少ない日でラッキーだと言ってくれる。NJは今日も絶好調であるらしい。

それでも時折、ひどく画像の歪む画面から物静かな声が聞こえる。最近、彼の艦に配属されたオペレーターの女性だ。

「ストーンくん、聞こえるか?」

「はい、感度良好です」

画面には激しくノイズが走っているが、声を聞く分には問題ない。シビル・ストーンは艦長の言葉を復唱する。彼女の乗るローラシア級クルックスと、麾下の二艦は護衛任務のためにマイウス・ツーへと向う。

副艦長にそれを伝え終え、シビルはそつと息を吐き出した。ようやく、日々のルーチンな仕事には慣れてきたところだ。別段、仕事が苦手というわけでは無いが、実戦経験のある艦とそのクルーには、一種独特のチームワークがある。

互いの長所で短所を補い合うクルーのスタイルに、彼女はなかなか馴染めなかった。

「これは、君に対する配慮を込めた提案だと思っている」

おそらく、悪い人ではないのだ。ただ、その傲慢な善意に無自覚なだけであつて。講義棟の連なる一角であるため、講義時間の真つ最中である今は学生の姿も見えない。木陰のベンチに沈み込んでしまいそうな感覚に、男性は思わず顔を上に向けた。木漏れ日が残酷なまでに美しい。

正直、これほど早くに再召集があるとは思っていなかった。もちろん、正式な召集で

はないため、拒否する事も可能という建前ではある。だが彼に、そんな選択肢は存在しない。ブルーコスモスの活動に対する取締りが強化されているとはいえ、大西洋連邦在住のコーディネーターは常に自分の有用性をアピールしなくてはならないのだ。

男性は隣に座るスーツの男に、戦争が近いのかを聞いた。

「ラビには、試験機の随伴をお願いしたいのです」

ザフトとの戦闘ではなく、新兵器の実験に協力して欲しいのだという。MSに代わる新型機動兵器の試験が計画されているのだ。スーツの男が時計を見て立ち上がる。周囲を見回した男は、誰かを見つけたように手を振った。ラビ・アルベール・コクトーは、そちらに視線を向ける。

やって来たのは二人の少年。あどけなさが全く消えていないその顔に、ラビは気持ち悪さを覚える。子供を兵器に乗せるなど、まともな大人のやる事ではない。彼はその事をはつきりと言った。

スーツの男は視線を落とす。そしてアルベールの耳元で言った。

「だからこそ、ラビをテストパイロットに選抜し随伴を要請するのです」

アルベールは、それ以上は言わなかった。目の前の男は上からの指令に対して、出来る限りの事として、この提案をしているのだろう。それ以上は、何も要求できない。代わりに席を外してもらおうと言った。せめて、この二人と直に話をしてから、要請を受

けるかどうかを決めたい。

スーツの男が建物の陰に消えたのを見計らって、アルベールは短く自己紹介をする。一人の少年が折り目正しく敬礼をして名前を言った。

「ミコト・ムラサメ准尉であります！」

「カナン・エスペランザ。よろしく、神父さん」

もう一人の少年が素晴らしい終わるや否や、ミコトの拳がカナンの顎を捉えていた。

「真面目にやれ！ 上官になる人だぞ！」

「上官になったら不真面目に出来ないだろ」

ミコトの第二撃を受け流し、カナンはアルベールの後に隠れた。ミコトが深く頭を下げて、カナンの非礼を詫びた。アルベールは困惑した顔で二人を見つめる。そのまま何を言っていないか分からなかったので、気になった事を聞いた。

「ムラサメ准尉……キミは、女か？」

「!!」

「すつげえ、さすが神父さん。こいつが女つて一発で分かったの男じゃあんたが初めてだ」

足払いで地面に倒れたカナンの腹に、ミコトの肘がめり込む。そんな二人の様子を見て、アルベールはスーツの男が言った言葉の意味が分かったような気がした。ならば、

自分が大人として出来る事は一つしかない。

集中力を有する仕事で凝り固まった体をほぐすように、窓辺で思い切り伸びをする。グラウンドでは、サークルや同好会の連中が思い思いに練習をしていた。遠くから聞こえてくるのはプラスチックの音だ。戦争の終結は、アカデミーの空気からもはつきりと読み取れる。

先輩達が作業を行っている中、一人で先に帰るのも気が引けるので、放り出していたスケッチブックに線を走らせる。スケッチブックのみを見つめて描いた絵は、作業台の上の絵と寸分たがわぬものになる。見たものをそのまま覚えらるる記憶力と、日々精進を重ねている描写力の賜物であった。

「遊んでるなら手伝ってよ、コトハ」  
「うちのノルマは終わりました」

スケッチブックを傍らに置くと、コトハ・キサラギは涼しい声で言った。今行われているのは絵画の修復作業である。

最近地球から運び込まれた絵画らしいのだが、梱包も輸送方法も雑であったため、一部に傷みが生じてしまったのだ。存命中の無名の画家の絵画でそれほど高価なもので

もない事から、学生による実習をかねて、ここで修復されているのだ。

彼女はスケッチブックと作業台の上の絵画を見比べながら、抽象画はどうも苦手だと思う。渦巻き模様や螺旋模様らしきものが絡み合い、四色の色のみで塗り分けられた不思議な絵だった。

「こちらです、先生」

アカデミーの職員が、来客らしき人を連れてきた。指導教官は席を外していると伝えたのだが、来客の用件は別のところにあつたらしい。部屋を見回して、コトハが修復した絵のところに足を進める。

「・・・これは君が？」

「ええ、何か？」

年の程は五十前後といった感じの痩せぎすな男性はこのアカデミーにはいないタイプ、科学者とかそういう感じ人間だった。絵画に興味を持つような人物には見えない。修復が終わったばかりなので動かせないとのおうとしたコトハは、その人物の視線が自分のスケッチブックに向いている事に気付く。

男性はスケッチブックを手にとって、見本を見ながら描いたのかと聞く。その困惑が浮かぶ視線に、コトハは見ながら描いたと言おうとする。何か拙い事をしてしまったようだ。

だが、一緒にいた先輩が本当の事を言ってしまった。見た絵を記憶して正確に模写するのが特技だ。男性は深くため息をついた。

「私はトルベン・タイナート。フェブラリウスの大学で研究者をしている」

男性は連絡先の書かれた紙を手渡すと、スケッチブックは処分しておくようにと言った。そしてアカデミーの職員に、出来るだけ早く絵を梱包して大学の方まで送り届けるように頼んだ。

これがナンパであれば、どれほど安心できるだろう。それくらいに暗い表情をしながら、トルベンと名乗った男性は部屋を後にした。彼が有名な遺伝子工学者だと知らされると、不安はさらに深くなる。

ゆつくりとした手付きで眼鏡を拭き、もう一度資料に目を通す振りをする。不満を表情に出さないように、意識して口元を引き結んだのが逆にその心情を顔に表してしまつたようだ。そつと視線を上げると、上官が苦笑いをしている。

「君の所属はどこだったかな」

「・・・戦技教導隊です」

自分の所属する部隊に関して、これほど後悔した事は無い。だが今回の指令は、だか



らこそ回ってきた指令だといえる。指令書は、新型MSの性能試験及び運用試験への参加を命じていた。連合が新たに採用するMSの試験である、教導隊の人間が行うのが道理であった。

だが、それは愛機との別れを意味する。噂では聞いていたが、ハイペリオンはついに制式MSの座を掴めなかったのだ。その性能を肌で感じてきた彼としては、非常に辛い決定である。

指令書に書かれているMSはウィンダム、サブフライトシステム無しでの飛行を可能とし、空母での運用も視野に入れた機体であった。ダガーと比べても、カタログスペックの上では数段の向上が見られる。その性能では不満かねという上官に、せめてもの文句を言った。

「戦場で命を預ける物です。パンフの数字より、今までの実績を信じたい」  
「確かにな……だが、ハイペリオンは君が思うほど高性能ではないのだよ」

軍にとってとはと付け加え、上官はコーヒーカップを手にとった。生産性や整備のしやすさ、故障の頻度に補充部品の手配体制、そしてそれらのコスト。軍の求める性能とはまさに総合的な性能なのだ。連合加盟各国で共同開発されたウィンダムの性能は、軍が求める水準を満たしているのだろう。ハイペリオンは、ユーラシアの特殊部隊による運用が続けられるのみであった。

上官は、ウィンダム運用ノウハウを早期に構築した陣営が、今後の連合の主導権を握るだろうといった。オーブ解放作戦以降の大西洋軍の独走は、ダガーという連合初のMSを生産から運用まで独占していたからこそ出来た事である。

「それを繰り返さないためにも、俺……私の力が必要という事です、か」

ハハハと笑った上官が時計を見上げる。同時に部屋扉がノックされた。

入ってきたのは、東アジア軍の制服を着た数名の人間だった。ウィンダムの試験は東アジアとの共同訓練なのだ。一通りの挨拶が済むと、後ろに控えていた女性が前に進み出る。

小柄で気の強そうなショートカットに、秘書か何かだと思っていたのだが、腕のマークはパイロットを示すものだ。

「東アジア共和国陸軍第422独立機甲混成部隊所属、メイファ・リン中尉。お目にかかれて光栄です、レコンキスタの英雄」

「カルロス・アストウリアスだ。英雄はやめてくれ」

初めて訪れたプラントは、拍子抜けするほどに普通の街であった。高層建築が多い事を除けば、待ち行く人々を含めて地球と変わる所は無い。クレープを片手に歩いている

カッパルの姿に、これが地球を未曾有の災害に落としいれ、血みどろの戦争を行っていた相手なのかと思う。

憑き物が落ちたような虚脱感を味わえただけでも、ここに来たかいがあつたのかもしれない。戦争が終わって半年程度でプラントに入国できるなど、どんな手品を使ったのか知れたものではないのだから。

ではその手品を何のために使つたのだろうか。男は地図を確認するように立ち止まる。マイウス市の中心街から離れた一角は、雑居ビルや小さな工場が立ち並んでいた。こういつたところも、地球と同じだ。

「イーガン設計開発事務所は、ここですか？」

「あ、お父さんとお母さ……社長と専務は外出中です」

ご用件でしたら私が承りますと言つたのは、自分の子供より少し大きいくらいの女の子だった。カフネ・イーガン、彼の接触目標である。

図面用のコンピュータに大判のプリンターとコピー、机の上に乱雑に積まれた書類、いかにも設計事務所といった感じだが、書庫や小物類に散見される家庭の匂いが、家族経営を偲ばせる。営業スマイルの少女に、男は名を名乗つた。そして、用件を切り出す。

「……旅行代理店の方ですか。グエン・ヴィレンさん？」

「いや、違うんだが……」

彼が彼女に接触した理由は、彼女をユーラシアへと「招く」事であった。詳しい話はこの書類を読んで欲しいと、グエンは封筒を差し出す。嚴重に封をされたその内容は、彼自身知らされていない。宛名は、彼女自身の名前になっていた。

警戒心一杯の表情で封筒を受け取ったカフネに、グエンは苦笑する。だが、家の手伝いをしていような子供にどのような用件があるのだろうか、彼はクライアントの顔を思い浮かべていた。楽な仕事というものは、どこにもないようだ。不意に、事務所の呼び鈴が鳴った。

カフネがドアを開けるより早く、ドアが開かれる。郵便だか宅配便のような制服を着た人間が三人、異様な身のこなしで入ってきた。室内にいたグエンの存在に驚いた素振りを見せたのは一瞬であり、彼はこの連中が宅配便のアルバイトなどではない事を見抜く。

偽宅配便がカフネの腕を掴んだのと、グエンの靴がそいつの顔にめり込んだのは同時であった。そして彼は悟る、何故自分がスカウトされたのか。

叫び声すら上げられないカフネを担ぎ上げ、グエンはブラインドの下ろされていない窓から外に飛び降りた。背後から聞こえてきたのは、サイレンサーで消された銃声。オーブンカーの幌をクッションにして道路に下りると、近くに止めてあった自転車を失

敬する。

「ママ、久しぶり」

「よく来たわね、アルテシア」

若い女性と中年の女性が、親しげなハグをする。パリ郊外にあるヴァロア邸は、日々政府要人の訪問に事欠かないが、今日の客は彼女の私的な知り合いである。カフェ・オ・レを給仕していた女性を下がらせ、しばし世間話に花を咲かせる。

陰では女ナポレオンと呼ばれるアリシア・ルイズ・ド・ヴァロアも、今はただの女性であった。訪ねてきたのは、彼女が寄付を行っている孤児院で育った女性だ。はつらつとした姿は、彼女が良い環境にいるだろう事を想像させる。それでも、今後の事まで心配してしまうのが親心だ。

「リシュレークの家は・・・大丈夫なの」

「戦争は、終わったのよ」

質問を上手にはぐらかせた。アルテシア・ローレンスは、呼吸を落ち着かせるようにカフェ・オ・レポウルに口をつける。この相手が警戒心を解いている機会など、そうそう巡って来るものではない。胸の底の良心を宥めるように、男の顔をポウルの底に思い

描く。

静かにボウルを置いたアルテシアは、そつと視線を外して庭の木々を見つめる。心配  
そうな微笑を横顔に感じながら、彼女はつぶやくように言葉を紡いだ。

「戦後復興は電力から・・・そう言ってるわ」

アリシアの微笑みが柔らかさを失う。さらに言葉を続けた。

「危険な仕事だから、自分でやるつて・・・秘書の私にも教えてくれないの。何でも・・・」  
「アズラエルの遺産」

心臓を鷲掴みにされるようなアリシアの声に、表情を変えなかったのは奇跡のファイ  
ンプレーだ。アルテシアはあくまで自然な装いで視線を元に戻し、首を傾げる。アリシ  
アの周りの空気が硬直しているのが分かる。

アリシアは呼び鈴を鳴らして、カフェ・オ・レのおかわりを持つてこさせる。だがも  
はや、世間話を出来る雰囲気は失われていた。それでも、アルテシアにとつては十分な  
情報を得る事ができた。後は知らぬ存ぜずを決め込めばいい。こちらの情報もアリシ  
アに知られてしまっただろうが、それは想定の上である。

日差しの温かさを感じないくらいに涼やかな空気、だというのに全身に汗が滲んでい  
るのが分かる。アリシアの迫力は想定していた以上のものであった。あの頃とは、何も  
かもが違う。

点つていく計器類が、コクピットを光で満たしていく。最後に正面モニターが点り、カメラが映し出す映像が辺りをおおった。画面に映る各種データを読み飛ばし、レバーとペダルの遊びだけを確認する。シートベルトの圧力を上げて、体の浮遊感を消す。

随伴の二機にはドッペルホルンを装備させておいた。こちらの機動について来られないのであれば足手まといであり、どの道特攻まがいの奇襲である。気楽に暴れられる状況を作っておきたい。

目標は輸送船、三隻のうちどれが本命かはいまだ持つて不明。そもそも成功させる気があるのかどうかすら分からなくなってくる作戦だ。

「ダガーの配置完了しました。砲撃開始と同時に射出します」  
「遅い、着弾と同時にライフルの有効射程に入りたい」

船長からの許可が下り、リニアカタパルトのチャージが開始される。

「ノワールダガー、出る」

いつものように、名前は言わない。ディルク・フランツ・ツエルニーという名、いや名前そのものに対するコンプレックスは、消えそうにない。

加速されたMSが宇宙空間に飛び出す。スラスターを吹かさないのは、熱紋を抑える

ためだ。機体の熱だけであれば、艦のセンサーでも感知は遅れる。AMBACだけで機体の向きを制御し、リニアカノンの照準を定める。第一撃で目標の一つを破壊しなくては、作戦の成功などありえない。

護衛のローラシア級が射線を遮らない事を願う。それが裏切られ、デイルクは思い切り舌打ちをした。

「素人が!!」

ドッペルホルンによる砲撃が早すぎたのだ。砲撃に対して防衛行動を取った一隻のローラシア級が、丁度ノワールダガーの照準に重なった。艦のセンサーに捕まる前に第一射を放つ。同時に最大戦速で艦隊へと機体を突っ込ませた。

対空砲火の光より早く、MSのスラスターの噴流炎が見える。一撃を食らっておきながらもMSの展開を優先したのだ。輸送艦隊にしては上等な司令官を持っているようだ。デイルクはペダル踏み込みを弱める事無く艦隊へと接近する。閃いたビームサーベルがジンを上下に分割していた。

「ミシマ、主推進器に被弾。速力が半減しています!」

「フィッツジェラルドを前に、ミシマを盾にする。砲撃は無視だ、当たらん!」

サイモン・メイフィールドは、積荷の正体を知りたいと願う。ザフトの艦隊が護衛する輸送艦を狙うのである、テロリストや海賊の類ではあるまい。ならばこれは戦争であ



る。その引き金は、間違いなくあの積荷だ。

モニター上の味方機がロストする。新兵が乗っているわけのない月軌道艦隊のMSだ。それが瞬く間に三機ロスト、艦の一隻は事実上の放棄、どこからか撃つてくる砲撃が牽制にすらなっていない現状を鑑みれば、

「二機です、間違いありません！」

裏返りそうなシビル・ストーンの声に、サイモンは眉間の皺を深くする。ヤキン・ドゥーエを戦い抜いた彼は、戦闘におけるコーディネーターの優位性など信じてはいない。だが単機で斬り込んでくる連合機は始めて見た。

損傷した艦を突出させ、あるだけの対空砲火を吐き出させる。それを軸とするように護衛機で火線の網を張って、敵機の色を落とさせた。戦争末期に就航した対空強化型の艦である事が唯一の幸運だ。輸送艦の足の遅さにイライラしながら、サイモンは敵母艦の索敵を急がせる。

砲撃を行っている機体を含めればMSは三、四機、それを積んでいた艦である。隠す方が難しいだろう。キャプテンシートが激しく揺れる。

「船首左舷部に被弾！」

「通常砲弾程度で沈むか！ 索敵急げ!!」

味方機の頭部が吹き飛ばされるのが望遠モニターに映った。

一般旅客の使用するロビーではなく、商用の貨物用シャトル専用の発着ロビーを歩く。作業服姿の人が大半で、普通の服を着ている自分達はかなり目立つ感じだ。前を歩いていた男性が立ち止まる。待ち合わせの場所らしい。

引つ張つてきたキャリーバッグを足元に引き寄せ、コトハは腕時計を見ている男性に声をかけた。

「先生、いい加減教えてくださいますか。これ以上は誘拐やつて、大声出しますよ」

「トルベンで構いませんよ、お嬢さん」

こちらの問いかけをはぐらかすような言葉だが、おそらく他意はないのであろう。アカデミーにいた芸術家肌の変人とは、また違った種類の変人にカテゴリーズされる人物だと思う。

肩のための息をつくコトハを横目に、トルベンはもう一度腕時計を見る。定期シャトルに遅れが出ているようだ。おそらく彼らが乗る予定のシャトルも、順番に遅れていくだろう。彼は自分のスーツケースに腰を下ろす。そして、コトハを見上げて問いかけた。

「トポロジって分かりますか」

「・・・幾何学かなんかですよね、般教にそんな授業があったような」

数学上の専門的な話題は本題ではないのですがと、トルベンは前置きをする。では本題をしやべってくれと言ったコトハに機先を制されて、彼は軽く咳払いをした。そしてコトハが修復したあの絵は、位相幾何学を応用した特殊な方法で解析すると、全く別の図形に変形させる事ができるのだという。

いわば一種の暗号のようなものだ。つまりコトハは、その暗号文を丸暗記している事になる。そして、それはとても危険な事なのだ」とトルベンが言った。

「・・・何ですか？」

「あの絵を思い出してごらん、そして僕は遺伝子工学の研究者だ」

四つの色の折り重なった螺旋模様で構成された絵を思い浮かべる。そこにトルベンの研究分野を重ね合わせると一つの答えが出た。

「あの絵は、レシピと呼ばれている」

危険の意味を多少は理解したような顔のコトハに、トルベンは申し訳ないと詫げる。絵画の搬送ミスは完全にトルベンらの責任であった。メンデルでの研究経験を持つ彼は、まさに生命に直結する危機感を持っているのだ。それに全く関係のない学生を巻き込んでしまった。

だから近づいてくる男にも、一応の警戒を示しておく。戦争終結直後で警戒レベルが上がったままの宇宙港だが、用心は自分でしておくべきものだ。

「タイナート先生かい？ 女連れとは聞いてなかったが？」

「・・・失礼だが、君は？」

「オイレン・クーエンス、あんたの迎えだ」

そう言った男は、不躰な視線でコトハを眺める。愛人でも無ければ、隠し子でもないと言おうとしたが、この手の男にはゆつくりと時間をかけて接していく方が得策だと思いい直し、彼女は黙ってキャリアバックのハンドルを伸ばした。

男は不遜な態度のまま先に立つて歩き出した。空港ロビーの窓から見えるシャトルを顎で指し示す。かなり大型のものだ。彼らはこれから大洋州の所有する資源衛星へと向う。

揺れ一つない磁気浮上式列車は、飛行機よりも快適かもしれない。ただ、車窓の景色を楽しむには不向きなのが玉に瑕だ。昼食が下げられ、食後のデザートとともに書類が手渡される。移動中にやってくる書類に、良い報せが入っているわけもなかった。

「・・・確認は？」

「取れています」

書類には、彼が接触を図った人物の死亡が記されていた。事態の展開の早さに、考え

がまとまらない。秘書からの報告では、警戒中の人物もこちらと同じ目的を持っているはずである。そういったこちら側の動きを察知して、ザフトが先手を打ったという事であろうか。

デザートには口をつけず、そのまま下げてもらおう。ブリュッセルまで一時間ほど、食後の一服をくつろげる気分ではなかった。

「アルテシアは、明日戻るのだったな」

ルーファス・リシユレークは、そう確認をして別の書類に目を落とす。財務内容はなかなか改善の兆しを見せない。政府方針の迷走が、経営環境に悪影響を与えている事は明確だった。

戦争がひとまずの終結を見せた今、世界はどの方向を見て足を踏み出そうとしているのか。ある者は、エイプリルフル・クライシス以来続く、地球規模での経済混乱を立て直すべきときだと言う。またある者は、プラントの野心を押し留めるに足る新たな軍備が必要であると言う。

戦争遂行のための各種規制が撤廃されない以上、民間企業とはいえ政府方針に従って活動を行わざるを得ない。だが肝心の政府方針が定まらない以上、経営方針も決める事ができない。

「だから、その電力事業、なのだがな・・・」

休止していた油田・ガス田の再開は進んでいるが、エネルギー価格は際限無く上昇していくであろう。そうすれば、経済復興だろうと軍備拡張だろうと、すぐに行き詰る。だからこそ、増加するエネルギー需要を賄いうる新技術を手にした者は、間違いなく戦後世界の中心となる。

それがルーファスの野望である。そのための鍵を求めて、プラントに人を送った。その人物からの報告はまだないが、先ほどの書類を見れば相当に危険な仕事となっているだろう。契約書のファイルを探し、内容を確認する。

「ご家族は・・・奥さんに、お子さんが五人か。死亡保障は低すぎるかもしれないな」  
万が一の場合は、ポケットマネーから弔慰金を出す事を決めておく。

ライフルの有効射程距離に入ったのと、カメラが捉えていた艦が爆発するのはほぼ同時だった。援護が間に合わなかった事に心の中で舌打ちをする。

センサーとカメラの乱れを勘で補正して、引き金を引いた。相変わらず、ビームライフルとの相性は悪い。もともとゲイツ用に開発されたライフルをシグーでも使えるようにしたものだ。戦争末期では、信頼性よりとりあえず使える事が優先された。バッテリーへの負荷を考慮に入れて、狙いを付ける。無駄弾は撃ちたくないが、牽制射撃を続

けた。

「速いな……!」

宇宙に溶け込んでしまいそうな暗緑色のダガーが、ビームの煌きの中に舞っているのが見える。特徴的なバックバックを付けているという事は、専用機の類だ。こちらの射撃にも気付いたはずだ。ダガーの挙動は、一隻撃沈を成果に帰還する腹積もりにも見えた。横滑りするようにビームライフルの射線を外す敵の動きに、ウォーレン・パーシバルは奥歯を噛み締める。

シグーにシールドを構えさせて、ペダルを踏み込む。二挺の小型ビームライフルを細かく連射してくる敵機に怯む事無く、シールドの機関砲で応戦した。ビームが機体をかすめたが、それが直撃しない事は見えている。

「ざんっ!!」

気合の声と共にシグーは腰の斬機刀を振り抜く。以前の乗機から移し替えた装備だ。漆黒の空間に火花が散るのが見える。敵は対艦刀を抜いていた。ビームサーベルであれば、そのまま突き抜けて攻撃を通せたはずだ。

伊達に特殊な機体に乗っていないと感心するより早く、敵のレールガンが放たれた。自由に稼動する翼状のユニットに取り付けられたそれは、こちらの機動に合わせて厄介なほどに動き回る。ウォーレンは再度踏み込む。リニアカノンのついたユニットを死

角は、ゼロレンジしかありえない。

シールドの機関砲の残弾を気にするのを止めて突進をかける。逃がしはしない。

「運が無い!!」

デイルクは叫んでレバーを押し込む。バッテリー残量を考えればこれ以上の戦闘は難しい。襲撃した輸送艦隊に増援が来る事までは想定していなかった。モニターの片隅には、ヴェサリウス級の姿が映っている。

シグーの突き出す刀が頭部の右側を通り抜ける。同時に機体同士が衝突してコクピットが揺さぶられた。揺れる視界の中で、敵の刀がその向きを変えたのを見る。持つて行かれるという意識と同時に、避けてはならないという本能が閃く。左腕部と左ウイングユニットがひしやがていくのが、やけにはつきりと見えた。

しかし、ノワールダガーは斬撃の勢いを利用してその場で一回転する。右手から伸ばされたビームサーベルは、その勢いのままにシグーの頭部を斬り取った。あとはあるだけの弾で牽制を入れて、スラストを吹かすだけだ。

ドッペルホルンの攻撃もいつの間にか止んでおり、宙域は再び静かになっていた。

撤退していく敵機のスラスト炎に、シビル・ストーンは肩の力が抜けるのを感じる。救援に駆けつけてくれたMSとの間に通信が開かれた。無線が通じるくらいの距離で戦闘が行われていたのだ。Nジャマー下特有の、酷くノイズの交ざった声が聞こえてく



る。

「プラント守備艦隊、ヤヌアリウス遊弋隊のウォーレン・パーシバルだ。まずは拾ってくれ」

「こちら月軌道艦隊所属、第52臨時輸送艦隊護衛部隊。指揮官のサイモン・メイフィールドだ。救援感謝する」

シビルは光学センサーが、シグーの打ち上げた信号弾の光を捉えた事をサイモンに伝えた。

「何だよ、こいつっ！」

通常のコクピットに比べてはるかにたくさんの装置が詰め込まれた場所で、それらの装置と一体化するような格好になっていたノーマルスーツがぐぐもった声を出す。潰れたようなその声は、苛立ちの言葉を吐き出し続けている。

エグザス本体から最大限まで伸ばされたケーブルは四本。そこに接続された四基の攻撃デバイスが、パイロットの意志を正確に攻撃へと転化させていた。だがその中心にいるはずの敵は、彼の攻撃のことごとくをかわし、本体のみを狙って反撃を重ねていた。「お前……他に出来ること無いだろ!!」

エグザスのコクピットの中、咆哮のように聞こえる声でノーリツチ・シユナウザーは言う。同時に、ガンバレルの動きは激しさを増し、エグザス本体も敵機を狙い始める。ガンバレルが発振するビームの刃が、妖しげに揺らめいた。

それでも、敵は冷静さを失わない動きで、エグザスのオールレンジ攻撃をいなしていく。

「勝てると思うなよ！ MA風情が!!」

オイレン・クーエンスの叫びとともに、一基のガンバレルがレールガンの直撃を受けて爆散する。彼の駆る機体は、アサルトシユラウド装備型ジン。武装とスラストターが一体化されたベルモットと呼ばれる追加装甲を着込んだそのジンは、マティーニと俗称される機体だ。

アサルトと呼ばれるジンよりも使い勝手が悪いと評判の機体だが、彼にとってはそのような評判は無関係であった。彼に操れないMSなど存在するはずがないのだ。発射されたグレネードの爆発が、エグザス本体の動きを止める。

本体を守るように寄り集まってくるガンバレルに、マティーニの突撃銃が降り注ぐ。重斬刀での斬り込みは回避されるが、ケーブルの一本が切断されガンバレルの一基がコントロールを失ってあらぬ方向へと飛んでいった。

「私の言った危険という意味、分かったかな」

生きた心地のしない状況で、そんな事をよく言えるものだと思う。トルベンの声が、ノーマルスーツのヘルメット越しに聞こえる。彼らの乗る貨物シャトルは、プラントの領宙を越えてしばらくしたところで襲撃を受けた。

それは予期されていた事だったのでだろう、オイレンは直ちにMSを発進させその迎撃に当たった。襲撃された理由は、間違いなく「レシピ」と呼ばれているもののせいなのだろう。

だが、こんな事に巻き込まれた不幸を嘆く余裕も無く、コトハは無事にこの場を切り抜けられることだけを祈った。シャッターの下ろされたシャトルの窓からは何も見えないが、時節座席が揺れるように感じるのが、何よりも不安であった。

「調子に乗るなよー」

「死ねやー」

二基のガンバレルの特攻を追加装甲のパージで切り抜けると、オイレンは重斬刀のみのジンでエグザスに突っ込んだ。一瞬の交錯と激しい衝撃。刀ごと右腕がもげた。大きく息をついてセンサーに視線を落とす。

エグザスの熱紋ははるか彼方に離れており、ジンの推進剤も乗ってきたシャトルまで持つ程度しか残っていない。

## 第二部

飽きる事はないのだろうかと思う。別段、風光明媚な場所でもなく、浜遊びの出来るささやかなビーチに過ぎない。だが、カーペンタリアの基地に下りてきた人は、多くがこうして海を眺めるのだ。そして誰もが、プラントには海が無いと言う。

白い肌に、白のビキニが妙に艶かしい女性が、大きなサングラスを水平線の方向に向けていた。

「泳いだり、しないの？」

ユウキ・ナンリは、身じろぎもせず海を眺める女性にそう聞いた。女性は、はつと気付いたように彼女の方を見てサングラスを外す。テルシエ・ミンターは、ユウキの姿を一通り眺めた。

「うん、しつかり女の子」

「!? 僕の趣味じゃないだろ！」

テルシエの見立てた水着を着ていたユウキが、顔を赤らめる。流石にこのフリフリはやりすぎだ。突っかかろうとしたユウキの手をすり抜け、テルシエが波打ち際に駆けていく。

このビーチは、基地関係者がよく利用する場所だった。戦争が終わって、ようやく地球を堪能できるとばかりに、非番の者はカーペンタリア周辺に繰り出していく。ビーチには他にも多くの兵士が訪れていた。

テルシエに追いついたユウキの顔に水がかかる。水しぶきの向こう側に、彼女の笑顔が見えた。ユウキも負けじと水を撥ね上げる。笑い声が青空に響く。遠浅の海が、幾重もの青のグラデーションを見せていた。

「あ……シャトル。輸送機かな、降下軌道」  
「見えるの？」

浮き輪を首の下にしてテルシエがやるように空を見上げる。少し傾いたとはいえ日はまだ高く、空に見えるものは、僅かな雲だけだ。一瞬だけ光つたと言うが、それをよく見つけられると思う。

目を凝らして空の一点を見つめてみる。テルシエに浮き輪を沈められ、ユウキは盛大に水を飲んだ。

不規則だった振動は徐々に収まる。アナウンスが流れ、シートベルトのランプが消えた。グエン・ヴィレンは大きく息をつく。同様にシートに着いていた人間は、めいめい

に立ち上がり持ち場へと戻っていった。おそらく着陸の準備だろう。隣の席では、ゆったりとした動作で、少女がシートベルトを外していた。

「もつと、堂々としていた方がバレないですよ」

「そりやそうだが・・・」

グエンは着慣れないザフトの制服の首周りを気にした。そして、こんな少女が着るサイズまでそろっているザフトという組織のあり方に呆れた。東アジア軍では、軍服など服に人間を合わせるもんだと古参兵に教えられたものだ。

マイウスで拉致されそうになったカフネ・イーガンを、一応は助け出したという形となったグエンは、その後二度のカーチエイスと一度の徒手格闘を経て、今このシャトルに密航している。気密の保たれた安全な場所に身を隠すため、彼らはクルーの予備の制服を失敬して何食わぬ顔でシャトルに搭乗していた。ちなみに、制服を借りる事を提案したのはカフネだった。

「降りるまでどれくらいかかる？」

「二時間つてところだと思えますよ」

少しはゆっくり話せる時間が取れるかもしれない。とりあえず目の前の事態には対処してきたが、根本的なところは何も分からないままだ。ただ、危機的状況とともに逃げ延びたという点において、彼女の信用を得る事は出来た。

だからグエンは疑問の核心を聞く。この少女は何者なのか。彼女を拉致しようとした者達、そして自分のクライアントは、この少女にどのような用件を有しているのだろうか。

シャツターの開いた窓から外の様子が見えた。丁度雲の上を飛んでいる。このまま地球を一回りしてカーペンタリアに降りるのだ。彼女はそう言つて、問いをはぐらかす。カフネは視線を合わせないように、窓の外を見続けた。

グエンが持つて来た封筒に書かれていた書類を一目見たときから、自分が狙われる理由は分かっていた。ザフトの開発局に関係する仕事をしていたため、このような事態が訪れる可能性は常にあつたのだ。ただ、実際にそれに巻き込まれると、心構えなどどこかに吹き飛んでしまう。

未だに頭の中は混乱しているのだ。無意識にグエンの手を握っている。ゴツゴツとした大きな手を、頼もしく感じていた。

そのサイズを小さいと言うのは語弊があるかもしれない。国際大会が開催できるレベルのサッカースタジアムと同じくらいの広さがあるのだ。だが、そこが居住空間となつたとたんに、言いようの無い圧迫感を覚える。天井のスクリーンに映し出されたイ

ミテーションの青空が白々しい。

大洋州が所有する資源衛星にたどり着いて二日、コトハ・キサラギは早速暇を持って余っていた。シャトルの傍で本物の戦争をされた恐怖は丸一日抜けなかったが、それが峠を越えると、好奇心が頭をもたげてきた。

しかしそこに、好奇心を満たしてくれる物は無かった。コンパクトな居住空間に、ささやかでも潤いを与えようとするように、花壇には花が植えられている。せめて画材でもあればと思った。

宇宙進出黎明期に作られた資源衛星で、かつてはプラント建設のための拠点でもあった。ここも、今では複数の企業が共同出資して基礎研究などを行うための施設になっている。トルベン・タイナートは到着早々に、その研究施設へ出向いている。

「単位とか・・・どうなるんやろ」

結局、そんな心配しか出来ない。レシピと呼ばれるあの絵が、どのような重要性を持つていて、自分がそこにどの程度関わってしまったのか、途方も無い上に漠然としていた。花壇の縁に腰をかけてため息をつく。

「危機感持てよ、危機感」

その声に振り返ると、ザフトの緑色の制服を着崩した男が見下すような視線を向けていた。その声と視線に、コトハは冷めた笑顔を向ける。



「先日はご苦勞様でした、オイレン・クーエンスさん」

たつぷりと棘を混ぜ込んだ声でそう返すと、踵を返して自分に割り当てられた部屋に戻ろうとする。肩を痛いほどに掴まれる。女性に対する、最低限度の配慮すらない男の行動に、反射的な恐れを抱いた。

オイレンが突きつけるように紙を差し出す。プラントで発行されている新聞の電子版を印刷したものだ。赤く縁取りされている記事は、読めという事なのだろう。男の手から逃れるように体を振って、紙を受け取る。

マンションの一室が全焼したという火事の記事だった。その住所は、彼女が一人暮らしをしていた場所である。火の不始末である可能性は、絶対に無いと言い切れた。

「……どういう、事ですか」

「狙われたのさ、命をな」

あの先生には価値がある、だけどあんたには無い。ただ余計な事を知っただけだ、オイレンははつきりと言った。コトハの手が強く握り締められ、新聞は小さな音を立てて破れる。

そのまま彼女を置き去りにするように立ち去るオイレンは、胸の内をつぶやく。どうせ命を狙いに来るならMSで来いと。そうすれば、自分が全て撃退して見せると。

「・・・ヤバい、わね」

各部のチェックを受けているムラサメのコクピット内で、ユイ・タカクラは資料をめくる。東アジア軍との共同訓練という名目で、ムラサメのデモンストレーションを行うはずだったのだが、連合も新型機を投入してきた。いわば、コンペテイションの場となってしまうのだ。

テストパイロットのプロフィールを見れば、ユーラシアも東アジアも本腰を入れてるのが良く分かる。

何より、ウインダムという新型の性能は破格であった。複雑な可変機構を導入する事無くサブフライトシステム無しの飛行を可能とするMS、しかもデインのように空戦に特化させたものではなく汎用性を維持したままなのだ。

モルゲンレーテは、これを機にムラサメの売り込みを考えていたのだろうか、そうは問屋が卸さないだろう。ハッチに上がってきた作業員が、コクピット内に繋いでいたケーブルを外そうとする。不自然に視線の向きに、ユイは胸元を広げていたパイロットスーツのファスナーを首まで上げる。

とりあえず、エアコンの効きが悪いと報告しておく事にした。ハッチが閉じられ、モニターが起動する。

「ま、あの子の方がきついでしようけどね」

滑走甲板に上がってカタパルトに機体を載せる。丁度、東アジアの空母にMSが着艦する姿が見えた。それに続いて、ウインダムも降りていく。最初の模擬戦が終わったのだ。カナデ・アキシノはヘルメットも外さずに、荒い息を吐き続けた。

機体への被弾をゼロに抑えることはできた。だが、計器のあちこちでアラームが鳴っている。過度の変形と強引な制動で、内部構造に負荷をかけ過ぎた。明日行われる二度目の模擬戦までに、修正できるかどうか微妙なところだ。

しかし、それ以上に衝撃だったのは、連合とオーブの送り込んだMSの性能であった。東アジア、いやFUYUYAMA社は完全に出遅れていた。満を持して発表した、自分達のオリジナルMSであるはずの心神。それがこのざまである。ウインダムやムラサメと比べて、スペックが低い事は明白であった。

空気抵抗を抑えるために機体を変形させ、あとはスラスター推力だけで飛行する形式の心神に対して、ムラサメは限定的ながら揚力を発生させて飛行する事ができる。推進剤消費量に圧倒的な違いが生まれるのは明らかだ。ウインダムにいたっては人型のままで飛行可能な大推力スラスターを装備し、強い空気抵抗を受けとめられる頑健な機体構造を有していた。

模擬戦の結果は、自分のパイロットとしての腕で機体性能の低さを隠したに過ぎな

い。だがそれも、素人の目を誤魔化せる程度の話だ。

「お疲れ様、いい戦闘だった」

シヨックに打ちひしがれる心に、その快活な声は毒であった。コクピットから降りたカナデを迎えたのは、模擬戦の相手の男だ。パツと見がいい男だけに、余計に堪える。差し出された手に何とか握手を返した。

「こちらこそありがとうございます、アストウリアス少佐」

カルロスは、握手の手をそのままに彼女をエスコートする。全く自然に腰に手を回し、甲板上に臨時で設営されている展望台に上った。次の模擬戦が始まる時間だ。

流星に腕から逃れたカナデの後姿に苦笑いをし、係員が手渡した双眼鏡を手にする。紺碧の空の微かな染みが、レンズの向こう側でMSの形になった。信号弾が打ち上げられる。ウインダムとムラサメが、ともに先手を取ろうと動き始める。

流星に航空機のような形に変形できるムラサメは、機動性が高いようだ。だが航空機同様に旋回半径は大きくならざるを得ない。それが、有利に働くのか不利に働くのか。カルロスは、彼女らの判断をシミュレートしながらそれを見つめる。

「そっさいや・・・女ばっかなんだな」

カルロスのつぶやきと、ウインダムが仕掛けるのは同時だった。ライフルの銃口が光る。模擬戦用のレーザーが発射されるが、命中判定はつかない。それでも、ムラサメの

飛行コースを潰すように銃口が巡っていく。

「落ちろ、戦闘機!!」

メイファ・リンはそう怒鳴ってペイント弾を発射した。ビームライフルを構えて、息を詰める。ペイント弾に対する回避行動を取った瞬間に狙撃するのだ。だがムラサメの回避行動は予想の上を行った。

人型に変形をしてエアブレーキで強引に制動をかけると、ほぼ垂直に上昇してペイント弾をかわしたのだ。戦闘機ではありえない動きに、ライフルの狙いをつけられない。しかも太陽を背にされた。シールドに三発の当たり判定、機体への損傷は皆無。メイファは対応を練り直す。

航空機形態と人型を行き来するその機動は、従来のMS戦闘とは全く別の対応が必要だろう。しかし、むやみに変形を繰り返すそのスタイルは、可変機の戦闘スタイルというより、パイロットの趣味に思える。メイファは奥歯を噛み締めた。

「戯れるな!」

ムラサメが発射したペイント弾をシールドで払いのけるようにして、ウインダムを突っ込ませる。ムラサメの余裕めいた動きが消えた。ビームサーベルが交錯、するはずだった。模擬戦では、ビームサーベルでの戦闘は再現できない。

信号弾が弾け、双方の機体が母艦へと帰還する。

ベッドというより、それはMSの整備用ハンガーに近いのかもしれない。透明なアクリル製の蓋の向こう側では、管やケーブルに繋がれた人間の姿が見える。それも、体の各部にそれらの機器をつなげるための装置が取り付けられている人間だ。文字通り、機械と一体化している。

「宇宙から降下したばっかなんだろ」

「でも、こうやって繋がってりや関係ないんじゃないか？」

白衣を着た人間が、そんな事を言いながら慌しく作業を行っていた。MSの方は既に準備が整っており、作業が遅れているのはパイロットの方だ。しかし、じきに日没を迎えることから、作戦の開始は翌日に繰り下げられる事になる。そのため、夜を徹して作業を行う事になった。

宇宙での戦闘データをフィードバックして、身体各部の再調整を行うのだ。エグザスを使用しながら戦果が芳しくなかったため、再調整も入念に行いたいところであった。せめて結果くらいは、まともなものを示したいところだ。

MSよりも整備に手間のかかるパイロットである、そこに投じられる費用もMSと同様の額がかかっているであろう。作業を行っている者も、それに実用性などない事は分

かっていた。

だからこそ、結果を出さなければクビに直結する。

「ノーリッチ・シユナウザー……たいそうな名前だよ」

番号で呼ぶのと、犬の品種名を付けるのと、どちらの方が趣味がいいのであろうか。

それはこんな化け物MSを開発する連中にも問いかけたかった。こちらのネーミングセンスは、あまりにも捻りのないものであるが。ノーリッチの乗る機体は、すでにそのエンジンに火を点していた。

大型浮体構造物を利用した洋上の観測拠点。大戦中、太平洋でのザフト監視の最前線の一翼を担っていたそれは、現在でも遠くカーペンタリアに備えるためのものである。戦争は終わったのではなく、ただ止まっただけなのだ。

連合各国もプラントも、次のための準備を怠ってなどいない。ここには、その準備の一つが用意されていた。

「海老？」

「ハサミが付いてるんだからザリガニだろ」

テストパイロットと聞いて、てっきりMSに乗るものだと思っていた二人は、目の前

の巨大な機体に、そんな間の抜けた感想を漏らす。技師はMAと言っているが、メビウスなどとは似ても似つかぬ形であった。

アドウカーフ・インダストリーが開発した新型MA、正式名称は決まっていなかった。ここではガラム・ガーと呼ばれていた。連合内でいち早くMSを導入した大西洋は、早くもそれとは異なる兵器体系の構築を考えているようだ。MSのみで全ての戦術を組み立てるザフトに対して、同様の方法を取るのには得策ではないという判断だろう。

「この機体は、機体制御と火器管制を別々に行う複座型コクピットを採用している」

「それって……ミコトと一緒に乗るって事か？」

「そう聞きたいのはこっちだ」

腐れ縁もここまで来ると運命だと、頭を押さえるミコト・ムラサメは、隣でにやにやしているカナン・エスペランザの頭を殴る。じやれる二人を無視するように、技師は向こう側のハンガーを指差した。

「ラビにはあちらの機体、ウインダムに乗ってもらいます」

連合の次期正式採用機だという機体は、塗装面にいささかの曇りもなく照明の中で輝いている。ラビ・アルベール・コクトーは、一瞬だけ視線をそちらに向けて、再びMAの巨体を眺める。

おそらくは、大戦初期から計画されていたものであろう。戦争が終結しても、兵器開



発は終結しないのだ。それだけに、自分の引き受けた事に暗澹たる思いを抱く。

以前の従軍理由は、あくまでも戦争を終わらせるためだった。個人の力がどうだという話ではなく、少なくともそういつた大義名分が存在した。だが、今から行う事は戦争の準備であり、戦争を始めるためのものではないのか。抑止力云々といった政治的レトリックを除けば、そう結論づいてもおかしくは無い。

「おとなしく試験飛行をさせてもらえないようだしな・・・」

MAの試験を行う場所は、大洋州領海のすぐ近くである。カーペンタリアの目前であり、それが示威行動を兼ねている事は明確であった。新兵器の姿を出し惜しみするつもりなど、どこにも無いようである。

早速ロッカールームに向うカナンとミコトの後姿を見送り、アルベールは責任者との調整のため会議室へと向った。

秘書が執務室に入ってくる。男性は顔を上げ、部屋に詰めていた会社の幹部達を下がらせる。彼は執務室と繋がった奥の私室に秘書を通した。彼女を抱き締めるのは、プライベートの場でと決めているのだ。

だからこそ、彼女が節度を持ったまま彼に接し続ける事を少しだけ不満に思ってしまった

う。コーヒーをいれる彼女の姿をしばし見つめる。

「どうしました、社長？」

「ここで社長はやめてくれ．．．いつも言うだろう」

「では、ルーファス．．．」

「様はつけるなよ」

ルーファス・リシユレークはそう言つて微笑んだ。受け取つたカップに、コーヒーではなく彼女の香りを感じる。アルテシア・ローレンツに椅子を勧めた。報告書は読んでもらえましたかという彼女に、君から直接聞きたいと、悪戯っぽく言う。

少し困つた顔をして、アルテシアは唇をぬらすようにコーヒーに口をつけた。そして、アルシア・ルイーズ・ド・ヴァロアと接触した内容を伝える。手ごたえとしては、100%黒である。

そして、こちらの動きも早晚把握されるだろうと伝える。ルーファスは微笑みを消して、腕を組んだ。

「用心したかいはあつたか．．．」

「プラントに送つた者からの連絡は？」

ルーファスは首を振り、代わりに接触対象のうち二人が殺害されたと言つた。犯人は不明だが、おそらくはプラント側の何者かであろう。情報の漏洩を防ぐための口封じと

考えられた。もう一人の接触対象については、連絡がないという。楽観的な期待は持てなかった。

プラントからの情報入手が困難になった今、残る情報源はオーブしかない。こちらに關してはモルゲンレーテが相手だけに、さらに情報入手は困難になるだろう。冷めたコーヒーを見つめながら、ルーファスは考えを巡らせる。

軍事予算に依存した経営など、どのみち時代遅れになる。原子力発電の復活は戦後復興に伴うエネルギー需要の増加に対する救世主となり、国家の経済基盤として会社の経営を支えるはずだ。しかしそのために必要なものを、スパイ小説さながらの方法で獲得しなければならぬというのが問題であった。

「すぐにでもオーブへ飛びます」

「・・・ああ、だけどすぐに行かなくていい」

今日くらいはゆっくり休んで欲しい、ルーファスはアルテシアにそう言う。俺のそばで、と付け加えるのを忘れなかった。

宇宙艦で感じるのが投げ出される不安だとすれば、潜水艦で感じるのは押しつぶされる恐怖である。宇宙艦で感じるのが漂流の不安だとすれば、潜水艦で感じるのは沈没の

恐怖である。

ザフトの地球での戦力を支えるボズゴロフ級潜水空母であるが、実際には潜水艦としての機能は極めて限定的である。潜水艦の建造ノウハウを、プラントにおいて獲得する事など不可能なのだ。さらに連合各国の海軍には職人的ソナー手が数多くいたため、大戦末期の対潜戦闘ではボズゴロフ級は多大な被害を受ける事になっていた。

そんな話を聞かされた上で艦長を任命されたのは、何かの嫌がらせかと思う。カーペンタリアでサイモン・メイフィールドを待っていたのは、異動通知であった。

「潜望鏡、海面に到達」

カーペンタリアも人手不足かなどと思いながら、報告を受ける。モニターに画像を映し出し、目標の姿を探した。ブリッジ内部のレイアウトは宇宙艦と全く異なっているが、それを苦にする事無く機器を操作しているのは彼と共にカーペンタリアに降りたシビル・ストーンだ。

操艦やCIC畑を渡ってきた女性で、ローラシア級のクルックスでもそつなく仕事をこなしていた。ただ、目立つタイプでない事は間違いない。それまでの経歴を見てみたが、上司や同僚からの寸評は、ほとんど付けられていなかった。

独特の結束を持つと言われる潜水艦のクルーにもすぐに馴染んだと思ったのだが、ただ存在感が薄くて軋轢がないだけなのかもしれない。そんな部下への物思いを断った

のは、モニターに映った映像だ。

「距離・・・5000」

「現在地把握、こつちの間違いでない証拠を残しとけ」

彼らの任務は、太平洋上で行われている連合の共同訓練の監視である。カーペンタリ  
アから指示された場所に潜行し、観測機器を洋上に浮かべて目標を探るはずだった。  
だが、その場所は訓練場所からあまりにも近すぎた。

いきなり爆雷を投下されることもないであろうが、当分の間は、物音一つにも神経を  
尖らせて過ごさなくてはならないだろう。慣れない、というか初めての潜水艦任務にし  
ては、ずいぶんとハードなものだと思う。サイモンは、ただ眉間の皺を深くする。

モニターに映る夕焼けの映像だけが美しかった。

プラントの演出される時間ではなく、自然の時間。空の彼方に沈んでいく太陽は、不  
機嫌な心を真っ赤に照らしてくれた。ずいぶんと小さな事に腹を立てていた物だと思  
い、ウォーレン・パーシバルはコクピットでの調整作業を切り上げる。

アンノウンの襲撃を受けていた輸送隊を救助し、そのまま護衛に付いた彼は、積荷と  
共に地球に降下していた。すぐにでも宇宙に上がれると思っていたのだが、そのあてが

外れたのだ。積荷の引渡しが終わるまで、引き続きその護衛を行うようにとの命令だった。

しかも、その積荷の正体、引渡しの日時や場所は全て伏せられたままである。先ほどまで文句を言いながら、シグーとグウルのマッチング作業を行っていた。

「やつと荷下ろしかよ……」

コクピット前の昇降用デッキで伸びをしながら、ウオーレンは降下したシャトルから積荷が降ろされていくのを見た。作業員に混じって、親子連れのような風貌の二人が降りてくる。14、5歳でのザフトに入る人間も珍しくないのだから、それほど奇異なものではないが、それでも一方はずいぶん子供に見えた。

昇降デッキのスイッチを操作してウオーレンは下に降りた。奇妙な二人連れは、積荷と共にどこかに行ってしまった。牽引車が積荷のコンテナを引っ張っていく。

それを横目で見ながら、カフネは張られたラベルを読む。目立たない形で張られているラベルに書かれているのは、数字とアルファベットの羅列だった。だが彼女には、その意味が理解できる。

クルーの話では、積荷はオーブへと送られるという。その不可解さが、彼女をグエンと共に行動する事を選ばせていた。この積荷が彼女の推測するとおりのものであれば、何故オーブに送られるのかが分からないからだ。そんな彼女の思いを見透かしたのか、

傍らの男性が聞く。

「・・・保護を求めたりはしないのか？」

「それじゃ、グエンさんが困るでしょ」

自分はザフトではなくあくまで民間人だというカフネに、グエンは肩をすくめた。何か重大な事を知っているであろう彼女を、そのままクライアントのもとに連れて行っているのであろうか。彼のクライアントが、彼女を拉致しようとしたあの偽宅配便連中と同じ穴の貉である可能性は十分にあるのだ。

涼しげな顔を崩さない彼女に、グエンは一抹の不安を覚える。この子は、子供が背負うべきではないものを背負っているのでは無いだろうか。彼はカフネの手を引いた。歩哨から距離を置いて背中を向ける。

まず考えるべきは、ここをどう抜け出すかだ。オーブに行ければ、ユーラシアのクライアントとも連絡が取れるだろう。彼は、のろのろと走る牽引車の後部座席にカフネを抱えて乗り込んだ。驚いた顔の運転手に「すぐそこまでだ、乗せてくれ」と頼む。

MSを打ち出すための専用装備は無いため、貨物用のマスドライバーを使う。居住区に重力を発生させるための回転運動を利用して、貨物を宇宙に放り出す装置がMSを発

進させた。中古の化学燃料ロケットが点火され、派手な光とともにMSが加速する。

発進はオイレンの独断である。たまたま管制室で発見した船籍不明の艦、それを追っ手だと判断したのだ。拠点攻撃用装備などで狙われれば、こんな資源衛星などひとまわりもない。先手必勝であった。

燃料を使い切ったロケットをパージし、スラスターを吹かす。最大望遠のカメラが捉えたものは、艦から伸ばされたカタパルトにMSが設置される様子だ。

「遅えよー」

オイレンと共に咆哮するレールガンは敵MSを仕留めるはずだった。だがモニターに映ったのは、よろめいた姿勢を立て直す黒いMSの姿である。舌打ちとともに武装を切り替えた、PS装甲を持った敵だ。

マティーニの腹部に装備されたビーム砲は、連射が利かない。あのタイミングでの攻撃で沈まない敵ならば、ビームで仕留められるとも思えない。ビームを牽制に接近して、持てる限りの砲弾を至近距離から叩き込む。反撃の射線を冷静に見切つて、オイレンはペダルを踏み込んだ。

突撃銃を細かく撃ちながら、敵との距離を詰める。腹部複列位相砲をワイドにして、壁を作るように発射した。黒いダガーが右に流れるのを捉える。腕のグレネードを発射して敵の動きを妨げ、慣性重力を振り切るように機体をターンさせる。



「消し飛べ!!」

突撃銃と肩のレールガン、そして各部に設置された小型のミサイルが一斉に吐き出される。

ノワールダガーは、全身を丸めるようにして衝撃に備えた。レールガンの一撃をウイングユニットで受け止めると、二振りの対艦刀を同時に抜いた。

殺到するミサイルが連鎖的に爆発する。その爆煙の中で、ノワールダガーのゴーグル型センサーの奥、デュアルアイが冷たく光った。デイルクの叫びとともに、ノワールダガーはマティーニに肉薄する。完全にノワールストライカーの間合いだ。突撃銃が切り裂かれ、腕の追加装甲に対艦刀が食い込んだのが見える。

だが一撃で腕を落とせなかった。寸でのところで衝撃を殺されたのだ。とっさに捻ったダガーの胴体の脇をレールガンが通り過ぎる。

頭部機関砲をばら撒くと、センサーを守るようにマティーニが距離を取った。デイルクは、ビームガンを乱射させて間合いを取らせない。瞬間的な加速性能は、ノワールダガーの方が上だった。対艦刀が機体の速度を加えて振り抜かれる。衝撃が機体全体を走った。マティーニの重斬刀が斬撃を受け止めている。

実体剣同士の鏖迫り合い、宇宙空間ではスラスターの総推力が勝負を決める。マティーニの重斬刀が押し勝ち、ノワールダガーが吹き飛ばされるように後退する。すか

さずマティーニは、レールガンを連射し複列位相砲で狙い撃つ。それでも、オイレンは奥歯を噛む。

自惚れてなどいない、自惚れる暇などない、だがMSの操縦という点で、他の人間に負けるわけには行かないのだ。だが彼の思いを空回りさせるように、敵は照明弾と煙幕でセンサーを殺して後退して行つた。

ノワールダガーのkokopittで、デイルクが二度に渡る作戦の失敗に歯軋りしている事など、オイレンは知る由もない。

既に日は沈んでいた。ようやく来客が途切れたと一息つく。今日の夕食は久々に一人であった。もちろん、食卓を囲んだ団欒の日々を過ごしていたのではない。食事の間まで来客の相手をしなくてはならないだけであった。

給仕の者を下からせ、好きなシャンソンをボリユームを絞って流させる。ワインの香りが鼻をくすぐる。料理の味を確かめるように、ゆっくりと口を動かす。

だが食事に多くの時間を取れるほど、彼女に暇はなかった。戦争が終わった今、ユーラシアは多くの懸案事項を抱えているのだ。アリスア・ルイズ・ド・ヴァロアは、その懸案事項に対する処置を考えなくてはならない立場にある。差しあたって考えねば

ならないのは、戦後の安全保障問題であった。

連合軍もザフトも疲弊しているため、再度の軍事的緊張は誰も望んでいない。だがこの軍事的空白を、誰がどのような形で埋めるのか。それが問題であった。既に連合内部でもユーラシア国内でも策動が始まっている。

「・・・戦争は、変わってしまった」

Nジャマーによる電波障害は、兵器から目と耳を奪った。レーダーと無線なしに、音速の数倍で飛ぶ飛行機から正確な攻撃を行う事はできない。GPSなしに、戦車は自身と味方の位置をリアルタイムで把握する事はできない。

それを解決した兵器がMSである。情報ネットワークのサポートを必要としないその兵器は、あたかも中世の騎士のように個人で戦場を形成する。

個々の兵器ではなくその全ての兵器を有機的に繋げるシステムこそが軍事力であった時代から、システムとは無縁の一騎当千の兵器こそが軍事力の時代になるだろう。MSの発展速度は、そのような時代がすぐそこまで来ている事を予言している。やがて量産機は基地の置物に変わり、戦争は圧倒的な性能を持つ少数のMSのみで行われるようになるだろう。

「そのための・・・核」

そんな時代を予見するからこそ、彼女は動いていた。ザフトを含めた地球圏の各陣営

は新型MSの導入を進めているが、彼女の目から見ればそれらはすぐに時代遅れとなる。新たな戦争に対応するには、新たなMSが必要とされるのだ。

アリシアは食堂をあとにして執務室へと向う。プラントから必要な人材を得る事には失敗したが、試験そのものを中止することはしない。

「エンジンの活動限界時間の計測を主眼に・・・」

技術の導入経緯を含めて、ユーラシア内部からの反発も予想される。だが安全保障問題は、移り気な世論に振り回される事なく、冷徹に国益に徹して考えるべきなのだ。手を組む相手が何者かより、それがどのような自国の利益をもたらすかを考えなくてはならない。

ユーラシアと東アジア、それにオーブを加えた共同訓練。新型MSを投入したそれには、企業関係者などの民間人も多く参加していた。そのため、一日の予定を終えた艦上では、ささやかなパーティーが開かれている。

明日も模擬戦が行われるため、最初のシャランペンだけに留めておく。カルロス・アストウリアスは、改めて他のパイロット達を眺めた。MSのコクピットに身を置く女性には、確実に増えている。それは決して喜ばしい事ではない。女は陸で男の帰りを待つて

いるべきだなどと、アナクロな事を言いたいわけではなくてもだ。

「美人がだいなしだ、中尉」

「その発言はセクハラになりますよ」

制服をきつちりと着たメイファ・リンは、カルロスに視線だけを送る。女性士官でもパンツルックを選ぶ者は少なくない。だが、それを喜ばない男も多いのだ。カルロスが軽く肩をすくめ、窓の外を指差した。

外は既に暗く、窓には顔が映るだけで何も見えない。カルロスが微笑んで、ようやくその発言の意味が分かる。ずいぶんときつい表情になっていた。メイファは慌ててグラスに口を付けて、その場を取り繕う。だが、そんな顔つきになつてしまうのも、当然だと言えた。

パーティーの中心では、私物であろう派手な服を着た女性が、周囲に微笑を振りまいている。

オーブのユイ・タカクラ。モルゲンレーテのテストパイロットという肩書きだが、あの技術は実戦経験がある事を物語っていた。おそらく、今日の模擬戦では手を抜かれた。機体の特徴をPRするために、変形を繰り返す事を主眼に置いていたのだろう。上には上がいる事は、理解する。だが、ああいうタイプが自分の上だという事が癪に障るのだ。

「君もああやって微笑めばいい」

「私はパイロットです。コンパニオンではありません」

カルロスはグラスを煽つてため息を消す。視線の隅に捉えたユイの姿にコーディネーターの即物性と複雑さを垣間見た。腕時計を見て、ジュースのおかわりを頼む。

ここを抜け出して二人で星でも見ないかい、と誘う気分にはさせないだけメイファは損をしていると思う。もう一人の彼女ならどうだろうと、会場を見回した。今日の模擬戦の相手、カナデ・アキシノの姿は見えなかった。代わりに、別の声を聞いた。

「いえ、明日は心神の模擬戦は行われません」

今回の共同訓練の主催者である東アジア軍から責任者として送り込まれた艦隊司令のゲンヤ・タカツキは、モルゲンレーテの人間にそう告げていた。今回の訓練はあくまでも軍のものであり、オブザーバー参加であるFUJIYAMA社の機体をむやみに訓練に加えるわけにはいかなんと言ふ。訓練とはいえ、事故を起こせば死者も出かねない。その時、軍属でないものが関わると、色々と厄介な問題も出てくるのだ。

「話が違います、艦長。我々は、法的問題点をきちんと解決した上で・・・」

それを聞いていたのか、FUJIYAMA社の社員らしき男が、ゲンヤに非難めいた口調で言う。聞き流す振りをしていたゲンヤも、くいさがる男のしつこさに閉口したのであろう、周囲の人間に分からないように日本語で言った。

「首相の娘さんに、これ以上恥をかかせたくはないでしょう」

心神の性能が、ウィンダムやムラサメと比べて劣る事は、今日の模擬戦で分かったはずだ。MSの採用は一国の都合だけで動かせるものではない。圧倒的な性能差を示せなかった以上、東アジア軍が他の連合加盟国と同じMSを採用する事は明白だ。

黙りこんだ男に軽く会釈をして、ゲンヤはその場を後にする。ブリッジから上がった報告に眉をしかめて、パーティーが行われている部屋を出て行った。戻ってきた対潜哨戒機が、奇妙なデータを持ち込んできたのだ。

戦争は終わった、その言葉の空虚さは、こういった形で現れるのだろう。テルシエ・ミンターはパイロットスーツのヘルメットを掴んだまま走っていた。ユウキがシエルトーに避難した事を確認していたら、遅れてしまったのだ。

「新人で遅刻って最低ね・・・」

古参整備員の怒鳴り声を聞きながら、コクピットのスイッチを入れていく。スクランブルが発令されており、既に数機のMSが発進した後だった。機体名と自分の名前を告げて簡易カタパルトに機体を移動させようとする。

不意にスピーカーが揺れて、通信が入った。先に出撃させろということらしい。管制

室からは確認のために書類をめくる音が聞こえてくる。

「パイロットだけじゃなくて、管制も新人かよ……行かせてもらうぞ。ウォーレン・パーシバル、シグー出る!!」

グウルに張り付くような姿勢で、シグーが射ち出される。珍しい機体だと思いつながら、テルシエは再度、名前を言った。乗っている機体は新型の可変MS・バビ。今までデインに乗っていたパイロットからの評判が悪いので新人に回されているという噂のある機体だ。

軽い衝撃とともに加速度を感じる。モニターには、一面の青空が映し出された。しかし、それに歓声をあげている余裕は無い。MSに乗っていると、大気が存在が一層はつきりと感じられる。ペダルとレバーに意識を集中し、大きく息を吸った。先行したシグーから通信が入る。わざわざレーザー通信を送ってきてくれた。

「悪かったな、先に出て。出撃は初めてか?」

「はい」

「なら、今回は何もするな。まだ仮免だつて事、忘れるなよ!」

ウォーレンはそう言って通信を切った。戦闘が行われずに越した事は無い。だが、もしそうなれば、新人など使い物にならないのだ。それを使い物になるようになるまで生かして帰す事も、経験者の仕事である。ルーキーをスクランブルに出すようでは、宇



宙で聞いていたほどカーペンタリアの内実は充実していないようだ。

あの積荷を襲った連中である可能性を捨てきれないために出撃したのだが、そうでない事を切に願う。あのレベルのパイロットであれば、新人達など標的にしかならない。バビがきつちりと後を付いて来る事を確認して、グウルのスラスターを吹かした。

レーダーと無線が使えない現在、スクランブルでも真つ直ぐに対象機体へ向える事は稀である。地上の観測所からの情報を基地で聞いたとしても、一旦出撃すれば後は自分の目で敵機を確認するしかないのだ。

そのため、敵機がとると予測される複数の進路に向けて、複数の部隊を向わせるのがセオリーだ。ウォーレンとテルシエは即席の部隊として考えられたのだろう、後から追いかけてくる機体は無い。

それを含めて嫌な感じだ、ウォーレンは呼び出した地図を見てつぶやいた。大洋州と大西洋が、その排他的経済水域か何かの権益を巡って揉めているという海域に近づいている。

「冗談じゃないぞー！」

グウルのリケットランチャーから発光信号弾が打ち出される。国際法に基づく警告の信号。シグーの望遠モニターに映るのは、はじめて見る機体だった。

「冗談でしょー！」

新型MAのコクピット内を悲鳴のような怒鳴り声が満たした。モニターに映し出された地図は、まだ大西洋の領海を飛行していると示している。隣のシートで攻撃用のスコープと火器管制用モニターを起動させた男を制して、女はレバーを思い切り引き上げた。

ガラム・ガーはその巨体に見合う噴流炎を光らせて急上昇を見せた。その様子にアルベールは胸を撫で下ろす。だが、状況の好転は見出せない。Nジャマー濃度が薄く、無線が辛うじて使えることだけが幸運だった。

「ムラサメ少尉、エスペランザ少尉、一切の発砲許可は私が出す！」

「ラビ、先に撃ってきたのは……」

「発光弾で戦闘はしない！」

ウインダム機の機上で、アルベールはそう言う。だがここは、非常に退き難い。領有権で揉めている場所で先に退けば、相手の領有を暗に認めた事になる。だが、カーペンタリアから出撃したMSとの交戦など、戦争そのものだ。

このまま推進剤とバッテリーが共に切れるまで、ギリギリと精神をすり減らすにらみ合いをしなくてはならない。敵にこちらのようないパイロットがいない事を願って、アルベールはウインダムを旋回させる。

ガラム・ガーもウインダムも新型であり、それをザフトに晒す事のリスクはあるが、戦

争の引き金を引く事も、地図の点線を実線に変える事も御免被りたい。二発目の信号弾が打ち込まれた。同時に放たれた信号弾を見てアルベールは通信機に怒鳴る。

「発砲許可は私が出すと言った！」

「発光弾は戦闘じゃないんだろ」

ガラム・ガーが放った信号弾は、派手な光りを青空に閃かせた。アルベールは、ミコトに撤退を命じる。カナンが不測の事態を招く可能性が出てきた。自分一人で、この場を収めるしかないようだ。

だが、不測の事態を招いたのは相手だった。信号弾を打っていない方の機体が急接近してきた。向こうにも若いパイロットがいたのだろう。敵の様子に、アルベールは一計を案じる。

「ミンター、何もするなと言った！」

ウォーレンはシグーを前に出す。通信機の声は冷静そうだったが、たつたの二機しかない状況で、敵の新型の挑発めいた信号弾だ。頭に血が上っても仕方がない。尻尾を巻いて逃げないだけ、パイロットとしては優れているのかもしれないが、ここでは臆病者の方が正しい判断が出来ただろう。

敵の新型の鋏状ユニットが色を変えた。おそらく、装甲切断用の武器だ。変形を解いたバビがエアブレーキで止まる。胸部ビームの発射体勢を取ったテルシエは、通信機か

らの盛大なノイズで引き金から指を外した。代わりにペダルを踏み込んで、巨大な鋏を足元にやり過ごす。

味方機の動きを押し留めるためとはいえ、シグーとウインダムはライフルの有効距離に入る。アルベールは通信機のノイズが消えたのを聞く。

「聞こえるか、ザフトのパイロット！」

「!? レーザーか！ 聞こえるぞ、人型の方のパイロットだな!」

ウオーレンが敵からの通信に怒鳴り返す。アルベールは、この場を共に黙って退く事を提案した。相手が退けないのも、こちらと同じ理由だろう。ならば、この提案にも乗れるはずだ。

シグーは信号弾を打ち上げた。今までのものとは違う色。それと同時に、グウルの機首が向きを変えた。アルベールも撤退を再度命じる。

ガラム・ガーから聞こえたカナンの不満そうな声に、アルベールは戻つてからの処分を考えた。普通の戦闘の方がましだったと思えるほどに、汗が吹き出ている。

対潜水艦戦、対水上艦戦、対航空機戦、そして対MS戦。一体どのノウハウを使用すればいいのだろうか。さらには共同訓練であるため、そのための装備しか持ち合わせ

せていない。自分に課せられた使命を考えれば、この訓練に参加している部隊を無事に帰すことだろう。

だがモニターに映るあれを前に、どうやって艦を後退させればいいのか。ゲンヤ・タカツキは細かな指示を出していく。艦砲が順々に発射されていき、水柱の檻で敵の動きを封じる。

「あとはこっちでやれって事か・・・」

艦砲を避けるように機体を旋回させながら、カルロスは舌打ちめいたつぶやきをもらす。訓練用標的艦を動かしていた僅かなクルーが、どうにか脱出できただけでも御の字としてもらいたいところだ。オートで火器を作動させていた艦は、今まさに沈もうとしている。

二機のウインダムと一機のムラサメによる対艦戦の模擬戦闘、そこに乱入して来た物を正確に認識するには少し時間がかかった。通常のMSの二倍強の身長をした巨大MSが、海中から現れたのだ。

その黒光りする装甲は、標的艦の火器を寄せ付ける事無く、指先から発射されるビームで艦を沈めた。

「アストウリアス少佐！・・・あれは、ザフトですか!?!」

「あちらさんも、そこまでバカじゃないんじゃないかしら」

メイファの声とユイの声、そして電波障害のノイズが交互に通信機を揺らす。上空を旋回していたムラサメが機体を傾けた。ビームを連射しながら急降下を仕掛ける。敵の正体が何であれ、敵である事に変わりはない。ましてや、あれを背に逃げられる気がしない。

巨大MSが空を見上げる。そしてその口にあたる部分から、幕のようなものを吐き出した。ビームとロケット弾が同時に弾ける。

「光波防御帯……まずいな、オイ」

カルロスはペダルを踏む。メイファ機の援護射撃を受けて、パックパックの翼にぶら下げている対艦ミサイルを一齐に放った。ガクツと軽くなった機体をさらに加速させ、ミサイルと共に突っ込む。

巨大MSの指から発射されるビームがミサイルを薙ぎ払い、爆発の炎と煙が壁のように立ち込める。その煙の壁を背にして、カルロスのウインダムがビームサーベルを振りかぶる。光波防御帯に受け止められるのは予想通り、狙うのは近づいてきた腕だ。

シールドに隠すようにしていたビームサーベルを伸ばし、機体を掴もうと不用意に伸ばされた腕を切りつける。同時にカルロスは、自分のミスを悟った。巨大MSの腕を切り落とせない。

「少佐!!」

メイファ機がシールドを構えて体当たりを敢行し、ムラサメは対艦ミサイルを急降下爆撃の要領で巨大MSにぶつける。流石の巨体も、派手な水飛沫とともに海面に倒れこんだ。

カルロスは二人に礼を言いながら機体を立て直す。全身がPS装甲かと思っていたが、腕だけビームコートを被せてあったのだ。

このまま沈んでくれればいい、そう思うという事は沈まないということ。三機は素早く散開し。三方からの攻撃に切り替える。光波防御帯も全面には展開できない。だが体勢を整え、海面をホバー走行する巨大MSは思いのほかよく動く。背部のコンテナから大量のロケット弾を打ち上げ、煙と水蒸気が周囲を満たす。

「実体弾!？」

メイファの声とレバー操作は同時。掲げたシールドに重い衝撃が走る。敵の腕にはリニアガンまで仕込まれていたのだ。掌を突き出すように、高速の弾丸を撃ち出して行く。立ち込める水蒸気でビームは減衰が激しい。こちらの反撃をし難くした上での攻撃だ。

メイファ機がリニアガンの圧力に弾かれる。歪んだシールドを投げ捨て、メイファは歯を食いしばるように体勢を立て直す。

「二機一機潰していく気ね・・・」

ウインダムを狙っていると判断したユイは、ムラサメを加速させる。あの装甲ではこちらの実体弾は利かないだろう。ビームが利く距離まで近づくか、そのまま肉薄するか。どの道、接近しなければ話にならない。変形を解いたムラサメが突き出したビームサーベルは、ビームコーティングされた腕で受け流された。

誘われたと思ったときには、一撃をもらっている。MSに殴られたとは思えない衝撃に、コクピットが揺れた。カルロスの攻撃が光波防御帯で受け止められ、自機に向けられた巨大な指が禍々しく光るのを見る。

次の瞬間、別の方向から光が走った。巨大MSの右腕が脱落する。

「・・・FUJIYAMA社のー」

「いいタイミングだー」

上空から飛来した心神の攻撃で主兵装の一つを失った巨大MSの動揺を、カルロスは見逃さない。シールドを鈍器代わりに、光波防御帯へと打ちつけた。ガクンと首を仰げ反らせた巨大MSのから空きになった顎に、ウインダムの爪先が入る。

再度転倒し海中に没した巨大MSは、そのまま沈んでいった。

バッテリーと推進剤のメーターはエンプティを示しており、普通ならばホッと一息つける状況ではないだろう。だが今は、彼らの全身を安堵感が満たしている。あの艦長なら、ちゃんと拾ってくれるはずだ。



海上に不時着させた機体のハッチを開けて、非常用の救命艇を用意するメイファは、すぐ近くにブイの様な物が浮かんでいるのを見つけた。しばらくするとそれは、海中に姿を消し、そのまま姿を現さなかった。

「どう・・・報告すればいいと思う？」

「私に聞かれましても」

シビル・ストーンは、サイモン・メイフィールドの深く深い眉間の皺を見ながらそう言った。連合の共同訓練を襲った謎の巨大MS。あれが自軍の物であつたらと夢想しても、あまり良い未来は見えないような気がした。

撤収の指示に従って、彼女は艦のオペレートへと戻るが、実感できた事は戦争が終わっていないという現実だけであつた。歪んだ現状を元に戻すための反発が戦争なのだとしたら、まだ世界は歪みを戻しきっていないのだ。だから、あんなものまで現れる。

レシピとは言いえて妙なのかもしれない。そこに書かれている通りの材料で、書かれている通りに調理をすれば、少なくとも料理は出来上がる。だが見本の写真のように上手に盛り付けたり、店の味のように仕上げるには、それだけではダメなのだ。レシピに加えて、求められる技量というものがある。

トルベン・タイナートは、画面から目を離す。観葉植物の緑が滲み、目頭を強く押さえた。この設備では、やはり十分な研究が出来ない。実際の遺伝子発現を行うための培養施設も手狭であるし、タンパク質をシミュレートするためのコンピュータも能力不足であった。

襲撃を受けたという話も入ってきた事であるし、やはり場所を動いた方がいいのだろう。彼を支援している研究機関も、そのための準備を始めたようだ。

「問題は、あの子だな・・・」

手違いとはいえ、とんでもない事に一般の人を巻き込んでしまった。このまま彼女を同行させるといふ事は、巻き込み続けるといふ事でしかない。しかし、彼らを狙うのがある種の超国家機関であるのならば、彼女の安全を保障できるのはここしかない事になる。

難しいところであった。トルベンはブラインドを開けて外の光を入れる。外とはいつても、室内と同じ人工灯に過ぎないのだが。

庭の芝生のところで、コトハ・キサラギが研究所の女性と何か話しているのが見えた。度胸が据わっていて、順応性も高いので、彼としても余計な心配をしなくていい分業ではある。だが根本的な解決にはならない。

彼女の選択に任せるといふ無責任は、巻き込んでしまった大人としてしたくない。だ

が、あやふやな説明のまま連れまわす事もそろそろ限界だろう。しかし、明確に説明を行えば、確実に彼女を深みに連れ込む事になる。

机の受話器を取ってコーヒーを頼む。本格的にここを動く話が出てくるまでもう少し余裕があるはずだ、それまでに方針を決めればいい。彼はそれだけを決めた。

## 第三部

意を決する、初めてその言葉を使う時がきた。カフネの足が、薄い鉄板を蹴る。その小さな体は夜の闇を背景にした何も無い空間へ飛び上がり、つかの間の浮遊感に髪が揺れた。勢いの付いた彼女は、目の前で待ち構えるグエンの体にしがみつく。ロープを掴んだ腕一本で宙吊りに体を支えていたグエンは、その衝撃を利用して体を振ると勢いよく隣の足場へと飛び移る。

彼はカフネをしがみつかせたまま、足場を駆け下りた。背後からも、足元からも、追っ手の声が聞こえる。出合い頭に衝突した歩哨を掌底で沈黙させ、彼はさらに足を速める。

暗闇に響くのはサイレンの音と怒声。時折走る光は、車のヘッドライトや懐中電灯の灯りだろう。走れると言ったカフネを降ろし、藪の中に分け入って一息入れる。

「よく飛んだ……偉いぞ」

肩で息をするグエンは、既に傷だらけであった。擦り傷や切り傷、せいぜい打撲程度で、大事に至るようなものはないが、それでも見た目はボロボロであった。カフネは自分のハンカチを出して、半分乾いているような傷口を押さえる。蒼白な唇と涙を浮かべ

る瞳に、グエンはせめてもの微笑みを見せた。

カーペンタリア基地は首尾よく脱する事ができたのだが、オーブへ向かうためにダーウインの街に入ったところで追跡者に追いつかれた。追跡してきたのが、彼に言わせれば喧嘩慣れしていないような子供が大半であったため、カフネを抱えての大立ち回りを演じながら、逃げ続ける事が出来ている。だが、明るくなればそれも難しくなるだろう。カフネの安全だけでも確保しようと投降も考えたのだが、彼女はそれを拒否した。流石に今回は、その理由を問い詰めざるを得ない。そして彼女は、あの積荷の正体と、自分が狙われているであろう理由を答えた。

「・・・待てよ、嬢ちゃん。なら、ユーラシアだつてヤバいぞ」

「でも、グエンさんは大丈夫です」

確かに、ザフトに投降した場合の自分の身の安全は保証されないだろう。だが自分のクライアントが、彼女の持つという技術を使って何を考えているのかが予測できない。プラントにもコーディネーターにも恨みはあるが、だからといってブルーコスモスのような手段を正当化できるかと問われれば、頭を抱えざるを得ない。

本当なら、ゆっくり考えてでも最善の答えを探すべきなのだろうが、今の状況はそれを許してくれないだろう。グエンは何か言おうとしたカフネの口を押さえ、頭を低くした。すぐ近くの道で、懐中電灯が揺れている。

考える時間を作るためにも、今はこの場を無事に逃れる事を優先すべきだ。グエンは近くに落ちていた木切れを拾い上げ、藪の向こう側に投げる。

「行くな！ 罠だ！」

「ハイ、よく出来ました!!」

木切れを投げ込んだ藪の方に向わなかった一人の追っ手は、突如目の前に現れた拳に吹き飛ばされる。その音に振り向いた一人は首筋にハイキックを叩き込まれ、もう一人は懐中電灯を向ける前に一本背負いを食らっていた。

「ザフトってのは受身も練習しないのか」

グエンはカフネに合図を出し、追っ手の乗ってきた車に乗り込む。三人の追っ手が連れてきた犬が所在無げに歩き回り、寂しげな遠吠えをあげた。

「もしかして、デインゴってやつ？」

「まさか、野良犬だよ」

カーテンの隙間から外を覗くテルシエに、ユウキはそう答えた。彼女のオフを利用しての旅行の最中なのだ。ダーウィンにある両親の実家に一泊し、そこからオーブへと向う予定である。

初出撃で大きなミスをしたと一時はものすごく落ち込んでいたのが嘘のように、テルシエははしゃいでいる。ユウキは彼女に早く寝るよう促した。

自爆したマストドライバーの再建が始まっている。突貫工事とはいえ、港の復旧工事もあらかた終わっているようだ。乗ってきた貨物船の検査は簡単に終わった。名目は独立を保っているとはいえ、ここまで大西洋の息がかかった国が目の前にあるというのは、カーペンタリアとしても面白くないだろう。ラビ・アルベール・コクトーは、新型MAを極秘で輸送中の貨物船を見やった。

先日、飛行訓練中にザフトの部隊と接触したというアクシデントは、流石に軍上層部を慌てさせた。そこで地球での運用試験を中断し、先に宇宙での試験を行う事が決定されたのだ。ここからビクトリアまで移動し、宇宙への打ち上げを行う事になっていた。

「じゃ神父さん、あとはよろしく」  
「ハメを外すなよ」

ミコトの拳を顎に受けているカナンを横目に、アルベールはそれだけ言う。カナン・エスペランザとミコト・ムラサメのスキンシップは、今にはじまったことではない。オーブへの寄港中は、二人に休暇を与えておいた。ああしてじゃれあう年頃の子供を、MSのそばに押し留めておく不健全さを許したくなかったのだ。

アルベールは在オーブ大西洋大使館に入った。ここの駐在武官とともに、今後の予定

を詰めなくてはならない。外から聞こえてくる騒音は、復興の槌音といったものであるうか。

戦争は市街地にも多くの被害を出した。連合がその復興支援などを行っているが、まだまだガレキの撤去が終わったばかりという場所も多い。街全体が埃っぽく、南国の青空も、どこか濁って見えた。

それでも、戦争が終わった事による活気はあった。板を組んだだけのような商店が軒を連ね、市場のようになっていている場所には多くの人が集まっていた。

「焼きバナナ二つ」

「無駄遣いだぞ」

「じゃ、お前にややんね」

串を二本両手に持ったカナンがそう言って、両方から湯気を立てるバナナを頬張る。ミコトが首を垂れた。別にシヨツピングと洒落こみたかったわけではないが、戦後闇市を見物しても面白いとは思えなかった。活気があると言っても、それは油断のならないものだ。

串を放り投げたカナンを注意しようとしたミコトに、子供が立て続けに二人もぶつかった。派手に転んだ子供に、カナンが駆け寄る。

「大丈夫かボウズ。ミコト、前見て歩けよ」



子供相手にぶつかってきたのはそつちだという事もできず、ミコトはそつぽを向いた。たまたま持っていたキャンディーをポケットに見つけ、彼女はそれを差し出す。無邪気な声でアリガトウと言った子供達は、そのまま雑踏の中に消えていった。

この人ごみでは身動きも取れなくなると、ミコトはカナンの袖を引つ張つて、通りから離れた。これでは船でじつとしていた方がいいと思ひ、カナンに戻るよう言う。もう少し見物していくと口を尖らせる彼の首を掴んで、そのまま歩き出した。

不意に、二人に呼びかける声がある。振り向くと、女性が一人手を振つて歩いてきた。デニムのショートパンツに、丈の短いTシャツ。メリハリの利いた体の線がイヤでも目立つ格好だ。口笛を吹いたカナンを一発殴る。

「ダメよ、あんな所でお金の入ったお財布見せちゃ」

その女性はそう言つてカナンが持つているはずの財布を見せる。彼は慌てて体を探つた。掏られていたのだ。だとするとこの女性は、それを取り返してくれたのだろうか。財布を手渡してくれた女性は、一緒にキャンディーも返す。

「年なんて、関係ないのよ」

あの子供かと、カナンは複雑な気持ちでキャンディーを受け取つた。

この女性は正しい事をしたのだろう。だがその微笑に、言い様の無い反発を覚える。礼だけ言つて立ち去ろうとする彼女を無視して、カナンが自己紹介をした。

「……こんな時期にカップルで旅行？」

「いえ、仕事です」

ユイ・タクラと名乗った女性は、また会えたらゆつくり話しましょうと言って、もと来た方へと去っていった。

こういうのは上手い絵とは言わないのだろう。観察力と記憶力、そして手先の器用さが描かせるもので、絵画のアウラはここに存在しない。模写や修復といった世界では、ある程度重宝されるのかもしれないが、個人的に心惹かれる業界でもなかった。

そもそもアカデミーに入ったのは、人生最後のモラトリアムのようなものだ。取得を目指していた資格はあるが、それとて夢にまで見るといったレベルではなかった。そして、それで十分な世界に住んでいたのだ。ついこの間まで。

「何なんやろ……もう」

スケッチブックを置いて、コトハ・キサラギは苛立たしげにつぶやく。絵も描き飽きたし、本も読み飽きた。あとは、人生について考えるくらいしかすることが無い。今考えねば、明日は考えられなくなるのかもしれない場所にいるのだから。

コトハ達が滞在している資源衛星への襲撃は一度あつたきりだが、警戒は続いている

ようで、オイレン・クーエンスは、毎日のようにMSを出撃させていた。最初のうちは、仕事熱心だ程度に思っていたのだが、どうやらそれとは少し違う種類の人間であるようだ。コトハに対する態度も、女性蔑視というよりもっと深いもののような気がする。重力区画を出て、船やMSの発着場がある無重力区画に足を向ける。

特殊な透明アクリルで出来た円筒形の通路から、ノーマルスーツ姿の作業員の姿が見える。戻ってきたらしいMSの整備を行っているようだ。ザフトの主力MSにゴテゴテと服を着せたようなその姿は、素人目にも強そうには見えない。

「何してる？」

その声に振り返ると、振り返った勢いを殺せずにその場で回転してしまう。靴の裏のマジックテープを床に貼り付けようとしますが、つま先が届かない。横を通り抜けようとしたオイレンの腕を掴んでようやく体を固定した。

「(っ)めんなさい」

「・・・つとに、危機感つてものが無いな」

オイレンの言葉に視線を伏せる。だが、自分の巻き込まれた状況が、巨大で複雑で捉えようが無い事も事実だ。そう言うと、オイレンはただ鼻で笑った。

「なら、どうやって持てばいいんです？ 危機感」

オイレンの手が伸びた。コトハの右耳が空気の揺れを感じる。音を立てて壁に手を

付けたオイレンは、そのまま顔をコトハに近づける。そういう危機感を聞きたかったわけではない。コトハは身をすくめる。

「あんたみたいな恵まれたコーディネーターには、一生無縁の話なのかもな」

耳元でささやくように言ったその言葉は、どことなく呪詛めいている。身を翻して通路を去っていく彼は、警戒飛行のためMSデッキへと向った。

コクピットに潜り込み、オイレンは素早く機器のチェックを行う。暇なら十分にあるのだろう、整備は完璧のようだ。マティーニに目に光が点り、物資投擲用レールが延ばされる。管制室からのカウンtdownに合わせて、スラスターを点火した。

漆黒の宇宙に飛び出したMSの中でオイレンは吠える。危機感とは、生死の狭間から生まれるものではない。そこにあるのは偶然と必然の刹那だけだ。オイレン・クーエンスの危機感は、自らの存在価値の有無が問われ続ける場所にこそある。手を伸ばせば届くほんの1.5m四方ほどの空間が、彼の存在意義の全てであった。

ザフトが現在使用できる地上施設にマストライバーはない。カオシユンとジブラルタルの交換は、プラントにとって大きな譲歩であるが、ザフトにマストライバーを保有させ続けるという選択肢が連合に無かった以上、再度の戦争を回避するには致し方の無

い事であった。地球とプラントの行き来は、大気圏離脱用のシャトルで中継地点まで飛び上がり、そこで乗換えを行うのが一般的である。

基本的に一般旅客など存在せず、兵員は即ち貨物であるという発想に基づく軍用シャトルは、頑丈だけが取り得の様な格好をしていた。連合が採用している空対空の機関砲弾にも耐えられるという噂だ。

「だからって、打上げ時に5Gはないよな」

ウオーレン・パーシバルは、隣の席の女性に話しかけた。自分に下つていたよく分からない命令は、良く分からないままに解除され、彼は原隊に戻るべくシャトルに乗り込んだのだ。

打上げ時のGの事など初めて聞いたとばかりに聞き返す女性の声に、聞き覚えがある。聞いてみると、自分と同じ時にカーペンタリアに降りてきた女性だ。通信で声だけ聞いた時は、さぞかし美人だと思ったが、見てみるとそれほどでもない。美人には違いないが凡庸だった。

ウオーレンの愛想笑いがどんなものなのか、シビル・ストーンは察する。彼女に対する周囲の反応はいつだって、期待外れという反応なのだ。それは自分が期待通りの能力を発揮するからこそであり、期待通り以上の事が出来ないからだ。曖昧な微笑みを浮かべると、彼女は視線を外した。

出来ない事は何も無いのに、出来る事も何も無い。努力しなくても出来るのに、努力しても出来ない。そんな自分の体の出来を、嘆く事にも飽きていた。シートベルト着用のランプが付く。

専用のリニアカタパルトにシャトルが設置された振動が伝わり、機長からのアナウンスが聞こえる。最重要物資である空気と水を満載し、いくばくかの機材をとみに積み込んだシャトルは、人員など余剰スペースを埋めるためのものだと言わんばかりの加速度で動き出す。

「まったく・・・地球の景色なんざ、見納めかもしれないのによ」

パイロットとして軽口を叩くくらいに余裕はあっても、窓の外の景色を見る余裕など無かった。下手に首の向きを変えたりしたらムチ打ちになってしまいそうだ。艦艇クルーのシビルに、ウォーレンの声に応える余裕など無かった。

頭をシートにめり込ませるような加速度が消え、逆に体全体を浮遊感が包む。シャトル全体に安堵のため息が広がった時、もう一度アナウンスが聞こえた。若干の軌道変更を行った後、經由地へ向うと。

窓の外には、景色ではなく地球そのものが見えていた。

上層部も、一回の試験で使えるか否かを判断する事はできないと判断しているのだらう。機体もパイロットも、ともに試作型なのだ。

ただし機体の方に関しては、少し違う見方が出来る。その存在を完全に秘匿するのはなく、不明確なまま誇示する事によって、相手に対して無形の圧力を掛けようとしていた。

彼らブルーコスモスとしてもスポンサーにその实力を見せておかなければ、いつ援助を打ち切られるか分かったものではないのだ。實力を誇示するために過激化するその行動の象徴となるのが、便宜的にブレイカーと呼称されている巨大MSであった。

「これだけデカイのに、コクピットスペースもまともに付けられないのか」  
「設計屋なんてそんなもんだ」

連合で採用を目指している新型MAが複座式を取り入れているのに対して、ブレイカーは単座のままである。さらに特殊な動力源はその制御が不安定なままであった。そのため、機体の操縦、火器管制、索敵などのほかに、出力系の制御までパイロットが行う必要に迫られている。

そこで、それらを一気に行う事のできるパイロットとして、今水槽の中で眠る彼が選ばれたのだ。だがもはや、彼という人称代名詞が相応しい存在なのかどうか、定かではない。

かつて生体CPUと呼ばれる強化兵士が存在したが、この試験型エクステンデッドであるノーリッチ・シユナウザーは、もはや生体であるのかどうかも怪しくなっていた。

「しかし、お偉いさんは……こういうので一発逆転できると思ってるのか？」

「考えるだけ無駄だ、仕事しろ仕事」

久しぶりの太陽に目を細め、整備員は流れる汗を拭いながらその巨体に取り付いていた。追跡していたザフトの潜水艦を撤く事に成功し、ブレイカーを搭載した特殊潜水母艦はインド洋の秘密基地で、再出撃の準備を行っている。

その場所は、カーペンタリアとジブラルタルを結ぶシーレーンのすぐ近くであり、灯台下暗しを地で行くような場所であった。サイモン・メイフィールドが伝えたアンノウンのロスト地点も、カーペンタリアの司令部は重点警戒区域だとして、所属不明艦の存在などはなから信じないといった感じで聞き流された。

「宇宙暮らしでもクジラと潜水艦の区別はつく」

サイモンは眉間の皺を深くしたまま吐き捨てる。気分を切り替えるように頬を叩いて、制服の襟を正した。

カーペンタリアからジブラルタルに移動した彼の目的は、ユーラシア軍への表敬訪問であった。ユニウス条約を主導したユーラシアとは、是々非々の関係を保つのが現在のプラントの方針であり、過度の対決姿勢を見せたりはしない。



既に幾人かの高官に会ったのだが、その中の一人が是非会っておいた方がいいという人物を紹介してくれたのだ。アリシア・ルイーズ・ド・ヴァロアという人物がそれであった。

カーペンタリアをその懐に有する親プラント国家、大洋州連合は鶴のような存在である。綱渡りのような外交戦略を維持し続けているこの国の首脳は、マスコミ受けする言動も無く地味で目立たず顔すら知られていないが、おそらくは歴史に名を刻む事の出来る政治家であろう。

大西洋連邦の保護国と化したオーブに対しても定期船をいち早く就航させるなど、その鶴つぷりをいかになく発揮していた。物資不足のオーブでは何でも売れるため、定期船は日用品を抱えた人達で溢れている。見えてきた岸壁は、修復したての鮮やかなコンクリート色だ。

「これじゃ、降りるのにも時間がかかるね」

岸壁には多くの人々が既に集まっており、定期船が持つてくる日用品を今や遅しと待っている。おそらく、即席の市場でも開かれるのだろう。ユウキ・ナンリは甲板から遠くを眺めている女性に話しかけた。

その女性、テルシエ・ミンターは港の一角をじっと見つめていた。何か珍しいものが見えるのだろうかとそちらを見るが、何隻かの船が停泊しているだけである。彼女は何かをつぶやいたが、聞き取れなかった。

テルシエは荷物を取り戻ろうと、ユウキの肩をじやれるように抱いて船室に向かう。遠くに停泊していた一隻は、コンテナ船に偽装はしているがおそらく軍艦の類だ。せつかくの旅行に水を差された気分だった。いつまで戦争をすれば気が済むというのだろうか。

「……私だけ、先行ですか」

そのコンテナ船の中で、ラビ・アルベール・コクトーの苦い声が響く。空路でビクトリアに向かい、そこで機体とともに宇宙に上がれという。宇宙におけるガラム・ガールの受け入れ準備が必要だというのが理由だ。

もう一つの理由は、インド洋におけるザフトの警戒レベルが引き上げられたという事だった。迂闊に航海すれば船ごとMAを拿捕されてしまう恐れもある。パイロット二名とMAは、もうしばらくオーブに留まって様子を見る事になっていた。

子供二人に留守番をさせるのが心配なのではないが、ある意味それ以上にリスクのある事かもしれない。オーブが大西洋連合の影響下にあるとはいえ、前大戦で暗躍した数々の組織と繋がりとあると言われている国だ。モルゲンレーテの非合法活動など、各

国の軍需産業の間では公然の秘密となっている。

アルベールは居住まいを正している二人に視線を送った。エイプリルフル・クライスの混乱時に現地徴用兵として大西洋軍に参加しそのままMSのパイロットにまでなった二人である。大使館からやって来た男は心配ないというが、アルベールとしてはだからこそ心配であった。

「ご心配には及びません、ラビ」

ミコトの言葉に、彼は辛うじて微笑んだ。彼女らは、子供として知るべき事を一体どれだけ知っているのだろうか。

コクピットがこんなにも気分晴れない場所だとは思ってもよらなかった。連合の新型にオーブの新型、そして正体不明の巨大MS。世界の兵器事情は、FUJIYAMA社の予測をはるかに超えるスピードで進んでいたのだ。心神の採用は、白紙に戻ったといつていいだろう。

両親が色々と手を回せば、二回目のチャンスくらいは巡ってくるかもしれない。だがそこで逆転が可能なほど、ウインダムという機体は低性能ではない。ロックを解除してレバーを起こすと、機体にかかる空気抵抗が増す。人型に姿を変えた心神は、標的ブイ

にレーザーを照射した。当たり判定の照明弾が打ちあがる。

機体の高度が下がりますぎる前に、変形して空母への帰還コースに入った。共同訓練が謎の巨大MSの襲撃によって中止された後も、東アジア軍日本自治州海軍の軍艦を借りて、FUJIYAMA社は訓練を続けていた。

「私個人のスキルが上がってもどうしようもないよね……」

カナデ・アキシノがつぶやきと共にセンサーを弄った。不意に左手に信号弾を確認する。熱紋の類を感じしていなかったため、兵器その他ではないはずだ。モニターで海面を映すと、ヨットが見えた。二人の人間が盛んに手を振っている。

「遭難ですか」

ヨットから空母に乗り移ったのは、親子らしき二人だった。らしきとしたのは、あまりに似ていないからだ。子供の方がコーディネーターだと聞いて一応は納得するが、どうにも怪しかった。

一人は鍛え上げられた軍人のような体つきの男性、もう一人は華奢な女の子だ。ヨットを使つての冒険旅行などと言っているが、信じていいものかどうか微妙だった。パスポートも持っていないので、グエン・イーガン、カフネ・イーガンという名前も本名かどうか分からない。

「準備不足ですな……明らかに」

ヨットを調べたクルーの報告書に目を落として、ゲンヤ・タカツキは言った。行き先がユーラシアだというのが、不可解さに輪をかけている。おそらく、オーブからの大洋州への密入国を狙った難民か何かだろう。大西洋の影響下に入り、コーディネーターが住みにくくなったのかもしれない。

ゲンヤが顎を撫でる。この二人をどう処遇するかだ。近くの港で適当に降ろそうにも、こちらは軍艦なので簡単に港に入る事ができないのだ。水と食糧を分け与えてヨットで追い出す事も出来るが、遭難者に対してそれは流石に非人道的であろう。

となると、一旦日本まで連れて帰る事になる。それはそれで面倒だと思いつながら、この仕事を途中で切り上げる良い口実かも知れないと思いついた。FUJIYAMA社のお守りに、クルーの士気も下がり気味だったのだ。

ゲンヤはカナデに、二人を適当な船室に案内するように言った。連れ立って歩く男性と女の子の姿に、長らく会っていない家族の事を思い出す。通信員に衛星経由のレーザー回線の状態を確認させた。

せつかく買った弟や妹への土産物を郵送にしなくてはならない事に、文句の一つも言いたくなる。カオシユンの街は、人々でごった返していた。郵便局なら基地内にもある

が、せっかくの休みなので街に出てみたのだ。カルロス・アストウリアスは、雑踏を避けるように店に入った。茶を注文して、ポケコンを開ける。基地で受け取った私信を、チエックしていく。

正直、訓練が終わったからといって即帰国できるとは思っていなかった。あの巨大MSについての報告を受け取れば、本国から何らかのリアクションがあるはずだ。東アジアの領内で大々的な事は出来ないだろうが、調査団くらいは派遣されてもおかしくない。家族に送る手紙の文面を考えながら、茶碗に口を付ける。

「………あんたが差出人？」

顔を上げず、視線だけを上に向けたカルロスが言った。その先にいる女性が、肯定の微笑と共に向い側に座った。店員に注文を済ませると、いきなり本題に入った。ずいぶんとせっかちな美人だ。

「話がよく見えないが、見当違いだな。うちはフランスと仲が悪くてね」

カルロス宛の私信に混ざっていたのは、有名企業の調査員を名乗る手紙だった。セーラスの類かと思つたそれには、あの巨大MSについての話を聞きたいとあつた。上官にも報告せずに差出人と接触したのは、直感的に握り潰される情報だと感じたからだ。

アルテシア・ローレンツと名乗る女性は、開口一番にアリシア・ルイーズ・ド・ヴァロアとの関係を問いただしてきた。彼女の表情に、こちらからの質問は無駄だと思ひ、

黙って頭を使う。スパイの真似事などしたくはないが、上の方が何を考えているかを把握しなければ、無駄に危険に晒される。

機密情報扱いであるあの巨大MSについて何らかの情報を掴んだ相手が、ユーラシア軍内に隠然たる影響力を有する人物との関係を聞いてきた。それが何を意味するのか。ポケコンを閉じたカルロスは、自分の分の伝票まで持っていた女性の後姿から視線を外す。

「やっぱりユーラシア軍も一枚じゃないみたいね」

あの男性に、嘘や隠し事の気配はなかった。ならば全くの無関係なのだろう。そうだとすれば、アリスアはほぼ独断であれを追っている事になる。

ルーファスの見立てでは、あのサイズのMSにあれだけの火器を搭載してホバー走行させるには、通常のバッテリーでは不可能だという。同時に、艦艇用融合炉はあのサイズに収まらない。ならば残る選択肢は一つとなる。

ただ問題は、誰がその現物を持っているのかだ。あれほどのMSを運用するには、それなりの組織が存在するはず。

アルテシアは足を空港に向けた。あれの現物がもう一つ存在するはずのオーブへ向うのだ。

「このタイミングで仕掛けてくるなんて・・・ふざけてる」

足元には青い地球が一杯に広がっている。ビクトリアから打ち上げられた輸送船は、味方とのランデブーポイントに至る直前で襲撃を受けた。まだ低軌道であり、下手をすれば重力に捕まる高さだ。

テロリストや海賊が跋扈するという話は聞いていたが、連合正規軍にまで襲撃を仕掛けてくるとは、正直予想外だった。幸運だったのは、空間専用装備に換装された機体と共に上がってきたという事と、ランデブー作業に備えて機体がすぐにでも動かせる状態にあった事だ。

メイファ・リンの掛け声とともに、ウインダムのスラスターが光る。輸送船なのでカタパルトの類は無く、開け放たれたハッチから直接機体が飛び出す。モニターを望遠に切り替えるより早く早く機体を振ったのは勘だ。直後に、リニアガンの弾丸が機体をかすめるのをセンサーが捉えていた。

ランデブー相手の低軌道周回艦隊が接触するまでの僅かな時間であっても、輸送船程度なら落とせると踏んだのであろう。その甘い考えを叩きのめす。メイファはウインダムのシールドを掲げる。

「避けたか・・・速いな」



突出するメイファ機への援護射撃を始めたラビ・アルベール・コクトーは、望遠センサーの画像と熱紋センサーのデータから敵機を特定する。八割の確率でスローターダガー。だが今の動きからすると、特殊なストライカーパックを装備しているのだろう。

メイファ機のシールドがビームガンを受け止める。シールドの影から覗く銃口が閃くが、黒い敵機はそれを見切っていた。構わずにペダルを踏み込み、メイファは裂帛の気合と共にビームサーベルを振り下ろさせる。ビームサーベル同士が干渉して、周囲を白光が満たした。

直前に遮光モニターに切り替えていたアルベール機のライフルが正確に狙いを付ける。ビームの干渉による衝撃から距離を取ろうとしない黒いスローターダガーに、ビームが殺到した。

アルベールは快哉をあげる事無くレバーを押し込んだ。敵機の背中についている翼上のユニットは、シールド代わりに使用できるものだった。一瞬体勢を崩しながら、二本の対艦刀を抜き放った敵は、メイファ機を吹き飛ばす勢いで刀を振るった。

「なんのお!!」

全体重をペダルに乗せて、メイファとウインダムは斬撃をその衝撃ごと受け止める。対艦刀をシールドに跳ね返され、逆にダガーの方が吹き飛ぶ。だがそれは、アルベール機の狙撃を回避するための行動だった。舌打ちするアルベールを尻目に、ダガーは左手

を振るった。ペンチのような鋏の付いたロケットアンカーが打ち出される。メイファ機のシールドがそれに拘束された。

振り払おうとした瞬間、シールドを持つ左腕全体が機能を失う。高圧電流を流されたのだ。パーズの信号すら受け付けず、AMBA Cの再設定も間に合わない。不完全な姿勢制御のまま撃つ機関砲はダガーを捉えられない。

二門のリニアガンと二挺のビームガンが向けられた。

「またか!」

完全に仕留められたはずの狙いをビームの奔流に邪魔される。ノワールダガーの中でデイルク・フランツ・ツエルニーが歯噛みして、モニターを睨んだ。もう一機のウィングダムは冷静さを全く失わずに、味方機に近接する機体への狙撃を続けている。狙撃専用装備の無い汎用機でそれを行うのだ、相当な自信があつてのことだろう。

牽制のためにリニアガンの砲口をもう一機に向けようとする。

「よそで見するな!」

左腕のパーズに成功したメイファ機がビームサーベルを振るう。間合いを取り損なってビームガンが一挺爆発する。デイルクは時間が来たことを知らせるアラームを切り、レバーを引いた。

ノワールストライカーが切り離され、残りの推進剤をつぎ込むように輸送艦への突進

を始めた。ウインダムの注意が逸れた瞬間、ダガーは本体のスラスターを点火してその場を離脱した。

彼の当初の目的は地球への降下。輸送艦はたまたまその進路上に現れたために攻撃したに過ぎない。マニュアルに沿って耐熱フィルムを展開し、大気圏突入を行う。

太平洋の島国なので、国土自体は広くない。だが戦争の被害といっても、首都とその周辺が攻撃を受けただけであって、そこから少し離れば平和な景色が広がっていた。

「本物見た方がいいと思うけど」

「イミテーションにはイミテーションの価値があるのよ」

海にも飽きた二人が訪れたのは、植物園。プラントの建設技術が使われているという巨大なドーム型施設の内部は、紅葉の季節であった。赤道直下でなお、四季を求めざるを得なかったオーブの人々の複雑な思いがまつた施設である。

真夏の格好では流石に肌寒い気温に設定されているため、ユウキは盛んに腕を擦っていた。紫外線対策として長袖を持っていったテルシエを横目に、お茶の飲める建物に入る。室内の暖かさにほっとすると同時に、鈍い音を聞いた。

レジの前で、少年が少女に頭を殴られていたのだ。それでもなお、レジの女性に馴れ

馴れしく話しかけている少年を、少女は再び殴る。この手のマナーの悪さは観光客だろうかと、ユウキは眉をひそめた。

「ほら、他のお客さんの迷惑よ」

二人のやり取りを見ていた女性がそう言う。彼女に促されるように、ミコトとカナンは建物を出た。やれやれといった感じでユイ・タカクラがその後をついていく。

文句を言い合いながらも決して離れようとしなない二人の後姿は、微笑ましいというより妬ましい。そして何より、あんな子供がパイロットだという事が俄かには信じられない。ユイの視線が冷たくなる。

こちらの正体はバレておらず、こちらが二人の正体を知っているという事もバレてはいない。大西洋がオーブで何かを企んでいるわけではないだろうが、監視は必要だと判断されたのだ。

監視のための専門職でもないユイがそれを引き受けたのは、個人的な興味からであった。彼女の視線は、前を歩く少女の方に向けられている。

「何ですか？ タカクラさん」

振り向いたミコトに曖昧な笑顔を見せておく。自分に対して、十分に警戒心を解こうとしないその態度は、大西洋の軍人としては良い直感だと思う。だが、彼女の警戒心は単に、新型MAのパイロットであるが故のものではない。ユイの直感はそう告げてい

た。

髪こそ伸ばしているが、立ち居振る舞いは少年のようだ。引き締まった体つきも、単にパイロットとしてのトレーニングの成果だとは思いいにくい。その言動ははつきりしているのに、その身体はどこか曖昧さを持っている。

普通の人であれば、それも個人差程度にししか思わないであろう。だがユイにとって、それは個人差『程度』の問題ではないのだ。自分にだけはそれが分かる、彼女は微笑みの裏でそうつぶやいた。

だからこそ、彼女が無邪気にカナン・エスペランザとじやれている姿を見て嫉ましく思ってしまうのだ。

老朽化した輸送船を無理やりにMSを積載できるように改造した艦である、文句は言わない。何よりこれのお陰で、資源衛星から離れた場所でも活動できるようになったのだから。その成果が今現れようとしている。

ブリッジから送られてくる映像は、ザフトの輸送シャトル。打つべきは先手のみである。ブリッジからは疑問を呈する声が聞こえてくるが、オイレン・クーエンスはそれを黙らせる。

「レシピだか何だか知らんが、コーディネーターの根幹に関わるモノなんだろ……」  
それは狙われるべきものであり、だからこそ自分がここにいるのだ。輸送艦のハッチが開いた。追加装甲を着込んだジンが、モノアイを光らせる。現在の距離とシャトルのセンサー能力を考えれば、こちらの発進と同時に熱紋が発見されるであろう。シャトルからMSが発進させられるまでの間に、勝負を決められるかどうか。

しかし、例えばそこで勝負がつかなかったとしても、オイレンの本領は次の段階でこそ発揮されるのだ。一体何機のMSが出てくるのか。彼は武者震いをしてペダルを踏み込んだ。滑るように格納庫を出たマティーニは、見る間に加速していく。

例えばMS戦を望もうとも、手を抜くようなことはしない。初弾が外れたのは、デブリに当たったからだ。光の加減か、光学モニターではその大きさが確認できなかった。シャトルが回避行動をとりだす。太陽を背にしようと動くあたり、ザフトは素人を使っていない。

「まったく、幸運なのか不幸なのか」

ウオーレン・パシバルがパイロットスーツのファスナーをチェックして合図を出した。整備員の退避の完了した貨物室から空気が抜かれる。カーペンタリアから一緒に上がったいたシグーに潜り込み、全ての確認作業を省略してバッテリーの電圧を上げる。シャトルが大きく揺れた。今度は掠めたのだろう。

積荷の確認作業を手伝うためにパイロットスーツを着用していた時の襲撃である。すぐに出撃できるのは幸運であった。しかし、そもそもザフトのシャトルが襲撃を受ける時点で十分に不幸であった。行きといい帰りといい、宇宙の治安の悪さを身をもって体感している。

シールドガトリングの弾が入っていないが、取り外す時間も惜しい。ようやく開いたハッチから、ウォーレンのシグーが飛び出す。同時に構えたシールドにビームが当たった。

「バルルス？ 厄介だな、おい！」

派手な光の割りにシールドへの衝撃が少ないのは、バルルス特火重粒子砲の特徴だ。敵の使用している機体はザフトのものなのだろう。ジャンク屋による軍資産の横領や横流しといった話は良く聞くが、こういう形で味方機に出会うとは思いもしなかった。

ビームライフルを細かく連射して敵の動きを拘束する。ようやく敵機体が特定された、予想通りにジン、ただし珍しいアサルトシユラウドを着込んでいた。マティーニが大型のビームランチャーを投げ捨てたのが見える。

高い加速性能を見せ付けるように接近してくるマティーニに、シグーはライフルを構えたまま、サーベルに手をかける。牽制の一射と同時に、ウォーレンはペダルを踏んだ。敵の回避方向は読み通り、抜き放った斬機刀から鈍い衝撃が伝わる。こちらの行動も読

まれていた。

「面白い、と思ったらダメなんだろうがな!!」

重斬刀を振り抜かせたオイレンはそう叫んだ。たった一機しかMSが出てこなかった事に落胆したところに、このパイロットである。マティーニの各部ハッチが開いた。乱舞する小型ミサイルの群れを、シグーは舞うように回避し撃墜し切り払っていく。その上で反撃までして見せるのだ、オイレンはレバーを押し込む。

両手に持たせた突撃銃と、肩部のレールガンを連射しながらシグーに迫る。意識を敵のライフルに集中した。銃口の動きに合わせて機体を振る。全身に強いGを感じながら、マティーニの速度は緩めない。

敵の斬機刀を受け止め、シールドの影から伸ばされたビームサーベルをかわす。至近距離からのレールガンは避けられるが、突撃銃が左腕ごとシールドを破壊する。

「・・・強い!!」

直線加速が強力な分、旋回性能が低いと踏んだが、敵パイロットは強引な制動でそれをカバーしている。左腕の代わりに得た情報としてはあまりにも少ない。ウオーレンは汗を浮かべた。

だが、考える暇など戦場にはない。モニター隅の計器を読むと、スラスターを吹かす。追撃してくるマティーニにビームを降らせながら、その時を待つ。錐揉み飛行のように



レールガンをかわし、反撃のビームを見舞う。マティーニの動きが変わった。シグーが迎え撃つように身構える。火線が機体を掠めるのも気にせず、マティーニの接近を待った。そのマティーニが重斬刀に手をかける。

間合いに入る寸前、シグーのライフルが火を吹いた。それは正確にマティーニの装甲を突き抜けるが、機体は爆発しない。ジンのコクピットで、オイレンは口の端をゆがめた。

「勝負ありだ!」

「やっぱり脱いだな!!」

追加装甲にもバツテリーと推進剤を積んでいるマティーニは、それを使い切れればパージするのがセオリーだ。同じザフトの兵器である、マイナーであつてもその使い方は知っていた。

追加装甲を外したジンの重斬刀が切り裂いたのは、ビームライフルのみ。薙ぎ払われたシグーの斬機刀は辛うじて受け止めたが、衝撃を殺せずに刀が根元から折れた。突撃銃の残弾も少なく、これ以上の戦闘はきつい。シグーの放った閃光弾と煙幕を突き抜けてまで、オイレンも追撃する事は出来なかった。

客を見送ると疲れが噴出してくる。次の来客が来るまで少し時間があるので、自室で一息入れる事にした。飾り立てられた軍服が妙に重い。アリシア・ルイーズ・ド・ヴァロアの心は、コーヒーの香り程度では晴れなかった。

今の肩書きは、養父のコネだけで手に入れたものではない。自らの能力については、ちゃんと自己評価が出来ているつもりだ。しかしそれ以上に大きな要因は、本来なら自分より上に立つべき人間の多くが失われた事である。

エイプレルフル・クライシス、世界樹、新星、グルマルデイ・・・ユーラシアも連合軍として多くの将兵を失っている。特に、本土への侵攻であったジブラルタルとそれに付随するカサブランカ沖の敗戦は、大きな痛手であった。

ユーラシアを指導すべき人物は責任とともに姿を消し、彼女らを導くべき人物は戦場に消えた。残されたのは、彼女のようなまだ若い者ばかりである。

「若手若手と言われているうちに、いつの間にか中堅・・・か」

ザフトから来た先ほどの来客が、そんな事を言っていた。ならば自分は中堅を通り越してベテランになってしまったのだろう。弱音など吐くつもりはないが、現状を正確に認識する事は必要だ。

ユニウス条約を主導したのはユーラシアだが、それと一枚岩ではない。モスクワではジブリールら最強硬派が台頭している。プラントとの関係も、どこまで安定するか未

知数だ。その時、祖国の安全をどう保障するのか。それが彼女の考えるべき事である。MS戦力に劣るユーラシアにとって、戦略的に優位に立ちうる軍事的プレゼンスが必要となるのだ。

手前は、この際問わなかった。

「つくづく、ブルーコスモスは祟るな」

戦中、ムルタ・アズラエルが入手したと言われるニートロンジャマーキャンセラー。核分裂を再び使用可能にするその技術を戦後も独占するために、アズラエルはデータを秘匿した。しかし彼は死に、そのデータは行方不明になった。

NJCのデータはブルーコスモスのルシア・ゼルレッツチの手に渡っており、アリシアはそれをブルーコスモスの内部抗争を利用する形で入手した。だがそのデータは、ミサイルの弾頭に使用するための装置に関するものしかなく、広範な応用には耐えられないものだった。

しかし再び、核ミサイルによる恐怖の均衡を作り出すことが、国家の安全保障にとって有効だとは、アリシアには思えなかった。代わりに、NJCを動力のために使う事としたのだ。そのためには、動力部にも使用できる形にNJCを改良するための技術が必要だった。

アリシアは時計を見て立ち上がる。先ほどの客が持つて来た花束を、秘書が花瓶に生

けていた。

「突っ込んだ話もしてみたいものだったな」

車の中で、サイモン・メイフィールドがつぶやく。ユーラシア軍の中核を担うと言われる女性将校は、噂通りの人物だった。同時に、どこと無く危険な感じのする人物でもある。ユニウス条約における軍備制限枠を話題にしようとした時の視線は、尋常ならざるものがあつた。

あの巨大MSについても情報は伝わっているはずだ。それを念頭に置いた上で話題にしてみようとしたのだが、あまりの迫力にそれ以上は口にしなかった。サイモンは書類を取り出す。シビル・ストーンが宇宙に戻る前にまとめておいてもらった資料である。

自分達が宇宙から降ろした積荷について、少し調べてもらったのだ。中身は不明ながら、その送り先がオーブである事だけは判明していた。大西洋連邦の強い影響下にありながら、オーブはプラントとのパイプを保持し続けているようである。

オーブの立ち位置ははなはだ不可解である。プラントにせよ大西洋にせよ、この国を緩衝国家として位置付けようとしているのであろうが、それが故にその政策は一貫して

いない。プラント国籍の人間に短期の観光ビザの発行をいち早く行ったり、大洋州所有の資源衛星に貨客船を就航させたりしている。

そうでなければ、カーペンタリアに降りたザフトのパイロットが観光になど来れるわけがなかった。宇宙港の案内表示を見上げていたテルシエは、肩をすくめるように言った。

「観光できただけでもマシかな」

彼女は、そのまま大洋州の資源衛星経由でプラントに戻る予定になっていた。地球に降りてきたばかりだというのに、ずいぶん慌しさだ。テルシエは大げさなハグの後で、搭乗口の方へ足を向ける。

ユウキはその背中に、大きなお世話と大声で言った。振り向きもせず手だけを振ったテルシエが笑っているのが分かる。髪を触り、小さくつぶやく。

「別に男っぽくしてるわけじゃないっての」

彼女はシャトルを見送るため、その足を展望塔に向けた。国際宇宙港は、開港直後からたくさんの人で溢れている。すれ違う人の顔も、国際色豊かだ。栗色の髪の美人が足を止めた。その視線は、壁に埋め込まれたテレビに向けられている。報道番組の一コーナー、海外の珍しいニュースを紹介するものだった。

東アジア軍の軍艦が、ヨットで太平洋を漂流していた親子を助けたという。救助され

た人が短いインタビュウを受けていた。アルテシア・ローレンツは、それを見て小さく舌打ちをした。すぐさま、航空会社のカウンターに向う。

「カナデが言ってたのはこれか……」

いつもはしない色付きのメガネをずらし、カルロス・アストウリアスがつぶやく。オーブ軍のMS運用体制の研究という名目でここに来ていた彼は、自分の行き先が東アジアに変わった事を悟る。

マメにアドレス交換はしておくものだ、ポケコンを取り出して思う。他愛の無いやり取りでありあつても、引き出せるものはある。スパイの真似事は御免被りたいところだが、あの巨大MSに関わる事であれば、そうも言っていられないのだろう。問題はユーラシア軍本体ではなく、その下にある彼の直接の上官からの指令だということだ。相変わらず、国家主権というやつは軍の中にもこびりついているようだ。

二、三日のうちに正式な命令が降りてくるだろう。それまでに、家族への土産物を決めておかなくてはならない。新聞を折りたたんで立ち上がったカルロスは、遠くの騒ぎの声を聞き流し、空港出口へ向う。

「ぶつかってきたのは君達の方だろう！」

ユウキの声が響く。若い女を連れた柄の悪い中年男が、彼女を上から睨んでいる。コーヒーをこぼした女が、服を拭きながら冷ややかな目でユウキを見る。コーヒーは彼

女にもかかつていた。

人目もはばかりにいちやついたあげく、ユウキにぶつかってコーヒーをかけたにもかかわらず、謝罪も無く逆に因縁をつけてきた。相手に関わらず、反射的に反発してしまふのは性分である。

だが男の目付きに、足がすくむ。今さら退けないが、次の言葉が出てこない。それに気付かれたのか、男の目が笑った。男があしらうように、彼女の肩を突き飛ばした。すくんだ足はそのままよろめく。

「……！」

「何だ、お前？」

ユウキは自分を支える格好になつてゐる男性を見上げた。突き飛ばされて、通りかがつた人にぶつかつてしまつたのだ。中年男はその男性にも因縁をつけようとしていた。何も言わずに立ち去ろうとする男性を掴もうと腕を伸ばす。

次の瞬間には、中年男が宙を舞つていた。床に倒れ伏した男は、腰を擦りながら立ち上がるが、男性の迫力に捨て台詞も言えずにその場を逃げ出した。

あつという間の出来事に、周囲の客と同様にユウキも啞然としていた。ハツとした彼女は慌てて男性の後を追いかけた。せめて礼を言つておかなくてはならない。追いつかれた男性は、迷惑そうな顔で彼女を見る。

「・・・デイルク・フランツ・ツエルニーだ」

何度も頭を下げる彼女に根負けしたように、男性は名を名乗った。



## 第四部

家に着いたら敵がいる、ずいぶんと間の抜けた話だ。謎のMSの攻撃によってシャトルのメインスラスターが損傷したため、寄港の許可を要請されたのだという。国際航宙法に基づく緊急避難要請は拒絶できない。マティーニにカバーを被せる作業員を尻目に、オイレン・クーエンスが体を流す。

緊急避難という事は、シャトルに積んでいたシグーは武器もスラスターも封印されているはずである。リベンジの機会はすぐには巡ってこないだろう。オイレンの拳が壁にぶつけられた。デイスペンサーから乱暴にドリンクを取ると、窓の外を見る。シャトルから降りてきたパイロットスーツを睨む。

「分かっています」

ノーマルスーツの係員が早口で言う。各種書類の数を数えながら、ウォーレン・パイバルのため息がヘルメットを満たしていく。こういう時、ザフトという組織は不便であった。ろくな階級がないため、責任者が誰か分からないのだ。結局、パイロット、年長者、先任者の順で責任者が決まるのだが、パイロット偏重主義もたいがいにして欲しかった。要領良く責任者を他人に譲れる性格ではないのが恨めしい。

地球に降りるときも地球から戻るときも、正体不明の凄腕パイロットと遭遇してしま  
う自分の運の無さを一緒に恨みながら、ウォーレンは管制室に向う。自分の腕を過信す  
るつもりは毛頭ないが、それでも自信が揺らいでいる事に間違いはない。本国との連絡  
がいたらしく、先にそちらの用件を済ませる事にした。

係員に借りたメモ用紙が一杯になるほどボールペンを走らせ、ウォーレンはもう一度  
ため息をつく。先に下りた連中は、もう宿舎に向っているだろう。

「いや、女の人はあかんでしよう」

不意に聞きなれないイントネーションが聞こえ、シビル・ストーンの視線がそちらに  
流れた。案内をしてくれていた女性が、受話器を取って何か話している。しばらくのや  
り取りの後、受話器を置いた女性は彼女に微笑みかけた。

「女の人には別の部屋、用意できましたから」

カーペンタリアから輸送シャトルで上がってきたのは、シビルを含めて20名強だ  
が、女性は彼女一人だった。男性と同室にならないように配慮してくれたのだ。やつぱ  
り民間は違うと感心した。ザフトでは女性の軍人も珍しくはないとはいえ、やはり男性  
中心に物事が回るのが軍隊だ。

イントネーションは元に戻ったが、ゆったりとした話し方と妙に落ち着いた雰囲気をも  
ち出し出す女性は、多分自分よりも年下だ。困った事があつたら呼んで欲しいという申

し出に、シビルはただ恐縮する。

「何してる、コトハ」

「お手伝いです。避難されて来た方を宿舎に案内」

コトハと呼ばれた女性は鋭い問いかけの声にも言葉の調子を変えないが、シビルは思わず肩をすくめてしまった。自分と同一年くらいの男性、きつい視線にどことなく崩れたような雰囲気的印象的だ。

少し後ずさってしまったシビルを、その男性は一瞥する。どんな意味があるのか、口元を緩めると、男性は何も言わずに立ち去っていった。

「あの人は？」

「オイレン・クーエンスさん。何ていうか、ここの用心棒みたいな人です」

コトハの後について歩きながら、シビルは振り返ってオイレンを見る。人工灯の下でも影をまとっているような人だった。

「改めて自己紹介というのも変な感じですね」

「よろしくお願いします、大尉」

姿勢のいい敬礼につられるように、彼も敬礼を返した。正式に顔合わせをする前に互

いに迎撃戦闘をこなしているため、初対面とは言いにくいだが、こういうのもケジメだろう。メイファ・リンの小柄な体は、覇気で張り詰めているようだ。

小規模の暗礁空域の傍らに、アガムムノン級一隻を中心とする小規模の艦隊が展開していた。新型MSの運用試験のための艦隊である。集められたテストパイロットに、試験概要が伝えられる。

ラビ・アルベール・コクトーは、一つの懸念を質問した。現在地は公宙域であるが、MSの航続距離圏内に、大洋州の領宙境界線が存在する。作戦指揮官は暗礁空域から出なければ問題は無いというが、その顔色を見て一つのデモンストレーションなのだと理解した。

ここに集まったのはテストパイロットを任されるレベルの人間ばかりだ。問題が起こる事はないと考えていい。オーブに若い二人を置いてきたのは、むしろ正解だった。会議室を出て自室に向おうとするアルベールを、メイファが呼び止めた。他のパイロットの目を気にするように、彼女はアルベールをMSデッキ脇のコーヒースペインサーに誘う。

「先日ありがとうございます」

頭を下げるメイファに苦笑する。あの突つかかるような戦い方は、この真面目な性格そのものなのだろう。その事を指摘しようと思ったが、やめておく。少々危なっかしい

が、MS戦のセオリーなど現在の連合には存在しない。彼女は、それで生き残ってきたのだから。

用はそれだけかと聞こうとした時、彼女が声をひそめて言った。ただの訓練で終わるだろうかと。

アルベールはその言葉を聞き返す代わりに考えた。そして次の言葉を待つ。逡巡を見せる彼女の表情にはあえて視線を向けず、ただ耳だけを彼女の言葉に集中させた。言うべき事を迷っている者に、余計な言葉を掛けてはならない。

「責任は、私が取ります」

そう言つて彼女は緘口令が敷かれているという情報を話した。オーブとの共同訓練中に、正体不明の巨大MSが現れたのだと。実弾訓練中であつたため何とか撃退は出来たのだが、その後情報は必死に隠蔽されようとしていた。

彼女は様々な事を懸念しているのであろう、軍とは盲信できる組織ではない。だが同時に、信頼せねば戦場で生き残る事は困難なのだ。アルベールは視線を向けて微笑んで見せた。

「撃退できたのだろう。なら、次もそうするまでだ」

気休めに過ぎない事が分かっているから、せめて精一杯力強く言つてやった。メイファアが、少し表情を緩めた。

戦中、ザフトから強奪されたMSを秘匿していたオーブが、その技術を手に行っている事は間違いない。だがそれに関して、連合とプラントはともに何らかの動きを見せることが無かった。政治的な決着がつけられたと見るのが妥当であるが、この問題において、そのような決着がありうるというのだろうか。

オーブは情報を完全に隠匿しており、連合・プラントともにオーブの動きを見落とししている、それが上層部の結論であった。レシピと呼ばれる情報と比べて、軍事転用の容易なこちらの情報の方を優先するのは、ブルーコスモスとしては当然の帰結であろう。追い詰められたものは、いつだって即効性のあるものを求める。

「オーブへは仕事……ですか？」

言い慣れない言葉にはにかなだ顔を隠すように視線を落とす少女の横顔が見えた。デイルク・フランツ・ツエルニーの思考が停止する。今自分がどこにいるのか、一瞬分からなくなった。

街も人ごみも、ずいぶんと久しぶりだ。意味のない話を話しかけてくれる人間など、いつ以来だろう。止まってしまった彼の表情は、覗き込むような少女の顔に、再び動きを取り戻す。

「あ、ああ・・・そうだ」

空港でちよつとした騒ぎに巻き込まれた少女、ユウキ・ナンリと再会したのは偶然であつた。だがこうして接触を続けているのは、理由がある。どの道、カーペンタリアを無視して活動する事はいへない。大洋州の人間との繋がりには、何かの役に立つだろうと考へたのだ。

空港でも、再会の時もスボン姿だったが、今日はスカートであつた。淡いブルーの布地が、潮風に揺れている。人々の喧騒が無くなつたと思つたら、いつの間にか海を臨む場所にまで来ていた。まだ傾かない太陽は、海面を真つ青に染めている。デイルクはそつと息を飲んだ。

横でユウキが何か言っているような気がする。とおきり風が木立を揺らす音、遠くから聞こえる波の音、そして少女の声。まるで和音のように、一切の不快感がない。彼は再び、自分の居場所を見失うような感覚に包まれる。

「あ・・・何か光つた」

ユウキが指を差した方向に自然と視線が流れる。目を凝らし、その先にあるものを認識した途端、彼は自分が何者かを思い出した。仕事のアポイントを思い出したと言ひ残し、彼は足早にその場を後にする。

彼の視力は、水平線上を見え隠れするMSの姿を捉えていた。

敵が強いのか、自分の乗っている機体が弱いのか。変形を解いて急ブレーキをかける敵MSに動きに、ガルム・ガーは追隨する事が出来ないでいた。苦し紛れに撃つ攻撃はことごとく的を外し、ただ虚しく空へと吸い込まれていくだけだ。

ビクトリアに向けて出港した輸送船は、オーブ領海を越える直前で、一機のMSから停止命令を受けたのだ。臨検を要求するそのMSを無視しようと、船が速度を上げたときに攻撃を受けた。辛うじて領海線を突破し、しつこく追ってくるMSを迎撃するためにガルム・ガーを出したのだ。

「神父さんなら、もつと上手く出来たよな」

「しゃべってないで当てなさい！」

ミコトはそう言つてレバーを引き上げた。照準用スコープを覗いたままの姿で、カンは何度も舌打ちをする。自分の射撃の腕には自信を持っているし、彼女の操縦技術には信頼を置いている。それでいて当たらない相手だ、かなりの腕のコーディネーターだろう。スラストアーを全開にして機体に制動をかけ、二人は強烈なGを歯を食いしばって耐えた。

それでいて、目だけは敵の動きを追い続ける。複列位相砲をワイドレンジにして突つ



込んでくる敵に対して壁を作る。敵が急降下でそれをかわしたのが視界に入った。レールガンを撃ち込むと、水柱が豪快に吹き上がる。

ミスツたというカナンの声より早く、ミコトはペダルを踏み込む。大量の水飛沫はビームを著しく減衰させる。大型MAでの接近戦は明らかに不利だ。機体下部に意識を集中させて、敵の出現に備えた。

「上よー」

変形を解いたムラサメがビームサーベルを振りかぶる。噴出した水柱に隠れるようにして上空に上がり、敵の目を欺いたのだ。オートでばら撒かれる機関砲を無視するよううにその扁平な機体に向けてビームサーベルを振るつた。

疑問より早くユイの体は反応する。完全に捉えたはずのビームサーベルが何故か弾かれていたのだ。機体サイズから見てラミネート装甲はありえない。ならば、何故だ。押している感触はあるが、止めを刺しきれなかった事に嫌な雰囲気を感じた。

「・・・なら、退くしかないわね」

MAが発進した輸送船にダメージを与えている事は確認した。そのまま外洋に出る事は不可能であり、彼女の乗るムラサメを撃墜しさえすれば、彼らは安心してオーブへ戻るだろう。ユイは口の端を歪めて、機体を変形させた。

敵MAに真正面から対峙するように機体を回す。ビームとレールガンの連射を最小

限度の動きで避けながら、ムラサメは最大戦速で距離を詰めた。MAの中心部分にあるユニットから、ビームサーベルが発振される。

ムラサメは変形を解いてビームサーベルを振り抜いたが、そのまま猛スピードの車に跳ねられた人のように吹き飛んだ。十分な姿勢制御も出来ずに海面に墜落していく姿を、敵パイロットは確認したのであろう。

「また会いましょう、ミコトちゃん」

海面に浮かぶ救命ボートの上で、ユイはそう嘯いた。あの少年のような少女の、警戒心も露わな視線を思い出し、一人笑った。

「とりあえず、私が身元引受人になりますから」

洋上で軍艦が拾った難民、この国なら入国手続きだけで二年はかかるだろう。親のコネはありがたく使わせてもらう。二人が親族のいるユーラシアに向うと言っているの  
で、ユーラシア大使館にも連絡を入れておかなくてはならないだろう。カナデ・アキシ  
ノは後部座席の二人にそう言った。

到着が早ければその足で大使館まで行けたのだろうが、今からでは窓口は閉まった後  
だろう。だから今日は自分の家に宿泊すればいいという彼女の申し出を、グエンとカフ

ネは受ける事にする。

しかし、彼女が東アジア有数の大企業の間人であり、かつ日本自治州政府首相の子だという事が、二人の警戒心を解かせない。カフネに関する情報を知れば、この対応がどう変わるか分からないのだから。グエンは緊張している少女の手にそつと触れてやった。

都心部の高層マンションの地下駐車場に吸い込まれていく車の中で、彼はため息をついた。第二人が来ているので少し騒がしいがと断るカナデに、さらに二人分の来客を受け入れられる部屋の広さを思う。安軍人には永遠に縁のない住居であろう。

「お帰り、姉ちゃ．．．お、おっさん!?! しかもコブ付きー!」

「お姉ちゃんの意志は尊重するよ、でも．．．選ばうよー!」

現地の言葉で話す二人の少年が何を言っているかよく分からないが、カフネの反応を見るとずいぶんと面白い事を話しているようだ。何となく愛想笑いを浮かべてみるが、何故か睨まれた。カフネに聞いても、知らない方が楽に過ごせると言われた。

その面白い事を言っていたらしい少年が用意していた夕食をご馳走になり、客間に通されて一息つく。明日、ユーラシア大使館でクライアントに連絡をつけることが出来れば一件落着といくのだろうか。

食堂の開店資金のために引き受けた簡単な仕事のはずが、世界規模の謀略に巻き込ま

れてしまった。自分達軍人が、ナチユラルだコーデイネーターだ、連合だプラントだと戦争をしている最中から、世界は二歩も三歩も先に進んでいた。プラントは普通の国であり、コーデイネーターはただのか弱い少女である事を、お偉方は戦争をしていた時から知っていたのだ。

そのか弱い少女は、彼のクライアントの要請を受け入れるという。そのクライアントに心当たりはまったく無いが、それが最善の選択だろうという。

「もう一度聞くぞ．．．いいんだな？」

グエンの言葉に、小さくうなずいた。疲労も限界に近く、両親の消息も確認したい。目の前の男性に迷惑をかけるのも、これ以上は心苦しい。どこかでピリオドを打ってきたかった。

自分の持つ技術が、どういった意図を持って要求されるのか。それは設計事務所の仕事をしている時から分かっていた事だ。ならば、命の心配をするような事は取り立ててないはずだ。グエンに微笑んで見せたが、彼の目はあまり納得していないようだ。

「もう少しで、グエンさんともお別れですね」

一緒の布団で寝てもいいかと言ったカフネは、答えを聞く前にグエンに身を寄せる。

メモ用紙に書かれた文章が解読された。プラント本国から受け取った通信は、全体が特殊な暗号文だったのだ。シビル・ストーンが解読した文章を受け取ると、ウォーレン・パーシバルは表情を歪めた。

意見を求めようとシビルに視線を向けたが、彼女の顔に変化はない。暗号を解読したのなら、その内容も把握しているはずだ。どうかしたのかと問いかけた彼女に、ウォーレンは何も言わなかった。とにかく、この内容を他のクルーにも伝えて準備をしなくてはならない。

「味方の資源衛星のつもりだったんだがな……」

ザフトが一枚岩の組織で無くなった事は、ヤキン・ドゥーエの時に痛感している。最新鋭のMSが二機、その追加装備である大型武装ユニットと専用運用艦が、敵に回ったのを直接見ているのだ。

そんなザフトの亀裂が、再び目の前に現れるとは思わなかった。彼は解読された文面を思い返す。さる研究者が持ち去った重要機密とは何なのだろう。そういえば、行きもそんなよく分からない荷物を運んだような気がする。居住区の庭を横切る時、視線を感じた。

歩調を変えずに周囲の木々を眺めるような仕草で視線を巡らせる。こちらを見ていた男が、踵を返して遠ざかっていった。ここにいるのは、研究者ばかりでは無いようだ。

「地球へ……ですね」

プリントアウトされた資料に目を通しながらそう言う。時間に余裕がないので、準備を進めておくようにと言われるが、トルベン・タイナートはため息を返答代わりにするだけだった。

どの道、ここの施設では研究に限界があった。次の目的地ならもう少し細かな調査も可能になる。データの解析作業が中心となるため、無重力下の実験が必要とされる場合もないだろう。しかし、と彼は考える。

詳細な解析を行ったところで、このデータにどれほどの価値があるのか。今のところ、目新しい情報は引き出せておらず、既知のデータの後追いばかりであった。このデータを手に入れその研究を依頼した者達は、「ジョージ・グレンのレシピ」という言葉に、過大なロマンチズムを感じているだけではないのだろうか。

所詮、ジョージ・グレンも人の作り出したものでしかない。人が作ったものは神が記した真理の断片でしかなく、彼の求めるものの断片でしかない。神が四つの塩基の有限な組み合わせで真理を記したのであれば、彼が求めるのはコーディネーター技術によって既に書き写された組み合わせではなく、今だ書き写す事のできていない組み合わせの方である。

手にした資料を机に置いて、彼は目を押さえた。科学者であれば、彼の考えに多少な

りとも共感してくれるかもしれない。だが政治家であれば無理であろう。とにかく今は、ここを引き払う準備をしなくてはならない。

CEにおいても、ヨーロッパ階級社会に大きな変動はない。上の階級では、たいてい  
が知り合いか、その知り合いという関係に落ち着く。顔見知りだけで政策原案が作られ  
る事も、よくある話である。

そんな狭い世界の住人であるため、彼の事もよく知っていた。たとえ知る気が無くとも、噂はいくらでも耳に入ってくる。

「お父上は、お元氣か？」

「ええ、おかげさまで」

コーヒーの湯気が薄くなっている。どうでもいいやり取りを、少し長く続けすぎたようだ。ルーファス・リシュレークの涼しげな表情を、じつと見据える。度胸はたいしたものだ。虎穴に入らずんば虎児を得ず、といったところであろう。

それは同時に、家業がそれだけ追い込まれているという証明でもある。戦争終結に伴う復興特需にリシュレーク家の傘下企業は乗り遅れていた。その上、ユーラシア軍は連合が採用したMSの採用を決定している。アクタイオンと組んでいた企業の株価は、そ

の影響を受けざるを得ない。

アリシア・ルイズ・ド・ヴァロアは、冷めたコーヒーを下げさせる。そして、改めて目の前の男を見させる。

「単刀直入に聞こう、こちらとの取引が可能な提案でも持つてこられたか？」

「いいえ。ユーラシア軍……いえ、あなた方がアレを何に使おうとしているのかを聞きたいだけです」

ルーファスの口調は、あくまでも確認のためだと言っていた。ニュートロンジャマーキャンセラーを機動兵器の動力源として使用するというこちらの考えは分かっているのだろう。アリシアは視線を逸らさず、ただ黙ってルーファスを見る。

ニュートロンジャマーによるエネルギー不足、その解消のためにキャンセラーの技術を手し、それを独占する事で戦後の電力業界で圧倒的な優位を築く。傾いたリシュレークの家業を劇的に復活させるまたとないチャンスであろう。

だが、ニュートロンジャマーキャンセラーの原料は極めて希少であり、その配分は当然国家が主導して行うべきものである。そしてプラントとの戦争状態が休止に過ぎない現状、そして圧倒的なMS技術によって連合内で大きな力を占めるようになった大西洋に対する牽制のためにも、核技術はまず国家の安全保障のために使われねばならない。



「あなた方は現物を既に有している、その実験も行っている……ブルーコスモスを使つてまで」

「それで？」

「だがその現物は不良品だ。修理工は……まだいない」

「……」

「もし取引があるのなら、それは私が修理工を手に入れた後になるでしょう」

アリシアは嘆息を漏らした。彼は既に虎子を得る確証を持っているのだ。そしてそれを虎穴に戻す気がないといいに来た。立ち上がり、慇懃な礼を述べて立ち去る男に、アリシアはもう一度嘆息を漏らす。

それは当然、観測対象となるべき存在だ。地球軍の新兵器であるなら、なおさら多くのデータを入手する必要がある。ただ、新兵器の実験を何故友軍相手に行っているのが理解できない。今のように、敵であるザフトを狙うのが筋なのではないだろうか。サイモン・メイフィールドは、現実逃避のようにそんな事を考えた。

「右舷注水ポンプに損傷！ 潜航できません!!」

不意打ちのリニアガンが引き起こした水中衝撃波は、あっさりと潜水艦の存在意義を

奪い去った。だがこの場合は、こちらの存在に気付いた敵の索敵能力をほめるべきであろう。スケイルモーターによる無音潜航を行っていたのだ。どうやってそれを見つけたのかは後で考え、今は逃げるか攻めるかを決めるのが艦長の仕事だ。

これ以上深く潜れなくなった以上、リニアガンによる攻撃は受け続けると考えなくてはならない。ボズゴロフ級の外装に、全幅の信頼を置くのは分の悪い賭けであろう。サイモンは転進と浮上を命じる。

水中発射ミサイルと飛翔魚雷を発射させ、MSの緊急発進を準備させた。あのデカぶつを潰さなければ撃沈しかない。

「ザフト艦？」

ブリッジで戦況を見守っていたゲンヤ・タカツキが思わず聞き返す。だが部下のソナー手の名人芸は彼自身が一番良く知っている。戦闘による音響の乱れの中であっても、ボズゴロフの音を聞き違えるはずがない。

ならばあの巨大MSはザフトのものではないという事だ。それ以上の状況は理解できないが、とにかくアレを撃退するのはこの機会しかない。対水上艦戦闘の要領で、海の上立つ巨大MSに対処する。

家族とゆつくり過ごす暇もなく、再び日本を遠く離れたかいがあつたというものだ。後方の空母から飛び立ったスカイグラスパーが、上空を通過した。艦隊が一斉に砲撃を

開始し、同時に退避行動をとりだした。ビームが海面を抉って、水飛沫と霧が生まれる。常に動いていなければ、一撃で終わりだ。

砲撃の集中する地点は、さながら昔の怪獣映画のようだった。海の上の巨大MS・ブレイカーへ、雨霰のごとく攻撃が降り注ぐ。実弾兵器がほとんどであるため、ブレイカーのPS装甲には通用しないが、その衝撃は海上をホバーで移動する巨体を十分に揺さぶる。

海中から飛び出した魚雷が滑空翼を広げて襲い掛かる。腕を振るってそれを叩き落とし、スカイグラスパーのビームを口から展開した光波防御帯で受け止める。指から放たれる十条のビームは、真上から襲ってくるミサイルと砲弾を薙ぎ払うが、それを縫って接近するデインが盛んに突撃銃を浴びせてくる。

海面に落ちる砲弾は絶えず水飛沫と衝撃を与え、海中から顔を出すグリーンがチクチクとミサイルを当ててくる。攻撃の圧力に押されるように移動すると、狙い済ましたように砲撃が襲う。ゲンヤは攻撃の手を緩めないよう、後方に第二次攻撃隊の発進を要請した。護衛艦一隻が派手な爆発を起こし、艦隊が浮き足立ったのを感じたのだ。

水平線の上で、敵が大きく腕を振り上げるのが見えた。

「いびけるなよお二！」

ブレイカーの中、ノーリッチ・シユナウザーが吠えた。全身を駆け巡る不快感が、腹

の底の違和感を忘れさせる。彼の意識に連動するように、ブレイカーの腹部シャッターが開放された。

「左舷急速注水！ 艦を傾けろ!!」

サイモンの命令にクルーは反射的に従う。浮上して攻撃を行っていた潜水艦が一気に九十度傾いた。同時に巨大なビームの柱が、艦を掠める。巻き添えになったのかデザインの信号が二つロストした。

第二射は避けられない、そう覚悟した時、サイモンは敵がダラリと腕を降ろしたのを見た。頭部に砲弾の直撃を受けて巨体が転倒し、そのまま海中に没していく。

「ぐっう……はぁ……」

ノーリッチが呻く。腹部ビーム砲を放った瞬間、腹の中の違和感が苦痛に変わった。重く熱いものが沸き立つような痛み。計器を読み取るのではなく、直接知覚する事によつて機体の操縦を行う、彼特有の感覚であった。

ブレイカーに搭載されているエンジンは、未だ出力の調整が万全ではないのだ。

ずいぶんと長電話になってしまったが、カフネはまだ控え室で座っていた。大使館といえども役所仕事は変わらないと思う。

「ご家族、お元気でしたか？」

表情が緩んでいたのだろうか、カフネにそう聞かれた。プラントからこのかた、まともな電話を掛けられるような場所に居なかつたため、ずいぶんと家族に連絡できずにいた。軍人だったので、そういう事は珍しくないのだが、やはり家族の声が聞けるのとうでないのでは、心の張りに大きな違いが生まれる。

控え室の扉が開いて、二人は同時に視線を向けた。グエンはあつと声を上げた。現れた女性は、彼に仕事を依頼した人物だつたからだ。歩み寄ってきた彼女は、グエンに丁寧な礼を述べる。

そしてカフネに向き直り、アルテシア・ローレンツと名乗ると、これまでの苦労をねぎらつた。カフネが少し身構える。

「突然の事で色々疑問に思われている事もあるでしょう」

大人を相手にするような態度で接するアルテシアは、カフネを別室に促す。これまでの経緯や、彼女を招いた理由など説明しなくてはならない事がたくさんあるのだ。当然のようについていこうとしたグエンを、アルテシアは押しとめた。用があるのは、あくまでもカフネだ。

振り向くと不安が高ぶりそうなので、グエンの方を見ないようにカフネは別室に入った。応接セットが申し訳程度におかれているだけの殺風景な部屋だ。テーブルには、紅

茶とケーキが用意されている。

遠慮せずにと言うアルテシアに、カフネはまず話を聞きたいと言った。アルテシアの口から出てきたのは、やはりニュートロンジャマーキャンセラーに関する技術の事だ。

もともとザフトの開発局の下請けとして様々な機器の設計を行っていた彼女は、ニュートロンジャマーキャンセラーとそれを応用した核エンジンの基幹部品の設計を請け負っていた。装置全体から見れば一部分に過ぎないが、核分裂反応の促進と抑制、即ちエンジン出力の調整に関わる装置の心臓部分が、彼女の設計担当部品であった。

この部品が無ければ、核エンジンには常の暴走の危険性が付きまとい、ニュートロンジャマーキャンセラーも連合のようにミサイルの弾頭として使用するしかなくなる。非常に重要度の高い部品なのだ。

そのためザフトの設計局からは何度も入局を要請されていた。装置の重要性を考えれば身辺保護の必要もある、そう言われた事もあった。実家を継ぐ事を考えていた彼女としては、それを断っていたのだが、今となつてはそれが悔やまれる。

アルテシアは、その技術をエネルギー不足を解消するために使いたいと言う。原子力発電の再開は、戦後復興に欠かせない要素だと。自分達は民間企業であり、軍とは距離を置いているとも言った。カフネは話を遮る。聞きたい話が出てこないからだ。

「あの・・・パパとママは、無事ですか？　ここから連絡できますか？」

アルテシアが言いよどむ。カフネは血の気が引くのを感じた。何か、あったのだろうか。

「ご両親は……お亡くなりになりました」

武術の型を一通り演じ、ミコトは静かに息を整えた。それでも、落ち着かない心はそのままであった。オーブの可変MSに乗っていたパイロットは、間違いなく自分達より優れた操縦技術を持っている。撃退できたのは、機体の性能差に過ぎない。背後から投げられたドリリンクのボトルを振り向かずには受け止める。

射撃用ゴーグルを額に乗せたまま、カナンがやってくる。彼も、自分と同じ事を考えているのだろう。

「ま、拳銃が上手くなったって、MSの射撃能力が向上するわけじゃない」

笑いながらそう言うが、彼もシヨックを受けているだろう。あれほど攻撃が当たらない敵には、戦争中もめつたにお目にかかれなかった。彼は整備の終わった機体を見上げる。オーブに戻ってきた輸送艦は、再び出港する機会を窺っていた。

本来の目的地である宇宙では、既に訓練が始まっているはずである。空になったボトルを受け取ったカナンは、代わりに封筒を差し出す。オーブでの滞在場所としているホ

テルに届いた郵便物であった。

差出人はユイ・タクラ。中の手紙を覗き込んだカナンは口笛を吹いた。デートのお誘いじゃん、とからかう彼にハイキックを見舞う。保養施設の割引券が二枚同封されていた。

火山島を中心とするオーブでは地熱利用が盛んであり、建国を行った民族が入浴に關する非常に繊細な文化を持つ人々であったため、赤道直下の国でありながら温泉を備えた保養施設が根強い人気を博していた。

ユウキ・ナンリの手にはラムネが二本握られている。

その一本を受け取った男は、旅行はいつまでかと尋ねる。デイルク・フランツ・ツエルニーは、虚ろな目をユウキに向けていた。

「学校が始まるまで」

復興資金としての外貨獲得が至上命題となっているオーブは、深刻な被害を受けた首都周辺を除いて、観光客の積極的な誘致を行っている。もともと治安の良かった国であり、学生の一人旅にはもってこいの場所なのだ。

そんな事を話しているユウキをデイルクが見つめ続ける。風呂で流したはずの汗がもう滲み始めていた。カーペンタリアからオーブに、核エンジンの部品が極秘輸送された事は確定しているが、その運び先が不明のままだった。流石にブルーコスモスでは、



この国で自由な活動が出来ないのだろう。

本来ならいつでも出撃できるよう、運び込んだMSの調整でもやっておかなくてはならないはずなのに、何故かこんなところに来ていた。どうしたのかと聞くユウキに、ただ首を振った。

「テルシエなら、こういうところ喜びそうなのになあ」

この前、宇宙が上がっていった友人だと、彼女は空を見上げながら言った。その彼方では、数隻の戦艦が隕石に偽装しながら、目標地点の監視を行っている。

ナスカ級とMS搭載型哨戒艦からなる艦隊では、作戦の概要がパイロットに伝えられていた。作戦は、目の前の大洋州資源衛星に潜んでいる研究者の捕縛。犯人グループは、プラント内部にも通じている組織で、遺伝子研究に関する重大な機密を持ったまま逃走しているという。

「・・・身内って事か」

周りのパイロットを代表して、テルシエがつぶやく。兵士に作戦のえり好みなど出来ないが、連合との戦争に向けてザフトを志願した者にとっては、気の進まない話であることは事実だ。

宇宙に戻った途端、休む間もなく作戦参加の命令である。ザフトの人手不足は深刻なようだと、みんな話していた。最も重要な、研究者の身柄確保と機密の奪取に関しては、

別の部隊が受け持つという話であり、彼女らの役目は犯人グループをいぶり出す事にあつた。

ただ、護衛のMSを有しているという情報もあり、気が進まないなどと言つていられない可能性もある。集められたパイロットは、隊長以外はテルシエ同様の新人ばかりだという事も、簡単な作戦で終わらない事を予感させる。

最後に作戦開始時刻が伝えられ、パイロットはブリーフィングルームを後にする。テルシエは振り返つて、モニターに映る資源衛星を見た。既に潜入部隊を送り込んでいるとは、ずいぶんと手回しがいいと思う。

「で、ですよね……」

陸戦など不可能だといったウオーレン・パーシバルの言葉に、シビル・ストーンはこつそり胸を撫で下ろした。拳銃射撃も格闘術も不得意ではないが、実戦でそれをやれと言われて素直に出来るとも思わなかつた。

緊急避難したシャトルのクルーに伝えられた本国からの暗号通信は、外に展開する艦隊と呼応して、ここの資源衛星に逃げ込んだ研究者グループを確保するようにとの命令であつた。どうしようもなく行き当たりばつたりなその作戦は、本国の焦りなのだろうか。ウオーレンはそのあたりの裏事情をしきりに気にしているようだった。

彼女は整備の続くシャトルを出て、割り当てられた自分の部屋に向おうとする。通路

の曲がり角で男とぶつかった。オイレン・クーエンスの暗い視線に、反射的に身をすくめる。

「……………怖いかな？」

「いえ、その……………」

「あんたも、恵まれてない部類なんだろう？ 分かるぜ」

少しだけ視線を緩めた彼がそう言つて彼女の肩を叩いた。どういふ意味かを聞こうとしたシビルに、オイレンはただ片手を上げるだけだった。

「一端の悪人だな、こりゃ」

中央アジアの山岳地帯にへばりつくように建設されている小さな軍用飛行場に、一機の航空機が着陸している。その周囲には三機のウインダムがビームライフルを片手にたたずんでいた。

東アジアからユーラシアへと向つていたプライベートジェットが、国境を越えたあたりで着陸命令を出されたのだ。乗つていたアルテシア・ローレンツは、その命令を無視して振り切る事を提案したのだが、MSによる攻撃を示唆されやむをえず着陸する事となった。

飛行場には別の飛行機が着陸し、乗員の乗り換えが行われる事が予測される。目的はもちろん、カフネ・イーガンであった。政情不安な地域での誘拐事件を装って、彼女の身柄を奪取しようというのだ。ウインダムのコクピットのモニターにはタラップを降りていく少女の姿が映った。コーディネーターの技師だというが、どうにも信じられない。自分の妹と同じくらいだと、パイロットのカルロス・アストウリアスは思った。

MS用新型動力源に関する重要な機密を持つ人物で、ブリュツセルの企業やパリの参謀本部が追いかけていたという。だが彼に命令を下し、この作戦を執行したのはマドリードの司令部であった。

「重要人物を誘拐で横取り．．．．．こういう悪人は、映画の中盤で消えるんだよな」  
カルロスがウインダムのカメラを回したとき、僚機の一機が足を撃ち抜かれて滑走路に倒れこんだ。ライフルより早くシールドを掲げて、敵の初撃を受け止める。滑走路の端の方のカマボコ型格納庫の方から、ストライクダガーが走ってきた。ビームライフルを構え、明らかに敵対行動を取っている。

この基地には話を通していたはず、ならばあれは何だ。戦場でその問いかけは死につながる。対応の遅れたもう一機はカメラを撃ち抜かれ、戦意を失ったように逃げていく。カルロスのウインダムがサーベルを抜き放った。ビーム同士の干渉で、夕闇の迫った滑走路が明るく輝く。

「上手くやれよ、美人さん!!」

ストライクダガーの中で、グエン・ヴィレンは叫んだ。このような形は予想外だが、カフネが狙われる事は想定していた。敵が彼女の身柄確保を優先している隙を突いて、彼は飛行機を抜け出し基地の歩哨を二、三人張り倒し、整備員一人をクレーンにぶら下げてストライクダガーを強奪したのだ。

だが彼の役目はあくまでも敵の目を引きつける事であり、彼女を助けるのはアルテシアの役目であった。彼女のスラリとした脚は、男を魅了するより早くノックアウトさせる。

股間を押さえてうづくまる男を飛び越え、彼女は人垣の中に踊りこんだ。そうすればむやみに発砲ができなくなる。目隠しをされているカフネを担ぎ上げると、立ち塞がろうとした男を踏み台にして人垣を飛び越える。カフネを抱えていれば絶対に撃たれない。

「ハリウッドかよ、お前ら!」

カルロスはペダルを踏んだ。シールドを構えて体当たりを仕掛け、よろけたストライクダガーにビームライフルを向ける。しかし安易に引き金を引けない場所である事を悟り、動きが止まった。その隙を逃さず、ストライクダガーがビームサーベルを振り上げる。切断されたライフルを捨てると、ウィンダムにサーベルを構えさせた。

MSの性能差を考えると、敵のパイロットはかなりの腕だ。慎重にストライクダガーとの間合いを計る。着陸させた飛行機が滑走路を移動し始めた。

「パイロットは見捨てるのか!？」

ストライクダガーは通常のバックパックしか装備しておらず、飛行機を追って飛ぶ事はできない。ならば、身を捨てて飛行機の離陸を守るつもりなのだろう。飛び上がられる前に勝負をつける。カルロスはフツと息を吸った。レバーを一気に押し込み、ジェットストライカーの推力が、二機の距離を一瞬で縮める。

冷静な表情のまま、グエンがコクピット側面のスイッチを作動させた。頭部の発射筒から打ち出された発光信号弾が、派手に炸裂する。ウインダムはその光にモニターを焼かれた。

数秒の後、正常に戻ったモニターには、滑走路を走る飛行機を走って追いかけるストライクダガーの姿が映っている。カルロスはモニターを望遠にした。

飛行機は、非常用の後部出入り口を開いている。おそらくオートで走っているだろう。ストライクダガーは、その掌にパイロットらしき人影を乗せていた。今まさに離陸しようとする飛行機に手を差し伸べたストライクダガーから、その人影が飛び出した。

悠然と飛び去っていく飛行機は出入り口を閉じる。ストライクダガーは足をもつれさせるように転び、滑走路脇の緑地帯に転がっていった。

「……ほんとに、ハリウッドだよ」

カルロスはヘルメットを脱いでそうつぶやいた。これだから、あの手の映画は嫌いなのだ。

試験飛行を終えた部隊が着艦し、次の部隊が発艦していく。ウインダムの宇宙適応能力は、悪くなかった。ラビ・アルベール・コクトーが自分の機体を先頭にたてる。五機のウインダムは、ぴったりとそれについてきた。各種センサーの感度を確かめながら、デブリを縫うように飛行する。宇宙においても、連合のMSは集団戦闘が基本であり、このような編隊飛行はその基礎技術である。

一機のウインダムが、アルベール機の装甲に触れる。接触回線特有のくぐもった声が響いた。メイファ・リンが確認した閃光を確かめるため、編隊を停止させ全機に索敵を命じた。

「見えた……近いです！」

訓練空域となっているデブリ帯を抜けてすぐの場所に、MSの戦闘らしき光が見えたのだ。直ちに照合された熱紋は、戦闘を行っているMSがザフトのものだと伝えていた。

こちらに向つてくるとは考えにくいが、停戦条約が締結された間もない時期である。不幸な事故であつても許されぬ。アルベールは三機のウィンダムに帰還と状況の伝達を命じる。その上で、自分を含めた残りの三機が戦闘の経過を観測する事にした。手頃なデブリに機体を隠すようにして、カメラだけを回す。

大きな爆発が見えた。その光がザフト艦のシルエットを映し出す。

「好き放題やられすぎだ！」

パイロットスーツにヘルメットを引つ掛け、ウォーレン・パーシバルはシグーのkokピットに滑り込んだ。艦隊による牽制で標的となる研究者グループを資源衛星から追いつ出し、それをシャトルで追尾してシグーで拿捕。難しくもないその作戦は、艦隊に対する資源衛星側からの先制攻撃によつて完全に失敗した。

既に哨戒艦一隻がメインスラストターへの直撃を受けて戦線離脱を始めている。ウォーレンの脳裏に、あのジンの姿がよぎった。封印破りは国際法上も問題であるが、親プラント国である大洋州なら穏便に事を運んでくれるだろう。シャトルにも準備が整い次第発進するように伝え、シグーを動かす。

替えのシールドを左の二の腕に直接固定するようにして失つた腕代わりになっている。いかにも応急処置といった感じだが、それ以外の整備は完璧だと信じる。通常のライフルを掴ませると、シグーは宇宙に飛び出した。



「早いんじや……ないー」

制動の横Gに耐えながら、テルシエが歯を食いしばるようにいう。彼女の目は、間違はなく敵機を捉えている。動きが追えているにもかかわらず、当てられないのだ。レーガンが虚しく宇宙に吸い込まれていく。

乗っているのは最新のゲイツRタイプ。いくらアサルトシユラウド装備とはいえ、ジンに引けを取るわけがない。それなのに、ビームライフルを構えた時には射線を外されているのだ。機体が激しく揺れる。シールドを構えたのは、もはや反射神経でしかない。マティーニの噴流炎を視界に捉えて振り向いた時には、一機のゲイツがリアガンで胴体を撃ち抜かれていた。

部隊に動揺が走った。一番最初に撃墜されたのが隊長機なのだ。オイレン・クーエンスが鼻を鳴らす。思った通り、隊長機を落としたとたんに、烏合の衆になった。

「どいつもこいつもお子様なんだろうー」

逃げ腰のゲイツに狙いを定めようとするが、オイレンはとっさにレバーを引いた。足元からビームが伸びてきたのだ。死角だと思った直下からのビームすら避けられ、テルシエは歯噛みする。敵の標的が自分に移った事も感じ、嫌な汗が流れた。

目と反射神経だけで敵の攻撃を捌く。だが切れそうな精神を繋ぎとめられない。これが切れたら間違いなく死ぬという恐怖が、さらに精神を削っていく。

悲鳴を上げそうになったテルシエの耳に通信機からの雑音が入る。斬機刀を振りかぶったシグーがマティーニの背後に見える。

「フォーメンションを組み直せ！ 一人でどうできると思っている！」

実体剣同士が激しく刀身を削り合う。ウォーレンは、通じるかどうか分からない通信機に怒鳴った。指先の操作で信号弾を上げると、呼応するようにヴェサリウス級からも信号弾が上がった。

パニクに陥っていたゲイツの部隊が、編隊を組み直していく。敵は一機なのだ、数を頼んで押しこめばいい。シグーとマティーニの距離が離れた。同時に、両機のライフルが火を吹く。

「リベンジマッチ!!」

敵機の状態は万全ではないが、戦場ではそれも実力のうちだ。シグーを牽制するため小型ミサイルを撒き、肩部リアガンでゲイツを狙う。背後には脚を消し飛ばされたゲイツが、回転しながら流されていくのが見える。シグーの斬撃をあしらいながら、マティーニのスラスターを全開にした。

ヴェサリウス級を狙うその動きに、再びゲイツの部隊が動揺する。後は一つ一つ潰せばいい、オイレンのその考えを裏切るように一機のゲイツが飛び出す。テルシエはレバーを握り締めて、マティーニに突っ込む。見覚えのあるシグーが、彼女を勇気付けて

いた。

振り抜いたビームサーベルは敵を捉えないが、それを回避したマティーニをシグーが冷静に狙い撃つ。舌打ち交じりに被弾箇所を確認しながら、オイレンは背中にマウントしていた特火重粒子砲を構える。

無造作とも言える動きで放たれたそれは、哨戒艦のブリッジを挟り取っていた。そのまま砲身を鈍器代わりにして突っ込んできたシグーを殴りつける。斬機刀に割かれた砲が爆発し、その光りを目くらましに、オイレンはマティーニを今見つけた物の方へと向わせる。

「正気か!？」

アルベールが叫ぶ。真つ直ぐ向ってくるジンの動きは、間違いなくこちらを見つけている。何のために連合機を狙うのかは分からないが、狙われた以上ここに留まって入れない。

「私が抑える! 両機とも退け!」

接触回線でそう伝えると、デブリの影からウインダムを飛び出させる。シールドを揺さぶるのは、突撃銃の正確な射撃。この距離から当ててきた。先ほどから戦闘を観測し、ジンの動きが異常に優れているのは確認しているが、それをいきなり見せ付けられた。ビームライフルを構えるが引き金をためらう。

追撃してくるザフトのMSに流れ弾を当てられない。その逡巡を見透かされるように小型のミサイルを撒かれた。機関砲とサーベルで振り払うが、背後を取られた事を感じる。牽制のビームが走り、ジンが離れる。

「リン中尉!? 退けと言った!」

「援護します!」

ためらいなくビームライフルを連射するメイファのウインダムがジンに突っ込む。放たれたりニアガンをシールドで受け止め、ビームサーベルを伸ばした。ジンならばそれを受け止める装備はない。

ウインダムの腕が振り下ろされない。逆に踏み込んだジンが腕ごと受け止めたのだ。ジンの脚がウインダムの胴体を捉え、メイファ機が吹き飛ばされる。アルベール機が間に割って入り、重斬刀を振りかぶったジンの動きを止める。

「パーシバル隊長……!」

「期待するな! 仕留める!!」

何故ここに連合の機体があったのか、そして敵がその連合機に攻撃を仕掛けたのは何故か、それはあの機体を撃墜してから考える事だ。連合機があれを倒してくれるなどという期待も持つてはいけない。戦場の楽観論は悲劇しかもたらさない。

連携の取れない相手との共闘は困難であり、その上連合機に弾でも当てたら、それこ

そ休戦条約が消えうせる。斬機刀を構えて、シグーを突進させる。ゲイツからの援護射撃が頭上を通り過ぎる。

突撃銃の火線を見切つて機体を回転させると、その動きのまま刀を振つた。回転した刀が突撃銃の銃身を捉えるが、それは既に弾の切れたものだった。マティーニが腰からビームカービンを抜く。

「やってみろよ!!」

オイレンの声は、歓喜にも似ていた。しつこく絡んでくるウインダムに重斬刀を叩きつけ、肉薄しようとするシグーをミサイルの網に絡める。リニアガンでウインダムの射撃体勢を崩し、一番動きの鈍いゲイツに狙いを絞る。

それに誘われるシグーの動きに合わせてビームカービンで狙い撃ちにし、隙を窺うウインダムに牽制のグレネードを放つ。リニアガンがゲイツのシールドを捉え、姿勢の崩れた機体の中心に照準が合わさった。ビームカービンが捉えたのは、飛び込んできたシグー。左腕代わりのシールドが完全に吹き飛ぶ。

畳み掛けようとするマティーニを狙い撃つのはウインダムのビーム。細かく放たれるビームの雨の中をビームサーベルを構えたウインダムが突っ込んでくる。突き出されるそれを紙一重の間合いで避け、近接用機関砲を叩き込む。脚にしかダメージを与えられなかったのは、敵が突進の速度を緩めなかったからだ。それでも機体の機動性は落

ちる。

手負いが二機に無傷が二機。どちらを狙うか、オイレンの目がモニターを走る。バッテリーと推進剤の残量を計算し、全機の撃墜は難しいと判断した。マティーニは残っていたミサイルを二機のウインダムに向けて発射すると、スラスターを吹かした。

「モニター！ 逃げろ!!」

突っ込んでくるマティーニに、シグーも負けずに突っ込む。だが振るった斬機刀が受け止められた時には、マティーニの姿がモニターから消えている。刀同士がぶつかり合った反動で器用に機体を反転させ、そのままシグーを無視してゲイツに向う。

連射されるレールガンもマティーニを止めない。シールドを重斬刀で弾き飛ばし、無防備になった胴体にビームカービンを向けた。口の端を歪めたオイレンは、次の瞬間さらにそれを歪める。

「無茶をする……………」

アルベールは汗を拭きたい気分で一杯だった。彼がメイファ機を守ろうと、向ってきたミサイルに対処している中、彼女はただジンのみを狙っていた。彼女のウインダムが放ったビームは、ジンの腕を消し飛ばしていた。ミスをすれば、ザフト機を撃墜しかねない間合いだ。

潮時と見たのかジンは追加装甲を排除し、そのまま戦域を離脱して行った。

ヴェサリウス級に收容されたシャトルの中で、シビル・ストーンはシートベルトを外した。結局作戦は失敗であり、艦隊は哨戒艦二隻にMSを三機も失う被害を出した。科  
学者グループは、戦闘の混乱の中で姿を消していた。

それでも、彼女は割り当てられた部屋でホツと息をついていた。自分自身が大事に巻  
き込まれずによかったと思うのは、ダメな事だろうか。

「向き不向きって、あるじゃない・・・」

ベッドに転がりながらつぶやく。どんな仕事もこなせるが、どんな仕事も自分には不  
向きなのかもしれない。不意に、あの男性の言葉を思い出した。

恵まれない部類、それはそういう意味なのだろうか。

## 第五部

カフネの事情は聞いた。彼女自身からではなく、アルテシア・ローレンツツから聞いたのだ。ブリュッセルの郊外にこぢんまりと建つ小さなホテルの最上階全てが、彼らの滞在場所として指定されていた。一階のロビーや階段の各所、各エレベーターホールには、制服を着た警備員が立っている。流石にカフネに配慮しているのか最上階に警備員はいないが、それでも物々しい事には変わりはなかった。

彼女は部屋の中で塞ぎこんでいる。部屋に運ばれる食事はきちんと食べている様子なのだが、せめてもの慰めだ。あの小さな体で、体験する必要のない出来事を立て続けに受け止めたのだ。ああならない方がおかしい。

「引かれるねえ……後ろ髪を」

小さな展望スペースで古雑誌をめくりながら、グエンはつぶやく。ともかくは目的地に到着し、仕事は終わった。家の方から、報酬の振込み確認の電話がかかってくれば、その時点でここを離れる事になる。カフネともここまでだ。

達成感のない仕事、というよりやり残した感じしかない仕事である。彼女の持つ技術を使って、クライアントは新型の原発建設を進めたいそうだが、カフネ自身がどうなる



のかは、何も聞いていない。

「いい絨毯つてのは、足音が消えて困るな」

「起きていらしたのですか？」

グエンが振り向いた先にいたのは、スーツの男。いい男だが、そう単純な人間ではないと顔に書いてある。まだ若い証拠だ。握手を求めてきた男に、グエンは面倒くさそうな表情を見せた。

直接出向いてくるのは、それなりに礼儀をわきまえているからかもしれない。だが、ユーラシア内部においてNJCの争奪戦が存在するからこそ、わざわざ遠く赤道連合の軍人である自分に接触してきた相手だ。厄介事の種にしか見えなかった。ルーファス・リシユレークは表情を変えずに笑う。

週末を挟む海外送金なので、実際の振込みは週明け以降になるだろうという話をグエンは遮った。この自信に溢れた若者が、報酬を値切るなどとは考えない。何も言わずにそつと上乘せくらい平気で出来るタイプだろう。だからこそ、カフネの事が気になる。若者は、往々として人の心の機微には無頓着なものだ。

「彼女の事情はこちらも把握しております。それに関しては、我が社としても彼女の生活と安全は完全に保障させていただきます」

「……違いな」

「何か？」

「自覚はしてんのか？ 俺を含めてあんたら全員が、あの子にとつちや同じ穴の貉だ」

きよとんとした顔の彼に、もう少し詳しく説明してやろうと思つた時、アルテシアが現れた。書類を手渡されたグエンは、そのまま黙つた。報告書らしきものを見ながら小聲で話す二人を見て、見ている方向がまったく異なる事に気付いたのだ。

大人らしくない感傷だが、同時に人の親であれば当然に抱く感情であろう。

プラント本国に戻つてから、息つく暇もなくカーペンタリアへの辞令が出た。何のためにわざわざ戻つてきたのかとも思うが、とりあえず親の顔を見ただけで良しとした。人手不足はどこも同じであり、兵士のやりくりにザフトも四苦八苦なのだろう。

連合が新型MSの運用試験を活発に行っている事から、ザフトとしても監視を強化したいのだ。最前線たるカーペンタリアからは、毎日のように人員が要求されているのだという。

カーペンタリアの宿舎へは、先に荷物を送っている。身の回りの僅かな荷物だけを持って、シビル・ストーンは地球に降りるための中継ステーションに来ていた。カーペンタリア行ききの輸送シャトルが出るまで二十時間ほど、寝て待つには少々長すぎる時間

だ。軍用のステーションでは見物する場所もないが、彼女は宇宙の見えるデッキにゆつたりと身を流していた。

「あつ、ごめんなさい」

窓の外に視線を向けていたため、人にぶつかってしまった。慌てて、足を床に吸いつけて頭を下げる。何も言わずに通り過ぎようとした男が立ち止まった。シビルはそつと視線を上げ、息を飲んだ。

見覚えのあるその男は、オイレン・クーエンス。大洋州の資源衛星にいた男だ。ザフトの追っている科学者グループの護衛として雇われている人間だと、後から聞かされた。それ以上に、彼女は彼の戦闘を垣間見ていた。ザフトの艦隊に対して、圧倒的な存在感を見せ付けたあの戦闘を。

「大声でも、出すか?」

挑発するでもなく、オイレンはただ淡々とそう言った。シビルの口は、カラカラに渴いている。そのまま、シビルの脇を通り抜けようとしたオイレンに、彼女はかすれた声を掛ける。

「あなたは……何者、なの」

「パイロットだ。それしか出来ないが、それだけは出来る」

遠ざかっていくオイレンの背中を見つめながら、シビルの胸にその言葉がゆつくりと

押し掛かってくる。その言葉だけは、暗い声で放たれたものではなかった。固い自負が込められた強い言葉。

そして彼女は、資源衛星で彼の言った言葉の意味を理解する。恵まれない部類、今の自分はまさにそれだ。彼女には、それだけは出来る事が何一つない。誰かに力強く言える自負がない。

何でも出来る事は、何も自慢できない。コーディネーターの社会の中で、ゼネラリストは無能と同義だ。戦場で、彼の動かすMSが見せた絶対的な強さ。誰一人追従できない特技。彼はきつと、それを『手に入れた』のだ。

姿の見えなくなつたオイレンの背中を追いながら、シビルは彼の所在を通報しようなどとは考えなかつた。

オーブ土産を馴染みの作業員に配る。日持ちのする菓子を選んで正解だった。カーペンタリアの基地は、今日も作業音に満ちている。休憩のサイレンが鳴り響き、ユウキ・ナンの乗る自転車に人が集まってきた。冷えた飲み物とクーポンを交換し、その時に買ってきた土産を手渡す。

「どうした、ずいぶん気が利くら」

「別に？」

「オーブで何か、いい事あったんやわ」

作業員達の冷やかしを笑って受け流しながら、ユウキはクーラーボックスの中を覗きこむ。次の作業場に持つていく分が残っている事を確認して、自転車にまたがった。再びサイレンが響くが、休憩時間はまだ終わっていない。

それは滑走路の方から聞こえたサイレンで、スクランブルを命じるものだった。非戦闘員に対する退避勧告のサイレンではないため、領海外に何かを見つけたのだろう。仰ぎ見ると、レドームをつけたデインが海の方に向かって飛んでいくのが見えた。ユウキはペダルを漕ぎ出す。

別にイイ事があったわけではないけど、彼女は鼻歌交じりに自転車を走らせる。モーニンググロリーの通り過ぎたカーペンタリアは快晴だった。

「まずい！ ザフトよ……」

「レドーム付きだろ、ただの覗きだよ！」

カナンはそう言ってトリガーを引く。一閃したビームを軽やかに交わしながら、黒く塗装されたダガーが接近してくる。滑空翼を不意に前方に向けると、レールガンが放たれる。ノワールストライカー装備の特殊な機体、そんなものと交戦する事になったのは、幸運なのか不幸なのか。

幸運に変えて見せるさと、カナンはレールガンで応戦した。わざと海面に着弾させたそれは巨大な水柱を作り出し、対艦刀を抜いたノワールダガーの前に壁を作る。同時に、ミコトは力いっぱい操縦桿を引き上げる。ガラム・ガーは機体をほぼ九十度に傾けて旋回した。両腕を上に向けてるような格好で、ノワールダガーを狙い撃つ。

捉えきれない事に、もはや驚きはない。急制動のGを感じながら、細かく砲を放つていく。機体性能にあかせて高出力のビームを乱射したところで、対MS戦では効果が低い。

「つくづく運がない!!」

デイルクの声がコクピットを震わせる。大洋州に潜伏するブルーコスモスの支援団体と合流し、カーペンタリアへのシャトル降下コースを監視できる場所へと向かうはずが、こんな事になってしまった。お互いに先手を打って障害を排除しようとしたのだから、退くに退けない戦闘になってしまっている。

巨体だからこそその機動性と火力、そして機体の動きに拘束されていない射撃。大西洋の新型MAの性能は、見た目の間抜けさとは正反対である。ましてや、ジェットストライカーと比較して明らかに空戦能力の低いノワールストライカーだ。

レールガンとビームピストルを乱射して、相手の気を削ぐ。何とかして退き際を見つけた。再び水柱が立ち上がった。デイルクの目が左右に走る。

「もらったー！」

ミコトは一瞬だけ動きの止まったノワールダガーにそう叫んだ。水柱の中に突っ込んで、一気に敵に肉薄したのだ。振るった腕の鋏には、間違ひなく手ごたえがあった。

だが鋏が挿んだのは片方の翼のみ。カナンが慌ててスイツチを叩くと、背面にいくつもの衝撃を受ける。ビームガンの直撃に高度を落とす、グレネードの煙幕にセンサーを遮られる。敵に逃げられた事を悟り、二人は顔を見合わせて息を吐き出した。

モニターにはデインが飛び去っていく姿が小さく映っていた。

「覗きは、もう一人いたな」

カナンは上部モニターに見つめていった。航空機形態のムラサメがはるか上空を旋回していた。そのコクピットで、ユイ・タカクラは再会を祈ってムラサメを帰還させる。

家族に土産物を渡す時間くらいくれてもよさそうなものだ。カルロス・アストウリアスは司令部に向いながらそう愚痴を言う。悪党の真似事までさせられたのだから、もう少し丁寧に出してもいい。

マドリードの司令部に呼ばれたという事は、前回の作戦についての報告か何かを求められるのだろう。話を聞きたいのは、こっちの方だった。

その彼が司令官に会う前に、面会に割り込んできた人物がいた。少将の肩書きだが、この司令官が遠慮をせざるを得ない人物である。彼も、実物を見たのは初めてだった。美人というカテゴライズを無効化してしまいそうな雰囲気をもった女性だ。女ナポレオンなどと呼ぶ者もいるが、それ以上だと感じる。それほど年上というわけでもないだろうが、貫禄のようなものは圧倒的であった。

「包み隠さず話してくれればいい。これはユーラシアの安全保障に関わる問題だ」  
「ユーラシア……ですか」

アロシア・ルイーズ・ド・ヴァルアは最初の一言を口にした後、無言のままカルロスを見据え続けていた。彼は、頭をフル回転させる。

自分が聞いたのは、プラントから来たカフネ・イーガンという人物の身柄を確保する事、その人物がMSの新型動力源に関する技術者であるという事、そしてその人物をユーラシアの複数の勢力が追っているという事である。その中にはパリの参謀本部も含まれているという話であったが、目の前の女性こそカフネ・イーガンを追っている人間だと、カルロスは直感した。

ならば何を話すべきか。それは、自分の立場をどこに置くべきかである。彼女の言う通りユーラシアの国益に関わる事であれば、マドリードの司令部は彼にあんな三下悪役のような事を命じないであろう。



「私が見たのは……巨大なMSでした。搭載火器も強力なもので、とてもバッテリー駆動とは思えないものでした」

それが連合の共同訓練に乱入し敵対行動を取った。もしあれがザフトのものであれば、連合は新たな脅威に晒されるであろうし、あれが連合内部のものであれば獅子身中の虫に悩まされる事となるだろう。

ゆつくりとしたカルロスの言葉を、アリシアは注意深く聞いていた。

カルロスが十代から軍にいる事は事前に聞いていた。ただのパイロットにしては、頭も切れるようだ。ジブラルタル奪還の功績は伊達ではないのだろう。彼女は、小さく息を吐く。

マドリードがどれだけの情報を持っているのかを調べに来たが、この男の頭の中は既に、ブレイカーの存在とカフネ・イーガンの持つ技術に密接な関連性がある事を掴んでいる。そして彼女がそれに関わっているという事から、この男は何を推論するだろうか。

これ以上は藪蛇になる、アリシアはそう考えて席を立つ。ようやくコーヒーを持って来た女性職員に会釈をして、彼女はその後にした。カルロスが、肩の力を抜いて息をし始める。コーヒーカップを手にし、口を付けた。

「俺好みの味だ」

「インスタントですよ」

地球と宇宙を往還するシャトルは、常に空港に着陸できるわけではない。領空や防空識別圏などを縫うように降りなければならぬ事も多く、飛行能力に限界のあるシャトルでは空港までたどり着けない事も多い。そのため、カーペンタリアに降りるシャトルの半数ほどは、大洋州の近海に着水し出迎いの船に乗り移るという方式を取っている。窓から見えるのは青い水平線であった。

方角に間違いがなければ、このずっとずっと先、地球を半周位したところに母国があるはずだ。思いもよらない形で地球に戻ってきてしまった。コトハ・キサラギがシートベルトを外す。

ザフトの部隊の襲撃を受ける直前に脱出した彼らは、一旦カーペンタリアに向かうのだ。ザフトに追われて、ザフトの基地に向かうというのも奇妙な話だが、ようはザフトの内部が奇妙な事になっているのだろう。漠然と、テロリストや犯罪組織にでも狙われていると思っていた彼女にとって、ザフトに追われているというのは大きな驚きであった。

「そんな重要なもんやったなんて……」

未だに正確にあの絵を思い出せる自分の頭を恨めしく思う。

「どうでしょうか」

横に座っていたトルベン・タイナートが視線を向けずに言った。彼にとつて、遺伝子は研究対象であり、純粋な学問の問題だ。だがコスミックイラにおいて、遺伝子とは極めて政治的な存在であり、具象化されたイデオロギーなのだ。彼に研究を依頼してきた人間が『ジョージ・グレンのレシピ』に何を見ているのか、そしてそれを追う者達は何を見るのか。科学者である彼には、想像もつかなかつた。

むしろそれは、一般市民であるコトハの方が理解できるのではないだろうか。トルベンはそんな事を聞いた。彼女は顔をしかめる。

誰が言い出したのかは知らないが『レシピ』という言い方は、気持ちのいいものではない。確かにコーディネーターは、そのように生み出されるのかもしれない。だが、今現に生きている人間を、あたかも物であるかのように考える発想がそこにはある。

そしてその発想は両極端に分かれる。人の英知が生み出した物だから尊いという考えと、自然に生まれなかつた物だから卑しいという考えだ。そこに『生きている』という視点は無い。ただ存在だけを取り上げて評価しているのだ。

「親が子に与える愛の形が、たまたまDNAやつたんですよ。私達は」

良い教育を与える事は正しく、良いDNAを与える事が間違いだというのは、どのよ

うな論理でなされるのか。親が子に与えた物の違いによって、子の尊厳に差異が生じるなどというのは、どのような論理ならば可能なのか。

今自分が目撃しようとしているのは、コスミックイラの愚かさの根源なのかもしれない。コトハは水平線に視線を向けたまま思う。

失われた艦の代わりに、ローラシア級が一隻回されてきた。ただ、MSの補充はなく代わりに降下ポッドが外付けされている。ヴェサリウス級に收容されたウォーレンは、それを見てため息をつく。もう一度地球に降りろと言われそうだ。

乗ってきたシャトルは無事に資源衛星を脱出し、中継ステーションに到着したのだが、彼だけは戦闘による機体の損傷が激しく、そのまま艦隊に收容される事となった。彼を回収してくれたゲイツのパイロットは、初対面ではなかった。

「妙な縁だな、テルシエ・ミンター」

「私としてはそれを大切にしたいと思います」

姿勢を直し敬礼をした彼女に、彼も敬礼を返す。部隊の隊長がいなくなったため、彼がそのまま隊長を引き継ぐ事となった。この艦隊の所属が、彼のいたプラント守備艦隊だったため、手続きは本国から電送されてきた辞令一枚であった。艦に積み重ねていたゲ

イツの予備機に、シグラーのデータが移しかえられている所である。

新兵を次々と送り込まざるを得ないザフトの現状では、彼のようなパイロットは貴重であった。同時に、彼のようなパイロットの下に就けるのは、彼女にとって幸運な事である。あの圧倒的な敵を前に生き延びられたのは、彼のお陰であった。

作戦は継続中であり、追撃は始まっていた。敵が地球を目指す事は確実であり、降下前に接触しそれを捕らえよとの指令である。追いつけますかというテルシエの問いに、ウォーレンは首を振る。

敵が先手を打ったという事は準備をしていたということであり、既に地球に降りる算段はついていたのだろう。もし追いつけるとしたら、科学者グループではなくあのジンの方だろう。

「だったら、シミュレーションを見ていただけませんか」

あのジンのデータは既にシミュレーションのプログラムに組み込まれているはずだ。実戦をくぐってきたパイロットに評価して欲しいと、彼女は言う。

そんなテルシエの申し出に、ウォーレンはもう一度首を振った。そしてまずはゆっくりと休めという。不満そうな彼女に、彼は付け加えた。戦争はまだ終わっていないからなんだよ、と。

連合も新型MSの宇宙での試験を始めている。現在の状況は、平和条約締結のための

休戦ではなく、次の戦争を準備するための休戦でしかないという事だ。彼らが追っている物も、きつと次の戦争のために必要なものなのだ。

「ブルーコスモス絡みですか……」

「小規模とはいえ、艦隊を編成している。ザフトにとつても重要なものだろう」

訓練空域における、アンノウンとの偶発戦闘。アルベールとメイファがその報告をした際、艦隊の司令が連合本部からの情報を教えてくれた。ザフトが追っているものは、高名な遺伝子工学者とその研究グループだという。

そして、ブルーコスモスの内紛のどさくさで流出したデータがそこに関係しているらしいという。アルベールは司令の持つている紙に視線を移した。どうしてそのような話をこの場でするのか。理由に察しが付くだけ憂鬱だ。

ザフトの動きを監視するため再び地球に降りろ、それが下された命令であった。司令の部屋を出るとメイファがため息混じりに言った。

「せわしないですね」

「宇宙と地球の行き来を日帰り出張程度だと思っているんだよ、本部の人間は」

アルベールの苦笑いに、メイファも苦笑いを合わせる。

シャトルの回収船からの連絡を受け、ボズゴロフ級は浮上したまま前進を始めた。ザフトの戦闘艦はほとんどがこのボズゴロフ級であるため、水上艦艇の護衛任務も潜水艦が行っているのだ。着水していた二機のシャトルを回収し、カーペンタリアへと向かう。サイモン・メイフィールドの目が、モニターの一点に注がれた。

「回収船に退避行動を。本艦は急速潜航、雷撃戦用意！」

発見した熱源は、こちらに気付いたように動き始める。先手を打つように発射された魚雷の爆発音をソナーが捉える。次の瞬間、衝撃波が艦を揺らした。敵も実体弾で応戦してきたのだ。

再度魚雷を発射すると共に、グリーンを二機発進させる。敵の動き、それほど機敏ではない。だが、その大きさには見覚えがあった。

「浮上させるな！ 空中投射爆雷!!」

直ちに敵の位置が計算され、艦の上面ハッチからミサイルが撃ち出される。海面に飛び出たそれは、小さな放物線を描いて再び海面へと向かう。弾頭部から複数の爆雷が撒かれた。

爆雷の生む衝撃が、天井を作るように頭上に広がる。激しく揺さぶられるコクピットの中でノーリッチ・シユナウザーが笑った。その程度の攻撃では、ブレイカーを止めることは出来ない。

「ウザい!!」

衝撃を突き抜けて海面に飛び出たブレイカーは、指のビームで爆雷の第二波を薙ぎ払う。胸部大型ビームを海面にぶつけると、海は沸き立ち大爆発を起こす。海上は靄と水飛沫に曇り、海中は泡で白く濁る。潜水艦のセンサーは、しばらくの間使い物にならなくなるだろう。

リニアガンを撃ち出して靄を吹き払う。目標は潜水艦ではない。ブレイカーのカメラが左右に振られる。

「何か・・・ヤバそうですね」

水平線の上で突然火山が噴火したように、遠くの海面が煙る。その中に、巨大な人影のようなものが見えるのだ。大抵の事には驚かなくなっただけだが、世界はやっぱり広いようだ。シャトルから船に移ったコトハは、トルベンと共に甲板に出る。救命胴衣の着用が命じられていた。

靄が薄れ、人影の正体が姿を現す。距離が遠く、その大きさが実感できないが、いま上空を走ったビームの規模からすると、とんでもないMSのようだ。甲板の上の人間がパニックを起こし始めた。

ブレイカーのカメラでもそれは捉えていたが、ノーリッチにとっては関係のない事だった。彼にとってはつまらない仕事を早く終えたいだけだ。両腕を前に向ける。



「お前、空気読めないだろ……」

左手を横に向けビームを放った。海面に顔を出したグリーンが、ミサイルを放つ事無く爆発する。ノーリツチはブレイカーの右手を、今度は上に向けた。だが放たれたビームは空に吸い込まれていった。彼の表情に喜色が生まれる。

つまらない仕事ではなくなつたと、背部コンテナからミサイルをばら撒いた。それを切り払いながら突っ込んできたMSの攻撃を、光波防御帯で受け止める。近接用機関砲をかわしたジンは、見たことのないパックパックを背負つて飛んでいる。

指のビーム、腕のリニアガンを乱射してジンを追う。胸部大型ビームが空を薙いだ。ジンのマシンガンが装甲に当たっている感覚を受けるが、それはただ当たっているだけだ。それでもノーリツチの喜色は消えた。ヒラヒラと飛びまわるジンが、彼を苛立たせる。その上、胸部ビームを撃つ度に体内の不快感が増してくる。

ジンの投げ付けたグレネードが黒い煙を吐き出した。

「さて……どうするよ」

中継ステーションから降下ポッドを使つて機体と共に降りてきたら、目の前に巨大MSである。試作型フライトパックの使い勝手はグウルより上とはいえ、信頼性は未知数だ。その上、この巨大MSに有効打を与えうる装備をジンは持っていない。流星のオイルン・クーエンスも迷う。

だが、喧嘩を売ったのは自分だ。逃げるという選択肢だけはない。何より、逃げたらそこで彼の存在は無に帰すのだ。

海中からミサイルが飛び出してきたタイミングで仕掛ける。重斬刀で殴り続ければ、何かが起こるかもしれない。翼にぶら下げたロケット弾を全て撃ち出して目くらましとし、頭部を狙って重斬刀を振り下ろす。

ロケット弾全てを装甲で受け止め、口から出した光波防御帯で重斬刀を受け止める。圧倒的な機体性能でセオリー通りの対処をされれば、性能に劣る側は手の出しようがない。オイレンは何度も舌打ちしながら、攻撃を回避する。だが、推進剤の減り方が予想外に早い。

「無理すんなよ!!」

ノーリッチは怒鳴り、リニアガンを海面にぶつけた。二本の水柱が立ち上がり、ジンの動きが制約される。そこを胸部ビームで狙い撃った。ジンの膝から下が消えてなくなる。

それでも突っ込んでくるジンに、ブレイカーが十本の指を向けた。だがそれを撃つより早く、背中に大きな衝撃が走る。PS装甲とはいえ、対艦ミサイル直撃は響く。それでもブレイカーは、バランスを崩しながらジンの腕を掴みとめていた。止めを刺そうとした瞬間、ジンが腕をパージする。

右手一本で突き出された重斬刀がブレイカーのカメラに突き刺さるが、頭部近接機関砲がジンの装甲を抉っていく。

「くっそおおお！」

直撃弾がなかったのは、運の良い角度だったからに過ぎない。それでも、バックパツクと頭部を消し飛ばされたジンの中で、オイレンは悔しさをこめて叫んだ。

カメラに突き刺さった重斬刀を引き抜いて、ブレイカーはその海域を離脱する。命拾いした事に胸を撫で下ろし、サイモンは先ほどのジンの回収を命じた。あのダメージでは長く浮いていられないだろう。

安堵の声が上がっていたのは回収船も同じだった。救命艇を降ろす作業は中止され、甲板上の人は誰彼無く抱き合って喜んだ。

そんな中、ずっと海の方を見つめている女性がいる。巨大MSに立ち向かうあのジンを操縦していたのは、オイレン・クーエンスで間違いない。そう、シビル・ストーンは確信していた。

乗員の着席を確認する事無く、輸送機が滑走を始めた。立っていた乗員は、慌てて近くの座席に座ってシートベルトを締める。それでも、カルロス・アストウリアスの目だ

けは静かに遠くを見据えていた。マドリードの司令部は、知っている事のほぼ全てを語ったのだろう、ようやく話が見えてきた。

パリの参謀本部、いやあの女ナポレオンが何を考えているか、正確なところまでは分からない。だがモスクワとつるんで、何かを画策している事は確かである。今のモスクワはブルーコスモスの影響が強く、プラントとの提携路線を選んでいるユーラシア中央政府とは何かと軋轢が生じている。プラグマチストだという噂は聞くが、ブルーコスモスという選択肢は予想外だ。

プラント・ザフトとコーディネーターとは、厳しく峻別すべきであり、偏狭なコーディネーター排斥を目指すブルーコスモスは、危険分子でしかない。カルロスは誘拐未遂作戦の時に敵対したタガーの事を思う。

「俺が………駆り出されなきゃならない理由だな」

赤道連合において戦場におけるMS運用体制の構築に大きな功績を上げた人物が、経緯は不明ながらターゲットの護衛を行っている。場合によっては赤道連合の介入まで考慮に入れなくてはならなくなるだろう。退役という情報が、実質である事を願うだけだ。

ウインダムを搭載した輸送機が六機、次々と滑走路を飛び立っていく。目的地は、ターゲットの滞在するブリュッセルである。しかしその時、すでにターゲットたるカフ

ネ・イーガンはそこを発っていた。

「あの警備員は何だったんだ？ コスプレか？」

ハンドルを握るグエンが、アルテシアにそう聞いた。カフネを連れ去った車を追っているのだ。既に、ルーファス・リシユレークの部下が追跡を開始しているのだが、それをただ見物する気にはなれなかった。ヘッドライトが、街灯も無い道を照らす。

「既に、報酬の支払いは……」

「大人の責任は金をもらって果たすもんじゃねえよ」

一瞬のブレーキとハンドルワークで、車は後輪を横に滑らせながら方向を変えろ。カフネにゆっくりと悲しませる時間も与えられないのは、大人として情けない事ではない。どいつもこいつも、カフネの事になど興味の欠片も持っていないのだ。

彼女の頭の中にある情報、それは戦後の軍事・経済に多大な影響を与えるものなのだ。大西洋、ユーラシアという連合内の巨大勢力に対して遅れをとっている東アジアとしては、一発逆転を可能とする切り札になりうる。

それはMS開発競争に乗り遅れたFUJIYAMA社にとつても同じ事だった。バックミラー越しにカフネの顔を見ながら、カナデ・アキシノはアクセルを踏み込む。このような仕事に自分を抜擢したのは、心神の実質的なコンペ落ちに対する制裁なのか、それとも失地回復の機会なのか。余計な事は考えないようにする。

何よりNJCを含むNJ関連技術はプラントの最重要機密であり、技術者として否応無く興味を駆り立てられるものだ。幼さしか見えない少女の不安げな表情に、良心が痛まないといえれば嘘になるが、今は頭を切り替えるべき時だ。

「本当に、パパとママは……あの人達が……」

「私が知っている事は、全部あなたに伝えたわ。100%の保証は、私にも出来ない」

カフネの両親が殺害された事は事実であり、ユーラシアが送り込んだ作業員が接触を試みていた事も事実である。その事実がどう繋がるのか、繋がらないのかは、彼女の知る話ではない。ただ、繋がる可能性もあると強調して話したのも事実だった。

港の倉庫街で車を止め、カフネを連れて栈橋へ走る。木材チップが満載された船に乗り込み、チップの山から突き出ているパイプから中に入る。

「……コクピット?」

「少し、我慢しててね」

シートの後ろにある補助シートにカフネを座らせると、カナデは諸々のチェックを省略してバッテリーのテンションを上げた。ペダルを踏み込むと、輸送船に隠されていたMS・心神が急上昇をする。

このままドーバー海峡を抜ければ、迎えの艦がいるのだ。

想定外の交戦が行われた以上、訓練が中断・延期されるのは仕方ない。地球に帰還せよとの命令には、納得も出来る。だが、この命令はそうも行かなかつた。正式な命令であるため反論など許されないが、アルベールは確認するように問い返した。

「こちらから仕掛ける、という事ですか？」

「君の疑問も当然だ」

艦隊の司令はあっさりと言った。ブリーフィングルームに集められたテストパイロットも、同じ顔をしている。停戦交渉がようやくまとまった直後のこの時期に、連合がザフトに攻撃を仕掛けるなど正気の沙汰ではない。その正気を捨ててでも、ザフトの機密を排除しなければならぬのだろう。

連合によるMSの開発成功によって、プラントとの軍事的な格差は無くなった。やがては、国力差によってプラントを圧倒できるであろう。しかしそれは、コーディネーターが今後とも「性能」を向上させない事が前提である。現に、プラント側の投入した一部機体は、MSの性能差以上の能力を見せ付けていた。

「コーディネーターの性能アップ……あり得るんですか？」

ヘルメットを接触させて、メイファはアルベールに聞く。それはコーディネーターに聞く質問ではないと答え、アルベールがコックピットに体を流した。自分の迂闊さに舌

打ちをした彼女は、コクピットの計器を手早く確認していく。

仕掛けるとは言っても、地球降下軌道に入りながらの戦闘である。時間は長く取れない。降下シャトルに乗り損ねれば、そこでゲームオーバーとなる厳しい条件だ。狙う相手が、何を持っているか持っていないのかよりも、その条件下での戦闘をこなせるかどうかの方が問題だろう。

新造されたMS用電磁カタパルトに、機体を乗せる。モニターにタイマーが映し出され、カタパルトのレールが点滅を開始する。

「メイファ・リン、ウインダム5号機。発進!!」

打ち出しの加速を受け止め、前を飛ぶ噴流炎目掛けて姿勢を制御すると、スラスターを吹かせた。目の前には真っ青な地球が、彼女達を吸い込まんとして立ちはだかっているようだ。

低軌道での戦闘は、大戦中でも数えるほどしか行われておらず、MS戦となると前例は皆無である。もちろん研究だけは行われていたが、実際に行う者にとっては関係のない話である。

「情報通りか……いえ、気に食わん。数は!？」

「5……いえ、6です!」

降下直前で連合軍部隊に捕捉されるという本部からの情報が当たった。だが、なぜ本



部がそれを察知できたのかが分からない。このところ、納得の出来る命令を受ける事がないと思いつながら、ウォーレン・パーシバルはゲイツのライフルを構えさせる。敵の数がこちらより多い以上、先手を打たなくてはならない。

やはり戦争は終わってなどいかなかった。引き金を引きながらウォーレンはつぶやく。そして一気にペダルを踏み込んだ。敵は新鋭機を任されたパイロットである、駆り出された新兵では荷が重過ぎる。

散開した噴流炎を視界に捉え、もつとも近いもの目掛けて突進する。左腕のシールドから伸ばされた二本のビームサーベルが、ウインダムのビームライフルを切断した。ウォーレンは舌打ちする。仕留められなかった。頭上からのロケット弾を回避し、遠くの機体に牽制のビームを放つ。

直下から突っ込んできたウインダムにエクステンシエンアル・アレスターを射出してその動きを止めると、スラスターを吹かせて真正面に機体に肉薄する。接近戦の間合い、敵がビームサーベルに手を掛けるのを見て、ウォーレンはゲイツに斬機刀を抜かせる。

一閃したそれは、ビームサーベルをすり抜けてウインダムの頭を割った。そのまま敵の胴体を蹴り飛ばすと、視線を戦場にめぐらせる。友軍機は指示通り、距離を取つての射撃に専念しているようだ。

「近づかせない!!」

レールガンとビームライフルを交互に撃ちながら、テルシエはモニターに向かって叫ぶ。ウオーレン機の突出で敵部隊はそちらに気を取られているようだが、一機だけ執拗に自分達を狙っている機体があった。三機のゲイツで連携して攻撃を繰り返すが、ジリジリとその間合いを詰められている。敵の放ったロケット弾を、レールガンが撃ち抜く。

しかしその爆発の閃光が、攻撃の手を緩めさせた。テルシエの視界の隅を影がよぎる。

「見えてるー」

ビームライフルの攻撃はシールドで防がれるが、背後を取ろうとした敵の動きは止めた。だが、距離は一気に縮められてしまった。味方機がシールドを吹き飛ばされていく。テルシエはレバーを押し込んだ。ビームライフルの火線をギリギリでかわし、ビームサーベルを発振させる。

「やる!!」

サーベルが頭部を掠めて、モニターの映像が乱れる。メイファは歯を食いしばるようにそう言うと、ウインダムを勢いよく反転させた。その勢いでゲイツにシールドをぶつけて吹き飛ばし、自分を狙っていたもう一機に残っていたロケット弾を浴びせる。

バランスを崩したその機体に追撃を見舞おうとするが、通信機を揺らすノイズに機体

を右に滑らせた。それでも、パツクパツクの翼を斬機刀で切り落とされる。アルベール機が信号弾を打上げながら、メイファ機の支援に入った。

現時点でも、機体はジリジリと重力に引かれているのだ。機体の些細な損傷が何をもたらすか、シミュレーションでは分かっていることが多い。突出したゲイツによつてダメージを受けた機体は、早々に撤退させている。敵への攻撃よりも、味方の降下を優先させる。それが現場での判断だ。

「まだ時間は！」

「リン中尉！ シャトルを捉まえろ！！」

アルベールはそう叫んで、斬機刀を振りかぶつたゲイツに突進する。シールドを使って、刀を受け止めるのではなく受け流し、ゲイツの姿勢を崩させる。落ちろと念じてゲイツを思い切り踏みつけ、真上から攻撃してくるゲイツにはビームライフルを見舞った。

コクピット内がアラームに満ちる。アルベールはメイファ機の撤退を確認した上で、手持ちのロケット弾とグレネードの全てを発射して後退した。

シールドのサーベルと斬機刀でそれを処理しながら、ウォーレンは一瞬だけ混線した通信機の声に、聞き覚えがある事を感じていた。母艦から信号弾が上がる。このまま機体を降下ポッドに乗せて、地球に降りなければならぬ。

## 第六部

プラントの地球における最大拠点であるカーペンタリアとはいえ、その巨大な基地機能をプラントの人間だけで動かす事はできない。付近の住民が基地に雇用される形で、居住施設を中心として働いている。両親は仕事を求めてこちらに越してきたのだし、ユウキ自身も戦時中から基地でアルバイトをしている。

だから、基地の雰囲気に変化した事は敏感に感じ取っていた。戦争の時ほどではないが、最近までの落ち着いた雰囲気が失われつつある。彼女は自転車を止めて汗を拭いた。前籠の代わりに取り付けたクーラーボックスの中身を確認して売店に戻る。今日はおもう上がるつもりだ。その視線が一点に向けられた。

自転車を飛ばし、そして急ブレーキをかける。

「ツエルニーさん!?!」

「.....!」

大きなアタツシエケースを持ったスーツ姿の男は、オーブで出会ったデイルク・フラントツ・ツエルニーだった。道に迷ったのかと聞くと、彼は無言で頷いた。彼の驚いたような表情に、Tシャツとショートパンツで日焼けした肌を晒している自分の格好を意識

してしまふ。

慌てて顔を逸らすと、最寄の事務所まで案内すると言う。仕事で基地に来たのなら中心区画に用事があるのだろうか、ユウキの資格ではそこまでの立ち入りは出来ないのだ。自転車を降り、彼の隣に並んで歩く。

横目で見るのは、彼の横顔だけ。影が差しているような表情が、端正な顔立ちの上を覆っている。自転車の車輪がかすかに立てる音以外には、何も聞こえない。休憩時間中はクレーンも溶接機も止まっている。その静寂に耐え切れず、ユウキは自転車を止めた。クーラーボックスを開けて、ジュースのパックを取り出す。

「の、飲んで・・・暑いでしょ」

「ああ」

彼女もジュースを手に取り、余計に暑くなった額にパックを押し当てる。長いのか短いのかも分からない不可解な時間が過ぎ、警備員が詰めている事務所に到着した。ディルクが一言だけ礼を言つて、事務所内の建物の中に入つていった。

ユウキはその場にたたずむ。よく分からない虚脱感のはずなのに、何故こんなに心地良いのか。手の中のジュースのパックはもうぬるくなっている。

「ユウキー！」

突然、背後から抱きつかれ、自転車が音を立てて倒れた。驚いて振り返ると、満面の

笑みを浮かべたテルシエ・ミンターが立っている。

「戻ってきてたの!？」

「今さっきね。真っ先に会いに来たのよ」

こんなところで何をしていたのかとテルシエが聞くと、ユウキは慌てて倒れた自転車を起こす。視線を向けずに何か言っているユウキの顔を、テルシエは覗きこんだ。

「何でもないって!」

「何も言っていないじゃん」

自転車にまたがったユウキの肩を掴み、後輪軸の左右に伸びたステップに足を掛ける。走り出した自転車から、テルシエは後ろを見た。事務所の中では、スーツの男と警備員が何かを話しこんでいる。

「作戦は中止だ、予想外に警戒が強い」

「バカな! 貴様を潜り込ませるだけでどれだけの苦勞を」

「それに外部との連携のない破壊工作では意味がない」

ディルクの持っているアタッシェケースの中には、高性能の爆薬が大量に詰められていた。カーペンタリアに対する示威行動の一環としての破壊活動だが、彼はそれを土壇場で中止にする。

その感覚をアナクロという者もいるだろう。だが再構築戦争によって近代国家の枠組みが解体され、より大きな国家として再編された時、かつての「国」は「郷」となった。かつてのナシヨナリズムは、いまやパトリオティズムとして語られるものなのだ。ゲンヤ・タカツキが自治州の艦隊司令をやっているのは、そのパトリオティズムの現れである。

だが、そうやって自治州に引きこもっている事が許されない時代なのかもしれない。戦争によってプラントは普通の国であると証明され、連合は旧世紀のような国家の寄り合い所帯である事を露呈した。再編されたより大きな国は、国としての求心力を持てないまま、再びかつての国が存在感を増し始めた。

エイプリルフル・クライシス以降の混乱した地球の復興を、どの国が主導するのか。国家間の競争は始まっているのだ。軍人など、率先してその駒とならねばならない立場である。

「進路を東に」

「( )からですか!？」

イベリア半島の沖合い南に向けて航行していた艦隊が、進路を90度変更する。ジブラルタル海峡を抜け、スエズ運河を使ってインド洋に出るのだ。戦争前であれば通常の

ルートだが、今は意味が違う。

ジブラルタルとカーペンタリアを結ぶ、地中海、スエズ運河、紅海、インド洋はザフトの最重要シーレーンである。ユニウス条約でほとんどの占領地が連合領に戻ったとはいえ、ザフトは各地に基地の割譲を認められ、今でもこれらの地域では連合も自由な活動が出来ないでいる。

ユーラシアからの追撃を避けて日本に戻ろうとすれば、このルートがもつとも安全と言えた。ただ航海するだけであれば、ザフトも手出しはしない。

「つまり、ユーラシアは当方に対する攻撃も辞さないという事ですか」  
「でなければ、君は首相専用機で今頃羽田に着いているよ」

ブリッジにいる女性の問いにゲンヤは答えた。軍艦による護衛が最もリスクを少なく出来る、それが自治州政府の判断なのだろう。カフネ・イーガンの持つ情報は、リスクに見合うだけのリターンを約束してくれるのだ。

だからと言って、誘拐の幫助に乗り気になれる軍人などいるであろうか。ゲンヤは横目で女性を見据えた。カナデ・アキシノは、あえて表情を崩すまいとしているかのようだ。ゲンヤは小さくため息をついた。

彼の見立てでは、戦闘はインド洋に入ってからだ。ユーラシア以外の勢力も、同じ情報を欲しているはずである。厳しい状況は、容易に予想できる。



プラントの人間がザフトに追われる、それくらいならば説明を受ければ理解も出来よう。だが、ザフトに追われるプラントの人間を手助けするザフトがいる、こうなると理解は出来ても納得は難しい。カーペンタリアで立派な宿舎に案内されてから、コトハ・キサラギが考えるのはそんな事ばかりであった。

『ジョージ・グレンのレシピ』なるものは、追う価値も匿う価値もあるものと考えられているのだろう。だが、それを持っているトルベン・タイナートはそれほど研究に乗り気なようには見えなかった。彼曰く、ジョージ・グレンのゲノムは全て公開済みなのだ。

彼のクライアントは、それらがどのように発現するのかについての詳細な研究結果を求めている。しかしそれに関しては人工子宮の研究者の方が専門家であり、ゲノム研究家であるトルベンにとっては興味の範囲外の話だった。それでも、彼がこの案件に首を突っ込み続けているのは、レシピにはジョージ・グレンの両親のゲノムについてのデータが存在したからだ。

正確に言えば、卵子と精子それぞれの遺伝情報である。つまり、これとジョージ・グレンの情報を比較する事によって、どのような遺伝子操作が行われたのかを調べる事が出来るのだ。トルベンは、そこで一つの疑問に突き当たる。

「キサラギくんは、レシピをどのように書く？」

「……うち、家政科違うんです」

「料理とか、しないのかね？」

「料理する人はレシピを書きません」

「こういう会話をすると、この人が学者なのだと思われて改めて実感する。普通、料理が先にあって、レシピが後から生まれるものだ。コトハはそれを丁寧に説明した。トルベンはさらに続ける。

「もし、創作料理を作る事になったら、レシピからはじめないかね？」

「多分……既存の料理のアレンジから入ります。それに、いくら料理の事考えても、先生の疑問にはたどりつかへんと思いますよ」

呆れ顔のコトハに、トルベンは困ったように腕を組んだ。

ジョージ・グレン誕生の経緯は、未だに謎のままである。もしそれが、無数の試行錯誤によって行われていたのなら、一体いくつの卵子と何人の代理母を必要としたのか。そんな多数の人体実験を、完璧に隠蔽など出来るわけもない。彼を作り出した科学者は、ジョージ・グレンを「狙って」作り出したのだ。

現在のように膨大な基礎データのない時代にそれを行ったのである。つまり、データから帰納的に有用な遺伝子を導き出し操作したのではなく、何らかの理論から演繹的に

有用な遺伝子を導き出す方法を確立していたのだ。

その理論こそ、遺伝子工学における最終理論、彼の求める神の設計図なのではないだろうか。

現在ザフトに所属していなくとも、少しでもザフトにいた事があれば予備役としてデータベースに登録される。だから、オイレン・クーエンスの事を調べるのは難しい事ではなかった。

輝かしいとは言いがたい彼の経歴、だからこそ大戦中の彼の活躍はひときわ眩しく見える。ただ淡々と数字が並ぶだけの画面に、あの凄絶なMSの動きが見えるようだった。シビル・ストーンは、そつと画面を切り替え席を立つ。予備役情報など、アクセス記録が残ったところで怪しまれるものではない。

同じ制服を着た人が無数に行きかうカーペンタリアの基地施設。配属先は、以前の上司だったサイモン・メイフィールドの艦であった。宇宙艦の専門家を潜水艦乗りにしてある事を見ても、カーペンタリアの台所事情が知れる。

「だから、降りて来られた・・・」

シビルは人知れずつぶやく。歩調は緩める事無く、周囲をゆっくりと見回した。根拠

無き確信を持って、オイレン・クーエンスの姿を探す。

謎の巨大MSと戦っていたジンは間違いない。彼が地球に降下した以上、カーペンタリアにやってくるはずだ。ならば、もう一度会えるはず。彼女の視線は、人の波をかき分けていく。だから、偶然ではなく見つけることが出来た。

居住区画にある地元資本の食料品店。インスタント食品が無造作に入れられた籠を持って、彼は棚の間を歩いている。その冷たく厳しい表情を、見間違えるわけがない。

シビルはオイレンの姿を遠くから見つめる。彼を見つけた高揚感と同時に、容易に人を近づけさせない彼の暗い雰囲気にしたじろいでいた。息を飲む音が聞こえるほどに緊張している。

磨かれた床に靴底が擦れて音が鳴る。オイレンの視線が彼女を捉えた。彼がゆっくりと近づいてくる。

「……………わざわざ、追ってきたのか？」

「あ、あの……………」

「残念だが、今は追われる身じゃなくなってるんでな」

そう言って、オイレンはシビルの横を通り抜けた。彼女は掠れる声で彼を呼び止める。射る様な瞳で見据えられ、シビルは体がこわばるのを感じた。それでも、震える声で自分の名前を彼に伝える。

オイレンは少しだけ表情を緩めた。そして何も言わずに、背を向ける。歩き去ろうとする彼をもう一度呼び止めようとしたシビルが声を出そうとした瞬間、オイレンが片手を上げる

「悪いな、どうせ忘れる」

彼はそう言つて彼女の名前を一度だけ口にした。そのままレジの方に消えていったオイレンの姿を、シビルはじつと目に焼き付けていた。

MAの運用試験だったはずが、いつの間にか本格的な戦闘を行なうようになっていた。ラビ・アルベール・コクトーが地球に戻ってきたという話は聞いたが、いつ合流するかは未定のままであった。カナン・エスペランザも、能天気を取りつてはいられなくなっている。今回の作戦の異様さは、彼でも分かる事だ。

地球連合とはいつても、この内実が一枚岩でない事は周知の事実である。だがそれでも、戦争とはプラントに対して行うものであり、連合加盟各国の間で行うものではない。今回の作戦の標的は、東アジア軍の艦隊である。

大西洋連邦海軍の特殊部隊を支援するため、ガラム・ガーは艦隊に対して陽動を仕掛ける。それ以上の作戦内容は伝えられない。

「まずは、生き残る事だな．．．．．」

シミュレーション用のヘルメットを外して、カナンはそうつぶやく。視点認識型マルチロツクシステムの仕上がりは上々であった。近接防御は、ほぼオートに近い感覚で動かせる。これで長距離攻撃に専念できそうだ。

問題は機体制御の面である。水筒に口をつけながら、隣の空席を見つめる。ミコトに何があつたのだろうか。オーブを出てから様子がおかしかった。彼らの乗機は複座式の機体である、パートナーとの連携は極めて重要だ。

古い付き合いであるし、遠慮などする必要のない仲だ。本人に直接問いただせば良い、少なくとも今までの彼ならそうするだろう。だが、今回は流石にそうもいかなかった。カナンはミコトの問いを反芻する。

「あんたは私の事を、女だと思っているのか男だと思っているのか」

彼は即答出来なかった。「ミコトの性別はミコトだ」などという冗談すら出てこなかった。それは真剣な迷いであるが、同時に禁忌を前にした戸惑いでもある。シャワールームの曇った鏡を拭う事無く、ミコトはそこを後にする。

曖昧さを具現化したような体、だからこそ彼女にとつて性は自ら決定できるものだった。カナンが男性として存在した時、ミコトは女性として存在する事を決めた。心に体を合わせる事を必要だとは思わないが、どのような体でも心は既に決まったのだと思っ

ていた。

だが自分の目の前に、曖昧さをそのままにした人間が現れた。それはどちらでもないという消極的な曖昧さではなく、どちらでもあるという積極的な曖昧さだった。それを目の当たりにした時、決まったと思っていたものが揺らいだのだ。

だから、もう一度決めようと思った。だから、カナンに問うたのだ。しかし、彼は答えなかった。だから、決まらないままなのだ。

「私は……」

ミコト・ムラサメである、それは何らの意味も持たない答えだ。更衣室の鏡は、シャワールームから流れてきた湯気で、曇っていた。

「俺は、あんたらの味方をするつもりはない」

「分かっています。ですが現時点では、多くの利害が一致するはず」

アルテシアの硬い声に、グエンは舌打ちをこらえる。美人だが、どうにも苦手な相手だった。ただ性格が悪いとか、慇懃無礼な能吏というわけではない。むしろ、そういった役回りを進んで引き受けようとしているかのような態度が、見えて痛々しいのだ。

グエンは彼女に向けていた視線を外して、向かいの席に座るクライアントを見る。

ルーファス・リシュレークは、努めて冷静な顔をしている。アルテシアが硬い声のまま、説明を続けた。

わざわざ指摘するような事ではないだろうが、アルテシアはルーファスとの関係に、一線を引きたがっている感じだ。時折、ルーファスが見せるアルテシアへの視線が、別の意味で痛々しい。

部屋の窓から見えるのは広いインド洋の水平線であつた。クリスマス島にある、ルーファスの別荘で、彼らはカフネの奪還作戦を練っている。

彼女を拉致したカナデ・アキシノのMSは、大西洋上で東アジア軍の艦隊に収容されていた。その艦隊は現在、紅海を抜けてインド洋に出たところである。ユーラシアからそれを追跡する部隊も確認されている中での奪還作戦である。

ザフトのシーレーンに沿うように航海している艦隊は、そこから外れるマラッカ海峡を通らず、スンダ海峡を使ってオーブ近海を通過して東アジア領海を目指すだろう。そのためクリスマス島で待ち伏せているのだ。

「利害は、いつまで一致する？」

「それは、双方が自由に判断すればよいでしょう」

「先に裏切った方の勝ちって事か」

そんな安い挑発に乗る相手ではないし、何よりグエン自身彼らの助けがなければ何も



出来ない。港には、とりあえずの母艦である大型のクルーザーが停泊している。もちろん、ルーファスの個人所有のものだ。

彼の情報によれば、ユーラシアの部隊が艦隊に対して攻撃を行う事は既に決まっているという。さらには、大西洋海軍の一部隊がインド洋に入ったという情報もあつた。カフネを狙うプレイヤーの数は、多いとの事だつた。

だからこそ付け入る隙があるとルーファスは言う。カフネの技術は、エネルギー不足に悩まされる市民のために使われるべきであつて、軍が爆弾やエンジンを作るために使われるべきではない。そのためにも、自分達が彼女を保護しなくてはならないのだと。カフネの技術か、そうつぶやいてグエンは立ち上がる。作戦開始まで、南の島でバカンスとしやれ込める気分ではなかつた。それは、カフネを助け出し彼女を連れて行くべき事だろう。

友人の恋の兆しをからかう暇すらない、戦争とはおそらくそういうものなのだろう。だつたらせめて、機体に慣れる時間くらいは欲しいものだつた。新人にとつて、機体の乗り換えは簡単なものではない。スクランブルで何度か乗つたというだけで、テルシエ・ミンターはバビに乗せられていた。ゲイツとグウルの組み合わせの方が可変機よ

りも楽なのだ、軍は個人的な事情には構ってくれない。「筋はいい、冷静でいればちゃんと出来る」

通信モニターに映ったウォーレン・パーシバルがそう言ってくれる。隊長の言葉は頼もしかったが、その隊長も今回の作戦には疑念を持っていた。作戦目標はウエリントン、大洋州の研究施設だという。資源衛星に対する攻撃といい、プラントの友好国であるはずの大洋州が何を画策しているのだろうか。

末端の兵士であれば、そんな事はいちいち考える必要の無い事だ。ましてや新人は、無事に作戦を終えて基地に戻る事だけを考えればいい。テルシエは頭を切り替える。モニターにタイマーが映り、カウントダウンが始まる。

専用輸送機がハッチを開き、バビを係留していたアームが外される。空中に投下された機体は雲中に沈み、その雲を吹き飛ばすようにスラスターを開いた。六機のバビはそのまま雲を突き抜けて高度を下げていく。

「対空戦用意」

サイモン・メイフィールドの眉間の皺を見ながら、シビル・ストーンが復唱する。艦長の声は苦渋に満ちていた。友軍機への攻撃を命じなくてはならないのだ、楽な命令であるはずがない。

敵部隊の足を止め、推進剤とバッテリーを損耗させればとりあえず作戦は成功である

が、艦載機はデインが四機であるため、艦の対空火器と組み合わせなくては勝ち目はない。どの道、手加減など出来ないのだ。サイモンは、浮上する艦の動きを感じながら、息を吸い込んだ。

ウエリントンの研究施設で行われる研究の詳細は知らされている。もちろん、その学術的な意味など分かるはずもない。だがそれが、コーデイネーターの将来にとって欠くべからざるものだという説明には納得が出来た。種としての限界に、早くも直面しているコーデイネーターにとって、それを突破する技術は必要なものなのだ。

ザラ派のやり方は支持しにくいものもあるが、ナチュラルに溶け込んでいこうというクライン派の主張は、そのままコーデイネーターの否定に繋がる。第二世代という生まれながらのコーデイネーターにとって、それは容易に受け入れられる考え方ではないのだ。

「ミサイル発射後、敵機の回避行動にあわせてデインを打ち上げる！」

モニターには、バビの熱紋を追って飛んで行くミサイルの群れが映っている。それが薙ぎ払われる前にデインを発進させなくてはならない。先頭を飛行していた機体が、立ち止まるように変形したのが見えた。

ウインダムが体を傾けるようにして対空機関砲を回避する。飛行状態では、シールドに衝撃を受けるだけでもバランスを崩しかねない。敵機はそれを徹底していた。ピームライフルの登場によって、MSの火力は過剰とも言えるレベルになっており、宇宙であれ地球であれ、艦艇は受難の時代であった。

海面から水蒸気を発生させる特殊な装置や煙幕、そして空気の存在によって、宇宙ほど長距離からの攻撃を気にせず済むとはいえ、航空機に対して水上艦艇が有効な対処法を持ちえないというのは、旧世紀から分かっていた事である。

ウインダムを有効射程内に入れてしまった時点で、完全に後手に回っているのだ。

「やはり、戦闘機では……」

「言い訳で敵は落ちん」

ゲンヤ・タカツキは短く言った。自分の艦隊が連合で運用試験中の新型飛行MSを搭載出来ていない事も、ユーラシアがその新鋭機を投入してくる事も、全て分かっていた事だ。早期に敵を発見し、航続距離で勝るスカイグラスパーを使って速攻を仕掛ける。正攻法で押し切るつもりだったが、相手の方が上手だった。

それならそれで、凌ぐ方法はある。モニターでは刻々と変化する戦場の形が映し出されてきた。敵の動きは、最後の一步をどうしても踏み込めないといった雰囲気だ。艦隊の殲滅が目的ではなく、拿捕が目的なのだから当然であろう。

足さえ止まらなければ、振り切る事も可能であろう。威嚇するように立ち上がった水柱が崩れ、艦が揺れながら水を被る。ゲンヤは、スクリューを狙って艦尾に回り込もうとするMSを重点的に警戒させ、速度を緩めずに艦隊を前進させる。

「オールMSドクトリンの限界だな！」

ウインダムのコクピットの中で、カルロス・アストウリアスは苛立ちを押さえて言う。全ての兵器をMSで賄おうという考えは、国力のないプラントだからこそその発想だ。生産能力を単一兵器に集中するという考えは、短期決戦であれば間違いではないかもしれない。

だがそれを、連合が真似する必要などないのだ。MSという新兵器は確かに強力な兵器だが、地球という変化に富む環境では単一の兵器が対処できない部分も出てきている。現にウインダムによる対艦攻撃は、詰め切れないままだ。

水蒸気の多い海上ではビームの減衰がひどく、雷撃も急降下爆撃も出来ないMSでは、対空砲火に機体を晒しながらビームを近距離で撃つしか手がない。だが、戦闘機に比べてはるかに的の大きいMSは、対空砲も当たりやすかった。

「カサブランカ沖だって、殊勲賞はドン・エスカルゴだぜ！」

カルロスが苛立ちをこめてビームを放った。巡洋艦の砲塔が溶けて落ちるが、喫水より下に攻撃を当てて浸水させない事には艦の足は止まらない。肉薄しビームサーベル

を使おうにも、ターゲットがどの艦に乗っているのか予想がつかない。旗艦に乗っている確証がない以上、他の艦もおいそれとは壊せなかった。

信号弾を上げて味方の四機に体勢を整えさせる。敵艦隊の艦載機を引き付けていた五機がもう少しで合流するはずだ。

つい最近、これと同じ構図に遭遇した事がある。カーペンタリアと大洋州の間に、何らかの軍事的摩擦が生じているとの情報と、ブルーコスモスからプラントに流出したとされるコーディネーターに関する基礎研究データがウエリントンに持ち込まれるらしいという情報。この二つの情報を追うことが目的であり、戦闘は避けるべき事のはずだった。

「MSを使わせたという事は、これを想定していたという事でしょうか!」  
「もしくは、これを意図していたかだ!」

アルベールは火線を見切つて機体を捻るようにしてそれをかわす。上昇したメイファ機が撃ち下ろすビームが立て続けに水柱を立てた。後続の機体も戦闘態勢に入っている。バビの編隊からロケット弾が斉射された。

海上に浮かべられたコンテナのようなものから射出されたジンに誘導されるように、

アルベールの部隊はザフト同士で戦闘が行われている空域に乱入する形となった。デインの散弾銃を嫌うように、アルベールはレバーを引き上げた。同時に煙幕を張って、追撃を撒く。シールドを掲げて重斬刀の一撃を受け止め、機体の全スラストを吹かして姿勢を保つ。

「気に食わん！」

オイレンを苛立たせるのは、ウィザードと呼ばれる武装換装システムの試作型を背負ったジンのバランスの悪さだけではない。自分の仕事をこのように手段で達成させなくてはならないという事だ。

だがカーペンタリアの足を本当に止めるためには、連合を巻き込むしかないというの  
は理に適っている。例えこの場にいる六機のバビを全滅させたところで、次が来るだけだ。

「次が来ようが！」

バックパックにミサイルを食らって墜落していくバビを無視し、オイレンはライフルの狙いを定める。徹甲榴弾の直撃でシールドを吹き飛ばされたウインダムは、その爆発を突き破るように突っ込んできた。

ジンの眼前を掠めたビームサーベルがライフルを真つ二つにするのを見る。コクピットに生じる慣性重力を気合を押し返し、メイファは全身の力をこめてペダルを踏み

込んだ。横合いから割り込もうとするデインに投擲式装甲貫入弾を叩き込み、ジンに向けて再度ビームサーベルを伸ばす。

ジンが放ったグレネードがビームサーベルに触れて爆発し、メイファ機の突進が止められる。モニターのジンを睨みつけながら、落下するようにしてバビのビームを回避した。

「パーシバル隊長！ あのジンです!!」

「落ち着けミントー!!」

味方機が一機落とされている。その上、連合の部隊との交戦になってしまった。もはや作戦どころの話ではない。三機のウインダムをあしらうように飛びまわるあのジンが、この状況を作り出したというテルシエの指摘は正しいだろう。ならばどうするか。海中から撃ち上げられたミサイルをライフルで撃墜する。

味方のバビが胸部ビームを海面に向けて発射するが、このビームでは海の中までは届かない。いやバビのビームが届かないギリギリの深さから攻撃をしているのだ。うっすらと見えるボズゴロフ級の影に、ウォーレンは舌打ちをした。

「訳が分からん……いや、知らなかっただけか」

あまりにもタイミングの良い連合軍の乱入に、サイモンはシナリオの存在を勘ぐってしまう。ウインダムの動きを見れば、明確な作戦目的のある行動ではなく偶発戦闘への



対処という感じであるが、偶発戦闘を狙って引き起こしたのであればやはりそれはシナリオだ。

だが既に、二機の艦載機を失っている。シナリオとしては出来が悪すぎた。彼は艦の深度を再度チェックさせ、対空ミサイルの発射を指示する。シビルの声がそれを復唱した。

しかし彼女の視線はただ一点、紺碧の空を舞い狂う一機のジンにだけ向けられていた。

「今度は何事だ!？」

ビームサーベルを振り抜いたウインダムの中で、カルロスが大声を出した。東アジア艦隊襲撃中に予期せぬ奇襲を受けた直後、緊急の信号弾が陽動部隊のいる方角で観測されたのだ。

鮮やか過ぎる手際で味方の一機を屠った黒い機体が、海面を滑走するように飛んでいる。ノワールストライカー装備のダガー、所属不明機にしては高価すぎる機体だ。それ以上に、部下を落とした技術は並ではない。

二機に信号弾の確認、もう一機に自機の援護を命じるとカルロスはウインダムを突出

させる。あの黒いダガーは、東アジア艦隊の隠し玉かもしれない。そうでなくても、放置など出来る性能ではなかった。

リニアガンの巻き起こす突風が機体を揺らす、カルロスはペダルの踏み込みを緩めない。ビームライフルを構えたまま、真つ直ぐ急降下していく。

「!? 体当たりか!」

対艦刀を抜かせようとしたデイルクは、機体を後退させてウインダム突撃を回避する。あの速度でぶつかれば、対艦刀がシールドを割る前に機体を潰される。目の前を通り過ぎたウインダムはそのまま体を反転させて、逆噴射で速度を減しながらビームライフルを連射してくる。

ノワールストライカーのピストルはライフルと比べ威力が低く、減衰も激しい。滑空翼と一体化されたリニアガンでは、砲撃のたびに機動性が激減する。つくづく地上用の機体ではないと歯噛みしながら、牽制のワイヤーを援護射撃を行っていた機体に打ち込み、そのライフルを破壊する。

だがその牽制が余分だった。熱紋センサーが悲鳴を上げ、デイルクは反射的にレバーを引く。背部を守る形になったウイングユニットが激しく振動し、TPS装甲の起動を示す印が画面に映る。ロケット弾の直撃を辛うじて受け止めたダガーの背後から、ビームサーベルを構えるウインダムが突っ込む。

「速い!？」

「沈める!」

カルロスが必殺を念じて突き出すビームサーベルが、ダガーの頭部を掠める。同時に双方の機体が、頭部機関砲をばら撒いた。互いにカメラを守るように距離を取り合うが、ウィンダムの方が機体制御に優れていた。ダガーは、乱射されるビームライフルを回避するのが精一杯だ。

それでも落ちないダガーに、カルロスは舌を巻いた。ジブラルタルにも、ここまでのパイロットがいたかどうか。味方機がロケット弾を発射したタイミングに合わせて再度仕掛ける。

そのロケット弾がビームの渦に飲み込まれた。視線を向けると、緊急の信号弾がもう一度打ち上がったのが見える。しかし信号弾が無くとも、緊急事態だという事は分かった。

大型MAが派手な噴流炎とともに、こちらに向かってくるのが見えたのだ。

絡み合うウィンダムとバビをすり抜けるように、ジンが戦場を駆ける。機体性能で言えば一番低いはずの機体が、連合とザフトの新鋭機を翻弄している。それは、見とれる

に値する光景だ。だから、艦長の命令を復唱するのを忘れた。

「魚雷発射！」

その声にブリッジの緊張が増す。ソナーが捉えた音は、幾度か遭遇した事のある巨大な物体だ。それが海面に頭を出す前に打撃を与えておかなくてはならない。水の中での勝機はあるはずだ。

しかしその読みは、艦を震わせる衝撃と共に消えた。発射した四発の魚雷を示していた光点が消え、代わりにソナーが異常をきたすほどの衝撃波が感知されている。

「水中で撃ちやがった……」

巨大MSは水中でリニアガンを発射したのだ。弾丸ではなく発射の衝撃で魚雷を破壊した。裏を返せば、その衝撃に耐えうる機体の頑丈さを持っているということだろう。サイモンは信号弾を上げさせる。あんなものまで現れたのであれば、もはやまともな戦場は形成できない。

上がった信号弾はザフト共通のものであった。ウォーレンはその意味を読み取り、交戦中の部下に離脱を命じる。同時に、海中から無数のミサイルが撃ち上がってきた。そしてそのミサイルを露払いとするように、巨大なMSが浮上する。驚きと戦闘態勢が同時に取れたのは、ヤキン・ドゥーエの経験のお陰だろう。

ウォーレン機の胸部ビームが浮かび上がってきたMSを襲うが、光波防御帯がそれを

受け止める。ロケット弾と突撃銃を乱射しながら、変形させたバビを突っ込ませる。明らかに浮き足立った部下から目をそらさせなくてはならない。

「あれです、コクトー大尉！」

通じるかどうか分からない通信機に怒鳴って、メイファはウィンダムのスラストアームを吹かす。同じように突っ込むザフトの機体は、この際無視であった。巨大MSの腕の動きに神経を集中し、機体を回転させながらビームライフルを連射する。

ザフトにとつても連合にとつても敵とは、どのような存在なのか。それはコレを撃破した後を考えればいい話である。五条のビームが機体の下部を通り過ぎ、装甲の一部に熱による損傷が出たとモニターに標示される。

見切ったはずの攻撃でダメージを受け、メイファは歯噛みした。だが機体の速度を緩める事はしない。バビのビームを受け止めようと光波防御帯が一方方向に展開される。その隙を狙おうと制動をかけた瞬間、直横から突っ込んできたアルベール機に機体を弾き飛ばされる。

どうしてと問おうとするより早く、巨大MSから拡散式のビームが発射された。アルベールは、ジンが重斬刀を振りかぶって急降下していくのを見る。

「頭悪いだろ!! お前！」

PS装甲に重斬刀は効かない。ノーリッチはそう咆えて、頭部機関砲でジンを狙う。

艦艇の近接防御用機関砲のような音を立てて放たれるそれは、MSの装甲を砕くには十分すぎる威力だ。だから、砕けなかつた敵の存在に彼は苛立つ。ジンの動きには余裕すら見えた。

上空を旋回していた数機のバビに腹いせのビームを浴びせて、ノーリツチはエンジン出力を一段階上げる。両手を左右に伸ばすと、360度全方向を薙ぎ払うようにビームを放つ。

「何なのよ、アレ……」

自分の後ろを飛んでいたはずの味方機が消えている事に、テルシエはようやく気付いた。デインの姿はいつの間にか見えなくなっており、ウインダムもその数が減っている。

ウインダムと戦闘機が交戦している事を確認して、ミコトとカナンはガラム・ガーを東アジア艦隊の方向へと向けた。ユーラシアの部隊が東アジア艦隊の艦載機を引き付けているのならば、自分達は艦隊の目を引き付けるべきだという判断だ。

しかし、ウインダムが艦載機を無視して自分達を追ってくるとは予想外だった。上面のPS装甲で海色迷彩を作り出し、海面ストレスを飛んでいたのだが、あっさりバレた

ようだ。

「やっぱり、デカいつてのは不利だよな」

上空のウインダムを牽制しながらカナンが言う。だが、口調ほど落ち着いているわけではない。ガルム・ガーの頭上を押さえ込むように、五機のウインダムが連携しながら攻撃してくるのだ。

その上、増援に二機が現れた。ミコトが短く声を掛け、ペダルを踏み込む。ガクツと加速が強まり、体全体がシートに沈み込むように力を受ける。前方で交戦中の機体にビームを放ち、全速力で航行中の艦艇の目前にリニアガンを撃ち込んだ。

崩れた水柱の向こうに見えた黒い機体は、見覚えのあるものだ。ユーラシアのMS隊を牽制しながら東アジア艦隊の足止めを行う今回の作戦、聞いた以上にハードなものなりそうだ。

「あの黒いのは、ユーラシアでもないみたいね」

互いに牽制しあうノワールダガーとウインダムの動きに、ミコトはレバーを握る力を強める。ガルム・ガーの両腕が火を吹き、回避行動に移る二機にロケット弾が撃ち出される。

対艦刀でロケット弾を切り払いながら、デイルクはモニターに視線を走らせた。あのウインダムだけでも厄介だというのに、さらにあの海老モドキの登場だ。これでは東ア

ジア艦隊のみを利用する展開だろう。

リニアガンの射線から自機を外し、艦隊から放たれたロケット弾をかわす。デイルクが探するのは、あのウインダムだ。

「黒いダガーもザリガニも聞いてない話だ……こつからは、我々独自の判断で動かさせてもらう」

カルロスはそう言つて東アジア艦隊への攻撃を中止する。代わつて、乱入してきた二機のアンノウンに対する攻撃を決定した。八機のウインダムを二機一組として、二組ずつをそれぞれのアンノウンに対処させる。

その上で、彼はノワールダガーに単機で突つ込んだ。五機のウインダムが、ノワールダガーへと殺到する。

「洒落にならん！」

意志の疎通が取れているように連携の取れたウインダムの動き、それらを操るようにながら果敢に突撃を繰り返す隊長機らしき機体。個々の技量ならば、隊長機以外に見るべき物はない。だが小隊単位での戦闘で、これほどの動きを見せられる部隊は、ほんどないだろう。

ノワールストライカーの瞬発性を持つてしても、容易に敵機に肉薄できない。ビームサーベル同士の接触が周囲をストロボのように照らし、デイルクはそれに隠れて距離を



取る。アウトレンジは不得手な機体だが、このままではなぶり殺しにされかねない。

それと同じ感想をミコトとカナンは持っていた。二機一組で二組四機のウインダムは、援護射撃と肉薄攻撃を繰り返しながら、ガラム・ガーを追う。細かな制動が不得意だという事は、見た目からバレているのだろう。加速して振り切ろうというこちらの意図を見透かされるように、前方の海面にグレネードを投げ込まれる。

水柱にそのまま突っ込み、前方を薙ぎ払うようにビームを撃つ。ダガーを攻撃してはたはずのウインダムが単機で突進してくると、機体をロールさせて腹部に回り込もうとした。

「狙えるのか!？」

シールドに激しい衝撃を受けて、カルロスは必死で機体の姿勢を立て直させる。近接防御の機関砲は予想していたが、弾幕を張る程度だと甘く見ていた。両腕でビームとリニアガンを乱射しながらも、懐に潜り込んだ機体には正確な射撃を浴びせる。たいしたパイロットだと感心した。

大きく息を吸い込んでペダルを踏み直す。味方機に肉薄し対艦刀での攻撃を行って、いるノワールダガーを狙撃し、味方のフォーメーションを立て直させる。すれ違いざまのビームサーベルは回避されるが、味方はノワールダガーを追い込むようにビームを降らせる。

そのまま押し込もうとしたカルロス機の目の前に水柱が上がる。横合いから突っ込んできたガラム・ガーが、腕の爪を展開してウインダムを掴みにかかる。

「乱戦にするしかないだろ!!」

爪の一撃をかわされたカナンは、そう怒鳴ってレールガンを連射する。ガラム・ガーの耐久性はMSを大きく上回っているのだ。ノワールダガーとの共同戦線は不可能だろうが、ウインダムの部隊を攪乱させるためには、できるだけ近くで交戦した方が良い。カナンの目が一番遠くのウインダムを捉える。近くの敵は、視線を一瞬だけ送れば後は自動でやってくれる。

ガラム・ガーのビームが一機のウインダムを飲み込んだ。一瞬だけ生じたそのほころびに、ノワールダガーが飛び込む。放たれたロケット弾をビームピストルで撃ち落とし、その爆煙で機体を隠す。

その場で反転したノワールダガーが、対艦刀を振りかぶる。落下速度を加えて振り下ろされた一撃は、いとも簡単にウインダムのシールドを両断する。

「!? シールドだけだと!」

そう叫んでレバーを思い切り引いたデイルクは、シールドを投げ付けたであろうウインダムを睨む。戦場をかき乱すように撃ち込まれるビームとリニアガンの嵐をすり抜け、ノワールダガーとウインダムは再び真正面からぶつかり合った。

猛威を振るうブレイカーのビームで、モニターがカラフルな色に染まる。ノーリッチはそれを上機嫌で見っていた。今日はすこぶる調子が良い。体の中にわだかまるような不快感も無く、思う存分ビームが撃てる。ワイドレンジのビームで散り散りになる敵の姿に、ノーリッチは無邪気に笑う。

「お前ら…….……こんなもんじゃないんだろ?」

時折海の中から現れるミサイルや爆雷がうつとおしいが、それらの爆発の中で平然と立っていられるブレイカーの姿を想像するだけで楽しい。海面を滑るように移動しながら、頭上を飛び交うMSを追い回す。

逃げる機体を背後から狙う方が面白いが、あいにくと突っ込んでくる機体の方が多かった。指から放たれる十条のビームを掻い潜るようにして、数機の機体が攻撃を仕掛けてくる。

「どうするのよ…….……あんなの」

実測すれば四十メートル強といったところだろう。通常のMSのサイズの倍といったところだ。だがこうして見ると、もっと巨大に見える。上空を旋回するバビのкокピットの中で、テルシエは声の震えを抑えられないでいた。

ウォーレンのバビがガンランチャーを構え、ロケット弾と機関砲弾をばら撒く。それを意に介さないように突っ込んでいくブレイカーは腕のリニアガンを放ち、衝撃波だけでバビの機体が揺れる。背後から斬りかかるジンの攻撃をブレイカーは装甲で受け止め、逆にジンを掴もうと手を伸ばす。

その瞬間を狙うようにメインカメラに向けて発砲された突撃銃を、ブレイカーは手の中で受け止める。ウインダムは、光波防御帯で弾かれた。

「……………強くなってる」

最後のロケット弾を目くらましに使ってしまった、メイファは舌打ちしながら機体に制動をかける。前回の交戦時より、敵の動きは精度を増している。指から伸ばした五本のビームサーベルでアルベール機の斬撃を受け止めたのは、余裕の現れであろう。ブレイカーのバックバックから撃ち出されたミサイルを切り捨てながら、メイファはそれでも機体を突っ込ませる。

ビームサーベルで弾かれたアルベール機と入れ替わるように、メイファ機が斬りかかる。受け止められると同時にビームライフルを構えるが、胸部の砲口が光り機体を急上昇させざるを得ない。

足元をビームの渦が通り過ぎ、息をつく暇もなく十条のビームが襲ってくる。敵の攻撃が逸れたのは、他の機体が攻撃してくれたからに過ぎない。アルベールはブレイカー

の足元の海面にビームを撃ち込んで、その姿勢を崩させた。だが、直接的な打撃を与えられなくては、状況は動かない。

バビの胸部ビームでも攻撃が通らないのであれば、真正面から通常の方法をとつても無駄だという事だ。ジンの重斬刀が再び装甲に弾かれる。

状況は不明ながら、有利に運んでいるだろうことは間違いない。艦隊を攻撃していたユーラシアの部隊は、標的を所属不明機に向けたようだ。所属不明機も狙いはカフネ・イーガンだろうが、ユーラシア部隊との交戦で手一杯だろう。このまま艦隊を突つ切らせれば、MSの行動可能範囲を抜ける。

「空母を沈めるのはつまらんがな．．．」

報告を受けたゲンヤ・タカツキは、そうつぶやいて指示を出す。彼の乗る巡洋艦の後方を航行していた空母が、各部で爆発を起こす。自沈であった。足の止まった空母は、あつという間にその身を海の中に隠していく。

もぬけの殻になった空母に乗り込んだ、敵の特殊部隊はどのような気分であろうか。小型の潜水艇か水中用MSを利用しては、脱出は出来るかもしれない。

単独でMSやMAを投入してきた勢力は、ユーラシアのようにMS隊によつて艦を拿

捕するつもりはないはずだ。艦に対する攻撃の少なさから、カフネ・イーガン殺害を目的としているわけでもない。ならば機動兵器を陽動として、カフネ本人を強奪する部隊を送り込む可能性が高い。

黒い所属不明機の乱入の時点でそれを考え、空母の乗組員には緊急の脱出を命じた。艦載機は赤道連合の基地に緊急着陸させてもらえばいい。空母が狙われるとの読みは、一種の勘だ。

「脱出の容易さを考えれば、航空機を搭載している艦に重要人物がいると考えるのは自然だ」

カメラから回されてくる映像を見ながら、グエン・ヴィレンは言った。空母の自沈で、カフネがいるだろう艦は絞り込めた。可変型とはいえ、MSを載せられる艦はあと一隻だ。

久しぶりのパイロットスーツの感触を確かめながら、グエンがレバーを握り直す。個人所有の大型クルーザーの船底に設置されているのは、水中用ダガーと、その運搬用のユニット。スパーキヤビテーション魚雷と同様、超高速で水中を進める代物だ。

艦隊上空の戦闘はユーラシアの部隊が有利に進めているようだが、簡単に決着がつきそうではない。その際に艦に接近し乗り込む。コクピットの後部補助座席には、アルテシアが座っていた。ルーファスには何度も、それでいいのかと確認しておいたのだが、

結局こうなった。

「向こうは軍人だぞ」

「なら、私はコーディネーターです」

そう言われれば、反論のしようもない。グエンはクルーザーの運転席と通信をつなげ、出発を告げた。機体を固定しているアームが外れ、推進ユニット唸りを上げる。全面を泡でコーティングされたそれは、ロケットモーターに点火されると同時に一気に速度を上げた。

頭の上では、終わったはずの戦争をやっているというのに、元軍人の自分は一人の子供を取り戻そうとしている。なんと、胸躍る展開ではないか。

「何故退かん、ミンターー！」

撤退の信号弾は上げておいた。それでも戦場を離脱していないバビがいるのだ。上空を旋回しているが、あの巨大MSがいつ上空に目を向けるかなど分かったものではない。ガンランチャアの残弾数も心もとなく、ビームも使いすぎている。もはやヒヨツ子を守る余裕などないのだ。

それは、巨大MSの周りを飛びまわる他のMSも同じ事だろう。どんな動力源を使っ

ているのか知らないが、あれだけのビームとバリアと装甲を遠慮無しに使う化け物に対して、自分の身を守るので精一杯だった。

再度の信号弾を上がるが、テルシエはひたすらに戦場を俯瞰し続ける。あれだけ大雑把なMSだ、綻びはどこかに見えるはずだ。海の中に揺らめく影は潜水艦の姿だろう。かなりの位置まで浮上している。

「ぎ、残弾ですか……?」

サイモンの質問にシビルはとっさの返答が出来ない。砲手や雷撃手から次々と報告が上がリ、彼女はそれを足し算して艦長に伝える。サイモンの眉間の皺が消えた。

「出し惜しみしても無駄だな」

残りの全弾を一度に使用する事を決定する。艦を浮上させるのは、一部砲弾が深い深度では使用できない物だからだ。後はどのタイミングで使うかだった。せめて、何らかの効果くらいは生み出したい。

ブレイカーのビームが海面をかすめ、海が一気に泡立つ。水蒸気が立ちこめ、ビームの減衰率が増大した瞬間を狙って、艦を一気に浮上させた。全ての発射管が開放され、艦に残った全てのミサイルや爆雷が撃ち出される。直後に艦を潜行させるが、ブレイカーのリアガンが、推進部の一部に損傷を与えた。

撃ち出したミサイルがどのような効果を生み出したかを確認する間もなく、ダメージ



コントロールに追われる。

「諦めろよ！ いい加減!!」

流石に苛立ってきたノーリッチがそう叫ぶ。海中から発射されたミサイルと爆雷の群れをワイドレンジのビームでまとめて消し飛ばす。爆炎が周囲を一気に明るくし、直後に黒い煙がブレイカーを包み込んだ。

煙しか映さないモニターを見つめながら、ノーリッチは薄ら笑いを浮かべる。この煙の向こう側で、自分の隙を窺い飛び出すチャンスを狙っている敵がいる。それをどのように消し飛ばそうか、そう考えて視線を巡らせた。

だが、煙が晴れるより早く機体に衝撃が走った。ピンホールのような煙の隙間から、ビームを差し込んだ敵がいるのだ。

「ヒットした!?!」

その場の全員が同じ声を上げただろう。上空を旋回していたバビから放たれたビームが、煙の中のブレイカーに命中したのだ。千載一遇のチャンスと、アルベールは機体を突っ込ませる。

煙を吹き飛ばすように放たれるリニアガンをかわし、牽制のビームライフルを連射して機体を肉薄させる。周囲の機体も一斉に攻撃を開始し、ブレイカーの注意が僅かに散漫になった。アルベール機がビームサーベルを振りかぶる。サーベル同士が交錯し、激

しくスパークした。

「当たれ!!」

ウインダムが左手に持つのは装甲貫入弾。手首をスナップさせるような動作で、それが放たれた。PS装甲には無意味だが、装甲は一体形成されているところばかりではない。ブレイカーの肘関節、稼動域を作るための装甲の継ぎ目、そこに太いナイフのような形をした弾丸が突き刺さる。

小さな爆発が、その太い腕を脱落させた。ビームの嵐に穴が開き、ウオーレンのバビがその穴に突進する。アルベール機を振り払ったブレイカーは、残った腕からサーベルを発振して突っ込んで来たバビに振り下ろす。変形による急制動でそれを回避し、ウオーレンは口の端をゆがめる。

ブレイカーに再び衝撃が走った。背後のウインダムがビームを撃ち、バックパックが大きく損傷している。メイファは小さく舌打ちをするが、バックパックの傷に向けてビームサーベルを振り下ろす。

「あのザフト、私の動きを見て……」

その事が癪に障るが、この際はラッキーだ。バックパックをパージしたブレイカーは明らかに動揺の見える動きをしている。大型ビームの斉射も苦し紛れだ。だが、不時着水を覚悟しても、押し込めるかどうかは微妙だった。

アルベール機は信号弾を上げている。先ほどのバビも距離を取ろうという動きだ。腕とバックパックを失って火力と機動性が一気に低下したブレイカーであれば、撤退も可能だという判断だろう。メイファもそれに従うしかない。

「雑魚は逃げてろよ!!」

開きっぱなしの無線機が拾ったのは、高笑いのような声。ウインダム横の横をジンが通り過ぎる。今度こそ沈める、オイレン・クーエンスはその一念を研ぎ澄まして機体を突進させる。

「お前、ホントはビビってんだろー!」

ノーリッチは突っ込んでくるジンにそう叫んだ。展開した光波防御帯の向こう側で、ジンの脚が砕けたのが見える。だが同時に、防御帯も消えた。脚部で発振機を踏み潰したジンは、スラスターを全開にして重斬刀を突き出す。

首の関節部に捻じ込まれたそれはそのまま頭部を切り落とし、むき出しになった機械に突撃銃が叩き込まれる。

勝利を確信したオイレンは、次の挙動が遅れた。ブレイカーの腕がジンの体を掴み、そのまま海面に叩き付けたのだ。各部から煙を吹き出しながら、ブレイカーは海面を滑るように撤退していく。

戦闘は、もう長くは続かない。どの機体も、バッテリーと推進剤が心もとなくなっているはずだ。東アジア艦隊の追撃も不可能な状況であり、あとはいかにこの場を上手く撤退できるかである。

「やられっぱなしで逃げんのかよー！」

カナンの怒鳴り声と共にリニアガンが撃ち出される。もはや、自分の攻撃が当たらないという事に慣れてしまっている。一旦散り散りになったウインダムは、再びフォーメーションを組み直してガラム・ガーへと対峙する。

両腕の爪を振りかざし、ガラム・ガーはスラストを全開にする。周囲のウインダムの攻撃は弾くに任せ、ターゲットを絞って突進した。誘い込むような敵の動きに、カナンは視線を周囲に走らせる。死角に回り込もうとする機体を見つけた。

「まずった！ 速いぞ!!」

気付くのが遅く、近接防御も遅れた。だが、ミコトがとっさの制動を掛けるのと同時に、敵機が爆発する衝撃を感じた。全く別方向からの攻撃。その攻撃方向をいち早く見つけたのも、ミコトであった。

ガラム・ガーが機体を傾けて急上昇していく。カナンのターゲットスコープは、オーブのMS・ムラサメの姿を捉えていた。しかし、何故オーブがここにいるのかより、あ

の機体に向けてガラム・ガーを突っ込ませるミコトの方が疑問であった。

それでもカナンはビームとりニアガンを放っていく。彼女が敵と認識しているのだ、味方であるはずがない。

「落とせないとはな!!」

新兵を連れてきたのではない。ユーラシアでもトップクラスと自負するパイロット達だ。それを飛行可能な新型MSに載せた上でこの結果である。カルロスは声を荒げずにいられなかった。

ノワールダガーと切り結びながら、大型MAが上昇していく様子を視界に捉える。その先には、さらに別のMSの姿があった。いよいよ、作戦概要だけでなくその詳細な内容まで聞かなくてはならなくなったようだ。自分達が追わされている者が一体何なのか、それが部下の死に値するものなのかどうか。

ノワールダガーが左手で対艦刀を抜く。右手ではビームサーベルを構えたまま突っ込んできた。カルロスも負けじとペダルを踏み込む。

互いに突き出したビームサーベルが触れ合い、激しくスパークする。ウインダムは腕のアクチュエーターを軋ませながらサーベルの斥力をねじ伏せて、敵を押し切ろうとする。ノワールダガーが対艦刀を振り上げた。

「なんのおー!」

ウインダムが手にするのはステイレット。そのナイフのような装甲貫入部を使って、対艦刀を受け止める。同時に弾頭を爆発させ、左腕と引き換えに対艦刀を吹き飛ばし、敵の姿勢を崩させた。

敵がリニアガンを向けるより早くその胴体を蹴り飛ばし、残ったステイレットを連続で投げる。ビームライフルもロケット弾も使い尽くしているのだ。ステイレットがビームサーベルで切り払われるたびに、煙が両機の間立ち込めていく。

それを合図とするように、ウインダムは戦域を離脱した。

「ミコト、終わりだ!!」

執拗にムラサメを追うミコトに、カナンが強くそう言った。自分が止める側に回るなど、いつもならありえない事だ。肩で息をするようなミコトの様子に、カナンはいつもの軽口を口にしない事にした。

悠々といった感じで飛び去っていくムラサメを睨みながら、ミコトはそれに乗っているユイ・タカクラの影を見る。ウインダム部隊の撤退をカナンに知らされ、ミコトはようやくガルム・ガーを後退させる。

「誰か……拾ってくれるのか……」

海面に浮かぶ救命ボートの上で、疲れ果てた体を横たえたデイルクがつぶやく。機体は海中に没し、自分自身も極度の疲労の中にある。死なずに済んだ事を感謝する余裕も

なく、彼は泥のように眠る。

目が覚めるがどうかなど、今はどうでも良いはずだった。それなのに、誰かの顔が頭の片隅をよぎった。

MSで取り付いたのだ、極秘潜入などであるはずがない。甲板に突入パイルを突き刺しての強引な潜入だ。それでも、出合い頭に二、三人を殴り飛ばすだけで艦内に入り込む事ができた。緊急事態を知らせるサイレンが鳴り響いているが、思った以上に人影が少ない。僅か二人の侵入だとは、相手にも予想外の事なのだろう。上空でMS戦が行われている中、単機で艦に取り付きパイロット自ら艦内に潜入を試みるなど、通常の発想では出てこないものだ。

アルテシアはポケコンを叩いて艦内の構造図を呼び出す。東アジア軍の公式資料を基にしたものだが、居住区など機密とは無関係な部分は、十分な情報があった。

グエンは別のルートを使うと言い残して既に姿を消している。緊密な協力関係にあるとは言いがたいが、やはり心細いものはある。ハイキックを叩き込んだクルーを近くの部屋に押し込み、彼女は通路を進んでいく。

「大丈夫よ、あなたの無事は私が保証するわ」

ブリッジから連絡を受け、カナデはそうカフネに言う。しかしその半分は自分に言い聞かせたものだ。艦内に侵入者があり、万が一に備えてMSで退避する準備をしると言

われているのだ。

侵入者を撃退するまでの間だというのが、先ほどまで交戦していた敵部隊が引き返してこない保証はどこにもない。自分の腕と心神の性能では、何の対処も出来ないだろう。不安を押し込めるように、腰のホルスターを確かめた。

この艦にきて以来、すっかり無口になってしまったカフネの手を取り、サイレンが鳴り続ける通路に足を踏み出す。扉の両脇にいた兵士が、二人を前後から守るように付いた。艦の揺れは収まっており、攻撃による撃沈の可能性はなくなっているようだ。前を歩いていた兵士が止まるように合図をする。

曲がり角を確認し、安全だという合図を出した兵士が倒れた。後ろにいた兵士が駆け出し、曲がり角の向こうからは激しい銃声が聞こえてきた。その音が止むと、兵士が吹き飛ばされてくる。同時に現れたのは、長い脚。兵士の顎を下から捉えたアルテシアは、そのまま飛び出して拳銃を構える。

カナデも銃を抜いていた。

「……………ずいぶんと美人な誘拐犯ね」

「その言葉、そっくり返すわ。カフネちゃん、離れたらダメよ」

「イーガンさん、FUJIYAMA社は軍需企業です。あなたの技術は、兵器転用されるべきものではないわ」



「おたくの会社は、そうではないとでも言うつもりなの？ プラントに人を送り込んでまで、彼女を拉致しようとしていたのでしょうか」

「人聞きの悪い事は言わないで欲しいわね。法人同士の対等な契約を締結するつもりだったわ」

女性の冷たい言葉の応酬は、心を締め付けるように響く。カフネはただ全身を固くし、事の成り行きに身を任せるために目をつぶるしかなかった。

「誘拐犯同士でカツコつけてんじゃねえよ」

その声に、カフネは目を見開いた。知っている、待ち望んだ声だ。二人の女性がその声の主を探している中、彼女の視線は一点に注がれていた。天井の空調用メッシュが床に落ち、埃にまみれたグエン・ヴィレンが上から落ちてくる。

「悪いな、フェミニニストじゃなくて」

鳩尾に拳を当てられて気を失ったカナデを通路に横たえ、グエンはカフネを抱き止める。涙も出ないほど感動している彼女を抱え上げると、彼は後ろを振り向かず走り出した。

アルテシアは、この場に置き去りにされまいと二人の後を追う。乗ってきたMSは既に敵に押さえられているだろう、二人は後部デッキにある連絡用の小型ヘリコプターで脱出する事にした。

警備員を張り倒し、整備員を蹴り飛ばし、行きがけの駄賃ついでに、心神のкокピット開閉用装置にありつただけの銃弾を叩き込んで、ハッチのオペレーターに「女房子供を悲しませたくはないだろう」と脅して、二人はカフネとともに艦を脱出した。合流ポイントには、ルーファスがクルーザーを回している。

「収支はマイナスだな．．．」

ユーラシアはウインダムの部隊を半数失い、大西洋は特殊部隊に損害を出した。東アジアとしても空母くらい失っておかねば、相手国のメンツが立たないと思ったのだが、無駄に配慮になってしまった。後は、報告書に何を書くかだ。

起こった事を正確に報告書に書けば、ハリウッドの娯楽映画の脚本になりそうである。ゲンヤは深く息をついた。

## 第七部

目覚めた時、真つ先に聞いたのは敵を撃破したかどうかだった。驚いた顔の女は、何も言わなかった。オイレン・クーエンスは体を起こそうとして、それを咎められる。横にいる女は白衣を着ていない。看護婦ではないのだろう。

「誰だ？ それにここは？」

「ウエリントンの病院です」

女はそう言つて、少し言いよんだ後に、覚えていないかと問うた。しばしの沈黙の後、女はシビル・ストーンと名乗った。オイレンは天井を見つめながら考える。

敵のタフさが想定外だったとは言え、二度も同じ相手にやられた。それは屈辱である以上に恐怖だ。敵に対する恐怖ではない、自分自身の足元に対する恐怖だ。MSのコクピットを追われる、それは彼自身の存在意義そのものを失わせる事だ。

彼を一度コクピットから追いやったものは、停戦だ平和だと浮かれるプラントのクーデター政府であり、それを支援したラクス・クラインを首班とするテロリスト集団だった。それでも、ザフトを出してしまえばMSパイロットとして生きていく場所はいくらでもあった。パイロットである限り、彼には生きていく意味がある。

しかし、敵を撃墜できなくなれば、もはやパイロットとしての意味はない。パイロットとしての死を宣告されるという事は、オイレン・クーエンスという人間に死を宣告するのと同じ事なのだ。

無能力者を必要としないプラントという世界で、彼が生きていくための能力はMSに乗る事だけだった。自らに向けられる哀れみと冷笑をねじ伏せるには、全ての能力を凌駕しうるたった一つの能力が必要なのだ。そしてそれは、自らの手で証明しなくてはならない。全ての他者に自らの存在を認めさせるためには、全てを自己の力で示さなくてはならないのだ。

差し出される手を押さえつけ、彼は体を起こした。ようやく、横にいる女の事を思い出す。その曖昧な笑顔に、昔の自分を見る気分だった。

「待って、今お医者さんを……」

やっと掛けた声を無視され、シビルは取り残されたように病室に留まる。音を立てて閉まったドアの向こうに視線を向けながら、彼女は湧き上がる羨望の念を抑える事をしなかつた。

あの化け物のようなMSに敢然と立ち向かった彼の機体。ザフトと連合の並み居る機体の中で、彼の機体は英雄しく舞っていた。その圧倒的な姿は、彼女の心を捉えて離さない。自分自身に決定的に欠けている物、それを眩しいほどに感じていた。

それは、彼のようにありたいという憧れではない、ただ純粹な羨望。その眩しさに浴していたいという願望だ。シビルは、オイレンの後を追おうと病室のドアを開けた。

出合い頭のコトハ・キラサギが、大仰な仕草でドアから体を離れた。

「お医者さん、呼びましたけど……」

「すぐ連れてきます！」

駆けて行ったシビルを、コトハが呆れた顔で見送る。妙なところで縁の深い相手だが、印象のいい相手ではなかった。人の事を言えた話ではないかもしれないが、どうも危機感のようなものを感じない女性だった。

今の不可解極まりない状況を考えれば、ああやって男の後を追いかける余裕があるのだろうか。浮世離れの典型例のようなトルベンでさえ、研究よりもスタッフの安全を図るためにはどうすればいいのかを考えているというのに。

「男の趣味も……いまいちやしね」

それ以上は野暮なので考えない事にするが、アカデミーの先輩がこんな話をしていた。白馬の王子に惚れるのではなく、惚れた相手が白馬の王子なのだ。常々、理想の男性像を長々と語っていたその先輩がどうなったのか、さいわいコトハは知らなかった。

要請通りに補充の部隊が来るかどうかは分からない。何より、失った部下に替えなどない。修理中のウインダムを見下ろしながら、カルロス・アストウリアスは時計を確認する。通信でたつぷりと脅しておいたら、マドリードから司令官が直々にやって来ることになったのだ。

今後の事を含め、全ては話を聞いてからだ。会議室で最敬礼をして司令官を迎える。

「やられたようだな、ずいぶんと」

「お言葉を返すようですが」

事前に情勢を把握できなかったマドリードの諜報能力の敗北が原因だと、カルロスは言った。黒いダガーに、大西洋らしきMA、そしてオーブのMS。どれも、あの場に現れるとは聞いていなかった。

司令官は顔をしかめる事なく席に着く。そして長くなるぞと前置きをした。ウインダムが直るまで二日もあると返す。司令官は唇を湿らせるように、カップに口を付けゆっくりと話し出した。

「話は大戰終結直後に端を発する・・・」

ブルーコスモスの内部抗争によって、幹部の一人が殺害された。その内部抗争の原因は、アズラエルの遺産と呼ばれる二つのデータであった。一つはNJCに関するデー

タ、もう一つはコーデイネーター技術に関するデータである。

だがその被害された幹部は既にデータを流出させており、ブルーコスモスだけでなく連合とザフトの各諜報機関もそのデータの回収に躍起になった。

「我々が追っていたカフネ・イーガンという技術者はそれに関わりが？」

カルロスの言葉に、司令官は急ぐと言う。

データのうちの一つ、N J Cに関するものは思いがけない場所で見つかった。正確に言えば、既に見つかつた後であった。パリの参謀本部に近い人物がそのデータを入手していたのだ。経緯は不明ながら、モスクワ系ブルーコスモスの関与が疑われている。

さらにN J Cを応用した新型エンジンとその試験用機体が極秘開発され、ブルーコスモスの実働部隊がその試験を行っているという。司令官が視線を向け、カルロスはその機体の事を思い浮かべた。

「各国ともその事は知っている。連合内の不和を晒さぬように表面は取り繕っているが……」

そしてその新型エンジンが不完全だという事も、周知の事実であった。核エンジンを完成させるために、プラントの技術者が必要だつたのだ。それがカフネ・イーガンである。彼女やその両親に接触しようとしたのは、連合各国だけでなく民間企業も含まれていた。

しかしプラントでの接触は結局失敗し、イーガン夫妻は殺害されカフネ本人は一時行方不明となった。その上、各国ともプラント当局による口封じの可能性を考慮し、カフネ搜索のための大きな動きは取れなかった。

「それがどういうわけか、東アジアの艦隊に拾われていた……あとは、君も知っている話になる」

中央アジアでの拉致未遂に、インド洋での拿捕作戦失敗。カフネの身柄は二転三転しているようだが、カルロスはその後を追わされていたようだ。彼は考えをまとめた上で、問いかけた。ユーラシアとしては、何を考えているのかと。

「モスクワと手を組んでまで、パリは核エンジンの開発を進めようとしている。マドリードとしては、ジブラルタルとの緊張関係は望んでいない」

やはりユーラシアとして統一的な考えがあるわけではなかった。ようやく締結されたユニウス条約に抵触する可能性のある兵器開発によってプラントとの緊張が強まれば、イベリア半島は再び最前線となる。ピレネー山脈に防衛ラインを引くパリと前線に立たされるマドリードでは、違う考え方を持つのが自然の成り行きだ。

「だからこそ、君を動かした。三度目のレコンキスタは、避けるべき事だ」

一体化の進んだユーラシア軍の中で、マドリードの司令部が動かせる数少ない戦力がカルロスの所属する教導隊である。彼は一つの疑問を口にした。



「パリが関わっているにしては、ユーラシア軍本体の動きが見えませんが」  
「コネだけで軍を動かせる時代は終わっているよ」

あくまでも参謀本部に近い人物がやっている事であるとしか言わないが、それが誰を示しているのかは分かる。だが、あの化け物MSの事を考えれば、流星は女ナポレオンだと思った。

東アジア軍もカフネ・イーガンをロストし、その後の行方が分からないという情報のため、カルロスは巨大MSが確認されたという海域に向かう事になった。

とりたてて深い仲でも長い付き合いでもない。だが自分が離れていた間に、何事かがあったと分かるくらいに、二人の雰囲気は変わっていた。まだ難しい年頃の男女である、喧嘩でもしたのだろうか、気楽に構えてはられない感じだ。二人の間にあるのは、深遠な問題であった。

ラビ・アルベール・コクトーは、言葉を促すように沈黙を保つ。カナン・エスペランザの視線は一定せず、言葉を探すように動き回っている。

「だって……あいつは、女じゃなくて……その……」

「質問が悪かったな。君は、女性に恋した事があるか？」

「それは、まあ………色々と」

「なら、男性には？」

「はあ？」

「………人間には？」

問いかけの意味に気付いたのだろう、カナンは視線を落とした。アルベールは再び沈黙する。

曲がりなりにも神学に携わるものである、同性愛が教義上認められないものである事は理解も納得もしている。だが従軍牧師として戦場に身を投じた時、その教義の無力さを知った。

戦場という極限の中、人が求めるのは愛であり絆だ。信仰よりも先に死のある戦場で、人は神よりも先に愛を求めた。そこでは、性という矮小なカテゴリーは意味を成さない。人はただ人を愛するだけであり、神はただその愛を祝福するだけなのだ。だからアルベールは問うた。

愛を向けるのは、女へなのか、人へなのかと。

あとは、カナン自身が自分で納得できる答えを見つけただけである。アルベールはそつと席を外した。おそらく、ミコト・ムラサメの方がより深刻な悩みを抱えているだろう。言い方は悪いが、カナンはその巻き添えを食ったのだ。

おそらく、インターセクシャルである彼女は、ジェンダーアイデンティティの岐路に立たされているのだ。本来なら専門家の手を借りて、きちんと対処しなくてはならない問題であろうが、状況はそれを許してくれないだろう。

アルベールは、ガラム・ガーの背中で日課としている武術の形を演じているミコトの姿を見つけた。

『ほら、同じでしょ』

耳の奥にこびりついた声を振り払うように拳を突き出す。オーブで接触したユイ・タカクラの体は、ミコトの心を揺るがすものであった。保養施設などに誘ったのは、自分の事を知っていたからなのだろうか。

『あなたとなら……大丈夫だわ』

更衣室の片隅で見せられた体。ユイの、男女の両面を誇示するような姿に、ミコトは戸惑った。それ以上に、その視線に恐怖していた。好意の視線や、好奇の視線とは全く違う、自分の両面の性を同時に性の対象として見る視線は、彼女の体を今でも這いずり回っているようだ。

『男でも、女でも、結局ダメなの……私が愛せるのは、そのどちらも選ばないまま、どちらも手に入れてしまった、あなたのような人』

その場から逃げ出すしかなかったミコトは、それ以上の言葉を聞いていない。だが聞

こえてしまった声は、未だに消えずに残っている。

その誘惑に、彼女は恐怖した。

もはや先送りは出来ない。どちらかを選ばねばならないのだ。だから、カナンに選んでもらおうとした。

その身勝手さを打ち砕こうと、彼女の拳は宙を穿つ。

スクランブルの回数に変化はない。カーペンタリアも、表向きは平静を保っている。だがプラント内部にあるらしい対立、大洋州の動向、連合の動きなど、注視しなければならないものは多かった。地球におけるザフトの最大拠点と言えども、本国から遠く隔たった場所に孤立する基地に過ぎない。異常事態には自ら対処しなければならぬのだ。

あの巨大MSがカーペンタリアにとって脅威となるのか否か。あれが連合軍の運用するものであれば間違いなく脅威である。だが、ウインダムとの交戦も行っていた以上、簡単な結論は出せない。レポートの文面を練りながら、ウォーレン・パーシバルは天井を見つめる。

「そもそも、同じザフトに攻撃された事を追及すべきなのだろうか……」

それに関しては、高濃度のNJによつて敵味方識別信号の間違いが生じたという理由で、不問とされていた。ヤキン・ドゥーエですら、そんな事はなかったというのだ。

現場の人間であれば、目の前の新兵器を脅威に感じると思つたら大間違いである。一番恐ろしいのは、背後から撃たれる事だ。クーデター政権には、一生理解の出来ない感覚であろう。

ともかくレポートをでつち上げ、そのついでに自分を出撃のしやすい立場に変えてもらうようお願いする事にした。この不透明な情勢下で、新兵をむやみに出すわけにはいかない。経験者や年長者には、そういう責任があるのだ。

社会に出たばかりの人間を、無駄に消耗させる必要はない。ウォーレンは、娑婆つきの抜けない部下の事を思った。

「風邪？　大変なの、仕事？」

くしゃみをした鼻の頭を擦りながら、テルシエ・ミンターは違うと言う。傍らにいるユウキ・ナリが心配そうな表情を浮かべていた。テルシエは話題を変えられまいと、さらに追求した。

「それに……髪、伸ばし始めたでしょ」

「!？」

ちよつと見ない間に、ユウキの服のセンスが変わつた事を指摘していた。Tシャツに

シヨートパンツで、無防備というか無造作に肌を晒していた彼女が、それを止めていたのだ。リップクリームも、色付きのものを目立たない程度に塗っている。

その他諸々、気付いた事を挙げていった。日焼け顔が赤くなつていくのが分かる。ちなみに、日焼け止めクリームもSPFとPAが最大値のものを使い始めていた。

普段の強気の言動とは裏腹に、こういう追求に対してとても素直な反応を示してしまふのが、ユウキのいいところだ。押していた自転車のまたがり走り出そうとするユウキを追つて、自転車の後部に飛び乗った。

「ふ、二人乗りは禁止なんだぞ！」

「いつもしてるじゃん」

「あれは基地内だから。町ではダメなの！」

「そんな事より、聞かせなさいよ。何があつた？」

「じ、自分はどうかんだよ！」

「うーん、ユウキのとはチョット違うけど、尊敬できる上官ならいるわ」

急ブレーキに、思わずつんのめる。気を付けろと言おうとしたテルシエは、ユウキの表情に口をつぐむ。代わりに、その視線の先を見た。

基地の居住地に食料品などを卸している地元会社。そこの営業マンらしき男性が、正面の玄関から出てきた。年の頃は三十前後といった感じだろうか、意外と年上の男性

だ。これ以上何か言うと、本気で怒られそうなので、テルシエは黙ってユウキの女の子の顔を見つめる事にした。

「構わないのですか？」

「甘いかな、俺は……」

沈黙を否定に代えて、アルテシア・ローレンツはティーカップを下げる。ルーファス・リシュレークは椅子を回した。別荘から見えるインド洋も見納めだ、しばらくは仕事の日々となるだろう。

アルテシアを呼び寄せ、抱き寄せる。しばらくは彼女とも会えなくなるだろう。カフネ・イーガンとのコンタクトを彼女に一任しているのだ。秘書業を離れ、そちらに専念してもらおう事になっている。全幅の信頼を寄せられる相手を、彼は他に知らない。

顔を近づけると彼女は身を離す。そのいじらしさに、激しく抱き締めたい衝動を覚えるが、そつと栗色の髪に触れる事でそれを我慢する。

コーディネーターを快く思わないリシュレーク家で、コーディネーターの彼女がどのような立場にあるのか。ましてルーファスが妾の子として苦勞してきた事も知っている彼女だ。一線を引くのは当然かもしれない。

しかしそれは、自分の至らなきでもある。外野の口を封じられるだけの実績と力を示せていないという事だ。N J C を利用した新型発電施設、それこそが彼が示す実績となるはずだ。

その鍵となるカフネ・イーガンは今、グエン・ヴィレンとともに行動している。手荒な真似も出来ないわけではなかった。だが、グエンの敵父のごとき迫力の前に、彼女を無理やりブリュッセルに連れて行こうという考えは消えてしまった。

グエンの有無を言わさぬ雰囲気を思い出し、ルーファスは笑った。アルテシアの不思議そうな表情に、彼はつぶやくように言う。

「ファザコンっていうのかな……. . . . . こういうのは」

そのグエンはカフネを連れて家に向かっていた。空港に降り立った時間が深夜であつたため、近くで一晩泊まる事にする。ホテルのフロントで、しつこく親子かと聞かれたのは、その手の商売が横行しているという事だろう。復興も未だ道半ばといつたところであつた。

好きな方を使えと言われ、カフネは二つ並んだベッドの一方にちよこんと座つた。窓の外からは街の喧騒が漏れ聞こえてくる。

ピンと張られたシーツを何となしに撫でながら、今日は眠れるだろうかと思う。少なくとも今までは、ここより良いベッドの上でもちゃんと眠れていないような気がした。



色々な事がありすて、頭の中が今もグルグルと回っている。横になっても、それが治まることはない。

自分が何をすべきが、どう振舞うべきか、それ以前に何をしたいのかしたくないのか、それすら分からなかった。シャワールームのドアが開き、グエンが髪を拭きながら出てくる。カフネは視線を上げずに聞いた。

「これから……どこに行くんですか？」

「とりあえず、俺の家だ。身の振り方は、それからゆつくり考えればいい」

「でも、また……」

「ゆつくりって言ったろ。今は何も考えずに寝ればいい。目覚めた時には、今までの事の半分くらいが夢になってしまいうくらいにぐっすり」と

部屋の冷蔵庫からサイダーを取り出したグエンが、それをカフネに渡す。大きな体で遠慮がちにカフネの隣に座ったグエンは、そつと彼女の髪を撫でた。無骨な手だが、とても繊細な触り方。

グエンは財布に手を伸ばし、中から写真を取り出す。かなり色あせているが、それは家族の写真だった。一番上の子は、カフネと同じ年になると言う。その幸せそうな写真を持つカフネの手は震えていた。

涙が、溢れてきた。気付いた時には、もう止めようがなかった。体を折り曲げ、むせ

び泣いた。グエンの手は、ただずつと優しく髪を撫で続けている。

少し残酷な事をした、彼はそう思う。だが彼女は、これまでずつと全てを押し込めてきたのだ。気が狂ってしまわないように、無意識に感情を遮断してきたのだ。泣き方すら忘れてしまうほどに、彼女は耐え続けてきた。そんな過酷な境遇を与えてきた者に来る事は、せめてそれを思い出させることだけだった。

泣き疲れ眠ってしまったカフネの髪を、グエンはそつと撫で続けた。

地球の大半を占めるのが大洋である以上、兵器の運用もそれを考慮したものでなくてはならない。オーブ解放作戦で連合は、MSを強襲揚陸艦を使って作戦へ投入していた。MSの発進に時間がかかるという欠点はその頃から指摘されていた事である。そのため現在、各国がこぞつてMSの運用が可能な艦船の建造に取り組んでいる。

オーブのタケミカズチはその一つの回答であり、MS運用艦は空母型が主流となると考えられていた。ウインダムが発進シークエンスが進んでいく。

「ユーラシアは陸軍国家だなんて、言い訳にやならんな」

南太平洋へと派遣されたカルロス・アストウリアス率いるMS隊を載せているのは、タンカー型と呼ばれるMS運用艦である。MSを垂直に射出できるデッキを備えた艦

艇であり、ザフトのボズゴロフ級の運用形態を模倣したものであった。

空母型に比べてMS発進速度は速いが、着艦が異常に難しいためとてもではないが採用できないと言われている代物だった。君達になら使えるだろうかなどと言ってくれる上官には、心底腹が立つ。

謎の巨大MSが確認されたという情報のある海域に近づいたとき、アンノウンの接近が探知された。一応は公海上となつているはずだが、大洋州と大西洋が揉めている海域にも近い。ただちにウインダムが発進が命じられ、カルロスはコクピットの中で、隊員に信号弾の確認を行わせる。

本命の巨大MSではないだろうが、戦闘が避けられる状況でもなさそうだ。ブリッジからの合図と共に、押さえつけられるような加速度を感じる。MSデツキを映していたモニターが一瞬で、空と海の青へと変わった。

後方のモニターで六機のウインダムを確認すると、カルロスはペダルを踏む。

「連合……5、いや7か」

オイレン・クーエンスの口が歪む。シグーの方が試作型ウィザードシステムとの相性も良いようだ。あとはビームライフルの出来次第だろう。敵編隊の先頭がライフルを構えたのを見た。オイレンは機体を僅かに揺する。

頭上を流れたビームの光跡を視界の端に感じながら、オイレンはシグーのスラストー

を全開にした。ビームライフルはまだ構えない。二射、三射とビームが飛来するが、どれも射線を外している。牽制のロケット弾を無視し、シグーはなおも速度を緩めずに突進する。

ようやく敵編隊が散開したが、明らかにタイミングが遅く、しかも散開の速度が速い。視界全体を使って敵機の位置を補足するが、各個撃破を狙うには間合いが悪すぎる。軽く制動をかけて直上の敵にビームライフルを浴びせ、ロケット弾をシールドの機関砲で薙ぎ払って距離を取り直す。

「こいつもスペシャルかよー」

カルロスが舌打ち混じりに言う。あのまま取り囲んで一気に片を付けるつもりが、距離を取られた。戦争が終わった後だけあって、どこもエースパイロットしか残っていないようだ。

部下に二機一組のフォーメーションを徹底させ、自分は単機で突出する。コーディネーターのエースパイロットを前にした時、機体の数の差がどれほど有効か。個々のMS戦闘において、物量は意外なほど差を生まないものだ。だからこそ、自ら突っ込む。

部下の援護射撃が敵の動きを拘束する。カルロス機の左手がビームサーベルを握った。ギリギリまで挙動を隠すようにしてシールドの影から振り抜いたサーベルは、敵機の眼前を通り過ぎた。

「遠い!？」

「避けたんだよ!」

まずは一機、オイレンがそう思った瞬間シグーはシールドを構えなおす。敵は、味方が接近している状態で、狙撃めいた援護射撃をしてきた。パイロットの腕が射撃管制システムの精度かは知らないが、厄介な敵だ。すかさず第二撃を放とうとしたウインダムを蹴り飛ばし、シグーを上昇させる。

一機で突っ込んできたウインダムは、いわば囧だ。後ろから追いつがろうとするその機体を機関砲で牽制し、援護射撃に回っている機体を狙った。

「チヨロチヨロと!!」

オイレンは声を荒げる。六機のウインダムは、距離を詰めさせない。二機一組のウインダムは、シグーの動きを制限するための牽制射撃と機体を直接狙う攻撃に役割を分担し、さらにそれが三組同時に襲ってくる。そして残った一機が、執拗に肉薄攻撃を仕掛けてくるのだ。

ボアズやヤキン・ドゥーエの時のように、ただ寄り集まってビームを撃つだけではなかった。おそらく一対一なら、余裕で全滅させられる。敵編隊を乱して各個撃破すれば、そうなたはずだ。だが今は一対七である。

「沈め!」

カルロスのビームライフルは回避され、味方の攻撃は海面に着弾し水柱を上げた。シグーの姿が飛沫の中に一瞬消える。カルロスは慌てて無線に向けて怒鳴るが、同時に爆発音が一つ聞こえた。

ペアの機体を失った者を、ビームライフルの有効射程ギリギリまで下げさせる。味方の動揺を逃すまいとしているシグーに、あるだけのロケット弾を発射し、その乱舞と共に機体をつつ込ませる。

機関砲の衝撃をシールドで耐え、ロケット弾の爆炎を突つ切つてビームサーベルを振る。手ごたえがあるとは思っていない。ビームライフルを乱射してシグーの動きを止めようとするが、信じられない機動でそれをかわされた。

そればかりか、味方機の攻撃も同じようにかわしていく。ウインダムの射撃プログラムを讀まれたのだ。カルロス機はスラスターを吹かすが、さらにもう一機のウインダムがロストした。信号弾を打ち上げてフォーメーションを変える。

「無駄無駄！」

オイレンは叫ぶ。所詮はナチュラル、自分に敵うわけがない。敵の攻撃の精度が落ちたと感じるが、その理由までは分からないし分かる必要もない。自分が強く、敵が弱いのであれば、それは当然の事だ。敵が編隊の組み方を変えるが、小手先をどう弄ろうと、差を埋める事など出来ない。

肉薄攻撃を仕掛けてくる機体が信号弾を打ち上げていた。おそらく隊長なのである、ならば次はそれを落とす。四機のウインダムが降りに注ぐが、全く当たる気がしなかった。

ビームの雨の中、機体を躍らせるようにシグーが突っ込む。

カルロス機もそれに応じた。コクピットの中で、カルロスは怖気づきそうな脚を突っ張ってペダルを踏み込む。機体を犠牲に機関砲の残弾をゼロにしてくれた部下のためにも、ここは退けない。

シグーの手が閃く。振り払われる重斬刀はコクピットを狙う軌道。ウインダムが僅かに動いた。ウインダムの両腿が引き千切られるように切断される。

「三つ目……!?!」

オイレンは上部モニターを通り過ぎるウインダムの体を見た。まだ、死んでいないと示すようにその手がビームサーベルを伸ばした。反射的に体が動いたが、バックパックの右翼が脱落している事をモニターが示している。

落下するウインダムを睨みつけながら、オイレンはシグーを後退させる。だが不時着水は免れないであろう。モニターのアクリル板を思い切り殴りつける。

縁ではなく必然だ。連合内でもあの巨大MSの事は極秘事項であり、それに関わる人間の数は極力少くしたいと考えている。ならば、それとの接触経験のある者が集められるのは当然の事であつた。

連合の総意ではなくあのような物が運用されている。どの陣営としても看過できるものではない。理想としてはそれを鹵獲し自陣営による運用を行う事であろうが、既にザフトもかのMSの存在を知っている。余計な火種を抱え込む前に、火は消してしまつた方がいい。

「ああ、妻には迷惑の掛け通しだよ」

ゲンヤ・タカツキの自嘲がブリツジに響く。東アジア軍は、巨大MS追討を彼に命じたのだ。インド洋での奇妙な逃走作戦から戻り、数日と経たっていない。妻に留守を労うと同時に、次の留守を頼まなくてはならないのだ。物分りのいい妻は、こういう時こそ始末が悪い。

不平の一言でも言ってくれば多少は心が軽くなるが、それなしに送り出されると言うのはどうにも居心地が悪い。文句言われなだけでマシですよと言うクルーもいるため、どちらにしろ良い事態ではないのだが。

だからこそ死ぬわけにはいかない、せつかく戦争が終わつたのに、これ以上家族に迷惑を掛けられるわけがない。標的となる巨大MSへの対策を検討し続ける。



「敵はビーム、及び実体弾の双方を無効化する障壁を、機体各部から発生させています」  
映像資料を示しながら、メイファ・リンは巨大MSについてのレクチャーを続ける。  
二度の交戦経験を持つ彼女の証言は非常に貴重であった。

だが、それに対して有効な攻撃手段が存在するのかという問題となると、彼女の経験では存在しないと言うしかない。彼女の腕を上回る技量を持ったパイロットを十人以上集めた上で検討すれば、何か案があるかもしれない。だがMS運用能力の低い東アジアで、無い物ねだりをしてても無駄だ。

対艦戦、対潜水艦戦のノウハウも、巨大とはいえ機動兵器に対して有効とは言いがたい。ただ敵の母艦であろう潜水艦を発見しそれを撃沈した上でなら、あるいは何らかの対処方法が見えてくるかもしれない。

「派手に戦闘を行っている海域での潜水艦索敵ですか……」

機関を停止し潜行する潜水艦を見つけるのは至難の業であろう。ため息のような沈黙の中で、他に方法はあるまいとゲンヤが重々しく言った。その上で、敵出現地点から少しでも離れた場所を交戦地点とするようメイファに言う。

作戦には大西洋の部隊も参加する事になっているが、連携その他が上手くいく保証はない。困難この上ない作戦を命じられたと言う感想しか出てこなかった。

だがメイファは、大西洋の部隊に見知った名前があるのを見て安心していた。

クライアントが直接人間を送り込んできたのは、研究についての依頼を受けた時だけであり、それ以降はデータのやり取りか短い音声通信のみであった。自分の研究が周囲にどのような期待と不安を抱かせ、社会に影響を与えるのか。興味は無くとも知っていないことは仕事にならない、メンデルで学んだ最大の教訓がそれであった。

遺伝子という化学物質が神となったコズミック・イラでは、それを研究する者は司祭である。そして科学者が仕える神が善き神か悪しき神かは、人が決めるのだ。学生時代そんな事を言つて、分子生物学から文化人類学に鞍替えした友人がいた。彼が言つていたのは、まさにこういう事なのだろう。トルベン・タイナートはそんな事を思い出す。

ならば、遺伝子の中に神の意志を読み取ろうとしている自分は、さしずめ神の言葉を聞く預言者だろうか、それとも悪魔の代弁者なのだろうか。

「大丈夫です。これは人の世の問題ですの」

クライアントから送られてきた女性は涼しい顔でデータを差し出した。取り急ぎ調べて欲しい事があると、契約書を差し出す。トルベンはデータの入ったチップを手に取り、女性を見る。美しく、人当たりの良さそうな顔をしているが、どこことなく毒々しさの感じられる人だった。

自分の研究が怪しげな人間を惹きつけて止まない事には閉口するが、そういった連中と上手く付き合っていないかなくては研究資金が手に入らないのだ。レシピと呼ばれる情報を彼にもたらしその研究を依頼した相手である、普通の組織ではあるまい。

気に食わないのは、彼らが研究を実利をもたらしものとしてしか見ていない事であろう。手渡されたチップの中身を読み出し、依頼内容を見ればそれは一目瞭然だ。

あるMSのスペックとそれによって生じる慣性重力の予測値、及び火器管制に必要とされる情報処理能力の最低値と機体制御に関わる身体の反応速度の要求値が、様々な側面から示されていた。依頼は、そのMSの性能を發揮するためにどの程度の力が必要とされ、それを後天的な能力向上処置によって獲得できるかどうかという事であった。

「後天的、とは？」

「ありとあらゆる手段です。ただし……そうですね、一年以上もの訓練を行う時間は無いと言っておきましょうか」

トルベンは出かかった言葉を飲み込む。

おそらくこの依頼は、既に結論付けられているのだ。ただ単にプレゼンテーションの上で科学者のお墨付きが欲しいだけなのだろう。少なくとも目の前の女性は、このデータにあるMSの性能を「普通の人間」では引き出せない事が分かっている。

専門外だと突き返す事も出来るが、とりあえず締め切りを聞いておいた。ユイ・タカ

クラと名乗った女性は、次の定期連絡の時に正式な締め切りを教えると言つて、トルベンがサインした契約書を持つて部屋を出て行く。

「設計図、か」

コンピュータの画面を消して、トルベンは椅子の背に体重を乗せる。ジョージ・グレンを作った科学者は、何を基準にして彼を作ったのだろうか。彼がブロンドで碧眼で白い肌をしていたのは、作った人間が白人だったからだ。そんな事を、コトハ・キサラギは言つていた。

普通のレシピなど存在せず、食べる人の好みに合わせて塩加減を変えるのが料理だと言ふ。ジョージ・グレンのレシピもそれと同じだと。そこには高邁な理想も、神の語る真理も無く、作った人間の細かな趣味が入っているに過ぎない。ジョージ・グレンを作ったのがヨーロッパ人なら、彼にアメリカンフットボールの才能など与えなかつたであらう。

彼女の言つた事は、地球では珍しい主張ではない。だがそれ故に、覆しにくい説得力を持つてゐる。しかし、とトルベンは思う。

どれほど塩加減を変えようと、ザワークラフトをレバーケーゼに出来ないように、作つた人間の狭小な価値観がいかに入り込もうとも、変わる事のない普遍的な部分があるのではないだろうか、と。

クライアントの求める人間が、このMSの操縦の出来る人間であったとしても、トルベンが求めるものは、そんな実用性の根底にある神の作り給うた普遍の設計図である。

「何故だ！ 準備は十分に整っているだろう！」

「十分？ この爆薬の事か？」

机の置かれているのはフィルム型爆薬を服の形に形成した、着る爆弾。新型のポデイスキャナーに対しても強い秘匿性を持ち、また爆発力も現在主流のプラスチック爆弾と同程度という物であった。

これを装着した自爆要員をカーペンタリア基地の居住区画に潜入させ、自爆テロを敢行しようというのだ。基地内のシフトは大まかに掴めており、夜勤人員と日勤人員が交代する時間帯に攻撃を仕掛ければ、多くの戦果を見込めるとしていた。

それを鼻先で笑うように否定したのが、デイルク・フランツ・ツエルニーである。ブルーコスモスは過激化すると同時に、知的レベルが低下していると付け加えた。部屋にいる人間の半分は激昂するが、もう半分は苦い沈黙を強いられている。

彼はブルーコスモスが最近設立した戦闘部隊ファントムペインのメンバーであり、その戦果は文句のつけようの無いレベルであったからだ。ここでカーペンタリア基地の

情報収集作業を指揮しているのも彼であり、その権限で本部から降りてきた無謀な作戦を拒否しようとしている。

親プラントの大洋州におけるブルーコスモスは、当局による摘発が厳しいからこそ過激路線をさらに強化していた。そのあおりで、この自爆作戦も計画されたのだ。本部からやって来た人間を一瞥したデイルクは、ザフトに気取られないうちに戻れとだけ言った。

「たいした物言いだ、裏切りのコーデイナー……いや4321977」

沈黙させられていた男の一人がそう口にする。その声は挑発の色を隠そうとしていなかった。デイルクの出自に関わるこの言葉を知っているという事は、そこそこの高級幹部なのだろう。だからこそ彼は笑う。トップのレベルはそのまま組織のレベルに他ならない。

「ブルーコスモスの価値は、コーデイナーを宇宙に還した数で決まる」

「ならば貴様も……!」  
「殺せるのか?」

何気なく発した一言だけで相手を圧倒する。デイルクの沈黙はそのまま場を支配した。ブルーコスモスの内部抗争時、強化兵士で編成された部隊を全滅させたという噂に根拠の無い信憑性を感じさせる。彼は着る爆弾を片付けさせ、車を用意するように命じ

た。

丁寧な言葉で本部から来た人間達を部屋から退出させる。どいつもこいつも、自分でこの服を着る気のない人間ばかりだ。廊下で待っていた護衛の者達とスローガンを唱和する姿は、滑稽極まりなかった。

「青き清浄なる……君の場合は、乙女のために、かな」

最後に部屋を出ようとした男がそう言った。次の瞬間、その男の頭は弾け飛んでいく。テイルクが手にする50口径の大型拳銃は、銃口から煙を立ち上らせていた。

残った者は驚愕の声すら上げられず、何も見なかったようにただその場を立ち去るしかなかった。

甘い蜜に誘われる蝶か、それとも腐肉にたかる蠅か。それが、連日の来客にアリシア・ルイズ・ド・ヴァロアが抱く感慨であった。目の前の女性を蠅に例えるのは失礼かもしれない、だが彼女も同じ目的でここにやってきている。ニュートロンジャマーキャンセラー、戦後世界の趨勢を左右するこの技術を、誰が何に使うのか。関心はその一点に集まっているのだ。

高速中性子制御技術をプラントに独占させない。それは連合にとって暗黙の了解と

なっていた。だが、連合加盟国のどの国がその技術を手にするのか、それに関しての合意など存在しない。

「エネルギー分野への関心は、ないという事ですか」

「あいにくと、私はビジネスに携わっておりませんので」

東アジアの一大企業グループであるFUJIYAMA社、その社員の肩書きで来ている女性だが、実質的には最高責任者であろう。さらに背後には東アジア共和国がいる。ヨーロッパとは異質だが、あの国もまた血縁による階級社会を持っている。カナデ・アキシノとは、そういう女性だ。

宗教的な違いなのかヨーロッパの上流層にはコーディネーターは少ないが、東アジアの上流層の子弟にはコーディネーターが多い。血統ではなく祭祀による繋がりを重視する思想や、実利を重んじる考えなどが根底にあるなどと言われているが、カナデもその例に漏れる事はなかった。

現に存在するコーディネーターへの人権侵害は論外だが、コーディネーターを作り出そうという考え方もまた論外だと、アリシアは思う。目の前にいる美しい女性にそれを言う事はしないが、その美しさに美しさを感じないのも事実だった。

「引退間際の窓際軍人です。今さらビジネスの世界に飛び込もうとは思わない」

「〆〆冗談を」



目まで笑ってみせるアリシアに、カナデは相手の手強さを感じる。今の連合各国は、どこもシビリアンコントロールが弱まり、前大戦を生き抜いた将校は大きな影響力を持つている。目の前の女性もその一人だ。

コネクションだけでユーラシア軍を動かすと言う噂がどこまで本当かは分からないが、パリの参謀本部で最も影響力を持つ人物である事に間違いはない。彼女がどこまでユーラシア連邦政府の意向を代弁しているのかは知らないが、その動向を無視する事などできない。

ましてやモスクワを拠点とするブルーコスモスの一派とともに、核エンジンを動力源とした新型機動兵器の実験を行っているのだ。危険と判断せざるを得ない。

少なくともアリシアは、ジブラルタルを含めたユーラシア周辺国に対する抑止力として、NJCの技術を使用しようとしている。そのためには技術の専有が必要であり、電力事業のような民生分野への技術移転は全く考えていないのだろう。むしろ、そのような動きは阻止に回っているはずだ。

MSの動力源であろうと、発電所の基幹部品であろうと、NJC技術が生み出す利益は莫大なものである。東アジアとしてもFUJIYAMA社としても、その権益に絡むチャンスは逃したくない。

だがこの手の軍人の場合、そういったビジネス面の話を極端に嫌う。ましてや、フラ

ンス国粹主義者を公言してはばからぬ人物である。国家安全保障に関する思想は極めて硬直的であろう。世間ではアリシアの事を女ナポレオンなどと揶揄しているが、彼女はむしろドゴールに近い。

「私も、核動力MSとの交戦経験がありました」

カナデの言葉にも、アリシアは表情を変えなかった。同じ連合をも標的として機体の実験を行う、それがブルーコスモスの本性だと言いたいのであろう。それくらいの事は、承知の上である。

だからこそ、あの歪んだ遺伝子主義者どもに首輪を掛け、その鎖を握っておかなくてはならないのだ。それを行い得るのは、自分において他にいないであろう。それがアリシアの結論であった。

地球連合に対して圧倒的に国力で劣るプラントが、曲がりなりにも停戦まで持ち込めたのは、連合軍が一枚岩でなかったからだ。宇宙でザフトと戦ったのは、実質的には大西洋宇宙軍のみである。アイリーン・カナバが、交渉を纏め上げられたのも、連合内の足並みの乱れを突いたからだ。

だからこそ、ザフトは一枚岩を保たなくてはならない。元の数が少ないのだ、一致団

結して敵に対処しなくてはすぐに潰され、飲み込まれる。それがだ、サイモン・メイフィールドは思わずつぶやく。

現状はそうなっていない。連合の足並みは相変わらずそろっていないが、ザフトも深刻な分裂を抱えている。問題はその分裂が、よく見えないという事だ。連合のように枠組みがはっきり見えているわけではない。

その分裂の余波を受けて彼は今ウエリントンにいる。何故、自分がここにいるのか、はつきり見えないもどかしさを抱えたまま、サイモンはせめて手掛かりでなくともそのきつかけくらいは手にしたいと考える。

「失礼、少しよろしいですか？」

「はい？」

ザフトの制服をきつちりと着込んだ男性が、丁寧な物腰で声をかけてきた。確か、自分達を運んできた潜水艦の艦長だ。コトハ・キサラギは、食堂でいつも甘いデザートを頼んでいるその男性の事をよく覚えていた。

しかし、声を掛けられる心当たりはない。当然、ナンパではないだろう。そうなるにあとは一つだ。サイモン・メイフィールドと名乗った男性の問い掛けは、予想通りのものだった。

「……すると、何の関係もない一般の方と言う事ですか？」

驚くのは当然だ、一番驚いているのはコトハ本人なのだから。といつても、いい加減この妙な立場にも慣れてきた。トルベンも気を遣っているのか、何かと声を掛けるなどしてくれる。もつとも、何だかよく分からない話題の事が多いが。

その彼は、ある種の変人であろうしその倫理観には時々疑問符を付けたくなる事があるが、いわゆるマッドサイエンティストというより、中間管理職的役割に頭を悩ませる中年といった感じであった。有名な人らしいが、近くで見れば近所で犬の散歩をしているような普通の男性である。

そこまで話したところで、サイモンの眉間の皺に気づく。どうも自分の人物評は一般受けしないらしいと、コトハは思う。サイモンが遠慮がちに口を開いた。

「あの博士の研究はプラント、いやコーディネーターにとって極めて重要なものだと聞かされています」

「少なくとも、コーディネーター個人にとっては、あんまり意味ないと思います」

生殖という高等生物にとつて最重要な機能に重大な欠陥を抱えたコーディネーターに、トルベンの研究の副産物が福音をもたらす可能性はある。だが、人間としてのコーディネーターが抱える根本問題は、そんなレベルではないはずだ。

神を除く何者の意図とも関係なく生まれるナチュラルに対して、コーディネーターは明確な意図の下に生まれてくる。まさにレシピに従って生まれるのだ。生まれる前か

ら意味を持たされた者が、自由な意志即ち自ら意味を作り出す精神を持つという矛盾。それがコーディネーター、少なくともコトハ・キサラギの根本問題である。

親の意図に基づいて生まれ育ち、年頃というか今の学校を出れば親の選んだ相手と結婚する。両親が愛と信じて疑わないその重さから、彼女自身も愛を感じずにいられないその重さから、いかに軽やかに生きられるのか。その答えは遺伝子の中にはないだろう。ましてやその意図に愛を信じられないコーディネーターは、どう生きていくのだろう。

コーディネーターとナチュラルの間にある不平等は、政治なり科学なりでは正すればいい。だがコーディネーターがその根底に抱える形而上学の問題は、そうはいかないはずだ。

彼女がそんな事まで話してしまったのは、相手がきちんと耳を傾けてくれているように見えたからだ。それだけで、サイモン・メイフィールドという軍人が自分と同じ普通の側にいる人間なのだと感じる。

「だから、うちは別に期待もしてませんし。第一あの先生、やっぱ変ですもん」

プラントとは違うイントネーションでそう言ったコトハを見ながら、サイモンは彼女も一般の人間ではないのだろうと思った。プラントのコーディネーターに、このような考えを持つ者は少ない。

しかしそれこそが、ザフト分裂の深層なのではないかとも思う。遺伝子に未来を願う者と、自由意志に未来を託す者の対立。それを、彼女のようになんと言葉できる者がいれば、ここまできな臭い事態にはならないのではないだろうか。彼はそんな事を思った。

いわゆるマッドサイエンティストというものは、科学の発展に貢献するような独創的な研究を行う者ではない。むしろ役所仕事のように、与えられた研究課題を的確にこなすだけの人間である。そういう意味では、ノーリッチ・シユナウザーの運用を行う者達はマッドサイエンティストであった。

ブルーコスモスとしての思想性もなく、ただ仕事として人体実験を繰り返しているだけである。故に自分達の立ち位置を客観視する事も出来ず、迫った危険性を察知する事も出来ない。

「相変わらず、エンジン出力の調整が出来んなあ」

「パイロットによる調整の数値化を地道に続けるしかないだろ」

潜水艦の中で、ブレイカーの巨体の最終調整が進んでいた。コクピットに当たる場所にカプセルのようなものが設置される。ノーリッチ・シユナウザーが入っているカプセ

ルなのか、それともカプセルそのものがノーリッチなのか、考える者はいない。

核エンジン試験用大型MSであるブレイカーは、その中枢たる核エンジンが不完全なのだ。それに関する技術者をプラントから招聘する事に失敗しているため、全く別のアプローチでのエンジン完成を目指している。ブレイカーによる戦闘は、そのために必要な事であった。

同時にプラントとの停戦を結んだ連合穏健派に対するブルーコスモスからの恫喝を含んでいるため、連合部隊への攻撃を行っているのだ。だが戦果は芳しいものとは言えなかった。機動性に劣る巨大MSが、通常のMSとの戦闘で優位に立つには、より火力を増やす事や、本体の機動性を補う特殊な武装が必要だろうという結論に達している。

それでも、大電力を生み出す核エンジンの必要性は減じる事がないので、ブレイカーの試験は続けられているのだ。今回の標的は、インド洋で行われる大西洋連邦と東アジア共和国の合同演習である。

「詮索は、終わってからの方がいい」

MS隊同士の合同ミーティングが終わった後、メイファ・リンはラビ・アルベール・コクトーに声をかけた。軍上層部はターゲットである巨大MSの動きを把握しているのだろうか。名目は演習だが、実際の作戦は巨大MSの撃破である。何の当てもなくインド洋に来たわけはなく、上層部には何らかの確証があるのだ。

考えれば考えるほど、自分の背後が見えなくなる雰囲気、メイファは寒気のようなものを覚える。だからアルベールに声をかけた。彼も同じ事を考えているのだろうか、対処の仕方は極めて大人の対応であった。

それが出来なければ戦場で散る、その事を弁えているのだ。メイファは気を取り直して、作戦への随伴を希望した。今回の作戦、主力となるのは大西洋の大型MAである。戦闘継続時間を除けば、巨大MSに対抗しうる火力と防御力を有するという判断であった。

MAの随伴はアルベールが務める事になっているが、メイファはそれに同行したいと言う。

「東アジアの許可があれば、こちらが断る話ではない」

彼女の戦闘スタイルを見れば、言った事を引つ込めるような事はしないだろう。アルベールの言葉にメイファは深く頭を下げた。

「神父さんの彼女かい？」

メイファの立ち去ったのを見届けると、物陰から現れたカナン・エスペランザがそんな事を聞く。ミコト・ムラサメの裏拳を見事に食らったカナンの姿に、アルベールは安心の笑顔を見せた。



停戦中とはいえ、プラントと連合の最前線基地であるカーペンタリアだ。テロや小競り合いがあつて当然であろう。スクランブルなど日常的な出来事だと思つておこなうてはならない。

だがモニターに映つた機体を見た時、ウォーレン・パーシバルは嫌な予感を覚えた。見覚えのある黒い機体は、謎の積荷を襲撃してきた機体だ。その強さは、後ろを飛ぶ二人の新人パイロットを守りながら戦えるレベルではない。

敵のリニアガンが向きを変えた。ウォーレンが信号弾を上げるより早く、後方の一機が動いてしまった。パニックが自信過剰か、どちらも戦場では致命傷になる。リニアガンの弾丸を回避したバビが変形して胸部ビームの発射体勢になった。

黒いダガーがその隙を見逃すはずもなく、ビームを発射し空中で棒立ちになったバビに、二振りの対艦刀が殺到する。ウォーレンは奥歯を噛み締めた。

だが対艦刀が捉えたのはバビの腕のみ。ダガーがウイングユニットを防御で使用したため、その突進が止まったのだ。

「モニターか!？」

上空でガンランチャーを構えていたバビが変形したのが見える。信号弾は見ていたはずなのに、やはり後退しなかつた。両腕を損傷したバビを後退させ、ウォーレン機は

黒いダガーに対峙する。上空のミンター機には、援護を任せた。説教は、彼女を生かして帰してからだ。

突っ込んでくるダガーに突撃銃を浴びせかけると、変形して背後を取りにかかる。大気圏内の機動性で負けるわけにはいかない。

「ちいっ！」

背後から放たれたロケット弾を、ダガーは対艦刀を両手に、機体を回転させるようにして切り払う。リニアガンで後方に牽制射を行い、グレネードで煙幕を張った。背後のバビをやり過ぎたため、スラストターを切つて自由落下に入る。煙幕を突き抜けたバビが頭上を通り過ぎた瞬間を見計らって、リニアガンの狙いをつける。

その瞬間を狙い済ましたかのようなビームに、デイルク・フランツ・ツエルニーはもう一度舌打ちをした。あのバビの動きは、これを誘ったものだったのだ。上空の機体の事を完全に忘れていた自分に慄然とし、大きく息を吸って意識を集中させた。

カーペンタリア基地内での自爆テロを中止させたのだ、穴埋めをしておかなくてはガス抜きが出来ない。軽くスクランブルを誘って、戦闘の真似事をして撤退するはずだったのが、わざわざエースを引いてしまったようだ。しつこく絡むバビに向けて、ビームガンを乱射する。

基地内での自爆テロなど、示威効果すらない組織の自己満足である。ブルーコスモス

の掲げるコーディネーターの排除とは、個別のコーディネーターを殺害する事の向こう側にあるコーディネーターという思想の排除だ。ノワールダガーはレールガンで上空のバビを牽制し、対艦刀を抜いて背後のバビに対峙する。

変形による制動、ビームの発射、上昇しての回避行動、バビの一連の動きを見切った。左手から伸ばしたアンカーワイヤーがバビのガンランチャーに絡みつき、敵の体勢が崩れた。ワイヤーに放電をしてガンランチャーを破壊すると、一気に距離を詰める。

「……………甘いか!？」

振り下ろした対艦刀が空を切った。乱射された突撃銃に対してウイングユニットを防御の回したため、踏み込みきれなかった。損傷覚悟で仕留めるべき場面だ。デイルクは舌打ちをする。

何故か踏み込めなかった。敵機の撃墜より、確実な生還を優先した。体が、それを選択したのだ。その理由を、頭が理解できない。

自爆テロくらい、好きにやらせればよかったのではないか。大洋州のブルーコスモスにどれだけの義理がある。摘発が強まれば速やかに大洋州から撤退すればいい。しかし彼は、基地の人間を標的とせず、大洋州に留まる事を選択した。

「くそっ!!」

上空でビーム発射体勢になったバビにレールガンを撃ち込む。肩を吹き飛ばされて

バランスを崩したバビを尻目に、ノワールダガーが海面にビームガンを放った。水柱と水蒸気に隠れるように、ノワールダガーは後退する。

地球でも、都会はプラントと同じ姿をしているように見える。目に入る物の全ては、人が考え人が作り出したものだ。しかしそこから離れると、目に入る物は人工物で無くなる。それを、自然が作り出したものと表現するのは間違いだ。自然は「作為」よりも先に存在するのだから。

その一切を人が作り出したプラントは、人間という限界を超えることが無い。人はその発想の内側でしか「作為」を行えない。今カフネが見ている物は、人間という限界の外側に存在する自然であった。

山の形、木々の並び、川の流れ、風の動き、そのどれをとつても精妙な調和を内包した混沌を見せている。

「調和とはきつと、有意味な物による整然たる秩序の中にあるのではなく、無意味な存在の……」

カフネは言葉を探す。今日にしている物の中にある美しい調和を説明する言葉を探し当てられない。困ったように隣を見ると、グエンが苦笑いをしていた。トラクターが

食べ物の匂いのする排気ガスを出しながら、山道を登っていく。

食用油の廃油を精製した燃料で動くディーゼルエンジンは、充電用スタンドの普及していないこの地域では一般的な動力だった。グエンの家に着いた二人は、朝早くから近くの山に向かっている。

「珍しいかい、こんな田舎？」

グエンの家は、空港のある街から車で何時間もかかるような場所にある。何の変哲も無い田舎の村だ。ただ近くに国立の自然保護区があり、州がガイドラインを設定して観光客の誘致を始めるという話があった。グエンはそれを当て込んで、レストランの経営を考えている。

ルーファス・リシュレークからの仕事を請けたのも、その開店資金とするためだった。退役時に軍から支給された金など、子供の教育費に消えてしまったのだ。

二人を乗せたトラクターは、山の中腹の開けた場所に出た。下草が綺麗に刈り取られた空き地に、土を盛った山が二つ並んでいた。グエンは持つて来たたくさんの線香に火を付けると、その山に差ししていく。

「あの……」

「親父とお袋の墓だ」

亡くなって三年はこうやって土の墓に埋葬し、それから骨を取り出して石造りの墓に

埋葬しなおすのだという。手を合わせて短く黙禱を捧げたグエンは、両親の事を話す。エイプリルフル・クライシスによる混乱の最中、グエンの両親は相次いで命を失った。地球全域で、億の単位の人間が死んだ未曾有の戦争である、彼の話は珍しいものではなかった。今地球に生きている人間は全てが、その近い人を何らかの形で失っているのだ。それほど多くの人が死んだ。

政府が過激主義を排除しようが、プラントとの関係構築を目指そうが、この戦争がもたらした爪痕は、コズミック・イラに永遠に刻まれたであろう。憎しみと怒りと悲しみは、グエン自身の胸にも刻み込まれている物だ。

線香をあげ終え、グエンは立ち上がる。振り返る先にいるカフネの顔は青ざめていた。コーデイネーターが犯した罪の具体的な形、それを目の当たりにしたのだ。

何か言おうとするカフネの頭をクシャクシャと撫でると、グエンは彼女をトラクターの席に押し上げる。

「お前のせいなんかじゃ無い」

この少女が、これ以上何を背負う必要があるというのだろうか。戦争が終わってなお、戦争の残滓に翻弄される少女に、これ以上の労苦を与える事は大人として許されない事だ。トラクターのエンジンが、重そうな音を上げて回り始める。

「聞くと見るとじゃ大違いってか！」

「突っ込む!!」

ブレイカーの胸から発射された巨大なビームの柱を、ガラム・ガーは背中中で受け止める。連合の開発した防衛兵器、陽電子リフレクター。一応は試作機という事になっているが、これまでの戦闘データから十分すぎるほどに有効だという結論は出ている。

ビームを防ぎきったガラム・ガーは、両腕を掲げビームとリニアガンを乱射する。光波防衛帯を展開してそれを受け止めたブレイカーに、ガラム・ガーは肉薄した。展開された鉤爪が、ブレイカーの右腕を捉える。

スラスターを全開にしてブレイカーを引き摺り倒そうとするが、逆に機体を振り回された。カナンが咄嗟に爪を外し、ガラム・ガーは放り投げられるようにして距離を取る。そうしなければ、リフレクターのない腹部に左腕のビームを食らっていただろう。リニアガンでの攻撃に切り替えたブレイカーをあしらうように、ミコトはガラム・ガーの機体を操る。

機体の意思とは全く別の意思で繰り出されるビームとリニアガンの射撃に、ノーリツチの意識が覚醒し始めた。機体制御のための情報量が増え、半覚醒状態ではその処理が追いつかなくなってきたのだ。

単調だったブレイカーの動きに、生気が見え始める。アルベールは上空で旋回させていたウインダムを急降下させる。対艦攻撃用の大型爆弾二発、ブレイカーの動きが鈍いうちに当てておく。機体も軽くして戦闘に備えなくてはならない。メイファ機が続くの確認して、アルベールはレバーを引き上げた。

合わせて四発のうち三発は命中、もう一発も足元の海面を激しく揺さぶった。それでも、仕留めたとは思えない。爆煙と水煙が激しく混ざる場所に、ガラム・ガーのビームとリニアガンが殺到する。

「全員死ねよ!!」

ノーリッチの咆哮とともに、ブレイカーの全身が閃いた。指のビーム、腕のリニアガン、胸部大型ビーム、バックパックのミサイル。爆発するように、ブレイカーの全ての火器が放たれる。

大気を震わせ、海を沸騰させ、快晴のインド洋が一気に掻き曇ったかのようだ。使い物にならなくなったシールドを投げ捨て、メイファは機体を突撃させる。距離を置いたところで、埒のあく相手ではない。

ブレイカーの背後に回りこもうとするガラム・ガーから視線を逸らさせるように、ビームライフルを細かく撃ちながらブレイカーに接近する。十の指から十のビームサーベルが伸ばされ、メイファ機の前に巨大な網が立ち塞がった。押し掛かるように殺



到するビームの網に、メイファは悲鳴を抑えるだけで精一杯だった。ガラム・ガーが背後から直撃させたリニアガンが無ければやられていた。

「リニアだぜ！ この距離が無効かよ!!」

通常火薬とは段違いの初速を誇る電磁砲だが、極めて近くから当てなければ有効打にはならないようだ。カナンは頭を切り替え、ターゲットスコープも近距離用に切り替える。シートに機体の加速を感じながら、隣と繋がっている感覚に安堵する。

いちいち言葉にしなくてもいい。ちよつとした舌打ちや言葉の断片、パイロットスーツ越しに感じる息遣いだけで相手の考えている事が分かる。ミコトはカナンの思う場所に機体を運び、カナンはミコトの思う場所に攻撃を撃ち込む。全速力のガラム・ガーはすれ違いざまに、二発のリニアガンを直撃させた。

ガラム・ガーの動きに問題はない。だが、バッテリー残量に問題があった。アルベールは焦れる。ブレイカーの艶めくPS装甲は、いまだ十分な電力を有している事を示し、のべつまくなしに吐き出されるビームは、その異常な出力を示していた。後方の艦隊からの連絡はまだない。

「リン中尉……!?!」

彼女の戦闘スタイルは覚えているが、こうも平然と突撃を繰り返されるとたまつたものではない。アルベール機の牽制射撃をもろともしないブレイカーが、猛然とメイファ

機を追う。ガラム・ガーは旋回のために距離を離しているため、攻撃に転じられない。

一部のビームコーティングが施された装甲と、各部から展開する光波防御帯で、ウインダムはビームを弾きながらブレイカーは突き進む。目の前のカトンボに気を取られて、ザリガニの攻撃を受けたのだ。まずはカトンボを落とす。ノーリッチはブレイカーそのもののような感覚の中で、高揚感に包まれながら攻撃を繰り返す。

各部のカメラから入ってくる情報の全てが視覚として認識できるので、全ての方向が文字通り見える。小賢しく背後に回りこもうとするウインダムを、ノーリッチの目ははっきりと捉えている。ブレイカーの動きを鈍重だと判断したからこそその機動だろう。

「お前、メカに弱いだろ」

ブレイカーの頭部だけが真後ろを向いた。人型であるが故に、そのような後ろの向き方は完全に予想の範囲外だ。MSの近接機関砲とは比べ物にならない大きさの機関砲が、メイファを睨む。

間に合え、彼女はそう念じてペダルを踏み込みレバーを引き上げる。だが、機体に衝撃が走らなかったのは、自分の操作が間に合ったからではない。アルベールのウインダムが、シールドごと腕を吹き飛ばされる。ジェットストライカーの翼も片方が消し飛ばされ、海面を転がるように墜落した。

「神父さんが!？」

「カナン、仕留めろ!!」

ミコトはそう叫んでガラム・ガーのスラスターを吹かす。どの道、バッテリー残量を考えればこれがラストチャンスだ。海面スレスレを白い航跡を引きながら、ガラム・ガーは突進する。

ブレイカーの吐き出したビームを陽電子リフレクターで受け止め、その圧力を振り払うように、スラスターの光りが増した。鉤爪を展開し巨大な鋏にすると、それを赤熱化させる。ビームサーベルを発振させた両腕が振り上げられるが、ガラム・ガーは既に間合いに入っていた。

突き出された鋏がブレイカーの二本の腕を切断し、その勢いのままにブレイカーに衝突する。至近距離から放たれるビームをもう一度陽電子リフレクターで弾くと、飛び散った粒子がシャワーのように双方の機体を降りかかる。

各部装甲の損傷を知らせるアラームが鳴り響く中、ガラム・ガーの最後の電力がリニアガンの弾丸に伝えられる。激しく揺さぶられ続ける機体の中で、カナンの目はブレイカーの砲口を射抜いていた。

「抜けた……」

ビーム発射口から撃ち込まれた弾丸が、ブレイカーの背後に抜ける。同時にその胸から上が爆発してガラム・ガーが吹き飛ばされたのを、メイファは見た。

胴体と足だけになったブレイカーは、よろめくように去っていくが、メイファは三人の救助を優先した。

「どんぴしゃでしたね」

「流石はうちのソナー手だよ」

ゲンヤ・タカツキは、攻撃機が戦闘能力を失ったブレイカーを攻撃している事を伝えられると、対潜哨戒機を交戦していたMS隊の搜索に向かわせる。敵の運用母艦は既に発見済みであり、先に攻撃を開始してもよかつたのだが、この瞬間まで待っていた。

本命である巨大MSの破壊を確実にするためであり、同時にそれを東アジア軍の手で行うためである。敵を手負いにしたのは大西洋の機体だが、撃破するのは自分達である。座標の特定が終わり、音速魚雷とミサイル投下型爆雷が順次発射されていく。対潜装備のスカイグラスパーも第二陣の発進が進んでいた。

五分後、巨大MSの爆発と敵潜水艦の轟沈が確認される。

## 第八部

エイプリルフルクライシスによる死者数の正確な統計など存在しない。把握できるレベルではないという技術的な話とは別に、それによる対プラント感情の悪化をこれ以上進めたくないという政治的な理由もあった。プラントに対する徹底的な報復を求める世論は根強い。

NJによつて核分裂を利用したエネルギー利用が出来なくなった地球では、深刻なエネルギー不足に陥つた。資源衛星で使用される高効率太陽電池は、太陽からの紫外線やエックス線、ガンマ線といった放射線までも電気に変換することで効率を高めており、大気圏内では効率が極端に低下するため十分な電力の供給源とはなり得ない。そこで、宇宙艦船等で利用されている核融合炉を地上での電力供給に転用する事が行われた。

ヘリウム3を燃料とする核融合炉はNJ下でも使用できるが、そのヘリウム3は現状月表面でしか採取できない。そのため燃料輸送に多額のコストがかかり、それまでは省みられてこなかったのだ。戦時下では採算を完全に度外視した上で、核融合炉による電力供給を行っていた。

月の表側の拠点を失つた連合は、ヘリウム3の供給体制に深刻な打撃を受けており、

再びエネルギー不足に陥りかねない状況にあった。十数億と言われる犠牲者を出しながら、プラントに降伏を迫る事が出来なかったのは、そういった理由もあったのだ。プラントの殲滅より、明日の電気の方がはるかに重要である。

そのため連合はユニウス条約の遵守を各国に通達しており、それぞれの国で国内法制の整備が進んでいた。NJCを利用した核エンジンの存在は、ユニウス条約の崩壊に繋がりがかねない。

「事が露見する前に手を打つ……」

東アジア艦隊が巨大MSを撃破したのは、連合のそういった考えに基づくものなのであろう。輸送船に引き上げられた様々な残骸を検分しながら、ユイ・タカクラはつぶやいた。ブレイカーと呼称されていた巨大MSは、爆発によってその残骸が広範囲に散らばっている。

しかしその核エンジンは未成品であり、今回の回収対象ではない。完成品は、すでにカーペンタリアから運び込まれている。NJCを単に弾頭として使用する技術ならば、ブルーコスモスも有していた。そこから連合各国に情報は流出しているだろう。実際にはユニウス条約など、締結した時から形骸化しているのだ。作業員の呼び声に、足に向けた。

原型のよく分からない残骸が多い中、その部品だけは形が残っていた。専用の電源も

付いており、機能も死んでいない事が分かる。作業員が外側の作業パネルをいじる。しばらくして、部品の上面がハッチのように開いた。

「これね、生体CPUってやつは」

ユイの視線の先には、若い男性らしきものがある。らしきとしたのは、体のあちこちから直接コードが延びている姿だからだ。人の形を模した機械に見えなくも無い。ひよつとしたら、眠っているのではなく機能を停止しているのかもしれない。

今回の回収対象であるノーリッチ・シユナウザー。ブルーコスモスの強化兵士である。ユイは喉の奥で笑った。腰の拳銃に手を触れさせる。この場でこの不気味なものを破壊しても、咎める者はいないだろう。

彼女は残酷な笑みを浮かべたまま、作業員にノーリッチ・シユナウザーの輸送を指示した。ブルーコスモスには、それに相応しい死に方を与えなくてはならない。慈悲など、一片たりも必要ないのだ。

いい気味だわ、そう言つてユイはデッキを後にする。船は一路オーブへと向かった。

それを言われた時、何度目の荷造りだろうかと思つた。いつその事ここで行方をくらませて実家に帰ろうかとも思つた。ただ命を狙われている可能性があるため、実行に移

す気になれないだけだ。

コトハ・キラサギが向ける非難めいた視線を意に介さず、トルベン・タイナートは詳しい日取りを追って知らせると言った。再びここから移動するというのだ。

「詳しい話、聞かせてもらえませんか？　そろそろ」

「……?」

「艦長さんも言っていましたよ、敵も味方も分からないのは耐え難いって」

トルベンが組んでいた腕をキーボードへと伸ばす。二三の操作で、壁面に映像が映し出された。彼がクライアントから受けた仕事の中間報告である。ジョージ・グレンが残した業績と、その遺伝子の相関関係を示すものであった。

いくつかの限定的な条件を付ければ、遺伝子とその業績の間に強い相関関係が認められる可能性が見えてきた、そうトルベンは言う。この事から、遺伝子適性に基づく職業統制のような制度も、不可能ではないという結論を出し得ると、報告書には書いていた。分かるかという視線を向けられたコトハは、分からなくてもいいから続けろと視線を返す。

「で、この報告書はどうもクライアントには不評でした」

「?　待って下さい……じゃ今度逃げるのは、雇い主からですか?」

「ええ。まあ、捨てる神あれば拾う神ありでして」



次のクライアントは既に決まっているとトルベンは言った。この報告書を評価してくれる者もいるという事だ。彼にとつては、科学的に蓋然性の高い一つの仮説を支持しているに過ぎないが、どうもこの手の分野は政治色を帯びやすい。接触してきた次のクライアントが、今のクライアントの危険性を知らせてくれたのだ。

詳しい話を聞いたら余計に訳が分からなくなつたと、コトハが天井を仰いだ。映像を切つたトルベンに、何が問題なのかを聞く。

「だつてプラントつて、被選挙権は遺伝子適性のある人間にしかないんですよ。それに結婚相手まで決められてるんじゃないですか」

今さら仕事を遺伝子適性に基づいて決められる事のどこに問題があるのだろうか。所得格差云々は、社会保障制度でカバーするだけであろう。プラントの少ない人口では、市場による最適な人的資源の配分が達成されるのを待つ余裕が無いのだろう。恋愛結婚を制度的に否定できる人々が、今さら職業選択の自由を掲げるというのはどうにも一貫性の無い主張だ。

保守的というか反動的な家風で育つたコトハにとつて、「自由」が家という束縛からの自由だった頃は確かにある。憧れの先輩と駆け落ちして、どこか遠くの港町でひっそり暮らす三文小説に夢中になつていた頃もあった。

だが自分自身の遺伝子を含め、肉体も精神も社会的な関係性も、全てが束縛の産物で

あり、かつ自分自身の欠くべからざる部分である事を認識した時から、自由の意味は変わった。決して逃れられない自分自身というしがらみの中で、いかに自由にあるかを考えるようになったのだ。

手を使えないサツカーに自由なプレーは存在しないのか。その束縛の中で、無限に自由なプレーを繰り返しているのではないか。彼女の考える自由は、そういう事だ。束縛の外側への逃避ではなく、しがらみの中での軽やかな創造性。

「でも、まあ……どうせ命狙われるんやったら、恋愛結婚原理主義者とかに狙われた方がマシって感じしません？」  
「愛のためなら死ぬる人達ですか」

ハハハと笑って、トルベンはポットを傾けた。彼女の考えは、ただ彼女の中から生まれてきたものではないだろう。その生まれ育った言語環境、文化的背景、思想的バックボーンの上に成り立つものだ。

それら環境的要因はあたかも遺伝子のように、環境自体を保持し継続していく自律的な作用を有している。そんな事を言って、大脳生理学から民俗学へと専攻を変えた友人がいた事を思い出す。

もしそうだとすれば、神の設計図はどこまで線が引かれているのであろう

あの巨大MSが撃破されたという情報を受け、カナデ・アキシノはいくつかの予定を変更した。完成品ではないとはいえ、核エンジンの現物が失われたのだ。大西洋とユーラシアは戦時中にブルーコスモスを通じてNJCの情報を入手していたはずだが、あくまでも核弾頭に転用できる技術でしかない。

ヨーロッパにおける原子力発電事業の動向を探っていたカナデは、完全に行き詰ってしまった。ユーラシア軍を通じて現物と接触する機会を探ろうとしていただけに、方針の練り直しは必至だった。

「そもそも現物が消えたんじゃないや、当分は事業化は無理か……」

カナデは部下にアポイントを取るように頼み、資料を探す。ユーラシアで原子力発電事業にもっとも関心を持つ人物に直接会う事にする。

ヨーロッパでもそこそこ名の通った名家の実質的なトップで、複数の企業を傘下に持つ持ち株会社の経営者でもあった。戦時予算から復興予算へと政府方針が変わると読んでいるらしく、民生分野で活発な動きを見せている人物だ。しかしカフネ・イーガンを巡ってスパイ映画じみた事をしていたので、会うのを避けてきたのだ。取り出した資料には、以前アリスシア・ルイーズ・ド・ヴァロアとの会談の中で、彼について語られた事がメモ書きしてあった。

「そう、言っていましたか」

いい気分のするものではないが、ルーファス・リシュレークは最後まで話を聞いた。単なる表敬訪問にしては、ずいぶんと色々な事を話すものだ、カナデの顔を見ながら思う。ただ気がかりなのは、カナデが話すそれらの話はアリシアから聞いたものだという事だ。

自分の出自や、リシュレーク家を巡る一族の問題などは、社交界を飛び交う無数の常識の一つでしかないが、何故それをアリシアは東アジアの企業の人間に語ったのであるか。核エンジンの存在を探りに来た人間に、自分のプライバシーに関する事を話す理由はあるのだろうか。

カフネ・イーガンを巡ってトラブルがあったとはいえ、つまらない意趣返しをするような人物ではない。だから聞きたくも無い話の続きを促してみた。

「リシュレークの家は人材も豊富で、羨ましいと。緊急事態における指導部の混乱を回避するには、何よりも人材の層の厚さが必要だと」

カナデは平静を保って続けた。だが、何故この話題を打ち切ろうとしないのかが不思議だ。いつまでも本題に入れない。

カフネ・イーガンの行方を、彼なら知っているはずなのだ。核エンジンの現物はなくなっているが、複製品を作れるくらいのデータは十分にあるはずだ。カフネの持つ情報

はその価値を減じていない。だがその本人がどこにいるのか、社はおろかユーラシア東アジア大使館の情報部も掴めていなかった。

顔のバレる危険性を冒してまで乗り込んできたというのに、どうにも話が進まない。応接間の電話が鳴りルーファスは立ち上がった。

「……アルテシアが？ 来客中だと伝えてくれ」

ルーファスがソファアに戻るより早く、カナデは立ち上がった。流石に髪型と眼鏡だけでは、女の目は誤魔化せないだろう。あの美人秘書が来る前に退散した方が身のためだ。

そそくさと立ち去るカナデを見送りながら、ルーファスはアリシアが語っていたという話の事を考え続けていた。嫌な予感が胸のうちを漂っている。

状況は予断を許さなくなった。彼が追っていた物のうち、プラント製の核エンジンはオーブ国内に入ってから足の取りが全く掴めなくなっている。しかもザフト自体がその情報を追っている状態だ。プラント内部が割れており、その内の一派が極秘裏にオーブへ核エンジンを運び込んだと見るしかない。おそらく、ザフトも割れているのだ。

こちらに関しては、オーブ内のブルーコスモスに任せるしかない。問題はもう一つの

方である。コーダイネーターに関する重大な情報を持った科学者の動向も、見えにくくなっていった。

「デイルクさん、どうかしました?」

「え……? あ、いや」

何でもない、そう言ったデイルクは、手にしたアイスキャンディーが溶けかけているのに気付कि、慌てて口に運ぶ。はにかむように笑ったユウキは、口元を拭くようにとポケットティッシュを差し出してくれる。

カーペンタリアの基地構造物を遠くに望む、丘上の公園。アイスキャンディー売りの自転車が、ベルを鳴らしながらゆつくりと走り去っていくのが見えた。光の反射しにくい素材で覆われている基地構造物は、夕日の中でもやけにはつきりとその姿を見るこゝとが出来る。こうして、彼女とここに来るのは何回目だろう。

この町の住民は基地居住区の商業施設を利用できるので、町には古い映画館が一軒あるだけだ。デイルクとしては基地内をむやみに歩き回りたくない。そうすれば必然的に、こういう場所を二人で歩く事になる。

名残惜しそうにアイスキャンディーの棒を舐めているユウキの姿は、子供そのものだ。デイルクは自分の行為の不可解さとともに、彼女の横顔を見つめていた。それに気付いたのか、彼女は顔を赤らめ、近くのかごへ棒を捨てに行く。ワンピースの裾

がふわりと揺れた。

この僅かなひとときの重さを、デイルクは驚きを持って受け止めている。デイルク・フランツ・ツエルニーというかりそめの名前が、真実の音をもつて響く瞬間に戸惑っている。

ナチユラルとコーデイネーターのハイブリッドが可能か否か、それは実際に確かめてみなくては分からない事だった。彼はハーフが存在しうる事の証明であったが、同時に彼は生まれた事によって、その意味を失った。彼が生まれる事に意味はあった、だが生まれた彼に意味は残されていなかった。

故に彼は悟った、全てのコーデイネーターもそうであると。だから彼はブルーコスモスにいます。

「暗くなる」

彼はユウキの手を取って、立ち上がらせた。伏し目がちの彼女を促すように歩調を合わせ、その隣を歩く。人通りはなく、二人だけが黄昏の光の中に溶け込んでいた。

デイルクは自身の生きてきた時間の重みを思う。無意味な存在が紡ぐ時間に、重みなどない。だから、彼自身が紡ぐ時間にもまた重みはない。コーデイネーターの死に喝采を送るメンバーを見ながら、彼はその無意味さを静観していた。

ならば、この瞬間の重みは何なのか。今の一步一步が紡ぐ重みは。自分のペースで歩

いているのではないので、楽な歩き方ではない。隣を歩く少女の歩調に合わせるその一歩一歩に込められた重みは、一体何なのか。

「それじゃ、デイルクさん……また……」

いつもの分かれ道で、ユウキはそう言う。音も無く街灯が点り、彼女を淡く照らした。背を向けて踏み出そうとした彼女の腕を、デイルクは掴んだ。

驚いた表情のユウキを、デイルクは抱き締める。そして、その唇を吸った。やがてユウキの体が安堵に満たされる頃、彼は彼女をそつと解放した。そして、何も言わずに歩を進めた。

明日からの作戦は、トルベン・タイナートの追撃と確保もしくは殺害、及びデータの奪取ないしは破壊である。ジョージ・グレンのレシピは、もともとブルークコスモスが有していたものであり、そのデータをプラントへと流出させた幹部は、デイルクが粛清している。

「この手で、という思いはありましたよ」

巨大MS撃墜の報を聞いたカルロス・アストウリアスは、ベッドの上でそう言った。腕と脚の骨にヒビを入れたただけだが、軍医が歩き回る事を許さないのだ。だが上官の話



を寝転がって聞けるのは悪い気分ではない。

ブレイカーを撃墜したのは東アジアと大西洋の合同部隊であり、ウインダムと新型MAの戦闘試験も兼ねられたものであったらしい。カルロスと言う、大西洋は既にオールMSドクトリンを放棄する準備を始めていると。ユーラシアはまた出遅れていると。

新型MAがどのようなものか想像するしかないが、ブレイカーに匹敵するという事だろう。大西洋は、巨大機動兵器をブレイカーのように単独運用するのではなく、MSを随伴させる形での戦術を考案したのだ。

MAとMSは丁度、攻撃機と戦闘機の関係になるのだろう。MSは露払いとして敵の迎撃MSに対処し、高機動・高火力のMAが一撃離脱的に拠点や艦隊を攻撃する。MSの登場によって混乱した戦術は、再び基本的な形に戻ろうとしている。カルロスの指摘を、マドリードの司令官は苦い顔で聞いていた。

「とにかく、核エンジンは失われた。NJCのエネルギー分野への転用なり、NJの情報開示なりは、和平条約締結交渉の中で行われる」

ユニウス条約の遵守がなければ、和平条約も存在できない。ザフトとの緊張が高まればイベリア半島は再び最前線と化す。それを阻止する事が、マドリードの司令部が持つ唯一の目的だ。

そのための懸案事項の一つが解決したと、司令官が言う。カルロスはもう一つはと聞

き返した。司令官がいかにも暇人とはいえ、パイロットを見舞う殊勝な心がけを持っているとは思えない。怪我人を使って、何か仕事をさせようとしているのだろう。

司令官は察しがいいかと笑った。核エンジンに欠かせない人物は、まだ生きているのだ。カルロスは、そんな子供がいた事を思い出す。同時に、わざわざ「生きている」と言った司令官を冷たい視線を向ける。

「そういうのは、本職にやらせればいい。パイロットを暗殺者などに仕立て上げない事だ」

「気が早いな．．．．君にはマドリードの意向を伝えたただけだ」

正式な命令はユーラシア軍司令部から来るだろうと言つて、司令官は病室を出て行った。カルロスは上体を起こして、窓から見える海を眺めた。

おそらくユーラシア軍司令部の命令と、マドリードの司令部の思惑は食い違っているのだ。その時、現場の判断でそのいずれかを選択しろ、いやマドリードの意向を尊重して行動しろと言うのだ。

つまりマドリードとして責任を取るつもりは無く、せいぜい作戦後にカルロスへの処分が下つた後、何らかの便宜を裏から図る事もありうるかもしれないだろうという事に過ぎない。自分一人ならまだしも、家族も部下もいる身に、それは重過ぎる内容である。

ましてや、標的となつた年端も行かない子供を殺せと言われているのだ。気乗りなど

するはずが無い。

「複雑骨折でもしておくんだったな……」

明日には取れると言うギブスを見つめながら、カルロスはため息をついた。

退院と同時に下された指令は、ユーラシア国内より拉致されたカフネ・イーガンの救出作戦を支援する事であった。妨害者の存在が懸念されるため、MSによる直接的な援護が求められると言う。

ソースの完成と麺の茹で上がりが同時になるように時計を確かめながら、フライパンの中をかき混ぜる。ソースを絡める時にも加熱を続けるので、麺の茹で時間はほんの少しだけ短くしておく。キッチンタイマーの音と同時に麺をザルに上げ、素早くソースの入ったフライパンの中に入れる。

皿に盛り付け、パセリを散らした。リビングのテーブルの上のグラスを片付け、皿を置く。シビル・ストーンは、ソファで寝ている男の肩を優しく揺する。オイレン・クーエンスの不機嫌そうな表情に微笑みを見せ、食事が出来た事を告げた。

トルベン・タイナートとその研究グループを伴ってウエリントンまで来たボズゴロフ級潜水艦のクルーは、研究施設近くに宿舎で寝泊りをしていた。シビルもその一人であ

る。プラントと大洋州は友好関係にあるとは言え、カーペンタリア以外の場所でザフトの人間に行動の自由を与えるほど大洋州もお人好しではなかった。

だが、心配されたカーペンタリアからの第二次攻撃もなく、シビルにとってはさながら休暇のような感じであった。そして彼女は、かいがいしくオイレンの部屋に通っている。

「味、どうっ？」

いただきますも言わずに食べ始めた男が、そんな問いに答えを返さない事は分かっている。それでも彼女は、そんなやり取りを続ける。それはとても不思議な感じだ。どこをどう見ても、目の前の男は自分の好みではない。

行動はどこか投げやりで、言葉はいつも乱暴だ。女性に対しての心配りなどというものはどこにも見えず、見せる態度はいつだって横柄だ。それなのに、温かな微笑みも、甘いささやきも与えてくれないこの男に、どうしようもなく惹かれていく。

今まで理想として夢見ていた男は、自分の内側にあるものを形にしただけだ。それは既知のものであり、語りつくしてしまったものだ。だが目の前にいるオイレン・クーエンスはそうではない。彼は、シビル・ストーンの外側にいる人間だ。それは未知の存在であり、これから語るべき存在だ。

それでも分かっている事がある。彼もまた、コーデイネーターの中で息苦しく生きて

きた人間なのだ。そこから逃れんとする彼の姿は、彼女の心を捉えて止まない。

「博士達、またどこかに移動するみたいね。近いうちに召集があるって」

「……………」

ボズゴロフ級に物資が搬送されていた事から、大体のことは察しがついていた。だが彼はそれに同行しない。オイレンは護衛の任を解かれていた。

役に立たないと判断されたのだ。トルベンは、クライアントの変更に伴う契約の終了だろうと言っていたが、それは言葉の上での問題でしかない。今の状況を考えれば護衛が不要となるはずも無い。だとすれば、オイレン・クーエンスは護衛としての能力に劣ると結論付けられたと考えるしかなかった。

ここ数日は、怒りと恐怖がない交ぜのままに胸のうちを渦巻いていた。

以前のように軍縮だの条約だのの理由で降ろされたのではない、彼の能力だけがその理由なのだ。このままでは、MSに乗る前の自分に戻ってしまう。暗く澱んだアカデミーでの日々が再来してしまう。

何としてでも、自分の能力を示さねばならない。そうしなければ、オイレン・クーエンスの存在自体が消えてしまう。

「あ、ちよつ……………片付け、てから……………」

そう言いながらシビルは、オイレンの唇から逃れようとはしない。トマトとガーリッ

クの味のキスなんて、ちっともロマンチックじゃないと思いつながら、思うままに舌を弄ばれる。

ちやんとシャワーを浴びて、服を脱いで、ベッドの上で。部屋を訪れるたびに求められながら、彼女の求めるようなシチュエーションは全くなかった。それでもシビルは拒まない、いや求めていく。溺れているのが分からないほど堕ちている。

「なあ、頼みがあるんだ……」

耳元で囁かれる事など、あつただろうか。彼の言葉が、メロディーにしか聞こえない。「ありがとうな、愛してるぜ」

その言葉だけで、シビルは果ててしまう。

この艦に降り立つのは二度目だ。ユイ・タカクラはムラサメを歩かせ、エレベーターへと載せる。点検その他は必要ないと整備員に伝えて、MSデッキに降りた。口笛を吹くクルーに笑顔を向けながら、彼女は更衣室を借りる。艦長にパイロットスーツで会うわけにも行かない。

だが着替えたのは、オーブの軍服ではなくスーツであつた。少し別の肩書きでここに来たのだ。不服そうなゲンヤ・タカツキに丁寧な挨拶をして、書類を手渡す。それを一

瞥した彼はさらに不機嫌そうな表情を見せた。

「……………東アジア軍ではなく、自治州軍の命令書かね」

「詮索はご自由に。ですが正式なものです、問い合わせなり何なりはお国の方へ」

例の巨大MSの排除にも、この組織は絡んでいるのかもしれない。作戦終了後も、色々と理由をつけてインド洋に留めさせられたのは、この命令書が理由なのであろう。インド洋上のザフト施設から打ち上げられるシャトルの拿捕が、次の作戦であった。戦争を再開するつもりとしか思えない命令だ。

本来の任地から遠く離れて、このような不可解な作戦をやらされる。新兵の頃から、その苦労は変わらないようだ。涼しげに微笑む女も、ただの使い走りであろう。文句を言う気にもなれなかった。

女を追い出すように話を終え、艦長室に幹部を集める。東アジアや大西洋の部隊を載せたままで艦隊を動かさなくてはならないのだ、そのあたりの調整も必要となる。おそらく載せている他の部隊にも、この不可解な命令は届けられているのだろう。

「州軍とはいえ、どこまで食い込んだ組織なのです?」

「私も噂でしか知らん、が裏にフジヤマがいる事は確実だろう。あそこなら州のトップと直結している」

「すると、あの女は……………モルゲンレーテですか」

「オーブの軍人だ、当然だな」

戦争が巨大な経済活動である事は、軍人としてなかなか受け入れがたい事だ。だが現実に、自分達の生き死には金額換算されている。そしてその経済活動を巡って、せせこましい陰謀が張り巡らされているのだ。

ユイは、再びパイロットスーツに着替えていた。甲板に上がったムラサメは、着艦したばかりのガルム・ガーをカメラで捉えている。

「また、会えたわね」

「!？」

いきなり無線機を揺らした声に、ミコトは肩を震わせた。ムラサメの姿を見たときから嫌な予感はしていたが、その予感通りにあの『女』が来ていたとは。ミコトはヘルメツトを乱暴に外して息をついた。

カナンは心配そうな視線に、せめて笑顔だけでも返しておこうとする。そのカナンが声をかけた。

「どうした？ また、キスするか？」

ミコトの顔が赤くなるのと、その拳が顎を捉えるのは同時だった。あの夜の不覚を思い出し、彼女は一層顔を赤らめる。



「それが大人の責任つてもんだと思うんだ」

グエンは妻の不安げな顔に、努めて明るい表情を見せた。ブルーコスモスのような過激派はいないとはいえ、このあたりもまた対コーディネーター感情がよいとは言えない場所なのだ。隠し通すか、ちゃんと公表するか、その点からきちんと考えていかななくてはならない。

子供達は寝静まり、小さな灯りだけが食卓を照らしている。長い沈黙は考えるためではなく、納得するためのものだ。妻が小さく息を吐いた。

「そうね。今さら一人増えたって同じ事よね」

これから店を始めるのであれば、人手が多いにこした事はない。妻はそう言つて湯飲みを手にした。グエンは安堵の表情を浮かべる。そして早速明日にでも、カフネにその事を話すと言った。

だが翌朝に事態は急変した。夜も明け切らないうちに、グエンの家を一人の女性が訪ねてきた。修羅場にならなかつたのは、ひとえにアルテシアの的確な説明のおかげであつた。彼女はようやく納得したグエンの妻に、カフネを呼んでもらうよう頼む。

「あなた方は関わりを持たない方がいい話です。カフネさんご本人に、直接……」  
「あの子は昨日から家の子になつたの。子供に関わらない親なんていないわ」

玄関での押し問答に起きだして来たカフネが、驚いた顔をしている。グエンは額に手を当てて、天を仰いだ。

ひとまずカフネには、グエンの養女にならないかという話をする。すぐに答えを出さなくてもいいと、その話を保留した上でアルテシアの話を聞く。ただでさえ混乱しているカフネをさらに混乱させるような話だった。

一つはカフネの両親の遺体の話である。ザフトの警察当局が、保管されている遺体の引き取り手を捜しているという話であった。それが今になって伝わったという点が、非常に怪しいとアルテシアは言う。

もう一つは、ルーファス・リシュレークの失脚である。彼がトップを勤める持ち株会社の緊急役員会議で、ルーファスを最高経営責任者から最高顧問へと昇格させるという動議が決議されたのだ。昇格とは言うが代表権の無い名誉職に過ぎず、事実上のクレーターである。

彼の事を快く思っていない一族内部の人間が企てた事であるが、その背後にユーラシア軍の一部が関わっているという話であった。その目的は、ルーファス本人ではないはずだ。

「ルーファスも抵抗はすると言っています。ですが、今までのようにリシュレーク家の力でカフネさんの行方をごまかし続けることは出来なくなります」

「えげつないな、やり方が」

グエンは腕を組んだ。まさか、家族全員引き連れてカーチエイスだの何だのはできない。だがここまでするといふ事は、それなりの荒事を向こうも覚悟しているといふ事だろう。

厳しい表情を見せるアルテシアに、不安一杯の瞳で見つめるカフネ。グエンは唇を引き結んだ。妻に目を転じると、彼女の顔は笑みすら浮かべているようだった。真つ直ぐに夫を見る目は、信頼などと言う言葉では表現しきれないほどに力強いものだ。グエンは言う。

「まずは、朝飯だ。満腹になってから、名案を考える」

基地のすぐ近くにある割には、のんびりした雰囲気町の町だった。親プラントの国とはいえ、プラントとは似ても似つかぬ雰囲気になるだろう。何となく町を歩いているのは、とりあえず何をすべきかが分からないからだ。コトハ・キサラギはカーペンタリアの基地で降ろされていた。

トルベンではなく、艦長のサイモンが色々と手を回してくれたのだ。軍人として一般市民の保護を優先しなくてはならないと、同行を許さなかった。トルベンは、コトハ個

人への危険性を案じているようだが、トルベンのそばにいる方がはるかに危険と判断したのだ。

問題は母国の東アジアに戻る算段である。サイモンも、カーペンタリアの基地から出る方法までしか教えてくれなかった。戦争前にプラントの学校に入る時は、東アジアのパスポートを持って、プラントの就学ビザをもらった。戦争で国交が断絶された後は、特例としての滞在が認められていたに過ぎない。ユニウス条約の締結で、それらの問題が解決したはずなのだが、果たして自分のパスポートはどこまで有効なのだろうか。

それ以前に、大洋州のどの都市に東アジアの大使館があるのだろうか。空港に行けば、東アジア行きの飛行機に乗りたりするのだろうか。

「……これは、かなりピンチ？」

誰もいないがそう問いかける。むしろ基地を出なかった方が良かったかもしれない。トルベンの命を狙っているのがザフト内部にいる可能性を考慮して、基地から早く出る事を勧められたのだが、里帰りの途中で迷子になったなどと言った方が、確実に帰国できるのではないだろうか。

「どうかしました？」

声を掛けられ肩を震わせた。自転車を止めた少女が不思議そうな顔をしている。日焼けした肌に白いブラウスがよく映える子だ。伸ばし始めた髪がようやくやく様になって

きたという感じの髪型が、可愛らしい。

「あ………プラントから、来たんだけど、基地から出ちゃって………」

「ザフトの人？」

「ううん。里帰りで、東アジアにね………」

少女の表情が怪訝なものになる。一般旅客シャトルの到着日は三日後であり、その前の便は10日前のものだ。一般旅客、とりわけ連合各国に向かう人はその行動に大きな制限が加えられているため、出歩く事など出来ないのが普通だ。

そう指摘され、コトハは冷や汗が止まらなくなる。相手は軍属に見えないが、通報される可能性はある。

「何か、訳あり？ 泊まるどころとか、決まってる？」

黙ったままのコトハに、少女はユウキ・ナシリと名乗り、ついて来るように言った。ホームシックとかで、後先考えず地球行き便に飛び乗って難儀する人というのが、たまにいます。通報すれば、そういう人も押しなべてスパイ容疑者となってしまう。

あなたもそういうクチでしょと言って、ユウキは笑った。コトハは、安心の余り自然と笑みを溢していた。

オーブのマストドライバーがまだに試験稼働中であるため、現在地球と宇宙を結ぶのはビクトリアのマストドライバーのみである。カフネ・イーガンが宇宙に戻るには、ここを使うより他はないだろう。輸送機から降ろされたウィンダムは、真新しい装甲を光らせている。

子供一人にたいした手の回しようだと思うと同時に、それをするだけの価値がある子供に怖さも感じる。コーディネーターの歪さの一端が垣間見えるようだ。

「それは同時に、大人の歪さかな」

「いえ、大人はもともと歪なものでしょう」

だから戦争を始める、そう言っただけでルーファス・リシユレークはソファアを勧めた。肩をすくめるカルロス・アストウリアスは、自分も偉くなったものだと思う。これはいいよ、経済新聞を読む生活を始めなくてはならないかもしれない。いつまでもパイロットだけをやっていられる身分ではないのだ。

もつとも目の前にいるルーファスの事は、一般紙でも話題になっていた。民間企業における一族骨肉の争いかと思いきや、ユーラシア軍の思惑と自分の仕事に絡んだ問題だったのだ。

ルーファスが単刀直入に切り出した。

「カフネ・イーガンを見逃して欲しい」

「そりや、実行部隊に言ってくれ」

「実行部隊は、パリとモスクワから出ているのでしよう。だが、マドリードは別の考えを持ってはいるはずですよ」

「なるほど……頼んでるわけじゃないってか」

自分よりずっと若いのだろうが、企業経営を担ってきたというのは伊達ではないらしい。

カルロスとて、この命令を納得しているわけではない。むしろやらずに済むならそれで済ませたいのだ。これ以上、三下悪人の真似事は御免であった。だが確認しておかなくてはならない事がある。

「あんたは、何を提供できる？」

「再就職の斡旋でしたら、いくらでも」

ぶっ飛ばしてやろうかと思うが、押し留める。嫌味でも自虐でもなく、正直に言っただけであろう。閑職に飛ばされたルーファスに、出来る事などないのだ。

「いいな、若いつてのは……で、カフネちゃんをあんたはどうするつもりだ？」

「別に。今の私に、彼女の技術を有効活用する場所は残っていない」

「じゃ、何だつてこんな事を」

「プライドに付けられた傷は、倍にして返すべきでしょう」

カルロスは笑った。実際に命を張る人間を前にして、自分のプライドが最優先だと言いつたのだ。ならば自分も、プライド最優先で動くしかないではないか。

ラッキーかアンラッキーか迷う時は、迷わずアンラッキーだと思おう事になっている。戦場における楽観論ほど、有害なものはない。音響デコイを放ち、艦隊を直進させた。敵が増えたと言っても、連携の取れた敵ではない。

敵艦の艦砲の射程距離を算出し、最終防衛ラインを引く。ミサイルは基地の対空砲に任せるしかない。手駒は豊富ではないのだ、自分の出来る範囲を見定める。

「グリーンとゾノの発進準備、連合水上艦にあたらせる。動き回って航空機の目をひきつける。艦隊は対潜水艦戦の用意を」

サイモン・メイフィールドが帽子を被りなおす。宇宙と違ってノーマルスーツを着ないで済むので格段に動きやすい。各種計器やモニターに目を走らせ、彼我の位置関係を再確認させた。

インド洋上の環礁に係留された大型浮体構造物に、ザフトの基地が設置されている。ジブラルタルとカーペンタリアを結ぶ空路の真下であり、悪天候時の退避場所などに使用されていた。その滑走路は、ブースターを付けたシャトルの発射にも使用できる。



トルベン・タイナートを無事に宇宙に帰す、それがサイモンと彼の指揮する艦隊の役割であった。艦隊と言っても、ボズゴロフ級二隻にいくばくかの小型艦艇のみである。上手く立ち回っても、どこまでできるか。

「死ぬなら宇宙だ」

地球で、ましてや水の底で死ぬ気などなかった。サイモンの号令と同時に、静穏魚雷が一斉に発射される。

海面から水柱が立ち上がったのが、望遠モニターでかすかに見えた。予定よりも早いという事は、先手を取られたのだろう。ウォーレン・パーシバルは後方モニターに視線を移す。輸送機から伸ばされるケーブルに繋がったままの機体が、まだ何機も見える。

「先行して仕掛ける。バビは全機の補給が済みしだい、作戦通りに行動だ」

輸送機からグウルが射出され、ウォーレンの乗るゲイツはここまで乗ってきたグウルを乗り換える。ゲイツのモノアイが強く光り、グウルのスラスタターが一気に開かれた。彼らの目的は、トルベン・タイナートの身柄を確保する事である。ブルーコスモスと繋がっているとの容疑らしいが、上の言う事をそのまま信じる気にもなれない。

それでも、大洋州の資源衛星以来の縁である。ここらできつちり片を付けておきたい。本来なら、敵の潜水艦をウォーレン達のMSが引き付け、味方の潜水艦が基地を強襲する手はずだったのだが、逆になるかもしれない。

「そうは問屋が卸さない．．．か！」

海中から打ち出されたカプセルが割れ、中からハビが姿を現す。制動をかけたゲイツの脇をビームがすり抜ける。ウォーレンはペダルを踏み込んで機体をつつませた。姿勢を低くしたゲイツが手にするのは、わざわざ移し変えてもらった愛用の斬機刀。

その一振り、ガンランチャーから発射されたロケット弾を切り払う。散開したバビをビームライフルで狙い、海面下に向けてレールガンを叩き込む。グウルはロケット弾を牽制に、突撃銃の乱射をもろともしないでゲイツは突進する。

「ちいっ！！」

直上からのビームを寸で回避し、ビームライフルを向ける。予想以上にバビの動きがいい。良いパイロットを先に連れて行かれたかと苦笑する間もなく、周囲からロケット弾が迫った。コクピットのアラームが一斉に鳴る。

一条のビームと共にロケット弾の群れに穴が開き、ゲイツはそこに飛び込む。挙動の遅れたバビの頭を切り捨て、視線を巡らせた。一機のバビがゲイツを援護するように突撃銃を撃っている。

「ミインター！ 作戦通りと言った!!」

「一番に補給が終了しましたので、隊長の援護に回らせてもらいました！」

輸送機からの空中補給を真つ先に終えたテルシエは、そのままウォーレンの後を追っ

たのだ。ガンランチャーの射線を掻い潜った敵の姿を、その視界の片隅に捉え続けている。正面からの攻撃をかわしながら突撃銃を側面に向けて発射し、後方モニターに過ぎた影を向けてビームを斉射した。

変形によるエアブレーキで強引にビームを避けた敵機が、ゲイツのビームライフルに撃ち抜かれる。テルシエは小さく歓声を挙げて、次の敵を見定める。水中を走った影に爆雷を投下すると、派手な水柱が立ち上った。敵艦が放った魚雷だ。

よく見えていると感心したウオーレンは、機体を旋回させる。テルシエを敵の矢面に立たせるわけにはいかない。テルシエ機を取り囲もうとするバビの動きをかき乱すようにレールガンとビームライフルを乱射した。

すれ違いざまにビームサーベルを突き刺したバビが派手に爆発し、その光が海を照らした。

「……………別の機体？」

テルシエの目が、海面スレスレを滑空するように飛ぶMSの姿を一瞬だけ捉えた。ロケット弾を回避するために機体を振ったため見逃してしまいが、まだ他にも敵がいる。

「別地点でも交戦？」

旗艦のブリッジの大型モニターに映し出された地図に、敵の予測位置が示されている。だが大量に音響物が撒かれているらしく、どこまで信用できるかはころもとな

い。しかし新たに検出された音は、戦闘音でほぼ間違いないかった。

ゲンヤ・タカツキは唇を噛む。対水中MS戦を優先したため、艦隊が大きくばらけ、進路も大きく曲げられてしまった。その曲がった先で、交戦が行われているのだという。こちらに水中MSの準備が無く、駆逐艦の一隻がゾノの近接攻撃でブリッジを消し飛ばされている以上、判断にミスはないが相手の意思には乗ってしまっている。

「ならばそのまま乗ってやろう……MS駆逐艦以外は最大戦速で、交戦ポイントへ向かう」

スカイグラスパーの一部と対MS装備を施した駆逐艦は殿として、グリーンとゾノに当たらせる。MSで艦隊に奇襲を仕掛けたという事は、防衛側の規模はそれほど大きくない。十分に足止めできるはずだ。

MSがいなければ、ボズゴロフ級とてただの潜水艦と変わらない。奇をてらう事無く、手札の数で押し切る。対潜装備と対地装備の二種類のスカイグラスパーが、次々と飛び立っていった。

「連合軍？ 聞いていないな」

機体を反転させてビームガンを撃つ。被弾し高度を落としていくスカイグラスパーの装備を、デイルクはモニターで確認した。大型の爆弾は、地上施設攻撃用である。狙いはザフトのシャトル打ち上げ基地だろう。

ザフト同士の交戦を避けて基地に接近しようとした矢先、スカイグラスパーの編隊に見つかった。しかし、よく訓練されているのか、必要以上にノワールダガーへの攻撃を行わない。敵も作戦の遂行が第一なのだ。

ペダルを踏み込みスラスターを吹かす。空になった増槽を一つページし、スカイグラスパーの編隊を狙った。彼の作戦目標もザフトのシャトルだが、連合のように有無を言わず殺害しろとの命令ではない。標的となる科学者の持つデータは、もともとブルーコスモスが持っていたものだ。コーディネーターの秘密が隠されているという眉唾物のデータだが、そういう物でもなければブルーコスモスの求心力は保てないのだろう。

レールガンの一撃で三機のスカイグラスパーが消し飛ぶ。大型の爆弾を吊るしているため、動きが鈍い。護衛の機体も、ノワールダガーの敵ではなかった。ビームガンで構え、逃げようとする機体を狙った。

「ザフト!」

「連合じゃないのか!」

スカイグラスパーを撃ち抜いたゲイツの中で、ウォーレンは苛立たしげに言う。見覚えのある黒い機体が連合機を攻撃していた。連合機の装備から、標的がトルベン・タイナートである事は予測できたが、目の前で敵対行動をとる黒い機体が何故連合機を攻撃していたのかが分からない。

テルシエ機のビームを回避したノワールダガーが海面ギリギリまで降下する。ウォーレンはそれを追った。放置するのはあまりにも危険な機体だ。味方の編隊に合流するように通信を送るが、後ろからついて来るテルシエには聞こえていないようだ。

そのテルシエ機にビームが襲い掛かる。機体をロールさせて攻撃を回避したバビは、胸部ビームで空を薙ぎ払う。それを見極めるように、ウインダムが翼下のロケット弾を一斉に発射する。

「何者なのだろうな……トルベン・タイナートという人物はー」

ラビ・アルベール・コクトーの偽らざる思いである。ザフトと連合、そして所属不明の機体が入り乱れて一人の人物を追っている。そのたった一人は、この場にいる全ての人間の命に見合うものかどうか。

グウルに乗ったゲイツがロケット弾の群れを切り払い、レールガンの正確な射撃と共に急接近してくる。引かずに踏み込み、斬機刀の一撃をシールドで受け流す。アルベールは、衝撃に耐え視線を上に向ける。上空で二の矢を放とうとしていたメイファ機は、バビの攻撃を受けてゲイツを狙えないでいた。

苛立たしげに舌打ちをしたメイファは、モニター脇のスイッチを全て押す。ウインダムに懸架されていた、対艦ミサイルと対地攻撃用大型爆弾が投下される。海面を大爆発させたそれは、もちろん攻撃を意図したものではない。

一気に軽くなったウインダムは、スラストを全開にしてバビに肉薄した。だが勢いのままに突き出したビームサーベルは、激しいスパークとともに外側へと逸らされる。

「ビームサーベル持ってたの!？」

突撃銃の下部に設置された発振機から銃剣のように伸ばされたビームサーベル。実験品だが役に立ってくれた。バビの胸部が光る。

ウインダムの足がバビの胴体を蹴りつけ、ビームの射線がずれる。シールドのビームコートが一瞬で失われるが、何とか回避できた。だが距離を取ろうとするメイファ機は、バビに執拗に絡まれる。

支援の戦闘機もいるはずなのだが、それらの攻撃の隙間を縫うようにバビは飛行しているのだ。一機のスカイグラスパーが、突撃銃の直撃を受けて爆発した。

「まだ見えてる………けどっ!」

自分の集中力が切れていない事は分かる。だが同時に、自分達の劣勢もテルシエには見えていた。自分達の脇をすり抜けていくスカイグラスパーが増えていくのだ。トルベン・タイナートの身柄を確保する前にシャトルが破壊されてしまうかもしれない。

ガンランチャーでウインダムの突進を阻み、ビームでスカイグラスパーの小隊を吹き飛ばす。

ビクトリア湖北岸に鎮座するマスドライバー・ハビリス。湖岸とはいえ、内陸部に位置するそこは、他のマスドライバーに比べて不便だと言われていた。だが、他のマスドライバーが軒並み使用不能となっている現在、ここが地球の玄関口となっている。

そのため、基地周辺での戦闘行為は厳禁である。カフネ・イーガンの確保も、特殊部隊によるものが計画されていた。カルロスの部隊は、マスドライバーから離れた基地に待機している。

「さて、何が起ころるか」

カフネの保護者を名乗った男性の名前に聞き覚えがあると思つて、後で調べてみたら赤道連合のMS戦術を構築した一人であった。特殊部隊か諜報機関、そうでなければコックの身のこなしだと思つていたが、どうやらコックにはこれからなる予定であるらしい。カルロスは、駐機場のウインダムを眺めながら一報を待った。

カフネを乗せてビクトリアにやって来た大型クルーザーを特殊部隊が急襲。そのクルーザーから現れたMSが、カフネを連れてマスドライバーに向かう。そしてそのMSで、レール上を滑走し始めたシャトルに捉まり一気に宇宙まで。そういう筋書きであった。彼の役割は、そのMSを止める事である。



サイレンが鳴り、隊員たちが色めき立つ。カルロスはヘルメットを掴んで走り出した。コクピットの機器を確認しながら、気合を入れなおす。茶番とはいえ、命の危険は常にあるのだ。

湖上を飛ぶウインダムのモニターが、ビクトリアの市街地を歩くダガーの姿を捉えた。警察や軍の車両が遠巻きにしているところを見ると、一般市民の避難誘導は終わっているようだ。

「マスドライバーは目の前だ。発砲は極力……」

言い終わる前に、上空から一条の光が差し込んだ。同時にダガーの足が撃ち抜かれ、その足元が爆発するように抉れた。衝撃波が周囲の車両を吹き飛ばし、ダガーがバランスを失って転倒する。

聞いていない、そう思うと同時に索敵を開始する。熱紋センサーがギリギリの距離に反応を捉えた。照合率は8割だが、信憑性はゼロの結果だ。後続の一機から、通信が入る。ノイズの中の声は上空のアンノウンに関する事である。

「隊長の照合結果は？」

「多分、同じだよ」

戦争の終結に伴い、宇宙から生きて帰ってきたパイロットが語る二つの恐怖。一つはジェネシスの閃光であり、もう一つは既に伝説と化しているMSだ。モニターに映った

六枚羽根のMSの姿にカルロスはかつての同僚の引きつった顔を思い出す。

ウィンダムの手を振り、部隊を散開させる。アンノウンの目的は分からないが、一箇所に固まっただけでは危険だと判断した。次の瞬間、味方の機影が三つ同時に消滅した。

視線を転じるよりも早く、シールドに直撃を受ける。防いだのではなく、たまたまシールドに当たっただけだ。その衝撃に耐え、機体の姿勢を立て直す間に、さらに一機が撃墜される。

「真実なのかよ……あの噂はー」

カルロスは怒鳴り声と共にレバーを押し込む。ヤキン・ドゥーエ宙域戦で、連合とザフトの双方に無差別で攻撃を仕掛けた謎のMS。圧倒的な機動性と桁外れの火力を持ったそれは、たった一機で機動艦隊に匹敵する数の艦艇とMSを撃墜したと言う。

フリーダムと呼ばれたそのMSの噂を今なら信じられる。ものの十数秒で、部下の半数を失ったのだ。カルロスのウィンダムがビームサーベルを伸ばす。

「お前ら、ちゃんと練習してるんだな……」

全周囲を感覚できるノーリッチ・シユナウザーは、残ったウィンダムが自分を綺麗に取り囲んでいるのを見た。肉薄してきた機体を囲にし、一瞬にして包囲を完成させた敵編隊を、ノーリッチは冷ややかに評価した。

ブレイカーよりもはるかに軽く力強く動けるこの機体に、ノーリッチの意識は完全に

覚醒している。全身の感覚がむき出しになっているかのように研ぎ澄まされ、感じるものの全てがあまりにも鈍重に見える。

目の前をゆつくりと通り過ぎるビームサーベルを見送り、フリーダムはウインダムの胴体を激しく蹴りつける。猛烈な衝撃に、カルロスは息を詰めた。

激しくぶれるモニターの中で、フリーダムを取り囲んだ四機のウインダムが、コクピットだけを正確に撃ち抜かれるのを見る。攻撃よりも早く反撃されていた。フリーダムの目が、自機を捉えた。

「終わりだ、のろま」

苦し紛れのロケット弾を撃ち出したウインダムに、ノーリツチは笑みを浮かべる。ビームサーベルでロケット弾を切り払い、ビームライフルを構える。突然、視覚の一部が欠落した。頭部への損傷が示されている。

ロケット弾の背後から投げ込まれたステイレット。ノーリツチの死角に隠れたそれは、ビームサーベルを時間差でかわしPS素材ではないメインカメラに突き刺さったのだ。フリーダムは、フルバーストを湖面に叩き込み猛烈な水柱を発生させると、そのまま急上昇して姿を消した。

その数分後、最終加速を終えたシャトルがマスドライバーから発進する。

「大丈夫だよ、その人」

「ユーラシアでも五本の指に入るエースパイロットだ、間違いはないさ」

カフネとグエンは座席に身を沈めたまま小さな声で話す。二人は変装してシャトルに乗り込んでいた。クルーザーでのビクトリア入港、そしてダガーによるシャトルへの強行搭乗は、ルーファスが流した偽情報なのだ。

カルロスは自動操縦で歩くダガーのコクピットを破壊し、カフネ・イーガンの死亡を演出するはずだった。その作戦が謎のMSの乱入によって失敗した事を、二人は知る由も無い。

次から次へと現れるスカイグラスパーに対処しきる事はできない。いや、連合のMSがそれに対処させてくれないのだ。二機のウインダムと、それが率いるジェットストライカー装備型ダガーの部隊が、ウォーレンの前に立ち塞がっている。

テルシエのバビは期待以上の働きを見せてくれているが、味方の数が少ない。基地に侵入しシャトルを拘束するための部隊を潜水空母から打ち上げてもらい、数の埋め合わせをしていた。

科学者の身柄を確保するためには、その生命の安全が最優先だ。ゲイツのシールドか

ら伸ばされたビームサーベルがタガーを両断する。

「また宇宙まで追いかけるだけだ！」

デインを撃ち抜いたウインダムに突進し、ビームサーベルとシールドを振るう。シールドの下半分が切断されたウインダムは、ロケット弾を撒いて距離を取った。

ゲイツの動きを見ながら、アルベールは上空からビームを降らせてくるバビを狙おうとする。メイファ機に絡まれながらも、対地攻撃機を優先して狙っているバビは厄介この上なかつた。だが、簡単には狙いを変えられない。

水中から撃ち出される対空ミサイルを回避し、ゲイツの攻撃をビームサーベルで受け流す。突き出された斬機刀が頭の上を通り過ぎるのを見て、背中に冷たいものが流れる。それを感じられるという事は、まだ冷静でいるという事だ。アルベールはペダルを踏み込む。

すれ違い様にデインの翼を切断し、振り向き様にステイレットを投げ付ける。ゲイツのシールドがそれを受け止めた隙を突いて距離を詰めた。

「恨めよ……」

半分になったシールドを構えて体当たりを仕掛け、ゲイツのバランスが崩れたところにビームサーベルを振り上げる。だが、詰めていたはずの間合いを外され、シールドを脱落させる事しかできない。それでもアルベールは、さらにレバーを押し込んでウイン

ダムを肉薄させる。

オートで作動した近接機関砲がグウルを損傷させた。黒煙を上げるグウルにゲイツはしがみつくような姿勢になる。

「隊長!」

「よそ見は余裕か!」

メイファはそう叫んで、残ったロケット弾を全て撃ち込む。同時にウインダムのスラストも全開にした。ゲイツの援護に向かおうとするバビは、完全に側面を晒している。ビームライフルがバビのガンランチャーを破壊し、残弾を一気に爆発させる。

だがバビは、直前でガンランチャーを放っていた。爆発の熱に引き寄せられ、熱紋誘導ロケット弾はバビから離れた場所に殺到した。ウインダムのみを狙える状況にして、バビは突撃銃を構える。ウインダムがシールドを掲げると、空気抵抗でその速度は急激に低下した。バビは即座に変形して、ウインダムを振り切る。

「隊ちよ……」

「ミントーは輸送機の護衛に付け。MSは俺が抑える」

「でも、グウルは」

「新米に心配されるほどヤワじゃない。帰る場所、ちゃんと確保しておけよ」

キーボードを叩き終えたウォーレンは、ゲイツを立ち上がらせる。姿勢制御用のスラ

スターに損傷を抱えてしまったが、バッテリー切れも近くどのみち長く戦うつもりはない。手負いを見て突進してきたダガーをレールガンで吹き飛ばし、ゲイツを上昇させる。

猛スピードで突っ込んでくるウインダムが、ゲイツの脇をかすめた。後方モーターには、そのビームを辛うじて回避したバビの姿が映る。ウォーレンは絶対に繋がるようにレーザー回線を開く。

「二度くらい、俺の言う事を聞け！」

バビが反転したのを見て、ウォーレンは安心して体重をペダルに乗せた。バビを追おうとしたダガーを撃ち抜き、正面で逃げ遅れた格好のダガーを斬り捨てる。突っ込んできたウインダムのシールドに斬機刀を叩きつけると、その反動を利用して機体を跳ね上がらせた。

ビームサーベルがもう一機のウインダムに振り下ろされる。ゲイツのサーベルは、ビームサーベルを構えたウインダムの手首を斬り落とし、そのまま腕ごと斬り裂く。しかし代わりに、ウインダムのビームライフルがゲイツの胴体を貫通していた。

アルベールが苦い祈りを口の中で唱えるより早く、ゲイツの足元のグウルがスラストを吹かす。ゲイツの爆発で機体を揺さぶられる中、アルベールはバビを追撃しようとしたメイファ機が、グウルの体当たりを受けてバックパックを失うのを見た。

既に基地に対する攻撃は始まっているのだろう。対空砲が撃ち上がっているのが見えるが、あれではどうにもならない。航空機の数が少なく見えるのは、ザフトの奮戦の結果か連合の作戦の副産物か。艦砲による攻撃がないという事は、艦艇の接近阻止には成功したという事だ。

ザフトの基地構築物がどの程度の耐久力を有しているのか、攻撃の合間を縫ってシャトルを打ち上げるだけの度胸と技量を持っているのか。ビームを回避し、デイルクはモニターを望遠にする。

打ち上げ状態のシャトルをMSで打ち落とすのは難しい。飛行能力が限定的なノールストライカーではなおの事だ。最後の増槽と外付けバッテリーをパージし、デイルクは咆える。

「来た………落として!」

「任されて!」

ガラム・ガーのkokopittoで二つの声が交錯する。パイロットの耐G限界に迫る機動で、ガラム・ガーが機体を揺する。赤熱した両の銃でレールガンの弾丸を受け取め、陽電子リフレクターが乱射されるビームガンを弾き続ける。



揺れる巨体から正確無比に放たれるビームとりニアガン。ノワールダガーの機動範囲を制限するように攻撃が撒かれる。やむなく正対したノワールダガーが対艦刀を抜いた。ガルム・ガーのクローが展開する。

「捕ま………!!」

「………らん!!」

いつの間にか握り変えていたビームサーベルが、ガルム・ガーの剣を切断している。すかさず放つたりニアガンも、フェイズシフトした滑空翼を前方に展開する事で弾かれ、カナンは盛大に舌打ちする。リニアガンの衝撃を利用して間合いを取ろうとするノワールダガーの目の前で、ガルム・ガーが噴火したかのようにスラストを吹かす。

急降下で突進を回避したノワールダガーの頭上から、ガルム・ガーの近接機関砲が降り注ぐ。機体の機動を追い回すように撃ち込まれる弾丸に、デイルクは機体を反転させて反撃を試みた。

だが、明確に死を感じ取れるようになった彼は、その無謀さに活路を見出せない。レバーを引いて機体の向きを変えた。

「落ちた!!」

「違う! 後ろだ!!」

ミコトの声にカナンが応じる。腕を後方に向けて攻撃を放つが、水柱を生む事しかで

きない。海に突っ込んだノワールダガーが再び空中に飛び上がり、ガラム・ガーの背後を取る。

コクピットが激しく揺れ、スラスターへの損傷が示された。一気に高度の落ちたガラム・ガーの頭の上を、ノワールダカーは飛び去ろうとしている。ミコトは、ブレる機体を必死に制御した。機体の揺れが止まった瞬間、彼女は叫ぶ。

「今度こそ、当てろ！」

「奥の手は……最後に飛ばすもんだ!!」

ガラム・ガーの腕が関節から外れ、ミサイルのように飛び出した。ワイヤーで有線誘導されるそれは、鋏を広げてノワールダガーを襲う。デイルクがその武器の正体に気付いた時は、既に遅かった。

ノワールダガーの腰を挟んだ鋏は、着水したガラム・ガーもろともノワールダガーを海面へと引き摺り降ろす。

海面と海中を交互に映すモニターの中、水平線に浮かんで見えるザフトの基地施設が激しく煙を上げているのをデイルクは見た。トルベン・タイナートの乗ったシャトルの打ち上げを阻止するという、彼自身の任務はとりあえずは成功だろう。だが、何の感慨も湧かなかつた。

それは、基地施設を攻撃している連合にとつても同じである。ゲンヤ・タカツキは、艦

隊の取りまとめと、帰還してくる艦載機の着艦作業を急がせる。

「てこずつたな、色々」と

スカイグラスパーを分散し小出しに出撃させるのは各個撃破の危険性を伴うが、敵に十分な数がないと読んだゲンヤはあえてその作戦をとった。結果、スカイグラスパーの多くは基地施設攻撃に成功している。

ただ、対潜水艦戦は積極的に行わなかったため、敵艦への打撃はほとんど与えられていない。ザフトの潜水艦同士が戦闘をしているという情報もあり、大量の音響デコイが撒かれていた事から攻撃も出来なかったのだ。機雷に接触して速度の落ちた艦から、乗組員の撤収が始まっている。

浮体構造物を利用した基地施設が、攻撃によつて大きく傾いたとの連絡が入った。これでシャトルの打ち上げは不可能であり、作戦は成功と判断する。後は、大西洋の大型MAの回収作業が終わるまで、警戒を怠らずに待つだけだ。

「長い………ですな」

クルーが囁くように言う。レイアウトは宇宙艦とそれほど大差ないというのに、潜水艦の圧迫感は一とおだつた。耐圧深度ギリギリで息を潜めているボズゴロフ級では、海面の連合艦が海域を離れていく音を聞き続けている。

眉間を中指で揉むようにして、サイモン・メイフィールドが微速前進を命じた。艦装

甲に張られたスケイルモーターが作動し、潜水艦の移動音を消す。

やがて海面に姿を現したボズゴロフ級は、その上部甲板のハッチを開く。MS発射筒に設置されていたのは、ロケットであった。小規模の貨物や人員を輸送するための使い捨て打ち上げカプセル。トルベン・タイナートとその研究グループは、疲れきった表情でその中にいた。

旧世紀のロケット同様に、打ち上げ時の大きなGを全身に感じながら、トルベンは自分の持つデータを巡る空虚な争いに思いを馳せる。それは、これからも続いていくのだろうと。

カオシユンにあつたマスドライバーが使えなくなり、東アジアではシャトルの打ち上げが困難になっている。大陸の内陸部や、東シナ海の島などに小規模の打ち上げ施設は持っているが、効率的とは言いがたい。

オーブの宇宙港に専用の輸送機が引き出されていく。FUJIYAMA社がチャーターしたものだ。再建中のマスドライバーより一足早く、シャトルの打ち上げ基地は稼働を開始していた。外部燃料タンクへの燃料注入が始まっている。

「夜には、打ち上がりそうです」

空港職員の報告を受け、カナデ・アキシノは出発の準備を始める。核エンジンの現物を確認するために、宇宙に上がるのだ。

自分よりもっと上、即ちFUJIYAMA社の経営幹部それもごく一部の人間が、核エンジンの現物を持つという組織と接触を続けていたのだ。自分の両親も知らない部分で、そんな重大な事柄が進められていた。あまり愉快な気分にはなれない。

ブルークコスモスが持っていた核エンジンは、ブレイカーの消失によって失われたはずである。ならば現物が存在するのはザフトだけであるが、問題はザフトの一部とオーブの一部は、戦後も密接な関係が続いているとの情報が存在する事であった。

戦中、モルゲンレーテが核エンジンを持つ機体に接触していたのは公然の秘密であり、それ以降も何らかの技術的繋がりを持ち続けているというのは想像に難くない。そこにFUJIYAMA社も絡んでいるのだとすれば、この話もどうにか納得のいくレベルとなる。

ならばそれが、なぜ全社的な方針ではなく一部の人間が秘密裏に進める話となつていたのであろうか。カナデは空港に隣接するホテルの部屋を出た。

「ブルークコスモスと同じレベルの話、なのかもね」

戦中、核エンジン搭載MSを運用していたのは、ザフトではなくその分派だったのだ。オーブの亡命政府も資金援助していたというそのザフト分派は、ヤキン・ドゥーエ宙域

戦に潜入し、連合とザフトに大損害を与えた上に、プラントのクーデター勢力を支援してクーデターを成功させた。

ブルーコスモスが牛耳っていたと陰口を叩かれる連合と同じレベルで、プラントも混乱していたのだ。核エンジンもその混乱の元凶が手にしているのかもしれない。

まともにビジネスが出来るのだろうか、彼女はそう思いながらタクシーを拾った。

「第七予備管制塔、第七予備管制塔、状況を説明されよ」

「こちら第七予備管制塔、異常無し。通常の打ち上げシークエンスを継続する」

自動音声が定型の文句を返し、カウントダウンの数字は順調に減り続けていく。画面には異常を示す複数の警告が表示されているが、キーボードを操作するたびにその警告は消えていく。モニターに映し出されているのは、滑走路に引き出された小型のシャトルであり、そのシャトルに乗り込んでいるオイレン・クーエンスの顔である。

シビル・ストーンは別の画面を呼び出すと、シャトルの軌道計算を再度行う。修正結果をシャトルの自動操縦装置に転送し、笑顔を見せた。

「大丈夫、間違いなく上がるわ」

「ああ、ありがとう」

そつけない言い方であっても、彼の口から感謝の言葉が出てくるだけで十分だった。別の管制塔から繰り返し入ってくる通信を聞き流し、管制塔の機器を停止させようとする外部からの干渉を排除する。

二人は、大洋州から再びカーペンタリアに舞い戻っていた。オイレンを再び宇宙に上げるためである。シビルは、彼に頼まれた事を異常な確さでやってのけた。

偽の整備指示書や配置転換命令書をシステムの中に紛れ込ませた。それを使って彼が乗るためのMSとしてゲイツRを調達し、打ち上げのためのシャトルを準備した。基地の警戒網をくぐってオイレンをカーペンタリアに潜入させた。彼を自室に匿って時を待った。別のシャトルの着陸時間に合わせる事で、滑走路の封鎖などが出来ない日時を探った。そして今、普段は使われていない管制塔に忍び込んで、打ち上げの最終段階に入っている。

自分でも驚くほどに色々な事が出来るようになっていた。何事にも目立たず、ただ周囲に溶け込むように過ごしてきた今までとは、何もかも違った。自分の考える事の全てがエキサイティングであり、感じる事の全てがスリリングだった。

毎夜囁かれる「お前だけが頼りなんだ」というオイレンの言葉に、幾度と無く絶頂を味わった。そのたびに、生まれ変わったような感覚を覚えた。

いや感覚ではない、事実として生まれ変わったのだ。モニターの中で細かな機器の

チェックを行っているオイレンの顔を見つめながら、シビルは表情を緩ませる。壁のスピーカーが警告音を鳴らす。

舌打ちをしてモニターを切り替えると、武装した兵士が管制塔のドアに取り付いたのが見える。カウントダウンの数字を確認して、キーボードを操作する。管制塔の出入りのロックが固定された。バーナーや電動カッターを用意しているようだが、発射まで十分に時間は稼げるはずだ。

「大丈夫なのか」

「ええ、心配しないで」

モニターを見つめ、そこに切なく手を伸ばす。再び計器の方に向かった彼の視線は、彼女から外れるが、彼女の視線はじつと彼を捉えていた。カウントダウンの数字が色を変えらる。

オイレンはモニターを外部に切り替えた。遮るものがない滑走路が彼を迎えている。デジタル表示がゼロを指し示し、計器が一斉動き出す。振動と加速度が、ゆつくりと伝わってくる。

自分を切り捨てた連中に、自分の力を見せ付ける。そのために宇宙に上がるのだ。はしゃぎ出したい気分を抑えてオイレンは打ち上げの慣性重力に備える。切り忘れた通信機から、激しい銃声が聞こえた。オイレンは通信機を切る。



滑走路を飛び出したシャトルは、着陸態勢に入ったシャトルとすれ違うように上昇していく。このシャトルの存在は、先に準備されていたプログラムによって正規の打ち上げ便にすり替えられ、彼の身分は用意された偽のIDカードによって誤魔化される事になっていく。

オイレンはただ一点、宇宙を見据えていた。

## 第九部

「寂しかったよお、どこ行つてたの？」

「くつつくな、もう。ダーウインに用事があつたの」

べたべたと抱きつくテルシエに閉口しながら、ユウキは自転車を止める。空になったクーラーボックスを事務所に置いて、冷蔵庫に入っていた水をコップに注ぐ。ニヤニヤとそれを眺めているテルシエを睨んだ。

「何？」

「髪、伸ばしてる。長袖と長ズボン、着てる。ちゃんと、コップに入れて飲んでる」

「………だから、何よ」

「ユウキつて、そんな子だったかなあつて」

初めて会つた時のユウキ・ナンリは男の子だったけど、今目の前にいるユウキ・ナンリは女の子だと、テルシエは茶化すように言う。ユウキが投げ付けた飴玉を受け止めると、包み紙を開いて口に入れた。

「ね、遊び行こうよ」

「仕事は？」

「非番。ちなみに明日は遅番」

ユウキの返答を聞く前にテルシエは彼女の手を取っていた。彼女を自転車に跨らせ、後輪横のステップを広げる。自転車は二三度蛇行してから、ゆつくりとスピードを上げ始めた。工事の喧騒から遠ざかるように、居住ブロックの方へとハンドルを向ける。

吹く風が二人の髪を揺らす。ユウキは視線を上に向け、テルシエの言葉に耳を傾ける。

「兵役期間が終わったら一緒に旅行しようよ、地球一周」

「一周？」

「コースは任せて。ばつちり考えてあるから」

そして生魚は大丈夫かと聞く。ユウキはそれには答えず、自転車の速度を少しだけ緩めた。視線を真つ直ぐ前に向けたまま、テルシエに何かあったのかと聞く。はしやぎ方に、無理があった。

「……別に？ どうして？」

「ならいゝ」

それ以上は追求しないユウキは、自転車のスピードを上げた。再び風が頬を撫で始める。テルシエは快晴の空を見上げた。

あの時、バビは推進剤もバッテリーの危険域に入りつつあった。ガンランチャーは失

い、突撃銃も一連射分しか残弾が無かった。ウォーレンは、それが分かっていたから戻れと命じたのだ。輸送機の護衛と言ったのは、彼女の性格を考えてであろう。

だが、バビの状態がそうであるという事は、当然ゲイツも戦闘継続が難しい状態だったはずだ。その上、グウルは被弾までしていた。

戦場における個々人の生死の責任は、最終的にその個々人の責任に帰すものだとかアカデミーでは教わった。ウォーレンであれば、きつと同じ事を言うだろう。

だが彼は、わざと死地に飛び込むような無謀なパイロットではない。部下を守るために自らの命を張ったとしても、自ら命を落とす真似はしない人物だ。

だからこそテルシエは、彼の死に関わっているのではないかと感じてしまう。自分の勝手さ無謀さが、結果として彼の死を招いたのではないか。そう感じてしまう。

きつと、これが戦争なのだ。明後日、再び宇宙に舞い戻る彼女はそう思う。

状況を鑑みれば、新型機の稼動試験などではないことは分かる。だから、ウインダムばかりが集められた部隊というのは、普通ではない事態が起こっている事を示している。連合各国で試験中だった機体が、かき集められているようだ。数にして三十はあるだろう。ランデブーポイントである低軌道域で、各国の艦が隊伍をそろえつつあった。

「久しぶりだな、中尉……少し、化粧が濃いかな？」

「セクハラです、アストウリアス少佐」

敬礼を返しながらそう言った女性に、カルロスは肩をすくめる。メイファが体を流していく先に視線を送り、もう一度肩をすくめた。

「なるほど、真面目なのが好みか」

歯を見せて笑ってみせたカルロスに、アルベールは怪訝な表情を見せる。先ほどのメイファの言葉を聞くからに、彼はユーラシアのエースパイロットなのだろう。だが、アルベールに面識はないはずだ。

旗艦となった大西洋連邦のアガメムノン級には、各国のパイロットを集まっていた。正式な作戦目標が伝えられるのだ。アルベールはじやれあっているカナンとミコトを呼び、メイファを伴ってブリーフィングルームに足を向ける。

艦隊の目標は旧世界樹宙域、作戦目標はユニウス条約違反のNJCを搭載したMSを破壊する事であった。そのMS・フリーダム映像が映し出されると、ブリーフィングルームの半数から、どよめきのような声が聞こえる。戦中に宇宙を経験した事のあるパイロットは、皆その姿を知っていた。

敵基地の位置や、フリーダム以外のMS隊の規模など、いくつかの情報が提示されていく中、話に割り込むように手を挙げたものがある。

「ユーラシア連邦軍イベリア半島防衛軍戦技教導隊のカルロス・アストウリアスだ。まず肝心な事を教えていただきたい。敵は何者です？」

ブリーフィングルームの注目を一身に浴びながらカルロスは悠然と、部隊指揮官を見据える。部屋のただならない緊張感に耐えかねるようにカナンが小声で言う。

「ザフト、じゃねえの？」

「……ザフトなら、これは戦争になる」

ミコトが合っているかと確認するようにアルベールを見た。彼は黙って頷く。もしザフトが条約違反のMSを運用しているのなら、正規の外交ルートを通じて抗議すべきであろう。このような形で軍を動かすという事は、敵はザフトではないという事だ。

「私事で恐縮だが、つい先日このMSと交戦した。ビクトリアでな。8機のウインダムが一分もたなかつた……もつとも、それをもってユーラシアが白だと言うつもりもないが」

司令官が視線を落とした。そしてしばらくの後、確定的な情報ではないと前置きして、敵組織の正体を伝える。怪しげな陰謀論めいた話であるが、それを一笑にふせるほど、今の世界は常識的ではなかった。

静かになったブリーフィングルームで、再び作戦概要の説明が始められる。

集まったパイロット達がゾロゾロと部屋を出て行く中、大きく伸びをしたカナンがミ

コトに聞く。何故破壊なのかと。

「だって、凄いエンジンなんだろ。だったら壊す必要ないじゃん」

「君がそのエンジンを持ち逃げするような真似をしたら、私は容赦なく撃ち落す」

その冷たい声に肩を震わせたカナンは、ミコトに隠れるようにメイファを見る。困った顔をしたアルベールが、三人に部屋を退出するよう促した。メイファの言う事は、そのまま正しい。

各国の混成部隊なのは、どこかの国がNJC技術を独占しないよう相互監視させるために他ならないのだ。連携が取れるようで、決して取る事のできない戦闘になるのだろう。アルベールの憂いの瞳は、ようやく椅子から立ち上がったカルロスの姿を捉えていた。

地球とプラントを結ぶ直行便など無い。政府関係者なら、ジブラルタルやカーペンタリアからプラントに向かえるのだろうか、そうでない場合は月の中立都市を経由するか大洋州所有の施設を経由するしかない。カフネとグエンは、入国審査が比較的緩やかな前者の経路を使ってプラントを目指していた。

以前に自分がプラントにやって来たのもこの経路だったと、グエンは窓の外に煌き出

した砂時計形コロニーを見ながら言う。カフネとはその時以来、ずっと行動しているが、色々な事がありすぎてあつという間のようを感じる。

そのせいも、隣で寝息を立てている女の子を養女に迎えるという決断に、感慨すら湧かない。世界を左右しかねない情報をその頭の中に持つという女の子が、地球の片田舎で食堂のウェイトレスをやるようになるのだ。

「戦争つてのは、そうやって終わるべきもんだろうに」

カフネの頭をそつと撫で、グエンは月で受け取った封筒を開ける。ルーファス・リシュレークからのそれは、ピクトリアでの偽装工作が失敗し、二人がプラントに向かった事が露見したと記されていた。さらに、ユーラシアもプラントでは下手な動きが取れないだろうが、カフネはプラントからも狙われている可能性があると指摘している。

カフネの両親がそうされたように、彼女自身も口封じされようとしているというのだ。核エンジンの技術が流出する事はプラントとしても看過できないのだろう。グエンは奥歯を噛み締める。

追いかけてくるアルテシアと合流し、今度こそカフネを狙う者達の目を完全に欺かなくてはならない。

会社の経営権は奪われたが個人資産は十分にあると書き加えてあるルーファスに期待する事にした。あの手の金持ちは、こういうことでもない限り自分の金の使い道がな



いのだろう。

「ほら起きろ、シートベルト締めるんだ」

カフネの肩に触れたグエンが言う。プラント入港の時刻となり、客席にシートベルト着用のランプが点った。

噂は聞いた事がある、映像も見た事がある。核エンジンの現物として目の前のハンガーにそびえているMSは、その筋では有名なMSだ。カナデ・アキシノは、しばらくの間それを見上げ続けていた。

ザフトからオーブへと極秘で輸送された核エンジンは、モルゲンレーテの手で修復されているというのが、カナデの手元にある情報だ。モルゲンレーテが発電事業に乗り出すという話は、FUJIYAMA社の重電部門でも入手しておらず、オーブの核エンジンはMSに転用されたとかナデは推測していた。

すると、目の前にあるMSはオーブから極秘で打ち上げられたものなのか、それともまったくの別物なのか。

「オーブのエンジンは、さる御方の預かりという扱いだね」

カナデがゆつくりと視線を動かすと、ノーマルスーツでなくパイロットスーツを着た

女性が寄って来るのが見える。よほどプロポーションに自信があるのだろう、共同訓練の時もきわどいドレスを着ていたのを思い出す。カナデは何も言わずに、ユイ・タカクラの次の言葉を待つ。自慢話は、聞かない方が色々としやべつてくれるものだ。

「NJCに、いくつもの希少元素が使用されている事は、知っているでしょう？」

そのうちのいくつかは、アステロイドからの産出が困難であった。それは即ち、プラントはNJCの製造数に限界があるという事である。核ミサイルへの転用が出来なかつたのは、NJCを使い捨てられないからだ。

ユイがプラントで製造可能なNJCの数を言った。二桁に過ぎないその数字を、適当に言ったと考える事はできる。だがカナデは、その数字が正確だと感じた。この女性の自信はハツタリなどではない。

さらに、彼女のいる組織はその貴重なNJCをオーブに降ろしたエンジン用の一基を含め、複数保有しているという。目の前にあるものは、そのうちの一基だった。核エンジン運用試験のために、MSに積み込んでいるのだ。

「近いうちに必要になるわ」

「必要……ですか」

手元の資料を眺めながら、カナデはつぶやくように言う。自分の会社が関わっているのでなければ、こんなものを信じる気にはなれなかつただろう。彼女は薄ら寒いものを

感じた。核エンジン搭載型MS二機に、戦略兵器級の武装モジュールが二機。どれも正規の手段で入手したものではないはずだ。

ザフトが秘密結社から始まったという話は、つまりこういう事なのだろう。連合の目を盗んで武装化を進めたザフトは、自らの目の届かないところで武装化を進める秘密結社によって潰される運命なのだ。

まだ何かしゃべっているユイを無視するように、カナデはその場を離れた。自分がただの技術屋を出来るような世界は、まだずっと先だという事だろう。変形状態で係留されている愛機に、汚れ仕事はさせたくないと思う。

ステーションに設置された郵便局のドアを出て、天井の電光掲示板を見上げる。船の出航時間が迫っていた。ディルクは床を蹴ってリフトグリップのある壁まで飛ぶ。連合加盟国所有の資源衛星を回る輸送船に偽装した船で、彼は旧世界樹宙域へと向かう。インド洋での戦闘をどういうわけか生き延びていたトルベン・タイナートを再び追いかけるのだ。彼の持つ「ジョージ・グレンのレシピ」なるものは、コーディネーターの存在基盤そのものを否定せしめると、幹部連中は言っていた。

そんなものがなければコーディネーターを否定できないのであれば、ブルーコスモス

も終わりであろう。デイルクは、ただ乾いた思いを持つだけである。

「青き清浄なる世界……か」

ステーションの窓から見える地球は、その言葉通りのように見える。だがその姿は、人が生まれる前からそうであり、人が滅んだ後もそうであろう。その言葉は厳然たる事実であり、それ以上の意味は持たない言葉だ。

いつ頃からだろうか、こんな乾いた思いを抱くようになったのは。最近になって、急にそんな事を感じるようになった。コーデイナーターやプラント、そして自分自身の出自に対する憎しみに虚しさのようなものを感じるようになっていた。リフトグリッブを離し、搭乗ゲートをくぐる。

船の乗組員は既に準備を整えており、時間通りに出発できるようになっていた。搬入されたばかりの積荷についての資料を受け取る。

「I W S P か。ウインダムとのマッチングは？」

「大西洋軍の純正品だ、問題ない」

ダガーとノワールストライカーの組み合わせよりは期待が持てそうである。それでも、整備員が言うようなパワーエクステンダーによって稼働時間が他のMSの1.5倍になるといふ話には信用を置かないことにする。

せめて慣熟運転くらいはしておきたいと思うが、それが出来る場があるかどうか。船

長にその旨を伝えておくと、とりあえずはシミュレーションを繰り返す事にする。生きて帰るのならば、わずかであっても出来る事をしなくてはならない。

「納得のいく説明をしていたきたい」

姿勢を正したサイモンは、あくまでも穏やかな声ではつきりと言った。命令を忠実に実行するのが良き軍人だというのなら、今は不良軍人で構わないと思う。カーペンタリアではトルベン・タイナートを宇宙に脱出させるという命令を受けた彼が、宇宙に上がった途端、トルベン追撃の任務を命じられたのだ。

完全に矛盾した命令に、彼の忍耐も限界を迎えていた。遊びでやっているのではない、実際に部下は失われているのだ。サイモンの眉間の皺がこれ以上深くないほどになった頃、ようやく司令官が口を開いた。

プラント内部における、議長派とクライン派の対立がその原因なのだという。

アイリーン・カナバのクーデター政権を引き継ぐ形となった現議長は、前政権と同様に連合との緊張緩和や地球における現地勢力との関係強化など、現実主義的な政策を推し進めている。

一方、かつてのオーブ亡命政権や地球の宗教指導者との関係が強かったクライン派

は、その現実主義的路線に批判的であり、指導者たる人物がプラントに不在である事から原理主義的性向を見せ始めていた。ザフトはこの二つの勢力に分裂しているのだ。

「その科学者の研究は、クライン派にとつては都合の悪いものらしい」

議長派の多い地球ではトルベンを逃がす任務が与えられ、クライン派の多い宇宙では逆の任務が与えられるのは、それが理由であった。サイモンは、姿勢も表情も変えずに司令官を見据える。

司令官は確かに理由を語った。だがそれは納得のいくものではない。プラント内部でコーディネーター同士が対立してどうするのだろうか。そんなサイモンの言葉に、司令官は「ヤキンの時からそうだった」と自嘲した。ミーティアに破壊された僚艦の姿を思い出し、サイモンは口をつぐんだ。

断つてくれて構わないという司令官の言葉に聞こえないふりをして、サイモンは司令官の前を辞した。ローラシア級3隻、ナスカ級1隻からなる艦隊は、今のザフトで考えれば決して小さくはない。艦載機は新型のゲイツRのみであり、力の入りようが分かるというものだ。

「問題は、パイロットだな……」

ザフトの制服を着崩したオイレン・クーエンスが、デツキを眺めながら愉快そうに言う。首尾よくザフトに潜り込んだ彼は、早速の仕事に浮き立つ心を抑えられないでい

た。新型機で編成された部隊だ、パイロットにもそこそこの人間を持つてくるだろう。そして自分は、そんな連中をぶっちぎるのだ。彼は堪えきれずに笑う。

整備員のノーマルスーツに他に、パイロットスーツがデツキを行き交っている。めいめに自分の機体に取り付いていく姿を、オイレンは期待をこめて冷ややかに見る。ルーキーっぽいのも何人か混ざっていたが、面構えはそれほど悪くなかった。少なくとも数度の実戦は経験してきている顔だ。

出港時間が決まり、デツキでは各パイロットが最終調整に入っていた。その中の一人、テルシエ・ミンターの目はコクピット内を走る事無く、そこにある全ての計器を読み取っている。

彼女がこの部隊に志願したのは、その追撃対象が因縁深い相手だったからだ。仇討ちのようなアナクロな事を考えているのではないしそもそも筋違いだ、この機会をみすみす逃す事は彼女には考えられなかった。

ゲイツRのモノアイが強く光る。

文字通りの連合艦隊であるため、通信や信号弾の統一、指揮系統の確立、文書類の書式のすり合わせまで、打ち合わせは多岐に渡った。これは、今後の対プラント戦争を見

据えた、連合軍の運用試験という側面も持つのだろう。一服のコーヒーをすすりながら、カルロスは大きく伸びをした。

自分の年齢を考えれば、パイロットを出来るのもこれが最後になるかもしれない。そうしなければ、あとはこういう書類仕事をしなくてはならなくなる。退役してもらえぬ僅かな金では、家族を養うだけの畑は買えそうにない。

「結婚もせにやならんしな……そう思うだろう、ラビ」

カップを返しに食堂に来たアルベールは、いきなり話しかけられて面食らう。眼鏡の奥で子供のように目を細めるカルロスの顔に、確か自分より年上だったはずだと思う。どう対応していいか分からず、困惑の表情を浮かべたままのアルベールに、カルロスは真剣な顔で言った。

「リン中尉のような女性を見事撃墜されるラビには、ぜひともその秘訣を教えてくださいませんかねば」

「……申し訳ないが」

アルベールは薬指を見せた。カルロスはさらに居住まいを正す

「既婚者は即ち、人生における上官であります」

これにはアルベールも吹き出さずにはいられなかつた。カルロスは立ち上がり握手を求めた。そして周囲を見渡して、食堂から出るように促した。本題なのだろうと、ア



ルベールは気を引き締める。

MSデッキの脇にあるパイロット用の控え室で、カルロスはアルベールに向き合った。アルベールは聞く。

「私に、何か？」

「いや、何ってわけじゃない。あのデカブツをやったのがラビだって話を聞いたものでな」

今回集められたパイロットの中で、一番信頼の置きそうな人物とは、個人的にも繋がりを持っておいの方がいい、それがカルロスの考えだった。通信の利かないMSでの戦闘で、とっさの時に誰を頼って誰のために動くか。命令やルールで、体は動いてくれな  
いものだ。

少なくとも、今から自分達が相手にしようとするものは、あの巨大MSよりはるかに強い。だからこそ、優れたパイロットとの関係は重要になってくる。

「フリーダム、それほどの性能ですか？」

「初見だから手が出なかった。そう思いたいがね」

ジブラルタル奪還の功労者とまで言われるパイロットの言葉である、誇張はないであろう。アルベールは、軽く唇を噛む。カルロスは胸のポケットに手をつ突っ込んで、小さな板を取り出した。

ビクトリアでの交戦データ。僅か数十秒のデータであるが、ユーラシア軍が公開していないものだ。それを受け取ったアルベールは、カルロスに無言を送る。下手をすれば罪に問われかねない行為だ。

「そういうレベルの敵じゃなかったって事さ。リン中尉や、お子様二人にも見せてやってくれ」

本当なら大々的に配りたいところだが、そうすれば自分が出撃できなくなるとカルロスは笑う。頭を下げようとするアルベールの肩を叩き、カルロスはその場を立ち去った。

彼女の手の中にある小さな箱の中には、カフネの両親の遺髪が入っている。プラントでは、遺体は高度循環処理が行われるため遺骨のような物は残らない。その軽さを見つめる沈痛な表情に、グエンは掛ける言葉を探す事をしない。

設計事務所と住居の整理をして、わずかな遺品を地球に送る手続きを終えた頃、アルテシアがプラントに入った。ビクトリアでの隠蔽作戦が失敗したため、次の作戦を携えている。ルーファスが用意した様々な装備品とともに受け取り、グエンとアルテシアは最後の打ち合わせを行う。

「パリの方は、こちちらに手を出せない状況です。ですがそれとは別に、全く異なる組織も動いています」

「カフネの親をやった連中か？」

「はい。ビクトリアでの作戦に介入してきたのも、その組織です」

グエンは核エンジンの技術漏洩を嫌うプラント当局の差し金かと思っていたが、どうやら全く別の組織のようだ。プラントでも地球でも自由に活動できる組織、ある意味各国の政府当局よりもたちが悪い相手だった。

「だが、それだと若社長には関わりのない話にならないか？ 彼を蹴落としたのはパリの連中だろうか？」

「これはカフネさんに対する我々の責任です」

感心したという表情のグエンに、彼はそういう人ですとアルテシアがつぶやくように言う。今は、ビジネスマンである事を優先しなくてもいいのだから。

二人の間の事に口を挟むのは野暮と、グエンは用意された装備の確認をする。宇宙での活動は危険性が格段に上がる。それだけに、装備のチェックは念入りに行う必要があった。

しかし、これだけのものを個人資産でどうにかできるといふ事に、笑いすら出てこない。レストランの開店資金に頭を悩ませる自分のような庶民とは、別次元の世界に住ん

でいるのだろう。

「MSの価格は大幅に下落しているんです、ジャンク屋を野放しにしているから」

そんな考えを読んだのか、アルテシアが解説を入れた。デブリ回収業者による放置軍資産の横領や横流しが横行しており、その影響で中古MS市場という兵器のリサイクルマーケットが生じているのだ。コズミック・イラは、金さえ出せば個人で大型兵器を所有できる時代である。

つい半年ほど前まで自分が連合の最新鋭兵器として乗っていた機体が、値引きの札を貼られて売りに出されているのかと思うと、世も末だと感じる。そんな世界だから、少女を追い掛け回して平然としていられるのだ。

心配そうな表情のカフネが顔を出した。グエンは歯を見せて笑う。子供が味わうべきではない苦勞を散々味わってきた彼女に、今度こそ子供が味わうべき世界を提供してみせなくては大人として情けない。

手荷物の確認をさせて出発の準備に取り掛かった。

かつて世界樹と呼ばれたプラント群のあつた宙域は、現在デブリベルトとなつて月と地球の間に横たわっている。前大戦時に、ザフトと連合が初の大規模艦隊戦を行った場

所であり、そこにあつたプラントの多くは破壊され無残な姿のまま漂つている。

構造物の残骸など比較的大きなデブリが多く艦船による航行が難しい場所であり、ユニウス条約でも抜本的な対策が講じられる事無く、放置されている。海賊などの武装勢力の格好の隠れ家と目されているため警戒はされているのだが、それも外縁部を偵察艦が定期的に回つている程度であつた。

その旧世界樹宙域の最奥部の『施設』にトルベン・タイナートは降り立つ。流石の彼も、こんな場所にこんな施設が建造されているとは思ひもよらなかつた。思う存分研究が出来ると考えるより、その背後関係の不気味さに身震いする思いだ。

「量子コンピュータ……どれだけの数です」

「まだ半数が搬入されただけです」

案内をする人間が何事もないうな口調で言う。プラントの新政策の要となるべきこの施設はまだ建造途中であり、その内部もまだ完成には至っていないという。見渡す限り量子コンピュータの躯体で埋められた部屋を眺めながら、これを何に使うのかがいまいち分からない。

ジョージ・グレンのレシピと何らかの関わりを持つ物なのか、それとも全く別の研究のために自分が呼ばれたのか。施設の奥にある部屋に通され、施設の責任者と会つた。世情に疎い自分でも、その長髪政治家の事は知っている。そう言えば、彼の専門も自

分と同じような研究だった。

「タイナート博士、色々にご苦勞なされたとお聞きしました」

「その点に関しては、プラントに言いたい事もたくさんあります」

丁寧だが自信に満ちた物腰の男性にそう言うと、トルベンはソファアに腰をかける。

ジョージ・グレンのレシピとそれに関わる研究。ブルーコスモスが有していたという噂のそれをトルベンに託した最初のクライアントは、プラント内の組織を名乗りながらプラントから追われる身でもあった。しかも研究の途中でクライアントは方針を変え、トルベンの命を狙う側に回った。

ザフトにもトルベンを追う者とそれを保護する者がおり、彼も状況を正確に把握できているわけではなかった。目の前の男は、プラントを統括する者としてその不手際を詫びた。同時に、プラントの各勢力を十分に掌握できていない事を率直に認める。

「博士にデータを渡した組織、彼らが欲していたのは最高のコーディネーターの正確な能力です」

ジョージ・グレンの遺伝情報と彼の能力の相関関係から、最高のコーディネーターと呼ばれる存在が発揮しうる最大限の能力を把握しようというのが目的であった。そのデータはおそらく、新型MSへとフィードバックされるのだろう。

「私は博士に、ジョージ・グレンの遺伝情報とその業績の関係を調べていただいた」

遺伝情報と社会的業績の間に存在するある種の相関関係をもとに、職業などの適正を判定する事が可能な場合もありうる。確かにトルベンはそのような結論を出していた。だが彼はつまらなさそうに言う。

「どつちも発現畑の領域だ」

ゲノム畑の自分には、本来興味のない分野だと。トルベンが探す物は極論を言えば人ではなく遺伝子であり、彼が求める物は極論を言えば世界ではなく神である。コーディネーターという人の作った遺伝情報、ナチュラルという自然に作られた遺伝情報、それらに隠されている「神の設計図」を見つけ出すのが彼の研究分野だ。

男は、それは十分に承知していると言う。さらに、その研究に全面的な協力をすることも言った。もちろん、施設の本格的な稼動に向けた協力を行ってくれるのであればという条件付きであるが。

トルベンは出された紅茶に口を付ける。目の前の男の権限を考えれば、身の安全はとりあえず保障されるはずだ。あの大量の量子コンピュータを使用できるといいうのも魅力的であった。

だが、あれだけ危険な目に遭ってくれば、警戒心というのはどうしても強くなる。近いうちに返答するとだけ言って、トルベンは部屋を後にした。

計画は順調に推移している。これも組織の力の一端と云ったところだろう。ユイ・タカクラはパイロットスーツの気密を確認し、MSデッキに飛び出す。

トルベン・タイナートが宇宙に向かうタイミングで連合の部隊をけしかけたのは、その足取りを追うためである。ザフトが使用する秘匿航路を使用されれば追う事は難しいが、宇宙への打ち上げを優先せざるを得ない状況を作り出せば、追跡は容易になる。彼の行き先が、組織が全力を挙げてその行方を追っている『施設』である事は予測済みであった。

その『施設』の場所を特定する事に成功し、その情報をトルベン・タイナートの生存と共に情報をプラントへリークしたのは、『施設』破壊の手駒としてザフトを使うためである。同時に、核エンジンの偽情報を連合に流し、連合の追跡部隊も『施設』へと向かわせた。

「核に関しては100%ウソではないものね」

いくばくかの守備隊はあるだろうが、ザフトと連合の双方に攻撃目標として定められれば、持つはずもあるまい。念のために、フリーダムもそちらに向かわせる事としている。

もう一つの懸案事項だった核エンジンに関しても目途が立った。連合には核エンジ



ンの安定起動に必要な技術は渡っておらず、プラントでも組織への技術者引き抜きはあらかた終わり、引き抜きに応じない人間の処理は数名の逃亡者を除けば完了している。これで核エンジンに関する技術は、組織とそれに協力する企業が独占する事になる。

彼女はこれから、数名の逃亡者の一人、カフネ・イーガンの追撃任務に移る。組織より早く別の勢力が接触していたため、なかなか手が出せなかったのだ。だが少し情報を漏らしただけで、ノコノコとプラントまで出てきた。

「気持ち良いくらいに計算通り……か」

ユイの乗るオーブ宇宙軍の軍艦は、ジャンク屋の母船のような外見に偽装して、コペルニクスを出港していた。コペルニクスの中立など題目に過ぎず、月におけるオーブ宇宙軍の母港というのが実態であった。

本国に比べて大西洋の監視が緩いため、アスハ派などの反政府勢力の拠点ともなっている。当然、組織がそのバックアップを行っていた。オーブ軍を使用できるのも、そういう繋がりがあるからだ。

艦はカフネ・イーガンを始末した後、その足で旧世界樹宙域に向かう予定である。

ブリッジから回されてきたデータをコクピットに映し出しながら、発進のタイミングを計る。艦の望遠カメラが捉えたのは中古の輸送船。現在カフネ・イーガンの援助を行っているのはユーラシアの元企業家らしい。おそらくは、あれも個人名義の船なのだ

ろう。

カタパルトのシグナルにグリーンが点った。ユイが力を込めようとした時、アラームが鳴る。輸送艦以外に複数の熱紋が確認されたのだ。

「ま、これくらいのアクシデントがないと、気持ち悪いものね」

ユイはブリッジに連絡して発進手順を再開させる。熱紋の正体がザフトであれ連合であれ、カフネ・イーガンが保護されるような事になつては厄介だ。宇宙用に換装されたムラサメが、航空機形態で艦を飛び立つ。

輸送船が発光信号を出しながら、近づいてくるナスカ級との距離を縮めていく。

ザフト艦隊は旧世界樹宙域に向かう途中で連合船籍の艦を見つけたためその船に停止を命じたのだが、素直に従うところを見ると犯罪者の類ではないのだろう。サイモン・メイフィールドは、輸送船の検査を一隻のナスカ級に任せて艦隊を進めさせた。ナスカ級の足であれば、ローラシア級が先行しても追いつけるはずだ。

「航行システムの故障かなんかみたいだな」

警戒のために発進したゲイツRの中で、雑音交じりにブリッジからの声を聞く。そんなものかと思ひながらモニターに視線を戻したテルシエは、一瞬だけ何か光るのを見た。とつさに警戒の信号弾を打ち上げる。

見えた光が走った方向に、レールガンの弾種を散弾切り替えて発射した。閃いた光は

ミサイルの爆発。輸送艦が囷である可能性が生じ、ナスカ級が高速で後退を始める。同時に他の艦載機の発進も行われた。

四機のゲイツRが輸送艦を取り囲むが、直上からのビームで輸送船が揺れる。ゲイツのセンサーが捉えるのは正体不明の航空機。

「MS!?!」

ビームを放った航空機が人型に変形すると、輸送船から黒いウインダム姿が現れるのは同時であった。一瞬にして敵味方の識別が不可能になる。それでも散開して攻撃に備えようとしたゲイツRの中の一機が、ビームの奔流に飲み込まれた。そのビームは、輸送船に止めを刺そうとしたムラサメの足も止める。

「あれは間違いなく連合機です!!」

テルシエは通信機に怒鳴りながらビームライフルを連射する。巨大な缺付きの腕をつけた異形のMAがスラスト炎を盛大に光らせながら突っ込んでくるのが見えた。

ガラム・ガーのkokピットの中では、カナンの視線がスコープの中をめまぐるしく動いている。ムラサメを狙おうとしたのだが、あの黒く塗られた機体には見覚えがあるような気がした。I W S Pを装備しているが、味方という雰囲気ではない。だがミコトが機体を振ると同時に、ターゲットをムラサメに戻す。

二人は宇宙での慣熟飛行を兼ねた偵察任務中に、ムラサメの姿を発見し攻撃を仕掛け

たのだ。これまでの事から、ムラサメが敵対勢力である事は間違いない。

リニアガンを乱射させながら、カナンは反撃を始めたゲイツRの動きにも視線を飛ばす。それに連動して近接機関砲が作動し、陽電子リフレクターはビームライフルを弾いていく。

「ラビには怒られるな」

「カナンは巻き込まれただけだ。これは私の独断に過ぎない」

「いいって、一緒に怒られてやるよ」

ガルトム・ガーから伸びる二条のビームをムラサメがすり抜ける。そのまま変形してスラストの向きを変え、強引に制動をかけてゲイツRのレールガンを避ける。激しく動くモニターの中に、ユイはじっとたたずむインダムの姿を見つけた。

カフネ・イーガンの護衛にMSがいるとの情報はあったが、まさかインダムとは想定外だ。輸送船を守るように、その甲板の上で周囲の機体全てに殺気を放っているかのようだ。

ゲイツRが周囲で戦闘を行っているためナスカ級からの艦砲射撃はなく、このまま輸送船を射程距離圏外まで移動させれば良いと考えているのだろう。ユイはロケット弾をガルトム・ガーの陽電子リフレクターに命中させて煙幕代わりとする。変形したムラサメが、周囲のゲイツRを振り切ってインダムに肉薄した。

「………黒幕か」

ムラサメのビームサーベルをビームサーベルで受け止めさせ、デイルクは呻くように言った。連合とプラントの背後で、何らかの意図が働いているような動きがある事はブルーコスモスも掴んでいた。それが何者かは分からないが、連合でもザフトでもブルーコスモスでもない勢力がこの場にいるのなら、それが背後に見え隠れしていた何者かであろう。

航行プログラムの不備という通信をあつさり信じたザフト艦は、輸送船の正体を知らず偶然発見したに過ぎないのである。だがこのMSは撃沈を狙って攻撃してきた。つまりこちらの正体を知っているこという事だ。再度突撃してくるムラサメに、ウインダムのレールガンが咆哮した。掲げたシールドは、ゲイツRのビームを弾く。

周囲の機体は全て敵であろう。だからまず、明確に自分を狙ってくる敵を把握する。対艦刀をムラサメのシールドに叩きつけるようにして弾き飛ばし、返す刀がミサイルを斬り払った。MAの注意が自分に向かってこないのは好都合だ。

「速くたって!!」

テルシエの声とともにゲイツRのビームがガラム・ガーに殺到した。同時に、変形制動を繰り返すムラサメに機体を肉薄させて、シールドからサーベルを伸ばす。振り上げたサーベルは空振りになるものの、僚機の牽制射撃に回避コースを奪われたムラサメに

対して、さらに踏み込んでビームサーベルを振るう。

ビームサーベル同士の接触が派手な光を生み、怯んだゲイツRの胴体にムラサメが脚をぶつける。歯を食いしばって衝撃に耐えてレバーを操作し、突進してきたガルム・ガーをギリギリでやり過ごす。すれ違い様の近接機関砲が、激しくシールドを揺らした。

視界の隅をよぎった黒いウインダムにレールガンを放つが、易々と回避される。その向こうに見える輸送船を狙ってみたが、きつちりとシールドで弾き返された。

デイルクはゲイツRの動きに舌打ちをする。何とか切り抜けられそうだと思ったが、やはり戦場に甘い見通しは存在できないようだ。それでも、ムラサメの動きが拘束されているうちに、輸送船を少しでも離しておきたい。

「いいわ、まずはこの運命の糸に決着をつけましょう！」

「んな糸、俺が切つてやるよ！」

カナンの声とともに、ガルム・ガーのクローが鋏状に展開される。赤熱化したそれは、ムラサメを狙って繰り出された。機体をひねるようにして鋏をよけたムラサメがライフルを構えるが、背面部に展開された陽電子リフレクターに無駄弾を撃たない。カナンは距離を取ろうとするムラサメをビームで狙い撃ち、隙を窺おうとするゲイツRには牽制のレールガンを乱射しておく。

航空機形態で突っ込んできたムラサメは、発射されたガラム・ガーの両腕をかわすと速度を緩める事無く迫ってくる。変形と同時にビームサーベルが伸ばされた。

スラスタ位置の変化に伴う急制動で、ガラム・ガーの腹部にもぐりこむような形に持ち込む。近接機関砲の死角を見極めた上での動きだ。だが次の瞬間のユイの表情は、歓喜でなく驚愕だった。

ガラム・ガーは機体を反転させ裏返しになるような動きで、陽電子リフレクターが展開する背面部をムラサメの正面に持つて来た。強引この上ない動きだ。さらに、打ち出された腕が戻ってきた。ガラム・ガーの両腕は、有線ガンバレルと同じ要領で動かせる。機体制御と火器管制が分かれているため、空間認識能力のようなものが無くとも、操作は出来るのだ。ミコトの激しい操縦に歯を食いしばりながら、カナンが攻撃を繰り返す。

「あなたはその子の半身しか愛せないでしょ!」

「ミコトの体目当てで偉そうな事抜かすな!!」

機体が交錯するたびに無線は明瞭になり、そこで幾度と無く言葉が交錯する。

「何故、あなたは自分の半身を否定するの!」

「否定などしていない!」

「なら、どうして私に拘る? 私を怖がる?」

「気持ち悪いからだよ！」

「男が口を挟むな!!」

ムラサメの動きが一瞬だけ単調になった。カナンはそれを見逃さずに照準を付ける。だが機体の揺れとともに攻撃は外れる。ゲイツRの攻撃がガラム・ガーの機体を揺さぶったのだ。

それを見て、デイルクはウインダムのスラストターを開く。ゲイツRがガラム・ガーへの攻撃を再開すれば、ムラサメはこちらに向かうだろう。輸送船に近づかれる前に抑える。位置を知らせるように、レールガンとビームライフルを乱射した。

案の上突進してきたムラサメを単装砲で牽制し、対艦刀とビームサーベルを構えて迎え撃つ。ビームサーベルが交錯し、対艦刀がシールドに衝突する。その衝撃を全身で受け止めながら一気に押し込もうとするが、ビームとレールガンの奔流にウインダムは機体を翻さざるを得ない。ガラム・ガーが、他のゲイツRを引き連れるように突っ込んできたのだ。追いつがる三機のゲイツRから、盛んに火線が伸びる。

「私達はお呼びじゃないの!?!」

テルシエは声を荒げてロケット弾を発射する。旋回するムラサメをレールガンで狙い撃ち、ガラム・ガーにはビームサーベルで斬りかかる。陽電子リフレクターに斬撃は弾かれるが、背後に回りこもうとしたガラム・ガーの腕はちゃんと見えていた。ビーム



ライフルがそれを一発で撃ち抜く。

僚機がウインダムへの攻撃でシールドを吹き飛ばされるのを見て援護射撃を入れ、突進してくるムラサメに散弾の壁を作った。変形してシールドを掲げたムラサメに、ゲイツRを接近させる。ゲイツRの振るったビームサーベルは、ムラサメのシールドのビームコーティングを一気に剥ぎ取る。

二機もろとも吹き飛ばそうとするガルム・ガーの腕の動きに、テルシエは軽く舌打ちをして機体を反転させた。腕を伸ばしている分、ガルム・ガー本体の防備は薄くなっている。

陽電子リフレクターに攻撃を弾かれ続けている僚機の脇をすり抜けた。味方の攻撃がガルム・ガーの向きを固定している隙に、その腹部に回り込むのだ。グレネードをウインダムに放って牽制としてスラストターを全開にする。

「!？」

テルシエは女の子と目を合わせてしまった。正確には、ガルム・ガーの機体に描かれた女の子の絵と目が合ってしまったのだ。彼女の動体視力だからこそ、その絵を、その絵の目を捉えてしまったのかもしれない。

しかしそれは、テルシエの集中力に空白をもたらした。次に彼女が見た物は、モニターを覆うほどに接近した黒いウインダム。

対艦刀がゲイツRの装甲を捻じ曲げ、押し切っていく。ウインダムが腕を振り切ると、ゲイツRはその無残な切断面を晒すように両断されていた。軽く身構えたウインダムの目の前でゲイツRは爆発する。

その爆光を背景に、ガルム・ガーとムラサメが最後の突進を敢行する。どちらもこれ以上の交戦は不可能だ。

「あなたは自分をどちらでもない者だと思っっているのでしょうか!!」

「私は!!」

「でもね……私達はどちらでもある者なのよ!」

「っ!」

「だから、どちらか一方なんかでは満足できない! 男も女も、私達の片方しか満足させられないわ!!」

一本になった腕から、ビームとレールガンが交互に発射される。機体を僅かに揺するだけでそれをかわすムラサメが、速度を減じる事無く近づいてくる。

「初めてなのよ!! 私と同じ、どちらでもある者を見つけたのは!! あなたなら私を満たしてくれる! 私ならあなたを……」

「嬉しそうにエロトックしてんじゃねえよ!!」

「男が! 黙れ!!」

「ミコトとベロチューした事がある時点で、俺の勝ちは確定してるんだよ!!」

「カナン!! 今、言う事かそれ!？」

「今でなくっていつ言うよ!!」

ムラサメのスラスターが全開にされた。カナンはタイミングを計って、ガルム・ガールの腕を発射する。ムラサメが変形を開始する瞬間を狙った。赤熱化した鋏がムラサメを掴んだように見えるが、握り潰したのはシールドのみ。

ムラサメがビームサーベルを突き出したのは、陽電子リフレクターの基部。バリアを失いむき出しになったガルム・ガールの装甲に、ムラサメはグレネードを押し付けた。内部が露出するほどに装甲が抉れ、ガルム・ガーはコントロールを失う。

「さよな……」

ユイの言葉が終わる前に、ムラサメは激しい衝撃に機体を吹き飛ばされる。戻ってきたガルム・ガールの腕が、今まさに止めを刺そうとビームサーベルを構えたムラサメに衝突したのだ。

それを見届けたかのようにウィングダムはスラスターを吹かして交戦宙域を離脱する。ナスカ級からも撤退の信号弾が打ち上げられていた。

機体そのものをひどく歪めたままの姿で戻ってきたムラサメから、パイロットが運び出される。重傷を負っているようだ。艦内はそれなりの騒ぎになっているようだが、見舞いに行くような義理をカナデは持っていない。

結局、この艦にもたらされた情報は偽の情報だったようだ。つい先ほど、別の部隊からカフネ・イーガンの捕提及びその殺害の報が届けられた。偽情報でこちらの目をくらませている間に、地球に逃げるつもりだったようだ。カナデは、砂糖を入れてもなお苦いコーヒーをすすする。

「ちゃんと、うちで保護できていれば」

あの子も死なないで済んだのに、そう思わざるを得ない。もちろん、FUJIYAMA社が欲得づくで彼女を利用する事は確実だろうが、それとて死ぬよりはるかにマシな事であろう。

戦争はその形ばかりが終わり、肝心の平和は一向にやってこない。そして犠牲者の数が、こうしてただ増えていくだけなのだ。その数の中に自分が入ってしまう可能性も、十分すぎるほどにある。

MS開発に携わるものとしてはウエットな反応であろうか、そう思いながら彼女は一人コーヒーマグを傾ける。

## 第十部

「じゃ、若社長によろしくな」

グエンの言葉に、アルテシアは握手を求めた。色々と奇妙な縁を持つてしまった人であるが、こういう人に出会えて良かったと思う。彼女はカフネにも握手を求めた。

「あなたには、謝っても謝りきれないのだけでも」

「その分、感謝しても感謝しきれないほどの事をしてくれました」

その言葉に救われた気分になる。マドリード行き飛行機の搭乗時間が迫り、アルテシアは手を振ってゲートの方へと足を向けた。彼女を見送った二人は、自分達の乗る飛行機の搭乗ゲートに足を向ける。

ルーファス・リシユレークは、宇宙でいくつかの偽情報を流していた。そして囹の輸送船を仕立て上げ、そこへの襲撃を誘ったのだ。より確実に相手の目をくらませるために、ブルーコスモスが所有していた輸送船にも、カフネが乗り込んでいるという情報を流しておいた。

ブルーコスモスの武装輸送艦に彼女が乗っているという偽情報によって、カフネの乗った輸送艦の情報を隠す。そう相手に信じ込ませた。当の本人は、偽名と偽パスポー

ト、そしてちよつとした変装だけで、大洋州の民間旅客シャトルに乗り込んでいた。衛星軌道の中立ステーションでカオシユン行き降下シャトルに乗り込み、彼女はまんまと地球に降り経つ事に成功していた。

囹の輸送船は破壊されたという話であり、彼女を追跡していた連中はカフネの死を確信しているだろう。ピクトリアで行ったのと基本的には同じ作戦であるが、あえて同じ事を二度する事によって、相手の目を欺いたのだ。

「すみません、ナリタ行きの飛行機はここでしょうか？」

「ナリタ？ だったら向こうのターミナルだ」

女性に道を尋ねられたグエンが指差したのは、窓のずつと向こう側。マストドライバーはまだ使用できないが、宇宙から降りてくるシャトルを受け入れる宇宙港と、そこから東アジア各地の空港に飛行機を飛ばす国際空港を併せ持つカオシユン総合空港は、ターミナルビルだけで四つもある。

はるか遠くのターミナルビルだという事が分かって、彼女はげんなりとした。それを隠すために深くお辞儀をすると、コトハはキャリーバッグを引いて小走りに目的のターミナルビルへ向かう。

カーペンタリアの近くで出会った少女は、彼女をダーウィンの街まで連れて行ってくれた。東アジアの在外公館はなかったのだが、民間交流団体の事務所がありそこで国に

戻る手続きをしてもらったのだ。

自分が大洋州に降りてきた経緯を話すのは骨が折れたが、どうにか辻褃の合うストーリーをでつち上げる事はできた。周囲を見回すが、取り立てて自分の事を見張っているような人間はいない。

命を狙われている可能性があるという事は、一応頭に入れている。だが、カーペンタリアを出て以降、身に危険を感じた事はなかった。やはり潜水艦の艦長が考えた通り、降りた方が安全だったのだろう。

「……っ!? ぐ、ごめんなさい」

「いや構わんよ。余所見をしていたのは私だ」

コトハがぶつかった男性はそう言って、足のもつれた彼女を支えるように手を差し出す。何度も頭を下げる彼女を見送った男性は、後ろから声をかけられた。

「あなた、誰ですかあの方」

「知らんよ、ただぶつかってしまっただけだ」

ゲンヤ・タカツキは困ったような表情で言う。どことなく疑わしそうな顔で自分を見ている妻に、鼻の下が伸びそうになるのを感じた。美しい妻の恪気というものは、ほどであれば非常に魅力的なものだ。

インド洋における、ザフト要人の打ち上げ阻止作戦は成功したはずだった。だがどう

やら、その要人は宇宙に上がっていたらしく作戦は失敗という評価が下される事となった。

もともと、よく分からない経緯で上からゴリ押しされた作戦であり、上層部もその責任のあり方について苦慮したのである。結果、彼には半年の謹慎が命じられた。

とはいえ、家から一步も出るなど言われるわけでもなく、長期休暇をもらったようなものである。それを利用して家族サービスの最中であつた。トランクを転がしてはしゃいでいる二人の娘に声をかけ、彼とその家族は衛星軌道ステーション行きのシャトル乗り場へと向かつた。

幸先は悪いが思いの他部隊の内部に動揺がないのは、この連合部隊が寄り合い所帯だからであろう。大西洋の試作MAが大きな損傷を受けた状態で戻ってきたのだが、あくまでも大西洋の部隊が損耗したに過ぎないと捉えられている。

目標である旧世界樹宙域は目前に迫っており、各部隊とも臨戦態勢を整えつつあつた。ようやくMSデッキに現れたアルベールの姿を見て、カルロスが体を流す。

「いけそうか?」

「私は、何も問題ありません」



ヘルメット同士を接触させた時のくぐもった声。カルロスはバイザー越しに、アルベールの表情を確かめる。あの戦争を生き残ってきたパイロットだ、ウエットな感情でミスをするとはあるまい。それでも、アルベールが二人のパイロットを気にかけていた事は分かる。

損傷して戻ってきたガラム・ガーは、コクピット付近に大きなダメージを受けていた。カナン・エスペランザはコクピットの中で潰されており、ミコト・ムラサメも重傷を負って、懸命の治療が続けられている最中であつた。アルベールは、ガラム・ガーからデータの吸い出しが終わる時間を告げる。

ザフト以外の機体とも交戦していたようであり、そのザフト部隊も旧世界樹宙域に向かつているようだとの事だ。少しでも役に立つ情報があるかもしれない。

「当てにしているよ」

カルロスはそう言ってアルベールの機体から離れる。だが目標がフリーダムである以上、それ以外の情報にどこまで意味があるかは分からない。

ガラム・ガーについてもその性能は未知数であり、MSとの連携がどこまで可能かは不明であつたため、戦力としては当てにしていなかった。そのため、戦闘参加が出来なくなつたと聞いても、問題は無いと考えていた。

メイファのパイロットスーツがアルベール機に流れていくのを見て、カルロスはヘル

メットの中で口笛を吹いた。ブリッジからの通信で、警戒態勢のレベルが一つ引き上げられるのが伝えられる。

デブリベルトの外縁部に到達し、艦隊は速度を落とした。

「二機か……」

ローラシア級・クルックスのブリッジでは、追いついてきたナスカ級からの報告を受けて、サイモンが顔をしかめていた。この艦隊の艦載機は二十、そのうちの二機を作戰前に失う事になったのだ。

その上、どういふわけか連合が付近に来ている。やはり、納得の出来る作戰ではなかったようだ。気心の知れたクルーでブリッジを固めているため、サイモンの胸中も見取られるのだろう。士気に関わるので、サイモンは軽く頭を振って腹をくくる。

目標となる敵施設はデブリベルトのほぼ中心部にあり、デブリ密度も高い。艦の動きも制限されるため、操艦には細心の注意が必要とされるのだ。

「索敵は密に。待ち伏せもありうるぞ」

同時にMSデッキに警報が流れ、空気が抜かれる。緊急発進を可能とするための措置だ。パイロットにも、コクピットでの待機が命じられた。

言われる前からコクピットに陣取っているオイレンは、パイロットスーツの手を開いたり閉じたりしながら、モニターを見つめている。敵には連合もいるらしい。これは

ど、自分のためにあつらえられた舞台があるだろうか。

MSこそが彼の居場所であり、存在意義である。彼がコーディネーターとして生きるためには、そのMSにおいて他を圧倒し続けなくてはならない。

「腕は、ある」

あとは機会だけなのだ。MSに乗る機会と、それで敵と戦闘する機会だ。それさえあれば、彼はコーディネーターでいられる。

戦争も平和も、ザフトも連合も、彼にとつては関係がない。戦闘のない戦争なら拒絶するし、戦闘の出来る平和なら喜んで参加しよう。乗るMSと敵を与えてくれるのであれば、ダガーだろうとウインダムだろうと乗り込むだろう。

戦争が終わり、ザフトは彼からMSを奪った。しかしその休戦とやらは、早くも終わってしまったらしい。彼はこうしてMSに乗り、今や遅しと出撃を待っている。きつとこれからも、彼はコーディネーターであり続けられるのだろう。オイレンは通信機をオフにした。

そして高らかに笑う。

トルベンは、施設での研究に協力すると返答した。それを聞いた長髪の議員が、ただ

満足そうに微笑んだのを、トルベンは不気味に思う。彼の乗った小型船がデブリの向こう側に消えていくのを見ながら、施設の中が慌しい動きを見せ始めた事を感じる。

小惑星帯から運んできた岩塊を核に、周囲のデブリを再利用するような形で形成されているこの施設は、単に大量の量子コンピューターを核にした研究施設などではないようだ。専門家でなくとも、研究に必要な機材かそうでないかの区別くらいはつくというものだ。

「核パルスエンジン……」

戦艦などに積まれている物よりもずっと巨大なノズルの一端が、微かに見える。施設自体を移動可能な物として建造しているのだろう。おそらく完成後にはプラント宙域まで移動させるのだ。

わざわざこの旧世界樹宙域で建造しているのは、構造物材料の入手が比較的楽だからと考えられた。問題は、何故わざわざ移動可能にした小惑星に、研究施設を作るかである。

遺伝子研究が目の敵にされている地球なら、隠れるように研究を続ける理由も分かるが、ここは宇宙である。堂々とプラントの一面に研究機関を立ち上げれば済む問題ではないのだろうか。その程度の事は可能な権限をあの長髪の議員は持っているはずなのだ。それすら出来ないほどに、今のプラントは割れているという事だろうか。

「研究に集中したいものだ」

ため息を我慢して愚痴をこぼす。だが、研究と関係のない分野にも頭を使わなければ、再びメンデルでのテロのような事態を招くかもしれない。

コーディネーターで構成されたプラントにおいても、遺伝子研究というものに無制限の理解というものが得られなくなっている。この社会的な変化は、非常に大きな変化だと言わざるを得ない。

その基盤は、シーゲル・クラインの唱えたナチュラル回帰思想であろう。だがその思想として、正しく研究され科学的な根拠が示されてこそ正当化されるはずだ。それすらタブー視されるようになれば、そこに生じるのは新たなブルーコスモスでしかない。コーディネーターの生み出すブルーコスモス、想像もしたくないものだ。

トルベンとは与えられている居室へと足を向ける。量子コンピューターには、既にプラントに居住するほぼ全ての人間の遺伝子データが蓄積されており、それを利用したシミュレーションも可能になっていた。

この先、何が起こるか分からない。だから先に進められる事は進めておきたいと、彼は思った。

爆発とは微妙に異なる光が閃いた。おそらくアンチビーム機雷が敷設されているのであろう。デブリが濃い上に、アンチビーム粒子の撒布である。戦闘は困難なものになると考えられた。しかしそれは、あくまでも通常のMSによる戦闘ならばという条件がついている。

三色、六条の光が宙域を引き裂くように伸び、それに触れた物は爆発か融解のどちらかを起こす。宇宙空間には似つかわしくない色とりどりの光は、美しくなくただ禍々しかった。

その光を発するのは一機のMS。翼状のユニットを広げ、デブリが消え去った空間の向こう側を見ている。

「あれか」

それをパイロットと呼べるのであれば、彼はコクピットの中でかすれた声でつぶやいていた。核エンジン搭載MS・フリーダムの中核演算装置と化したノーリッチ・シユナウザーは、晴れやかな気持ちで宇宙に漂っていた。フリーダムそのものとなった感覚は、人には決して味わえないものであろう。

フリーダムのセンサー、いや彼の視覚がスラスターの光を捉える。目標の敵施設より発進したMSだ。ジンばかり五機ほどが、真っ直ぐに彼の元へと向かってくる。ノーリッチは微笑んだ。

フリーダムの砲門の全てが光り、彼に言いようのない爽快感を与える。スラスター光は爆発の光に変わり、再び宇宙には静けさが訪れたようだ。ノーリツチは高揚感のままに走り出す。フリーダムのスラスターが全開になり、MSとは思えない加速で前進をはじめ。

小さな石ころが装甲に当たる感覚すら心地良く、接触した機雷の爆発すらフリーダムの突進を止めない事が気持ち良かった。胴体を撃ち抜かれて漂うジンの残骸を戯れるようにビームサーベルで両断した。

だから、フリーダムを足止めするような攻撃には心底憤慨する。直上から降り注いだ、巨大なビームの奔流は、二度三度とフリーダム目掛けて押し寄せてくる。

「当たるわけねえな……散開!!」

通じるはずのない通信機に怒鳴って、カルロスが信号弾を打ち込む。わざわざフリーダム目掛けて発射したのは、ほんの少しでも足止めになって欲しいと思うからだ。だが、ウインダムが十分に加速する前に反転せざるを得なくなる。

フリーダムの機動力は、一瞬で彼の率いる部隊の背後を取った。まだ十分に散開すら出来ていない。味方機が撃墜されなかったのは、試作型のビームランチャーを盾に出来た事、後続の部隊の牽制があつた事だ。ビームランチャーの爆発光が周囲を照らし、フリーダムのシルエットが不気味に浮かんだ。

ビームライフルの一斉射、同時に複数の回避コースの全てを潰すようなロケット弾の発射。急造の部隊にしては良くできた連携でフリーダムを追い込もうとする。だがフリーダムは、ロケット弾をビームサーベルとPS装甲で強引に突破する。そこまでは読んでいたカルロスも、次の一手に吹き飛ばされた。

翼状ユニットに装備されたプラズマ砲は、真横に向く事もできたのだ。シールドでの体当たりでなく、ビームサーベルでの攻撃を選択していたら、もう一方のウインダムのように消えてなくなっていただろう。

「動かれたら捉えられん！」

吹き飛んだカルロス機を追う動きを見せるフリーダムに、アルベールはライフルを連射する。戦闘宙域から一步離れた場所で、手頃なデブリを足場に狙撃用のライフルを構えている。

専用電源を持った大物用のビームライフルだが、はつきり言つて当てられるとは思えない。バッテリーが上がるまでフリーダムの機動を阻害し続けるのみである。しかも、味方の攻撃を有利にするためではなく、撃墜されそうな味方機を支援するための牽制射撃に徹していた。

だが、ビームサーベルでビームを弾かれればアルベールも目を疑わざるを得ない。それでも次の瞬間には、味方の一機が真つ二つにされているのだ。背後に目がついている



かのようにビームをかわすフリーダムに、アルベールは舌打ちをこらえる。

「誘われるな!!」

ビームサーベルの激しいスパークの中、メイファが叫ぶ。二機のウインダムのビームサーベルを両手のビームサーベルで受け止めたフリーダムに、もう一機のウインダムが攻撃を仕掛けた。だが正面でビームライフルを構えた機体はレールガンに撃ち抜かれ、背後から切りかかった機体は、スラスタに吹き飛ばされる。

フリーダムがダツシュした勢いで振り払われたメイファ機を守るようにアルベール機のビームが注ぐ。フリーダムはそれを意に介さないように、回避の遅れた機体を斬り捨てた。

その背後からカルロスのウインダムがビームサーベルを伸ばす。仰け反るような姿勢でそれをかわしたフリーダムは、レールガンを発射体勢に移す。カルロス機は機体を捻り、レールガンの射線と射線の間で機体を滑り込ませて直撃を避ける。

装甲を叩くウインダムの機関砲を嫌うように距離を取ろうとするフリーダムにメイファ機が突進し、周囲からはビームが殺到する。

「何なんだよ！ お前らはよお!!」

ほとんど失われたノーリツチの声がそう叫ぶ。先ほどまでの心地良さなどどこかに消えていた。倒しても倒しても襲い掛かってくる敵の姿は、薄れかけた彼の記憶のザワ

ザワと呼び覚ますかのようだ。

ノーリツチは唸り声をあげ、感覚を周囲の宙域全てに広げた。空間の全てを把握し、そこに反射神経をつなげる感覚で、フリーダムの機能を開放する。

全砲門発射体勢になったフリーダムに対して、全てのウインダムが退避行動をとる。だが、一瞬だけ止まったように見えるフリーダムの挙動に、アルベールは嫌なものを感じた。それが形になる前に終わらせる。

発射したビームが外れるのと、味方機の一機が爆発するのが同時。さらに、熱紋センサーのアラームが鳴った。アルベールの視線がモニター上を走るより早く、狙撃用ライフルが弾け飛んだ。

「………無線ガンバレル!」

フリーダムから発進した四基の攻撃デバイスは、ビームを吐き出しながらウインダムへと襲い掛かる。

交戦は確認している。連合の部隊と施設側の交戦であろうと推測し、サイモンは艦載機の半数に要塞攻撃装備での発進を命じる。デブリの密度が高く、アンチビーム粒子も撒布されている事を考えると、艦砲での攻撃は効果が出にくい。MSで接近して直接打

撃を与えた方が確實という判断だ。

「艦隊は速度を維持し前進。砲の有効距離の算出を急げ」

旧世界樹の構造物残骸を利用して作られた施設であれば、その強度は計算しにくい。要塞攻撃装備でもダメだった場合、最後は艦砲が頼みだ。偵察カメラの捉えた交戦映像を見ながら、作戦の成功を願う。

連合がこの施設を狙う理由は分からないが、とにかく施設守備隊を引き付けてくれているなら好都合だ。各艦のカタパルトが開放され、発進の合図を待ち構えていた。

「オイレン・クーエンス、ゲイツR発進!!」

先頭を切るように発進されたオイレンの機体。携行型指向性熱エネルギー砲とキャニスターランチャーに脚部外付けロケットランチャーまで装備した機体は、後続の機体の進行方向を無視するように機体を傾けた。

岩の塊にミサイルを撃ち込むなど、バカでもできる事だ。彼の存在意義はそんな場所にはない。ミサイルランチャーからミサイルを撃ち出すと、ランチャーを捨てて突進した。

ミサイルの爆発する派手な光をバックに、ゲイツRは戦闘の中心部へと突っ込む。熱エネルギー砲を構えさせ、オイレンは引き金を引く。

「受け止めた!!」

羽を広げたMSがシールドを掲げるのを見て、オイレンは歓喜の声を上げる。熱エネルギー砲を乱射しながら突進を続け、機体を振るようにして殺到するビームをかわすと、熱エネルギー砲の砲身で、フリーダムを思い切り殴りつけた。所詮、取り回しの利かない武器である。

周囲のウインダムが動揺しているのが見て取れる。それがオイレンを奮い立たせた。「眺めてろ、雑魚どもがあ!!」

シグーの持つシールドガトリング砲と同じものを設置させた専用の盾で牽制し、ビームサーベルを振りかぶる。予想よりはるかに早いフリーダムの挙動にも、オイレンは動じない。ビームサーベルが触れ合い発光すると同時に、レールガンを撃ち込んだ。至近距離からの攻撃である。いかにPS装甲といえども、機体は揺れる。

シールドが半回転して二本のビームサーベルが発振された。都合三本のビームサーベルがフリーダムに殺到する。それすら避けきったフリーダムは、ウインダムの牽制に振り向けていた攻撃デバイスを呼び戻し、反撃に移った。

機体を軋ませるような機動でゲイツRはフリーダムに迫いすが。見るからにロングレンジ用の機体、その上デブリをもろともしない火器の出力を考えれば、最悪でもショートレンジ以下で戦わなくてはならない。ビームライフルとレールガンの牽制を織り交ぜ、突っ込んでくるデバイスを斬り払って、距離を詰める。

「ラビ、あれは？」

「フリーダムと交戦している。当面の敵では無いのか……」

「いや、甘いぜ！ 味方でもない!!」

カルロスはペダルを踏み込んだ。フリーダムへの攻撃を仕掛けたウインダムが、ゲイツRレールガンに撃ち抜かれたのだ。厄介なのが一機増えただけである。フリーダムのプラズマ砲を回避し、死角に滑り込もうとした攻撃デバイスにはステイレットを投げ込んでおいた。

周囲のウインダムも一斉にフリーダムへの攻撃を再開する。直接機体を狙う攻撃から、回避コースを潰すための攻撃まで、あらゆる攻撃がフリーダムを取り囲む。

しかしフリーダムは肉薄した機体にビームサーベルを突き立て、同時に全砲門を開放して囲みに穴を開けると、そこから包围を抜け出そうとする。待ち構えていたゲイツRの攻撃を装甲頼りに突き抜け、反転して再度全砲門を開放する。

複数の爆光にノリーツチは落ち着きを取り戻し、残ったドラグーンを放出する。砲撃の照準の一つを施設へと振り向けると、残りを飛びまわるMSへと向ける。

広がりきった彼の感覚は、周囲全ての動く物体を完全に把握していた。交戦域を外れて飛び去ろうとする機体を感じ、フリーダムがビームライフルを放つ。

「わけが分からん!!」

機体を横滑りさせたデイルクは、そう叫んでレールガンで応戦した。連合の目的は間違いない、あの羽根付きMSだ。ザフト機の目的は分からないが、他の機体を見ればザフト自身の目的は、トルベン・タイナートが潜伏しているという施設だ。ではあの羽根付きの目的は何だ。

施設を狙う自分を狙ったという事は、施設側の守備隊なのか。それとも全く別の目的を持っているのか。施設がザフトに破壊される前に、「ジョージ・グレンのレシピ」を確保しなくてはならないが、あのMSはそれをさせてくれそうに無い。

二機の攻撃デバイスの動きを見切つて黒いウインダムは機体を回転させると、その動きのままにフリーダムの斬撃を受け止める。その後ろから来るゲイツRの機関砲弾の流れ弾をシールドで受け止めて、距離と取ろうとスラスターを吹かす。

フリーダムはゲイツRの攻撃を捌きながらも、黒いウインダムへの攻撃の手を緩めない。一瞬にして距離を詰めたフリーダムに対して、黒いウインダムは対艦刀を抜き打ちにする。

PS装甲に刀がぶつかる激しい衝撃を全身で受け止めながら、デイルクはレールガンと単装砲を連射させた。直撃弾がフリーダムの姿勢を崩し、そこにゲイツRのビームサーベルが襲い掛かる。ノーリッチがつぶやくように言う。

「お前、ほんとはコーデイネーターじゃないな」

「!!? ほざけー」

通信機から聞こえた声を引き裂こうとするビームサーベルが空を斬ると同時に、オイレンはシールドの機関砲を至近距離から撃つ。その牽制射からビームライフルでの攻撃に繋げようとした瞬間、フリーダム脚部がゲイツRの胴体を捉えていた。だがフリーダムは吹き飛んだゲイツRに追撃を仕掛けない。

背後に迫っていたウインダムを、最大限に伸ばしたビームサーベルで薙ぎ払い、姿勢を崩された機体に攻撃デバイスをけしかける。全砲門が開かれ、再び複数の光が生まれる。

機体を盛大に振り回しながら、メイファのウインダムは三基のデバイスに対処している。ビームの衝撃がシールドを揺さぶり、フリーダム本体から放たれるレールガンが機体をかすめる。

一基のデバイスとビームライフルが相打ちになった。手元で爆発するライフルをもろともせず、一瞬だけほころんだデバイスのフォーメーションを突っ切って、メイファは機体をフリーダムに突進させる。黒いウインダムとゲイツRに絡まれるフリーダムの背後に、隙を見たのだ。

「無理してるなあ、女」

「!!」

ウインダムがビームサーベルを振り上げるのと、フリーダムがビームライフルを持った手を背後に向けるのは同時だった。とっさにシールドを掲げた瞬間、レールガンに脚部を吹き飛ばされていた。

ゲイツRと黒いウインダムを振り切ったフリーダムが、メイファ機に突っ込んでくる。横合いからアルベール機が体当たりを仕掛け、カルロス機が群がるデバイスを狙撃していく。カルロスが怒鳴る。

「リン中尉、退け!!」

「ま、まだ行けます!!」

「撤退だ! 味方も半分以上落とされた! リン中尉は撤退の指揮を、あれは俺らで抑える!」

アルベールのウインダムが、それを促すようにメイファ機に視線を送った。メイファ機が信号弾とともに後退していくのを確認し、アルベール機がスラストを吹かす。

「色男つてのは、乗る機体も色男なのかい?」

「来るぞ!!」

アルベールは短く叫んで機体を振った。プラズマ砲の光跡が通り抜けると同時に、ビームライフルを連射する。最後に残っていたデバイスをビームサーベルで斬り捨て、フリーダムへと接近する。



四機のMSの波状攻撃。連携が取れていないとはいえ、それを難なくあしらうフリーダムは、圧倒的だった。だがノーリッチは満足できない。一蹴できないという現実が、この上なく不愉快だ。

ウインダムにビームサーベルを受け止められ、黒いウインダムの対艦刀にシールドを掲げざるを得なくなる。プラズマ砲はゲイツRを捉えられず、もう一機のウインダムの狙撃に機体を回避コースに乗せてしまう。距離を取って全砲門を開くが、その光は虚しく宇宙を走る。施設攻撃を行っていたMSが、不幸にも流れ弾に被弾するだけだ。

フリーダムはビームサーベルを連結して、刃を倍以上の長さに伸ばす。それを風車のように回転させて突進した。ビームライフルもレールガンも、全てそのサーベルで斬り払っていく。

「子供騙し!!」

ゲイツRが脚部のロケット弾を放出する。対要塞用の装備であるため、初速は遅いが爆発力はMS用のものとは比べ物にならない。ビームサーベルの風車に接触した六発のそれは次々と大爆発を起こす。PS装甲と言えども、猛烈な量の破片を全身に浴びれば、パイロットに影響が出る。ましてや、感覚が直結するノーリッチであればなおさらだ。

フリーダムは動きに僅かな隙が生まれる。そしてこの場にいるパイロットは、その隙

間に自らの殺気を捻じ込む事のできるパイロットだ。四方から同時に、攻撃が延ばされた。

「どう動いた!?!」

デイルクは叫んでシールドの機関砲を乱射する。あの場の全員が必殺の間合いだと思つて仕掛けた攻撃は、フリーダムを捉えていない。いつの間にか囲みを抜け出ていたフリーダムが、全砲門を向けている。

応戦と回避、したくはないがフリーダムに突進するゲイツRへの援護。黒いウィンダムは、全身の火器を振りまきながら対処する。それでもフリーダムの勢いが止まらない。二機のウィンダムがビームライフルを構えたのを見て、対艦刀を抜いた。飛び道具を当てられる気がしないのだ。

それはカルロスとアルベールも同じである。だが、一機のMSに四機で接近戦は、逆に戦いにくい。味方ではないので遠慮は要らないのだが少なくともフリーダムを落とすまでは、ゲイツRと黒いウィンダムに味方でいてもらわなくてはならない。

対艦刀を白刃取りしたフリーダムを狙ったビームも、ゲイツRと斬り結ぶフリーダムを狙ったビームもことごとく外される。二機のMSをあしらいつつながら、反撃までしてくる敵に、カルロスは得体の知れない者を見る気分になる。

本物の化け物を相手にしているのではないか、そんな思いが彼の脳裏をよぎった瞬

間、フリーダムに捕まった黒いウィンダムが、軽々と投げ飛ばされてゲイツRと衝突したのが見えた。

アルベールからの通信と、体が動いたのは同時。それでも、フリーダムの接近に機体を回避させきれずシールドを持っていかれた。右手でビームサーベルを突き出すが、ほんの少し機体を傾けただけのフリーダムに、あっさり避けられる。その位置のまま撃ち出される近接機関砲を受けて、ウィンダムの右手が吹き飛んだ。

「がんばれよ、ナチュラル」

「分かるのかよ!!」

ウィンダムの足がフリーダムを蹴り飛ばし、左手から投擲されたステイレットがフリーダムのカメラを狙う。しかし、それを受け止めたフリーダムは、逆にステイレットを投げ返した。

ありえないようなスピードで戻ってくるそれは、カルロス機の腰部に突き刺さり爆発した。衝撃でウィンダムは、すぐそばのデブリに衝突し動きを止める。

さらに止めを刺そうとするフリーダムに、アルベール機が突進を仕掛けた。

着艦するウィンダムの数は明らかに少ない。艦隊司令も、流石に表情を歪めざるを得

なかった。核エンジン搭載MS、その機体性能の異常な高さだけでこの結果を説明できるのであろうか。

艦隊に前進を命じ、計画通り一隻の艦からクルーの緊急退避を行わせる。フリーダムを有する組織の拠点と目される構造物に対して、艦一隻を特攻させるのだ。いかに核エンジンであろうとも、補給も整備も無しに活動できるものではないのだから。

損傷した機体で何とか母艦にたどり着いたメイファは、コクピットハッチを開けるとMSデッキに飛び出す。全身に嫌な疲れが広がっているが、気力はまだ萎えていない。動けそうな機体を物色するのだが、どのウインダムも損傷を受けている物ばかりだ。艦が動き出したのを感じ、戦闘も最終段階に近い事を感じる。

「連合艦が!? 彼らの狙いもここか?」

サイモンは索敵班からの報告に思わず問い返した。ザフト艦隊が間もなく艦砲の射程距離に入るところで、連合艦隊の動きをキャッチしたのだ。連合もトルベン・タイナートの排除を目的としているのだろうか。

艦隊を止めMSを回収して後退、連合艦が施設破壊に成功した事を見届けてから撤退というのもありである。下手に近づいて、自分達が施設の守備隊だと勘違いされては、面倒な事になる。

目標施設は、その表層部に崩壊しやすい岩石や構造物を配置し、チョバムアーマーの

ように外側からの攻撃を緩和する仕組みになっていた。そのためMS隊の攻撃は不調に終わり、艦砲による直接攻撃が必要になっていく。はたして、連合艦隊が施設破壊を完遂できるかどうか。サイモンは眉間の皺を深くした。そして転進の命令を出す。

「連合艦の位置を正確に割り出せ。施設を挟んで連合艦と反対側に移動し、そこから艦砲を使う」

帰還を始めたMS隊から、施設防衛のMSが予想外に少ないとの報告が上がってくる。施設周辺で激しい戦闘が繰り広げられていると考えていたサイモンは首をかしげた。モニターが捉えていたおびただしい光は何なのだろうか。

フリーダムの特砲が開く。プラズマの渦を頭上にやり過ぎしながら、ゲイツRが突進する。フリーダムの構える銃口を見据え、機体の動きを最小にして距離を詰める。ビームライフルとレールガンを真正面から放ち、同時にスラスターを吹かす。

フリーダムの回避方向は読み通り、ビームサーベルを受け止められる事も想定していた。シールドからビームサーベルを伸ばし、さらに斬撃を加える。フリーダムのシールドはゲイツRの腕ごと受け止める。センサーを狙って放たれる近接機関砲を回避しつつ、オイレンはゲイツRの足をフリーダムの腹部にぶつけていた。

滑るよう後ろに下がったフリーダムに、二本の対艦刀が襲い掛かる。シールドに深い傷を付けたその機体は、勢いのままフリーダムをデブリに押し込もうとする。デイル

クはペダルとレバーを確認した。ウインダムフルパワーでも、フリーダムを押し切れない。それどころか対艦刀の一本を弾き飛ばされ、シールドにはレールガンの直撃をもらう。使い物にならなくなったガトリング砲をパージし、単装砲で牽制射を続けた。

背部のプラズマ砲はゲイツRを追尾するように動き、手にしたビームライフルは黒いウインダムを狙っている。腰部レールガンはその射角が固定されている。アルベールはビームライフルの照準を合わせた。

「なにいつ!!」

ノーリッチが声無き声で叫ぶ。ビームがシールドを貫通し、左腕の装甲に僅かな損傷が現れたのだ。対艦刀で付いた傷を、ビームが抉ったのだ。シールドを投げ捨て、そのビームを放った敵へと意識を向ける。同時に、二方向から攻撃が延びてきた。

不愉快さを抱えたまま距離を取ると全砲門開放。同時にスラストターを全開にして肉薄し、ビームサーベルを振るう。ビームサーベルの接触が光を生むが、それに構わずレールガンを放った。

モニターに左脚部の全損が表示され、アルベールは舌打ちをする。次の瞬間にはシールドを両断されており、回避のためにスラストターを吹かした時には頭部にビームサーベルを突き込まれていた。

「……」

そうつぶやけたのは、フリーダムが止めを刺さなかったからだ。おそらくあの二機が攻撃を仕掛けたのだろう。アルベールは、非常灯の点ったコクピットで、機体の復旧作業に取り掛かる。せめて帰還できるようにしなくては、漂流する事になる。

流れていくウインダムを尻目に、オイレンは笑みを浮かべたままレバーを握る。一機ずつ消えていく戦場、次に消えるのは黒いウインダムかそれともフリーダムか。最後に残るのは、自分以外にありえない。

フリーダムに近接し、残ったガトリング砲弾を叩き込む。装甲任せに突っ込んできたフリーダムのビームサーベルを受け流すと、そのまま機体を反転させるようにして互いの位置を入れ替える。背後から放たれる黒いウインダムのレールガンに、フリーダムの意識が流れた。

その瞬間、ゲイツRの攻撃がフリーダムへと延びる。ビームライフルとレールガンが同時に光る。

ビームをかわすためには、レールガンの直撃を受けるしかない。PS装甲を持ってしても激しく揺さぶられる機体。ゲイツRのビームサーベルに、右のプラズマ砲を切断されていた。フリーダムの頭上を通り抜けたゲイツRは、さらにビームライフルで右ウイングユニットを脱落させる。

ノーリツチの意識が完全にゲイツRに向かう。デイルクは冷静にそれを見つめてい

た。ビームライフルとレールガンが立て続けに左ウィングユニットに命中し、その形を無残なものに変えた。

「次に消えるのはお前だったな!!」

オイレンは叫び、ゲイツRを反転させる。三本のビームサーベルを展開して、フリーダム目掛けて突っ込む。火力も機動性も落ちた手負いの機体、オイレンは完全に捉えていたはずだった。

ゲイツRの両腕が消える。フリーダムのレールガンを、正確に命中させられたのだ。とっさに制動をかけてレールガンによる反撃を試みるゲイツRをあざ笑うように、フリーダムの拳がその頭部を潰した。

その衝撃で吹き飛ぶゲイツRへの興味を失ったように、フリーダムは黒いウィンダムを見た。デイルクは戦慄を覚える。

フリーダムが動く。デイルクの挙動は遅れた。フリーダムに覚えた恐怖が、彼の動きを縛つたのだ。回避を諦め、シールドを犠牲にする。間合いを取ってレールガンで牽制するが、フリーダムはさらに接近してくる。単装砲の連射をもらともせず突っ込んでくるフリーダムは、一気にビームサーベルを伸ばした。切断されたビームライフルが小さく爆発する。

デイルクはペダルを踏み込んだ。それでもウィンダムの動きが遅いと感じる。しか



しそれが、自分のせいだという事も分かっている。レールガンと単装砲の砲弾の全てを使い尽くした。

デイルクは歯を食いしばり、急激に縮まる距離を耐える。待ち構えるような体勢のフリーダム目の前で、デイルクはI W S Pのバツクを行つた。大型のバツクパツクがスラストを全開にしたまま突進する。

ビームサーベルが一閃し、I W S Pが爆発を起こす。黒いウインダムはその爆発の中に飛び込んだ。対艦刀を振るうと同時にガキンという鈍い音がコクピットにまで響き、爆煙の向こう側にフリーダムのカメラが光るのが見えた。

タイミングが僅かに早かった。フリーダムの左手が、ウインダムの右腕を掴んでいゝる。無線が揺れた。

「お前、女がいるだろ」

敵のパイロットが何故そんな事を言うのかは分からない。だがそれ以上に分からないのは、デイルクの中の恐怖が不意に消えた事だ。

フリーダムはウインダムへと、ビームサーベルを無造作に突き刺した。

「ああ、いるさ」

ノーリツチは無線から声を聞いた。

ウインダムは対艦刀を左手に持ち替え、逆手に握つたそれをフリーダムの胸へと押し

付ける。首の稼動部分を確保するための装甲の境目、そこから突き込まれた対艦刀は、フリーダムのコクピットを押し潰し、そのまま核エンジンにまで達した。

施設構造物の陰に隠れて連合艦隊の動きは見えない。だが、盛んに艦砲を撃っている事は、宇宙空間を照らす光の量で分かった。サイモンの艦隊も砲撃を開始する。デブリを組み合わせて作ったようなその構造物が、グズグズと崩れていく様子がモニターに映る。

しかし、大型の岩塊構造物を外部からの砲撃だけで壊すのは、非常に難しい。出来るだけ砲撃を一箇所に集中させ、構造物の内側に攻撃を通そうとする。偵察カメラからの映像が解析される。

「艦が特攻？」

連合艦の一隻が艦隊を離脱し、施設に向けて急速に接近しているという。サイモンは艦隊に宙域からの離脱を命じる。無人艦による特攻、おそらくは核爆弾を搭載している。宇宙艦のスペースであれば、レーザー核融合弾の搭載も可能だ。

僚艦の移動を確認して、サイモンの乗るローラシア級・クルックスも180度回頭す

る。だがスラスターが全開になるより早く、ブリッジのモニターに強い光が映った。

宇宙艦のスラスターに使用されているレーザー核融合を応用した爆弾は、核融合によるエネルギーを周囲に拡散させず、一方向に集中させて対象を破壊する。艦に搭載された爆弾は、施設構造物に対して大規模な損傷を与えただろう。

ブリッジには、状況確認の言葉が飛び交い。光の収まったモニターには、崩壊の始まった施設の姿が映る。

「各艦退避行動！ 石ころで沈むなよ!!」

サイモンが怒鳴ると同時に艦が急激に動き、強い慣性重力を感じる。核爆弾とそれによる施設の崩壊によって、デブリが高速で飛び散っているのだ。ある程度の大きさ以上のデブリとの衝突は艦船にも甚大な被害を与え、最悪の場合艦が沈む事もありうるのだ。艦砲が火を吹き、目の前の岩塊を割った。

僚艦からの被害報告と、自艦のダメコン指示が飛び交い、ブリッジはパニックの様相となる。サイモンも声の限りに、命令を出していく。

ザフト艦隊が宙域を離脱していくのを確認し、デブリの影に留まっていたMSがゆっくりと移動を始める。特攻艦の衝突位置から、高速デブリが生じたのはザフト艦隊のいる方向がほとんどであり、フリーダムが交戦していた宙域は静かであった。MA形態に変形した心神の中で、カナデ・アキシノが報告書の草案を考える。

「核エンジンとフリーダムに関しては、予想された通りの性能が出ていない。ただし、機体側の問題ではなくパイロットの問題である可能性が高い、と」

第一目標であった施設攻撃をほとんど行わず、連合MSとの戦闘を行ったのはパイロットの性癖もしくは情緒不安定性に起因するのだろう。ブルーコスモス製の生体CPUである、まともだとも思えなかった。ドラグーンシステムの使用についても、十分に使いこなせていたとは言いがたい。

だがフリーダムのカタログスペックが要求するパイロットは、コーディネーターでもそれを満たす事は難しいだろう。少なくとも自分には無理だと断言できる。それにもかかわらず、これ以上に機体の開発に着手しているというのだ。一体誰を乗せるつもりなのだろうか。

不十分なパイロットであれだけの性能が出せたのである、もし乗りこなすパイロットなどがいれば、それはどんな結果になるのだろうか。

「……ああ、いるのね。パイロットは」

これはつまり、オリジナルパイロット以外はフリーダムを使いこなせないという証明のために必要とされた戦闘なのだ。カナデは、そこで考えるのを止める。これ以上考えれば、何か不穏なものに触れかねない。

そうなれば自分の命も危ない。カフネ・イーガンのように自分も関わりすぎた、そう

彼女は思う。もしムラサメが一緒に来ていれば、この場で撃墜されていたかもしれない。自分の身の振り方、そして会社の身の振り方を慎重に考えなくては、この得体の知らない『組織』は容易に切り捨てにかかるだろう。

センサーの反応に機体を振り、スラストを全開にする。コクピットのモニターには、一機のダガーが心神に目もくれず戦闘の行われていた宙域へと向かって行くのが映っていた。

「大尉！ アルバール大尉！」

通じる可能性の低い無線に向かって、メイファは怒鳴り続ける。艦内作業用に搭載されていたダガーを使って搜索に来たのだ。艦隊の方では既に戦死扱いにしようとしているようだが、撤収準備が整うまでの時間は搜索を許可してくれたのだ。

カメラを何度も切り替え、熱源デブリに何度も舌打ちしながら、真つ暗な宇宙空間に視線を凝らす。小さな爆発光が、一瞬だけセンサーに反応した。

半壊状態のウインダムが手にしたスティレットを爆発させたのだ。ダガーのスラストターが強く光った。望遠モニターが捉えた胸の識別マークはアルバール機を示している。

「大尉！！」

ひしやげた装甲板をダガーの手がこじ開け、コクピットハッチを手動で開く。暗いコ

クピットの中で、パイロットスーツが動くのを見た。メイファはそのままクピットの中に体を飛び込ませた。

「ご無事で、何よりです……」

メイファの涙声に少し驚きながら、アルベールは助かった事に安堵する。信号弾代わりにしたステイレットの残りも二発になっていた。

抱きつかれた格好に困惑しながら、アルベールは掛ける言葉が見つからない。代わりに、無線機がしゃべってくれる。

「リン中尉、俺も名前で呼んで欲しかったな」

元気そうなカルロスの言葉に、メイファは慌てて非礼を詫びた。

ゴツゴツと響く音は、デブリが衝突する音だ。トルベン・タイナートが身を寄せている施設は、旧世界樹宙域を抜け出ようとしている。巨大な核パルスエンジンが時折、思い出したように噴射される。行く先は、月軌道だという話だ。

施設がザフトなどから狙われている事は想定していたらしく、そのための準備も行われていた。施設を取り巻くように防御用の岩塊を張り巡らせ、さらにその岩塊に自爆装

置を取り付けていたのだ。

艦砲その他の攻撃を受けて、施設が爆発したように見せかけ、なおかつ高速で移動するデブリを大量に作り出すことによって、攻撃を行っていた艦隊をセンサー有効範囲から排除する仕組みである。結果、ザフトと連合の艦隊はそろって宙域を離脱。それを確認した後に、悠々と施設は移動を開始したのだ。

「だが、食えんな……」

上手く行つたから良いようなものの、失敗すればトルベンの命はなかった。一人でさつさと施設を離れた長髪の議員は、この施設が破壊されても仕方ないくらいの考えでいたのだろう。

おそらく、もう半分の量子コンピュータは、バックアップとして別の場所に集められているのだ。そしてこの施設が無事に脱出できた事を確認した上で、搬入を開始することになっているのだろう。

地球圏に住む人間の全遺伝情報を蓄積し、社会そのものをシミュレートしようという実験。どうやら純粋に学術的な話ではないようだ。トルベンはただ、ため息を堪える。

## 第十一部

駅を出ると、ムツとする暑さが籠もっていた。これが盆地の暑さというものだろうか。暑さを表情に出しているのは、きつと自分と同じような観光客なのだろう。景観保護の取り組みが積極的になされているその街は、旧世紀のさらに前の時代の景観を見せたいようだ。

地面を掘れば遺跡・遺構の類が出土するので地下鉄・地下街が建設されないという話の本当なのか、公共交通機関はバスがメインであった。どうやら計画ではこの街で寺社仏閣を回る予定のようだった。

その手の興味は持ち合わせていないので、どうしようかと思う。チェックインの間にはまだ早く、時間をつぶさなくてはならない。結局、計画表に書かれていた場所の一つに向かう。

「意外と高くない、か？」

「いや、流石に飛び降りにはできんだろ」

観光客のそんな会話を聞きながら、人の流れに沿って進む。この国の伝統衣装を着ている女性と目が合った。そのまましばらく、その顔を見つめる。相手も自分に思い至っ



たようだ。

同時に驚きの表情を浮かべ、そしてかけるべき言葉を探す。

「コトハ・キサラギさん……ですよね」

「ユウキ・ナンリさん？」

ユウキは名前が間違っていないかつた事にホツとして、彼女の元に足を進めた。コトハがそのまま歩くように言う。観光客が多い中、着物姿の彼女は目立っていた。

「どうしたの？」

「お見合いの途中、というかはぐれた振りして逃げてきたの」

今時、見合いのコースに清水寺はありえないと言いながら、コトハは寺の境内を抜けてタクシーを拾うと、ユウキを押し込むようにして乗り込んだ。タクシーの後部座席で一息つき、互いの事を少し話す。

何とか実家に帰りついたコトハは、てつきり死んだと思われていたらしく、しばらくの間は下にも置かない扱いだった。だがその事が、早い事結婚しろという親の圧力を増加させる事にもなった。しかし当人は、今日のように見合い話をのらりくらりとかわし続けている。

「いつまでも逃げる気はないけど……うちもまだ、落ち着いてるわけ違うし」

現地語のイントネーションが残る独特のしゃべり方でそう言う彼女は、ふと厳しい表

情を浮かべた。単に、海外留学から帰ってきたという体験ではない事をしてしまったのだ。そうそう普通に戻れるわけも無い。そんな重苦しい感情を打ち消すように、コトハはユウキの事を聞いた。

「友達が立てた旅行の計画があつて、それに沿つて世界一周の旅をね」

その友人が死んでしまったらしい事は、ここで話す事ではない。ユウキはスシバーとというのがどこにあるのか尋ねる。計画表には、日本の街ならどこにでもあるとしか書いていなかったのだ。

法衣も聖書も持たずに病室に入った。聖職者という肩書きで、一歩引いた立場に立ちたくなかつたのだ。少なくとも、関わりあつた大人として正しく向き合わなくてはならないと思つていた。

ラビ・アルベール・コクトーの姿を認めたミコト・ムラサメは、少しだけ表情を緩める。ようやく包帯の取れ出した姿は、彼女の体が順調に回復へと向かつている事を示していた。

「ちやんとリハビリすれば、日常生活に支障は出ないそうです」

コクピットの中で潰され切断寸前だった左手と左足の接合手術は、なんとか成功だつ

たようだ。アルベールは一言断つて、ベッド脇の椅子に座つた。

白い病室は静かで、何か沈黙を許さないような雰囲気だ。アルベールは切り出す言葉を探すが見つからない。代わりにミコトが言葉を発してくれた。

「ラビの方はお変わりなく？ リン中尉とは何かありましたか？」

アルベールは苦笑した。彼女とは別に何も無い。好意のようなものを感じなかった訳でもないが、それを受け入れられる身ではない。彼は苦笑いから、笑みだけを消したような表情に変える。ミコトの選ぶ言葉とは思えなかつたからだ。

本来それを言うべき者は、もういない。アルベールの表情に気付いたように、ミコトは目を逸らした。そしてつぶやくように言葉を紡ぐ。

「手足は元に戻つても、半身を失つたままです」

そして、自分自身が何者かが再び分からなくなつたと続けた。曖昧なままではいられなくなつた自分が、何者であるかを確定してくれた存在が、失われてしまったのだ。

彼の存在は、ミコトが「彼女」である事を選択する理由となりえた。彼は別に彼女に選択を迫つたわけではない。だが彼が存在する事で、ミコトは「彼女」である事を自然に選択できた。

だが彼女は、自身が曖昧なままであることを望んでいると既に知っている。ユイ・タカクラの存在は、自分のその願望を浮き立たせた。それは驚きであり、恐怖であつた。

そして彼を失った今、再び彼女はその願望に向き合わざるを得なかった。

「私は……あいつの好意をそんな風に使っていました。あいつの本気を、自分のために使っていた」

「君が、君自身の体を、そのままの姿で欲する事は、正しい事だ」

「……違うんです」

ミコトは首を振った。どちらでもある体を持つからこそ、他者との相互関係の中でのみ、どちらかを選ぶという状態が生じる。曖昧なままでいるという事は、他者との相互関係を欲しないという事だ。ユイ・タカクラのように、一方的な関係を他者に押し付ける事だけを欲するという事だ。

そんな願望がミコトを恐怖させるのだ。だから彼との関係性を求めた。そしてそこに自身の好意がない事と、彼の好意を受け取らないままに彼が失われた事を後悔するのだ。

うつむき黙るミコトに、アルベールは沈黙を強いられた。神の言葉を借りて何かを語る事はた易い。だが、人の言葉、彼自身の言葉で何かを語る事は、これほどまでに難しいのだ。

それでもアルベールは、自分の言葉を欲した。彼女にかけるべき言葉は、神の言葉ではないはずだと。

招待されたのは報道関係者という話だが、見知った顔が何人かいた。ザフトが最新鋭のMSを公開するというのである、関係業界がマスコミ以上に興味を持つのは当然の事であった。しかし、同業者が多いこの状況が彼女を落ち着かせない。

連合とプラントの緊張緩和と政策の一環として、軍事費や軍備の透明性確保が喧伝されている。多分に政治的なパフォーマンスなのだが、この業界としては利の薄い競争より、利幅の多い軍拡競争の方がありがたくもある。

「戦争せずに兵器だけ買ってくれればね」

世界は平和でボーナスはアップだと、カナデ・アキシノはうそぶいた。だがアームリーなどと名付けたプラントを建造する時点で、ザフトは戦争に乗り気だという事が分かる。つまりは連合もその気だという事だろう。和気藹々と、新型MSを見物できるわけではない。

その上、どういうわけかオーブの元首が非公式にここを訪れているようだ。嫌な予感はこの上ない。爆発音を聞いたカナデは、どうしてそんな予感ばかりが的中するのかと頭を抱えたい気分だった。

招待客のいるビルはパニックになっているが、流星に同業者はマスコミ関係者と違っ

て我先に逃げ出す事をしない。双眼鏡や望遠レンズのついたカメラを取り出し、窓際の良い場所を取ろうと我先に走り出す。カナデは早くも、カメラを三脚に据えていた。レンズを覗くと、丁度MSが立ち上がったところだ。

「あの顔………亡命オーブ人を丸抱えで作ったつてのはホントなのね」

特徴的な顔をした三機のMSが、格納庫を突き破るようにして立ち上がる。横で双眼鏡を目に当てている男性が、ザフトじゃないと言った。その証拠にMSは格納庫を破壊するだけでは飽き足らず、基地を攻撃し始めたのだ。

テロに対応するため、出撃準備をしていたデモンストレーション用のMSを緊急発進させたのではない。あのMSはテロリストに強奪されたのだろう。悪名高きヘリオポリス事件の逆をやっているという事だ。

手元の資料に目を落としながら、細部の違いをメモしていく。兵装やその威力については、カタログとはかなり違う感じた。内蔵式のビーム砲を複数搭載したタイプを見れば、バッテリーの性能が格段に向上している事をうかがわせる。

不意に隣で声が上がリ、カメラの向きを変える。ザクと命名されているMSが、強奪されたMSへと攻撃を仕掛けたのだ。

だがカナデは、別のものにピントを合わせていた。上空に飛来する小型戦闘機だ。彼女の知る限り、ザフトではあのような戦闘機を採用していない。次の瞬間から、彼女は

夢中でシャツターを切る。

小型戦闘機は、後続してきた別の戦闘機と次々に合体し、ついに一機のMSとなつて大地に降り立ったのだ。単なる可変型MSではない、分離合体機能を有しているのだ。兵器換装システムの応用とその延長線上に現れる発想だろう。だが、それをあのサイズで実現している。

純粋に技術者として興奮する。それが兵器として使い物になるかどうかなど、どうでもいい事だ。その洗練された技術力の結晶は、ただ称賛に値するのだから。

斬機刀が横に振るわれると、ゲイツRの胴体は折れ曲がるようにして潰れた。流石に斬れ味の無くなった刀を、岩塊表面に設置されている装置に叩きつける。装置の回転軸がぶれ、そのまま停止した。

背後からのレールガンを機体を捻るようにして回避すると、突っ込んでくるゲイツRにグレネードを投げ付ける。その爆発を目くらましにして背後を取ると、ビームカービンを叩き込んだ。

再び大型装置を運搬している機体を発見し、ジンハイマニューバIIはスラスターを全開にして接近する。

装置を守ろうとしたザクの攻撃を難なくかわし、突撃銃でカメラを潰す。僚機がザクに止めを刺した事を背後の爆光で感じながら、装置を運ぶゲイツRを撃ち落していく。

もともとアステロイドベルトから牽引してきた隕石を使いやすいように砕くための装置であるメテオブレイカー。ザフトはそれを、地球に向けて落下しつつあるユニウスセブンを破壊するために設置しようとしている。オイレン・クーエンスの仕事は、メテオブレイカー設置作業の阻止である。

彼の担当するブロックでは、メテオブレイカーの起動をいまだに許していない。何とか設置された物も、ことごとく停止させている。

「易い仕事だ」

オイレンは笑みを浮かべずにそう言うのと、向かってくるザクに正対する。最近正式配備が始まったばかりの新鋭機に対して、自分が乗るのは型落ちの機体。それでも負ける気がしないのに、彼は高揚感を感じなかった。

見て取れるほどに未熟な動き。機体の性能差を生かしてゴリ押しすることすら出来ないパイロットに、オイレンは失望のようなものすら感じる。ザクのビームライフルをかわしながらジリジリと距離を詰めると、途端に敵の腰が引けるのを感じる。ここで踏み込めないパイロットは、死ぬしかない。

ビームカービンがライフルを持つザクの手を吹き飛ばし、突撃銃に付けられた重斬刀



がコクピットを貫く。

「時間すら稼げないのか」

あつという間に護衛のザクを失つてなお、メテオブレイカーの設置を行おうとするゲイツRのパイロットの方が、余程肝が据わっている。レールガンを乱射しながらビームサーベルを閃かせるゲイツRに、オイレンは口元を緩めた。

ザラ派だクライン派だという派閥争いに興味はない。テロリストと正規軍の区別にも興味が無い。自分のパイロットの腕を買い、それを発揮する場を与えてくれるのであれば、オイレンはそこに身を投じる。そのみが彼の存在意義だからだ。ゲイツRの機体が宇宙空間を跳ね爆発する。

僚機が設置されたメテオブレイカーを破壊した時、信号弾が上がるのを見た。オイレンは鼻で笑う。

「サトーって言ったか．．．．．失敗したのはテメーだけだ」

全機に突撃を命じたその信号弾を無視するように僚機に伝え、彼は別の信号弾を打ち上げた。これ以上留まれば、自分達も重力に捕まる。母艦の位置を確認すると、オイレンはジンを帰還させる。

次の戦場はどこになるのか、それだけが彼の気掛かりだった。

天変地異とはこの事を言うのだろう。ただ一つ違ふとすれば、それが人の手によって起こされたものだという事だ。空を彩るのは無数の流れ星。いや、その星は流れるのではない、落ちてくるのだ。

プラントのテロリストが敢行したユニウスセブンを使用した大規模質量弾攻撃。ザフトによる破砕作業は不十分なものに留まり、大量の破片が地表に落下を続けているのだ。ユーラシア連邦は、その被害を最も受けている地域の一つである。

「イベリア半島は破片の落着コースから離れています。慌てず落ち着いて避難して下さい」

各地の基地から軍部隊が緊急出動し、民間人の避難誘導を行っていた。破片が地表に衝突する事によって、ユーラシア西側地域は断続的に大地震に見舞われている。建物の倒壊に伴う都市での被害、道路の寸断や土砂災害による交通の途絶によって、民間人のパニックを抑える事は不可能に近かった。

報道も混乱し、デマがデマを呼んでいる。津波によってリスボンが消滅したという噂まで流れている。だが、ローマが消滅した事は事実であるらしい。にわかには信じがたいが、無事であるという話より信憑性がありそうだ。

「全機、発進は俺の後だ！俺より先に発進した者は撃ち落す!!」

カルロス・アストウリアスは、苛立ちを誤魔化すように大声で怒鳴った。あと半年もすれば正式に後方勤務になるという時に、この状況である。コクピットの中で、ジリジリとした時間を過ごす。

彼らの任務は一般市民の避難誘導ではない。この混乱に乗じて、ジブラルタルのザフトが再侵攻を行わないよう、監視する事にある。同時に、連合がこの状況でジブラルタルに対する攻撃を行わないように抑え込む事も任務である。戦争など、してられる状況ではないのだ。

内陸の町に住む家族は、とりあえず無事だと信じているが、地震と空から落ちてくる物は、誰に対しても安全な場所など与えはしないだろう。冷静さを保つ事が、これほど難しいとは思わなかった。再びジブラルタルに突入し、その場にある全てのものを破壊したい衝動を、深く息を吐いて落ち着かせる。

「そんなに、地球人を殺したいか………コーディネーターよ」

地球はエイプリルフル・クライシスの痛手からようやく立ち直ろうとしていたところだ。そこに再びこれである。一体、何人、いや何十億人の地球人を殺せば気が済むというのだ。

前大戦の最終盤、連合はプラントに対する核攻撃を行った。そこで二千万人のプラント住民を殺しておけば、今日この日に数億の地球人が死ぬ事はなかったであろう。核攻

撃を主導したのはブルーコスモスだという話だが、先見の明は彼らの方にあつたようだ。

通信機が揺れて、モニターにデータが表示される。アテネ近郊に到着した破片の大きさとその破壊規模を示すデータである。

「アテネも、消えたのか……」

その衝撃に重要な情報を見逃すところであつた。エーゲ海を起点とし、地中海全域に津波が押し寄せる事が示されている。大西洋側からの津波も第三波の到着が予測されていた。

カルロスは全MSに発進の準備をさせる。基地では職員達が輸送機に乗り込み始めていた。予測される津波の規模から、この基地の壊滅は避けられないのだ。定員をむかえた輸送機から順次発進していく。ザフトによる撃墜を避けるため、輸送機一機に付き二機のMSを護衛につけ、戦闘機やヘリの類も発進させる。

「間に合わねえ！」

大型輸送機の護衛に付いたカルロスは、水平線が盛り上がるのを見た。それは見る間に高さを増し、海ではなく山のような様相を呈する。MSや戦闘機は急発進するが、基地職員や兵士の収容を続けている輸送機がまだ残っている。

絶望的な光景が現れ、地上のものは等しく押し流された。そして一帯は海の底へと沈

む。

世界は彼女に失意の時間など与えてはくれなかった。核エンジンを利用した新型M Sの開発は頓挫、ユーラシアは十分な軍事的プレゼンスを有する事ができないまま、ブレイク・ザ・ワールドによる大被害を受けてしまった。

プラントに対する報復核攻撃も失敗し、逆に月における連合の優位性を担保していた虎の子のN J C核弾頭のほとんどを失う結果となっている。月の連合軍は基地防衛以外の活動余力を無くし、ブレイク・ザ・ワールドによって疲弊した連合各国は、プラントに対してその責任を問う力すら失った。

「これが戦争、か」

疲れ果てたようなため息とともに、アリシア・ルイズ・ド・ヴァロアがつぶやく。旧世紀の世界大戦において、一般市民の居住区に対する無差別絨毯爆撃という戦術が採用された。軍隊ではなく国民そのものを標的とするその攻撃は、国力に対する直接的な打撃と、国民の戦意を喪失させるために行われた。

プラントの行ったユニウスセブンによる大規模質量弾攻撃は、まさに地球全土に対する無差別絨毯爆撃である。彼らの狙い通り、連合各国の国力は削り取られ、市民は戦意

を失った。

プラントはそこに付け込み、人道援助の名目で支配地域を広げている。ユーラシア連邦の西側は、もはや完全にザフトの植民地と化していた。

執務室の緊急コールが鳴り、非常用モニターが自動点灯した。幾度か画面が切り替わり、ようやく安定した画像には見たことの無い光景が映る。その場所をベルリンだと特定できたのは、ブランデンブルク門の姿が一瞬だけ映ったからだ。その門は薙ぎ払われるビームの奔流によって消失した。

「何事か!？」

誰もいない部屋で、アリシアは叫ぶ。ベルリンを焼き払おうとしている巨大MS、それには見覚えがあった。

核エンジンの試験稼動のために使用していたMSは、インド洋上で破壊されたはずだ。計画は中止され、関わった者達も処分したはず。それを誰が。執務室の外で、警備の者が怒鳴りあう声が聞こえる。

ドアが開けられ、ダークスーツの人間がずかずかと入り込んで来た。彼らは居丈高に何かを言い、アリシアに書類を示す。逮捕令状であった。容疑は、ブルーコスモスに対する国家機密の漏洩。スーツの男がモニターを指し示す。

「あれに関する事、洗いざらい話していただく」

「こういう事だけは手が早いな、参謀本部も」

計画中止後も、ブルーコスモスは独自の研究を続けあのMSの開発にこぎつけたのだろう。ユーラシア軍は、そのブルーコスモスの動きを黙認していたのだ。だが、そのブルーコスモスは、何故かユーラシア自身をその攻撃の標的とした。

巨大MSの開発を黙認しながら、肝心のブルーコスモスを統制できず、結果として国内に大きな被害をもたらしザフトに介入の口実を与えた。その責任を誰が取るのか。

「つまりは、そういう話だろう」

アリシアの低い声に、スーツの男の腰が引ける。彼女の影響力を削いでおきたいと考える人間は少なくなく、渡りに船とばかりに罪を押し付けたのだ。構図が見えてしまえば、抵抗する気力すら失う。

参謀本部でもこの映像は見てははずだ。しかしそれを見ながら彼らが考えた事は、ベルリンへの支援でもユーラシア連邦の復興でもなく、自己の保身と他者を蹴落とす事であった。アリシアは言われる前に歩き出す。

今考えるべきは、この場を切り抜けることではない。ワートルローで負けない算段を今から考えておかなくてはならないのだから。

食卓に皿を並べ終え、二人だけのささやかな夕食が始まる。冬となれば日没も早く、外はすっかり暗くなっている。月明かりに照らされた山肌の雪だけが、ぼんやりと光って見える。

アルプスの山々を望むこの地に腰を据えたのは、つい最近の事であった。残務整理や業務の引継ぎ、関係者への挨拶回りなど、なかなか身軽になれなかったのだ。もちろん、片田舎で隠居を決め込むような年齢ではないが、プライベートな時間を優先しても構わない時期なのだろう。少し失敗した手作りのシャーベットを二人で笑いあう。

食器洗い機が止まる頃、居間のテレビが夜のニュースを流し始める。トップニュースは、プラント最高評議会議長の出した緊急声明であった。

「ロゴス、か」

ブレイク・ザ・ワールドに伴う政情不安下に、この声明は抜群の効果を發揮するだろう。出来の悪い陰謀論は、敵味方の判別がし易くなっているものだ。ルーファス・リシュレークは冷ややかに笑った。

これによってプラントは、連合各国の産業基盤を内部から突き崩すつもりなのだろう。今の世の中、純粋な軍需産業など子会社・下請けなどのレベルにしか存在しない。プラントがロゴスと名指しした企業は、どこも民生品売上高の方が多い。

それ以上に傑作なのが、名指しされた企業の中にモルゲンレーテやFUJIYAMA



のような、真つ先に槍玉にあげられるべき企業が上がつていないのだ。その裏側を調べれば、非常に面白い事になっていくだろう。テレビ画面に映されている顔写真を眺めながら、ルーファスには失笑しかない。

だが、そんな見え透いた虚構に人々が熱狂するだろう事を想像すると、その失笑もため息に変わる。彼が経営していた会社の幹部や、彼の実家の人間も顔写真のリストに挙がつている。もはや義理すらない連中だが、ほんの数ヶ月タイミンがずれていけば、あそこに自分の顔が映つたのだと思うと、背筋に震えが走る。

「人間万事塞翁が馬、だな」

東アジアの格言を思い出し、今の幸福にただ感謝する。同時にそれが移ろいやすいものである事を自覚し、それを維持するために努力しなければならぬ事を覚悟する。横に座る妻の肩を抱き寄せた。

「ルーファス……」

ちやんと名前前で呼んでくれるようになった彼女のためにも、自分がすっかりしなくてはならないのだ。家の名前や会社の肩書きは消え、一人の人間として社会に対峙し、一人の男としてこの女性に向き合わねばならないのだから。

だがそれは、男を奮い立たせるものである。掛け値なしの自分自身で、何をどこまでできるのか。武者震いを感じるほどであった。そのまま、妻の首筋に口付けをした。

「……アルテシア」

愛しい夫の甘い声に、彼女は身を震わせる。そのままソファーに横たえられ、テレビと電気が消される。

静かになった室内に、切なく荒い吐息だけが満ちていく。

「それくらいは予測して当然だろう。残存艦の指揮権は本艦が受け持つ！」

アイスランドの地球軍要塞に攻撃を開始したザフトと連合の合同艦隊は、要塞防衛のために配備されていた五機の巨大MSの砲撃によって、いきなり三分の一を消し飛ばされる結果になっていた。ザフトの手前、功を焦った連中の勇み足である。要塞砲の存在すら考慮していない素人の指揮であろう。

穿った見方をすれば、ザフトが連合艦を利用して要塞に配備されている兵器の威力を確かめたと取れるが、そのザフトも本命の軌道降下部隊を強力な対空兵器によって一掃されるという大損害を被っていた。同じ手が何度も通用すると考えている、馬鹿の発想である。

ゲンヤ・タカツキは、艦の速度を落とさせた。生存者の救助や、艦隊の取りまとめなどを行わなくてはならない。ザフト側にそれを了解させ、東アジアから参加した艦隊は

合同艦隊から遅れる形となった。

「訳の分からん戦争だ、言いだしつぺに始末は付けさせろ」

ゲンヤは双眼鏡で、水平線の彼方に見える戦闘の光を見つめていた。対ロゴス戦争と銘打たれた戦争は、それこそ敵が不明確な戦いである。大西洋やユーラシアの都市部では反ロゴスを標榜する暴動が頻発しているという話だが、どれも市民暴動のレベルを超えていた。

重火器なども使用されていることから、何者かが市民暴動の形を取って連合各国の産業界要人の暗殺を行っているのではないかと囁かれている。この戦闘は、おそらくその総仕上げなのだろう。東アジアはその勝ち馬に乗ろうとしているのだ。

理解の出来る戦争などという物はないが、納得の出来る戦闘という物は存在する。少なくともゲンヤにとって、アイスランドまで出向いての艦隊指揮など、納得の出来るものではない。だから、艦隊をむやみに前に進めることをしないのだ。ザフトのための戦争なら、犠牲を出すのはザフトであるべきだ。

「それでは格好もつかないでしょう……」

生き残った空母の上に、発進準備を整えたウィンダムがせり上がって来る。メイファ・リンの視線がコクピット内を走り、全ての表示が正常である事を確認する。ザフトとブルーコスモスの戦闘で死ぬなどバカバカしいが、論功行賞でマイナスの査定が付

けられる事態は避けなくてはならない。

ザフトの部隊もあの巨大MSにてこずっているようで、戦闘に参加する振りくらいはする余地がありそうだ。部下にはその旨を徹底させ、メイファはブリッジに合図を出す。蒸気カタパルトの湯気と共にウインダムが打ち出される。

軌道降下部隊を全滅させられたザフトは手駒不足のようであり、少数ながら特殊で強力な兵器を有するブルークコスモスの部隊に苦戦を強いられているようだ。他の連合の艦隊も、東アジア同様に様子見という態度を取っているため、ザフトの苦境は必然であった。メイファは自分達が突出し過ぎないように、注意深く戦線を観察する。

「!? デカブツが落ちた?」

巨大な爆発にメイファの視線が流れる。先ほどまで大量のビームを振りまいていた巨大MSの一団が、混乱したような動きを見せている。カメラを望遠に切り替えると、特殊な形状の戦艦と三機のMSが突出しているのが見える。

特に先頭に立つMSの性能は異常であった。そのMSは、尾を引く美しい燐光を纏うように巨大MSに肉薄し、その手にした実体剣で二倍以上ある敵を軽々と切り裂いている。常に味方の前に出て行くような戦い方は、機体の特性というよりパイロットの性格であろう。

「……………見とれてる場合じゃないわね。全機突撃!」

無線に怒鳴ると同時に信号弾を打ち上げる。あのMSのお陰で敵部隊が大きく攪乱された。中核であった巨大MSを失えば、敵の防衛線は一気に崩壊するだろう。その機を逃す手はない。タダで手に入る手柄は、ありがたく受け取っておくものだ。

メイファの率いる部隊は、戦線を整えようと後退する敵部隊の追撃に入る。不恰好に宙に浮かんでいるゲルズ・ゲーを上下に斬り離れた。

速度を上げながら、メイファのウインダムが敵ウインダムを撃ち抜く。自分の乗る機体と同じだという事に嫌な気分を覚え、彼女は機体を急降下させた。そのままザムザ・ザーの腹部に回り込み、がら空きの胴体にビームサーベルを突き立てる。

オーブ軍の動きに生気が戻る。ようやく指揮系統が正常化したらしい。

「ま、サボタージユが解除されただけなんだけどね」

ユイ・タカクラの乗るムラサメが、先頭を切ってザフト艦隊に攻撃を開始する。水上に浮かび上がりミサイルで対地攻撃を行っている潜水艦など、的ではない。直接のデインを一蹴して大型魚雷を投下する。一気に軽くなった機体を変形させると、背後を取ろうとしたグフを袈裟懸けに斬り捨てた。

ブルーコスモス残党がオーブのセイラン家に身を寄せた事は予想通りである。それ

に対するザフトの軍事行動も完全に予測できていた。ただザフトの動きが早く、オーブへの支援部隊降下が後手に回ってしまった。

本来なら、支援部隊の戦力を背景に「穏便」にオーブを奪還し、ザフトの攻撃に備えるつもりだったのだが、ザフトによる攻撃を受けている最中にそれをやらねばならない事態に陥った。多少は強硬手段も仕方ないだろう。ブルーコスモス盟主とともにセイラン親子は宇宙に上げる算段だったのだが、どうやらここで消えてもらうしかないようだ。

「ザフトが始末してくれば楽なんだけどね」

ザクのビームライフルをシールドで受け止め、グレネードを撃ち込んでバックパックを破壊する。ウィザードと呼ばれる換装システムのパージで爆発を免れたザクは、なんとか地上に降り立つが、背後から迫る赤い塊にそのまま轢き殺された。降下部隊は良い働きをしてきているようだ。

ザフトも反撃を開始したオーブ軍への対処で手一杯であり、ブルーコスモス盟主の捜索とその拘束などを行う余裕はないであろう。彼にはもう少し生きてもらわねばならない。

プラント最高評議会議長の策動によって、ログスと名指しされた経済界の重鎮は軒並み消された。あとは盟主を宇宙に上げ、議長とともに潰し合いをしてもらうだけだ。消

耗して生き残った方を排除すれば、勞せず地球圏を掌握できる。經濟基盤に打撃をかけた地球圏である、全ての經濟權益は勝者が自由に設計して使用することが出来る。

「ターミナルに春が来る」

ユイは楽しげにそういうと機体を振った。バビのビームをやり過ぎ、棒立ちになっているその機体にビームライフルを撃ち込む。しかし、思ったよりも周囲の敵が減っていない。

カメラを回すと、空の一角に戦闘の光が瞬いているのが見える。支援降下部隊の中核であるはずのMSが、一機のザフトMSに拘束されているのだ。核エンジン搭載の最新鋭機を、現在考えうる最高の生物が操縦しているのである、どうしてただの一機にてこずるのか。

敵の機体は、ニューミレニアムシリーズの一機から分離合体機構と武装換装システムをオミットしたデチューン機であり、量産化を前提とした先行試作機のはずだ。一応は核動力という事になっているが、ザフトでは技術者の大量流出によって核エンジンの安定起動が技術的に不可能になり、デュートリオン送電システムとの併用によってそれを補うという、非常に中途半端で無駄の多い動力源を採用せざるを得なくなっていた。

アイスランドでは大きな戦果を挙げたというが、所詮は浮き砲台相手の戦果であり、彼女らの組織が送り込んだ最高傑作相手に、まともに戦えるはずがないのだ。

舌打ちしたい気分を抑えて戦闘を見守っていると、小さな信号弾が上がるのを見た。ブルーコスモス盟主を乗せたシャトルが無事に宇宙に上がったという連絡である。

数年は客足が止まるだろう。ブレイク・ザ・ワールドの被害が北半球の特に大西洋岸に集中していたため、付近に大きな被害は特になかったのだが、観光客の多くはユーラシアや大西洋連邦からの人であるため、観光地としては大打撃であった。赤道連合でも津波被害を受けた都市がいくつかあり、国内の政治経済も混乱が収まっていない。

「ほらほら、今日は団体さんが来るんだよ」

店にはつばをかけるような声が響き、グエン・ヴィレンは頬を叩いて気合を入れなおす。念願だった食堂を開き、さあこれからという時に地球規模の災害である。店もしばらくの間は、沿岸部から避難してきた人の、非常炊き出し場所になっていた。ちゃんと店として活動できるだけでもありがたいと思わなければならない。

今日は、この地域の観光資源でもある遺跡の保存調査のために、大学の合同研究隊がやってくる日であり、久しぶりにまともな料理の腕が振るえるのだ。颯爽と店の掃除を始めた妻の姿を見ながら、料理の下ごしらえを始める。

窓の向こうから風に乗って、揚げ物の匂いが漂ってくる。同時に内燃機関特有の音が



響いてきた。その音が止まり、子供の声が聞こえる。

「頼まれてた野菜持つて来た」

「持つて来たじゃない、ちゃんとしてここまで運ぶ」

厨房に飛び込んできた子供達が再び外に飛び出すと、それと入れ違うように少女がダンボールの箱を抱えて入ってくる。

「お父さん、これは冷蔵庫?」

「とりあえず入れといてくれ。それよりカフネ、一夜干し、取り込んでくれたか?」

いつけないと小さく叫び、カフネも厨房を飛び出していく。子供達ががやがやと仕入れてきた野菜を運び込み、包丁の音がリズムカルに響く。

籠一杯に開いた魚を入れて戻ってきたカフネは、エプロンをつけてグエンの隣に立つ。子供達の昼食は彼女の仕事なのだ。まだまだ図面を引くようには上手くいかないが、それでもかなり上達したと思う。

出来上がったブンボーエをテーブルに並べる。掃除の終わった店内の一角から、いい匂いが立ち上る。一番下の弟の口の周りを拭きながら、カフネは天気予報を見ようとテレビのリモコンを押した。

いつもの時間なのに天気予報の画面にならないので、時計が止まっているのかと思うが、どうやらニュースの時間が延びているらしい。また何か事件だろうか、カフネは

身構えてしまう。

「……続報です。プラント最高評議会議長による声明発表が伝えられました。これよりその模様を中継します」

どこのチャンネルを回しても、同じ画面だった。彼女も知っているその人物は、デステイニープランなる政策を全世界に向けて発表しているようだ。よく分からないが、所信表明演説や一般教書演説みたいなものだろうと思ひ、テレビを消した。プラントがどんな政策を行おうと、ここには関係のない話だ。

「何だって?」

「知らない。ほら、お片付け終わったら宿題だよ」

文句を言う弟妹を追い立てるように、カフネは食器を厨房に返させる。母屋の中に消えていく子供達の後姿を見ながら、グエンとその妻は顔を見合せて微笑んだ。

艦内とは思えないほど広いブリッジ、正確には作戦司令室だが、そこは今錯綜する情報に右に左に行き交っている。作戦を発する場所であるため、上から降りてくる命令が混乱しているのではない。出した指令が正確に受理されないのだ。

「レーザーで直接伝えろ! 本艦の位置などどうに知られている!」

「全ての着艦許可を一時凍結！ 接近してくる物には警告射撃後の発砲を許可する！」  
コンドワナの司令室で、サイモン・メイフィールドは他の将校同様に声を枯らしながら指示を出し続けていた。

月面に逃れたブルーコスモスは、強力なレーザー兵器によってプラントを直接攻撃した。月軌道艦隊を主力とするザフトはその兵器が設置された連合基地・ダイダロスを奪取し、プラント崩壊に伴う混乱に乗じて軍事侵攻を企てた大西洋宇宙軍の艦隊をアルザツヘル基地ごと撃滅する。

だが、ブルーコスモス残党が宇宙に逃れる事を幫助したオーブ軍と、ザフトに対するテロ攻撃を繰り返していた武装集団が結託し、ザフトは掌握したはずのダイダロスを破壊されてしまった。現在、機動要塞・メサイアとコンドワナを最終ラインとするように、ザフトは戦線を構築している。

ダイダロスを巡る攻防戦によって月軌道艦隊は損耗し、プラント崩壊の影響で本国の防衛艦隊は機能を失っている。すなわち、メサイアとコンドワナのラインを突破されれば、プラントまで遮る物は無くなるのだ。

「そうなればオーブとテロリストにプラントを奪われるのだぞー！」

そんな事は分かっていると、サイモンは苛立たしげに振り向いた。喚くだけで自分の責任も、状況の打開策も口にしない司令官など無駄の一言だ。そもそも、このような状

況になることはずつと以前から予測できていたではないか。

ザフトに軍人としてのモラルなど存在せず、勝ち馬に乗るための裏切りは奨励されるのだ。元議長と前議長の子供がそうなのだ、下の人間がそれに倣うのは当然だろう。今も、現議長の配慮によって連合への戦犯引渡しを免れ、国内法廷で無罪まで出してもらった人間が先頭を切つてザフトに対する攻撃を行っているではないか。

「構わん、ボルテールは落とせ！」

「ぶち当てても落とします！」

つい最近まで艦長を務めていたクルツクスからの通信に、サイモンは思わず笑つてしまふ。クルツクスが無事なままでいられるとは思わない、だがそれでも部下に裏切りを勧める無能に成り下がったつもりはない。

ラクス・クラインを名乗る者の放送だけで混乱してしまう軍隊における有能さとは、きつと信念もなくその場の状況に流され口先だけの正義に身も心も委ねられるガキの有能さなのだ。そこで大人でいる事は、どこまでも難しい。

「敵の攻撃がメサイアに集中しているな」

「議長さえ殺害すれば、ということか？」

「もしくは……ゴンドワナを押しやる目途がついている？」

サイモンは直ちに艦内の全隔壁の閉鎖を進言する。周りに気を取られて足元に気を

配っていないかった。ゴンドワナ乗組員にも、当然裏切り者はいるはずだ。ブリッジと司令室が遮蔽モードに移行し、外部からの侵入を防ぐ形となる。

艦内のチェックを行うと、サイモンの進言がギリギリで間に合った事が判明した。反乱兵のいた八つの区画が切り離され爆破される。胸を撫で下ろす暇もなく、メサイアで大きな爆発が確認された。

「博士、こっちはです！」

スタッフとともに、兵士の先導を受けて脱出口を目指す。いつの頃からか、研究に費やす時間と逃亡に費やす時間が同じくらいの長さになっているように思う。時間の無駄とはこの事だ。

議長は、自分の政策が一部の人間から強硬な反発を受ける事、その一部の人間が私的な軍事力を有し国家を操作する影響力を持っている事を事前に分かっていたのだろう。だからこそ、研究施設をそのまま機動要塞にした。

ただ一つ分かっていなかったのは、敵が機動要塞レベルのMSを有していたという事であろう。それに関しては議長に同情もする。そんな事を予測できる人間などいるわけが無い。

着慣れないノーマルスーツに着替えて、空気の抜け始めた施設内部を進む。研究者の脱出が進んでいるのか、施設内は思ったより静かである。トルベン・タイナートは、立

ち並ぶ量子コンピューターを横目に眺めながら、もつたいない思いを抱いた。ようやく研究の端緒が見え出したところだったのだ。

「全くもって意味不明だよ」

デステイニープランの発表は、彼も周りのスタッフから聞いていた。あの少女の言葉ではないが、被選挙権をコンピューターが決定し、結婚相手を遺伝子診断で決定するプラントとしては、別段珍しい政策ではない。プラントの国内政策である以上連合各国には無関係の話であり、戦争の理由となるような考えではないのだ。

それがどういいうわけかこれである。周りの人間は彼の事を変わり者だというが、彼に言わせればこんな事態を招く人間の方がはるかに変わり者だ。

「博士、急いでください」

足を止めたトルベンに、通信機から声が聞こえる。彼は一度後ろを振り返り、それから走り出した。

今一瞬だけ見えたパイロットスーツの人物。見間違え出なければ、データにあつた「最高のコーディネーター」であろう。人工子宮研究の、現時点で確認されている唯一の成功例。遺伝子操作によって作られた遺伝子が全て正確に発現している個体である。

しかしあれをもって「最高」と名付けてしまったユールン・ヒビキは、科学者ではなく技術者であろう。もし神がいるのであれば、あんな設計図を引くはずか無い。所詮あ

それは「人の考えうる最高」でしかないのだ。だから、人の考えうる最高の結末しかもたらさない。

「勝利と権力か……」

一体、そのどこに魅力があるのだろう。トルベンはそんな事を思った。そして神の設計図を追う自分のことを、周りの人間は同じ目で見ているのだろうと思う。その違いを、説明する気にはなれない。

夕焼けの空の色は、えも言われない赤である。ブレイク・ザ・ワールドによつて巻き上げられた粉塵の影響だという。地球規模での気候変動は確実視されており、世界中が毎日のようにこの不安な赤を見上げている。

自転車を漕ぎながら、ユウキ・ナンリは視線を戻した。真っ赤な水平線は、見ていて気持ちのいいものではない。ようやく伸びた髪が風に揺れる。

被害の小さかった大洋州でも、プラントの政変とそれに伴うカーペンタリア基地の体制変更によつて、ずいぶんと混乱していた。両親は基地の仕事を解雇され、彼女もアルバイトの口を失っていた。それでも、一つ上の学校に通わせてくれていた事に感謝しながら、彼女は自転車を置き場に止める。

「まだ、帰ってきてないんだ……」

郵便受けに入っていたチラシを掴んで、アパートのドアを開ける。最近引越したばかりのアパートは、両親と暮らすには少し手狭だ。短期のパートで家計をやりくりしている両親のためにも、早い事アルバイトを見つけなくてはならない。

部屋の窓を開け放し、空気を入れる。夕飯の支度に取り掛かろうとした時、風が吹き込んできた。食卓の上に乗せたチラシが吹き散らされる。

ユウキは一枚の封筒を見つけて手に取った。

あちこちの郵便局に転送されていたらしいそれは、いくつもの消印が押されていた。一番古い日付は二年ほど前のものだ。宛名は、彼女の名前となっている。少し古びた色になっている封筒を開けた。

便箋に目を通すと、彼女は天を仰いだ。

簡素な文面はいかにも彼らしいと思う。デイルク・フランツ・ツエルニーが、あの日の非礼を詫びていた。それ以外には何も書かれていない。どこに行くとも、彼が何者なのかも。ユウキは、便箋をそつと胸に押し当てる。

何も書かれていなくても分かった。彼にはもう決して会えないのだと。彼の事を何も知らなくとも、彼がそういう人だという事は知っていた。まぶたに映る彼の寂しげな顔に、さよならを言う。



便箋を丁寧に畳み、封筒の中に戻す。自分の部屋の机の引き出しに、それを隠すように仕舞った。

明日、髪を切ろう。そしてまた伸ばそう。ユウキはそう思う。窓の外の赤い空が、少しだけ滲んで見えた。

## あとがき

最後までお付き合いいただき、ありがとうございます。

オープンな場（お世話になってるサイトの、小説等を掲載できる掲示板）でキャラクターの募集をして、そこに寄せられた設定をそのまま使用する形でお話を書いたため、改めて読み返してみると、設定に依存して描写を省き過ぎている部分が多々あるなと反省しています。おそらく、何だか意味の分からない部分が多いと思います。

その設定をそのまま掲載できれば良かったのですが、データがどこかに行ってしまったいました……（残っていてくれた人がいて良かった）

全てのキャラクターを満遍なく登場させようとして場面転換が激しくなり、どこで誰が何を目的にどうしようとしているのかが、分かり難い文章になってしまったのも反省点です。こんな事なら話の筋を通すために、一人くらいは自分でキャラを作って、その視点を中心に語りを進めた方が良かったかもしれない。

自分でキャラクターの設定は考えず、人から出してもらったキャラクター設定を使ってお話を作るという形式で、自分では考えつかない設定のキャラクターを使うというのは、新鮮な経験でした。

でも、人様から預かったキャラクターというものの扱いは、思った以上に大変でした。もつと上手くできたんじゃないだろうかと思う事も多かったです。ただ、またこういう事をやるなら、もつとキャラの人数は絞らなきゃダメかも。

最後に各キャラクターについて、少しずつ。(カツコ内はキャラ設定をくれた方のH Nです)

ミコト・ムラサメ

カナン・エスペランザ (地球連合軍第87独立機動群特殊制圧実行部隊フロントムウルブズさん)

設定上、ペアでの行動は必然だったのだけど、思い切って別行動つてのもありだったかもしれない。

ラビ・アルベール・コクトー (ペールギユント艦長さん)

使い方としては悪くなかったと思っっている。もう少し自由に動ける立場にしても良かったかも。

ゲンヤ・タカツキ

アリシア・ルイズ・ド・ヴァロア（初さん）

どちらも後方の人だから、前線のパイロットとの絡みを作れなかった。有能設定だと余計にその行動が制限されてしまうから、もう少し使いどころを考えるべきだったかも。

ユイ・タカクラ（YF119k（kyousuke）さん）

ヒールを引き受けてもらったのだけど、そのために必要なキャラの掘り下げについては少し手抜きをしてしまった。

カナデ・アキシノ

グエン・ヴィレン（かわさん）

グエンは、もらった設定通りにほぼ使えたと思う。カナデはオリジナルMSとともに設定してもらったのだけど、使い切れず。これは本編に出なかつた機体には、出なかつただけの理由があるはずという個人的な考えから。

カルロス・アストウリアス（特派員さん）

キャラとしてこういう感じで使っていけばいいんだと固まつたのが終盤で、もったい

ない事をした。真面目キャラのアルベールともつと絡ませれば良かった。

メイファ・リン

ウオーレン・パーシバル（shouさん）

メイファはそこそこ上手く扱えたと思うのだけど、ウオーレンは完全に貧乏くじを引かせてしまった。

サイモン・メイフィールド（J・P・ジョーンズさん）

物語を展開させていくために、かなり無理な命令を何度も聞いてもらう事になってしまった。もう少し、パイロットキャラとの絡みを作れたはずなのに……

シビル・ストーン

ノーリツチ・シュナウザー（マカロフさん）

シビルの使い方はキャラ設定をもらった時に決定していたのだけど、もつと掘り下げないと生きない使い方だったかも。ノーリツチに関しては、機械装置のように扱ってみようという試みだったのだけど、キャラクターとしては使っていないのと同じだった。

カフネ・イーガン

オイレン・クーエンス（w a t a さん）

カフネは少し辛い目に合わせすぎたかな。オイレンに関しては、使い切った満足感がある。

デイルク・フランツ・ツエルニー（k a z u h i d e さん）

設定をもらった時にメインキャラだなと思ったのだけど、ロマンスをやらせるならもっと深掘りしなきゃダメだった。

ユウキ・ナンリ（白菊さん）

一番お気に入りのエピソードを演じてもらったのだけど、立場的にメインキャラになれなかったかなあ。もう少し工夫できたかも。

テルシエ・ミンター

トルベン・タイナート（M I P さん）

テルシエの目が良い設定は、完全に設定依存だった。もう少し本編でも触れていれ  
ば。トルベンのキャラが中間管理職っぽいのは、自分の趣味です。

コトハ・キサラギ（あずまさん）

もしかしたら、この子とユウキをもっとあちこちに動かしてストーリーを語ってあげば良かったのかも……

アルテイシア・ローレンツ

ルーファス・リシュレーク（Ryuさん）

使い切れなかった感が強い。ガンダムにおいて、前線と接点の無い人を出番を確保しながら描くのは難しい。

キャラクターの募集に応じて下さった方、どうもありがとうございました。

あと締切後に白執事さんが、ルシア・ゼルレッチとリ・ツアオロンの2キャラを投稿して下さいだったので、前者のみ一番最初にチラッとだけ登場させました。